第三種郵便物認可

女學世界

第四巻第二號

記事要目

- 日本と露西亞
- 戰陣看護婦
- 女性壓服論
- 貴婦人の嗜好
- 婚禮の贐
- 悲劇ハムレツト
- 米國大統領の家庭
- 熱の話
- 満洲の動物
- 露西亞小話

口繪

- 御前會議
- ナイチンゲール嬢
- 日露の皇后陛下
- 出征のわかれ
- 雪の朝　初午（水彩畫）




東京日本橋駿河町
三井呉服店
大坂高麗橋三丁目
地方よりの御註文は御手紙にて御申越被下候はゞ小包郵便にて發送仕る可く候尚は註文御案内書は御一報次第御送り可申上候
一切の商品は店内一面に陳列致し置候に付き御立寄り御縦覧被下候様冀希上候

女學世界 第四巻 第貳號 目次

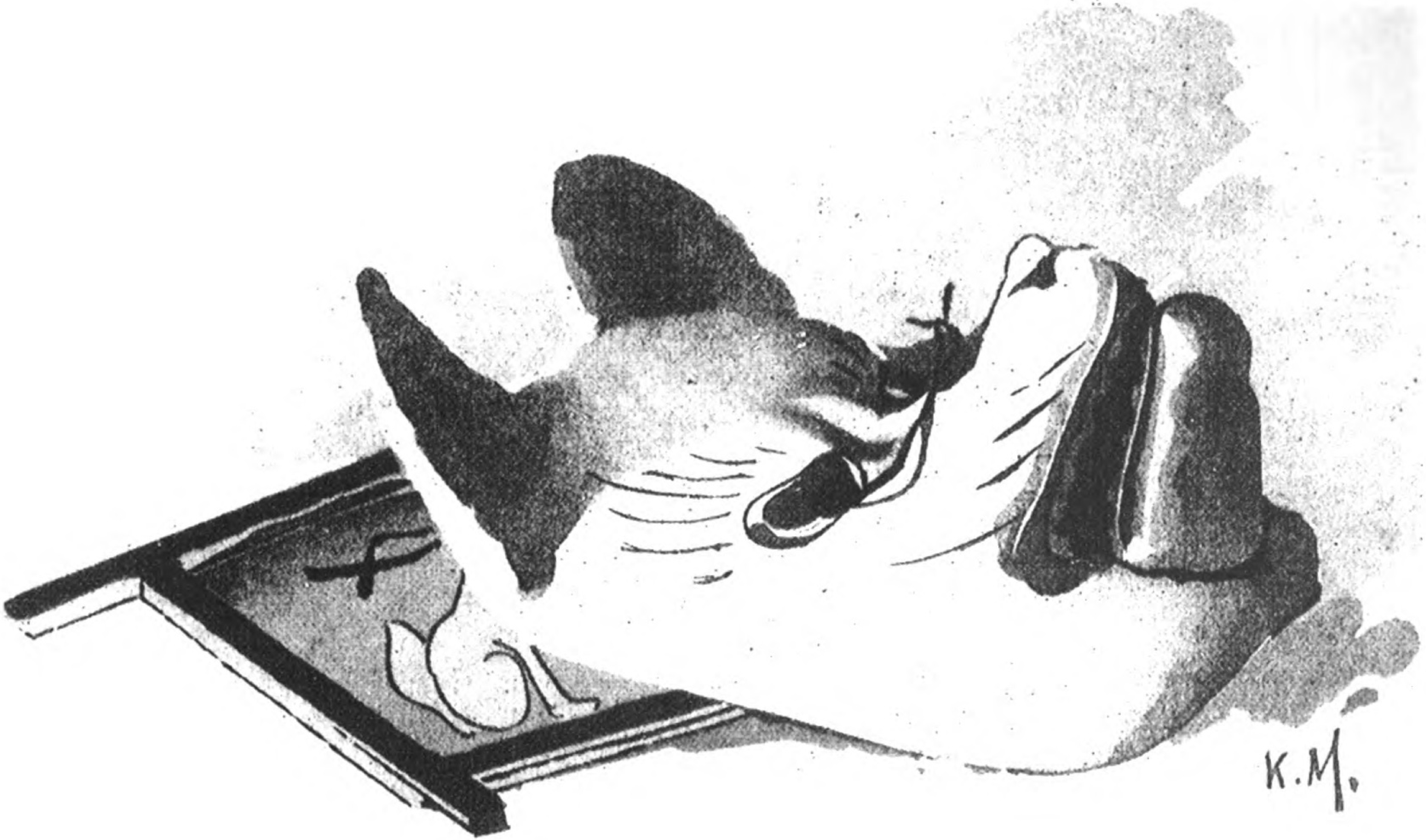
郊外雪景



三宅克己氏筆

初午

三宅克己氏筆



催眠術に熟達し其活用の妙を極めんとする人は本誌を讀め!!

第壹號に限り二月一日發行　第貳號二月十五日發行

前成田中學校々長 心理學催眠術大家 竹內楠三先生主筆

毎月壹回 催眠術 十五日発行

第壹號要目
一部十二錢郵稅壹錢●六部七十五錢郵稅六錢●十二部一圓四十四錢郵稅十二錢

催眠術の危險と施術法●無經驗失策實例●治療催眠等數項

胃腸病精神療法十數個條 教育と催眠道德的不具矯正●催眠術原理等他十數件

分娩と催眠實例數種 僧侶解脫と催眠術

犯罪と催眠實例十數項 催眠狀態と心動呼吸凝示法の弊害●暗示法●ブラトーン精神療法●符呪●局部身體の治病法

動物と催眠動物催眠最始實驗●牝鷄催眠●鳥類催眠●蛙の催眠●動物冬眠●鼠蛇蟹鰕鰐等の催眠奇談

催眠治療法不眠症全治●歩行恐怖病平癒●癲癇脚部攣痛ヒステリー全治等諸病治療例

遠方より人を眠らす實驗佛國催眠術家ジベル氏ジヤ子氏實驗

催眠應用心理學講話メスメル動物磁氣說●醫師と催眠術

實用催眠術問答施術第一要件●施術室●被術者の準備態度●催眠種類

●最良催眠術●覺醒法●狂人催眠●男女催眠比較●罪人催眠●催眠治療●吃者催眠治療●意志強弱と催眠術等數十項

質疑應答本誌購讀者は自由に質問をなすとを得

竹內楠三先生著 ●學理應用催眠術自在 價三十五錢 郵稅四錢 十九版出來

竹內楠三先生著 ●實用催眠學 價三十五錢 郵稅四錢 八版出來

近藤嘉三先生著 ●催眠術獨習 價三十錢 郵稅四錢 本日新版

竹內楠三先生著 ●心理應用讀心術自在 價三十五錢 郵稅四錢 參版出來

發兌 東京神田區鍋町廿一番地（電話本局三〇六七番） 大學館

賣捌 全國各地雜誌店書[illegible]店

(甲の一)

増補註釋 食道樂

正價一冊 金八拾錢宛

郵稅 市内五錢▲地方拾錢▲臺灣三十錢
米國開封廿六錢▲清韓國三十錢也

▲春の巻 は愈好評にして今や貳拾六版を發行せり

▲夏の巻 は拾五版出來

▲秋の巻 は米料理百種非常の好評にして拾貳版出來せり

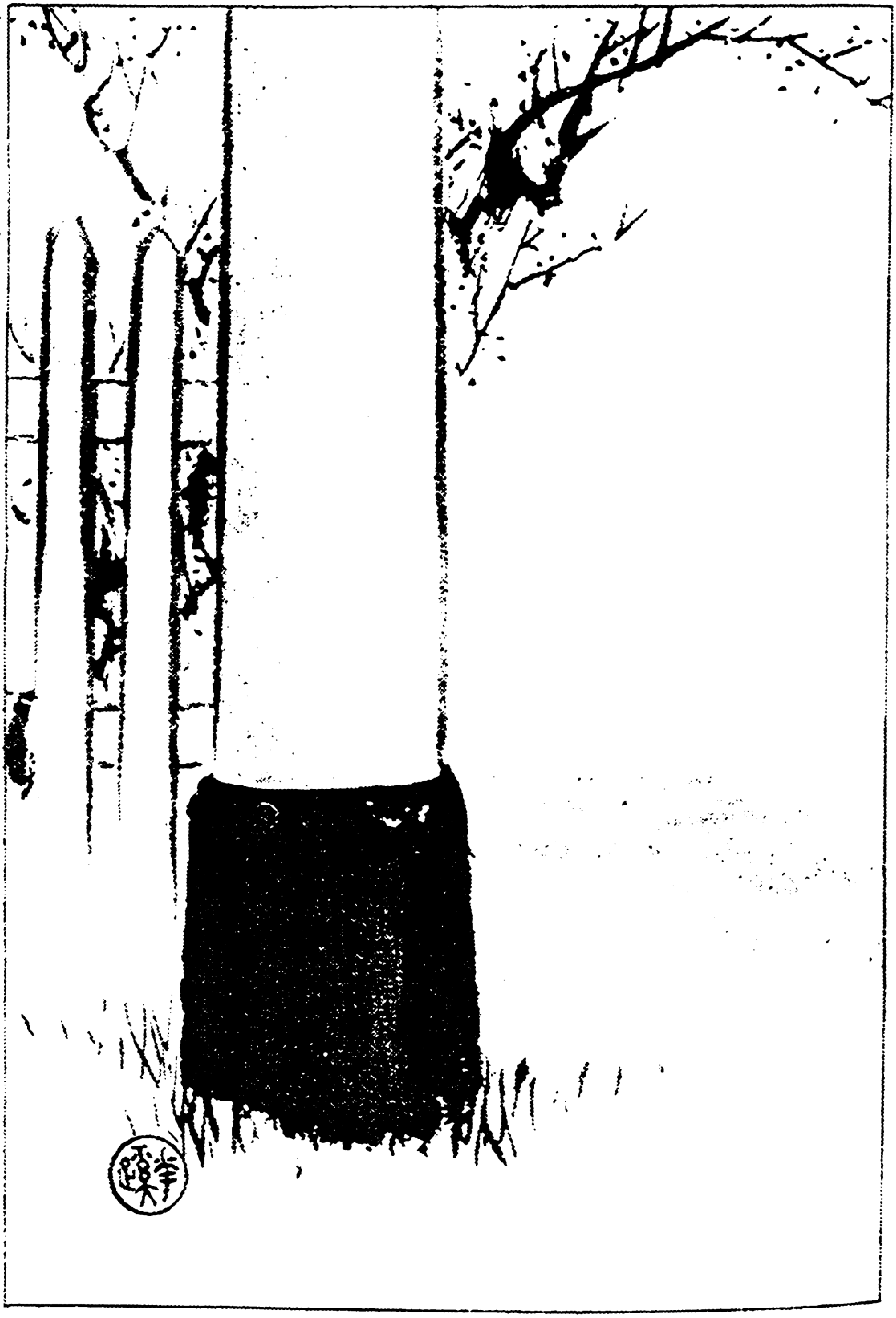
東京市京橋區三十間堀

報知社出版部

電話新橋二千卅六番

(甲の二)

稲荷祭



跡見花蹊女史筆

繁縷(はこべら)

跡見花蹊女史筆



三宅花圃女史筆

大寒のまつるもいとゝうらかふ

しらみかはよれ寒りも

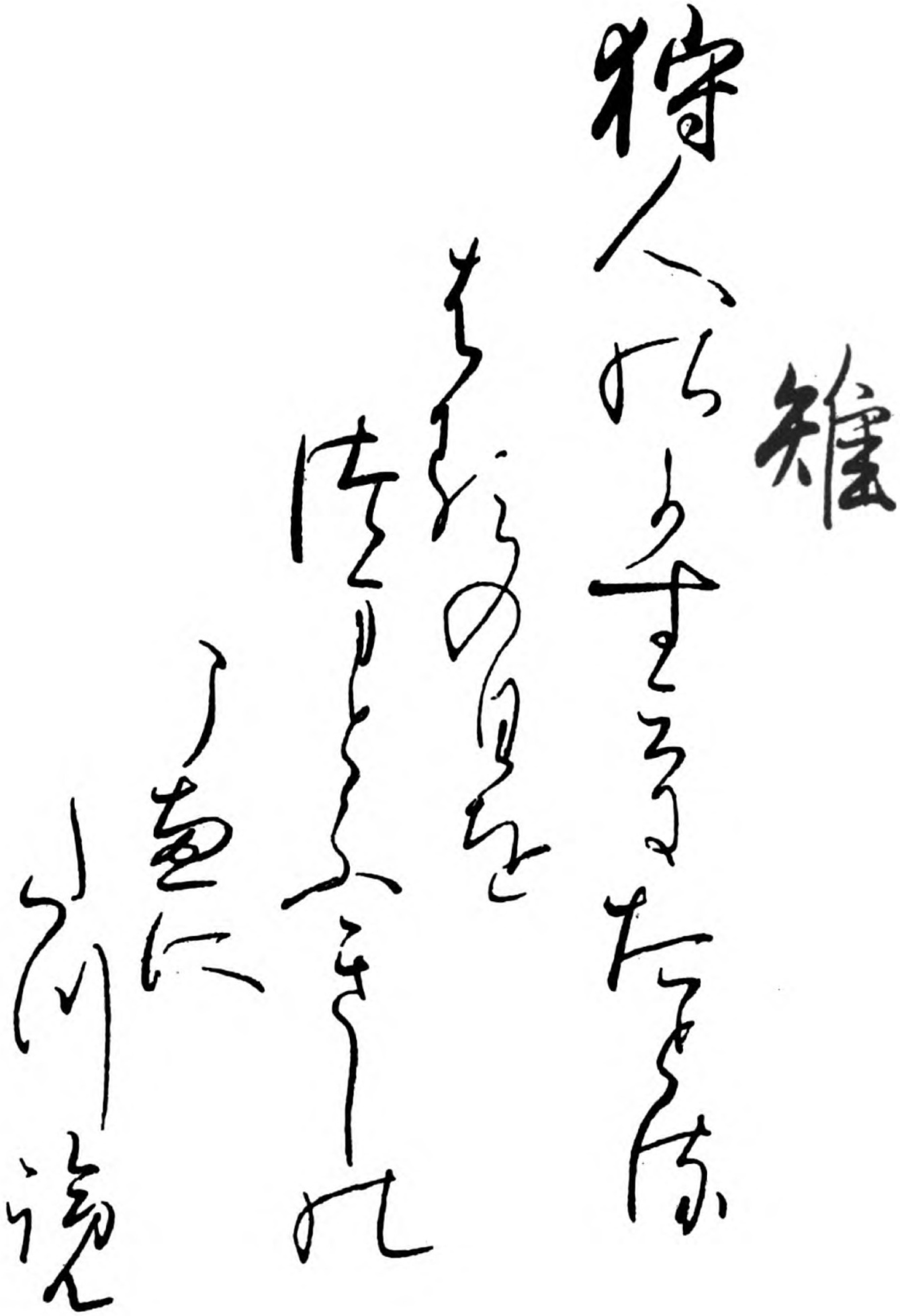
さしもあらねハあとさうかゝ雨ほと

なつかしむいりのことさや

まかしくめてたく侍りし哉

いつかおはしまして波はよ
梶とりも便りもあるまじき打
天の味かるくさらへのこころへ日
髪をとりもちて出てかぬらむま
つらねてともせ給へのこと

多田親愛先生筆



多田親愛先生筆

桜

かさし [illegible]
人の [illegible]
[illegible]
[illegible]

●英學新報社出版書類●

英文書簡

本社編纂

新刊　全壹冊（四六判）洋裝美製本●紙數三百五十頁●正價金四拾五錢郵税八錢

本書は交際用商業用英文書簡の書き方を最も丁寧に説明し約六百の作例を示したれば人事百般のこと悉く其文例を本書に求むることを得べしもし事に臨みて本書の文例を採り之に適宜の修補を加ふれば立ろに己の用務を辨ずることを得べし諸君一本を机上に備へて此至大の便を享有すべきなり。

英文 英國大家演説集

本社編纂

新刊　全壹冊（四六判）洋裝美製本●肖像寫眞版七葉挿入●正價金三拾五錢郵税六錢

本書はグラッドストン、デスレリー、ロズベリー等英國近時の七大政治家が國論を動かし一世を驚かしたる大演説各一編を蒐集せるものにして讀來り讀去りて文字血あり紙上聲あり肖像亦動かんとするの感あり我同盟國の爲政家の高風に接せんと欲するものは本書を執りて之を讀め。

●和文英譯集　東京高等商業學校教授　高嶋捨太先生著　正價三拾五錢　郵税六錢

本書今般増訂再版出來せり

英文討論集

東京外國語學校教授　村井知至先生著

新刊　全壹冊（袖珍）洋裝美製本　正價[illegible]拾五錢　郵税二錢

討論は言論の花にして字々皆金句々悉玉なり一文一章論理の正鵠を失はず條理明晰にして推論機微に入り寸毫の瑕瑾を存ずべからざるなり此活躍せる言論を英文にて讀まば更に一層の妙趣あるべし是を以て本書は東京外國語學校副用教科書に採用せられ又江湖の歡迎を受くること極めて大なり。

●英文對話編　東京外國語學校教授　村井知至先生著　正價三拾五錢　郵税六錢

●アーサー王物語（註釋付）　ハーツホーン女史著　英學新報社撰訂　正價金四拾錢　郵税六錢

●エノックアーデン　正價金二拾錢　郵税二錢

●和漢名家英譯詩歌集　村山敏雄先生著　英人リッデル女史英人コルビー女史米人グリーン女史英人ソントン女史英譯　正價金三拾錢　郵税四錢

●英和對譯日本昔噺　壹冊金拾三錢　郵税四錢

發兌元　東京日本橋區本町　博文館

發兌元　東京神田表神保町　東京堂

（乙の二）

和氣靄々春風の如き家庭を望む人は必らず本書を讀むべし

慶應義塾敎授　菅綠蔭先生閲
渡部竹蔭君著　最新刊

明治の家庭

（總ふりがな付）　洋裝美本定價廿五錢郵稅四錢

いくら多くの富を重ねても、大なる名譽を負ふても、家庭が圓滿で無ければ、其人は最大不幸の人と言はねばならぬ、いくら學校敎育は完備しても、家庭が不規則では、玆に養育される子女は皆腐て了ふ。本書は我國現今の不完全、不規則極まれる家庭を矯正せんが爲めに生れたので、已に將來理想の家庭を作られた紳士や奧さんは勿論、苟も家庭を作らふと云ふ靑年淑女は是非一讀せざる可らざる處の珍書であります且本書の如き家庭書は進歩したる新春の贈答品として最も趣味あるものと考へます

久津見蕨村君著　大好評增訂六版

家庭教育 子供の躾

洋裝淸洒艶麗全一冊、定價廿五錢郵稅四錢

本書は著者が該博の識と多年の實驗に依り家庭敎育の仕方を十三章百六十餘條に說き示されたる者なれは婦女子にても容易に理解せられ直に實際に試むることを得べきやう記述せられたる近來稀に見るの好著なり

宮中御歌所寄人中郡秋香先生著　訂正三版

新編書簡文法式

新編女書簡法式

總クロース金文字入　定價五拾錢　郵稅六錢

洋裝古今無類の美本　定價六拾錢　郵稅六錢

書簡文の法式男女に別ちて大成せる者は、古來未だ曾てあらず、盖し書簡に法式のなからざるべからざるは、尙人に禮儀の缺くべからざるが如く、苟も人に禮儀なく、書簡に法式なからんか、其人如何に貴しと雖も、又いかに富めりと雖、一日も交際塲裡に立つこと能はざるべし、中郡先生深くこゝに感せられ、今日の現狀に依り、舊新を對照して以て、時の宜しきに從ひ、適當の式を設けられしものなり、故に人間處世には一日も欠くべからざるは勿論、苟も筆を書簡に把る人は、瞬時も座右を放つべからざる要書なり。

增訂四版

文鑑 千草の錦

菊大判三百排頁餘和裝　無類の美本　定價五拾錢　郵稅八錢

本書は現代の文豪中郡秋香先生が該博の識を以て、古學復興以來今に至る家庭の文中、男女學生の摸範となるべき、美文、記事、紀行、論說、消息、物語體等、無慮數百編を撰出せられ、之に加ふるに上欄には、類語數萬を載せ、作習の摸範と應用とに供せられたるは他に其比を見ざるなり、故に師範學校、高等女學校、其他國文學研究の學生諸君は勿論、家庭の御夫人方も作文の摸範として此上もなき良書なり。

（乙の三）

◎發兌元　東京市日本橋區箔屋町十六番地　前川文榮閣◎

元和二年創業

醬油

花紋賞牌 第一回內國勸業博覽會

有功二等賞牌 第三回內國勸業博覽會

優等賞牌 米國市加古世界博覽會

有功二等賞牌 第四回內國勸業博覽會

有功金牌 創設廿五年紀念博覽會

金牌 佛國巴里萬國博覽會

金牌 佛領ハノイ亞細亞博覽會

一等銀牌 第五回內國勸業博覽會

宮內省御用達

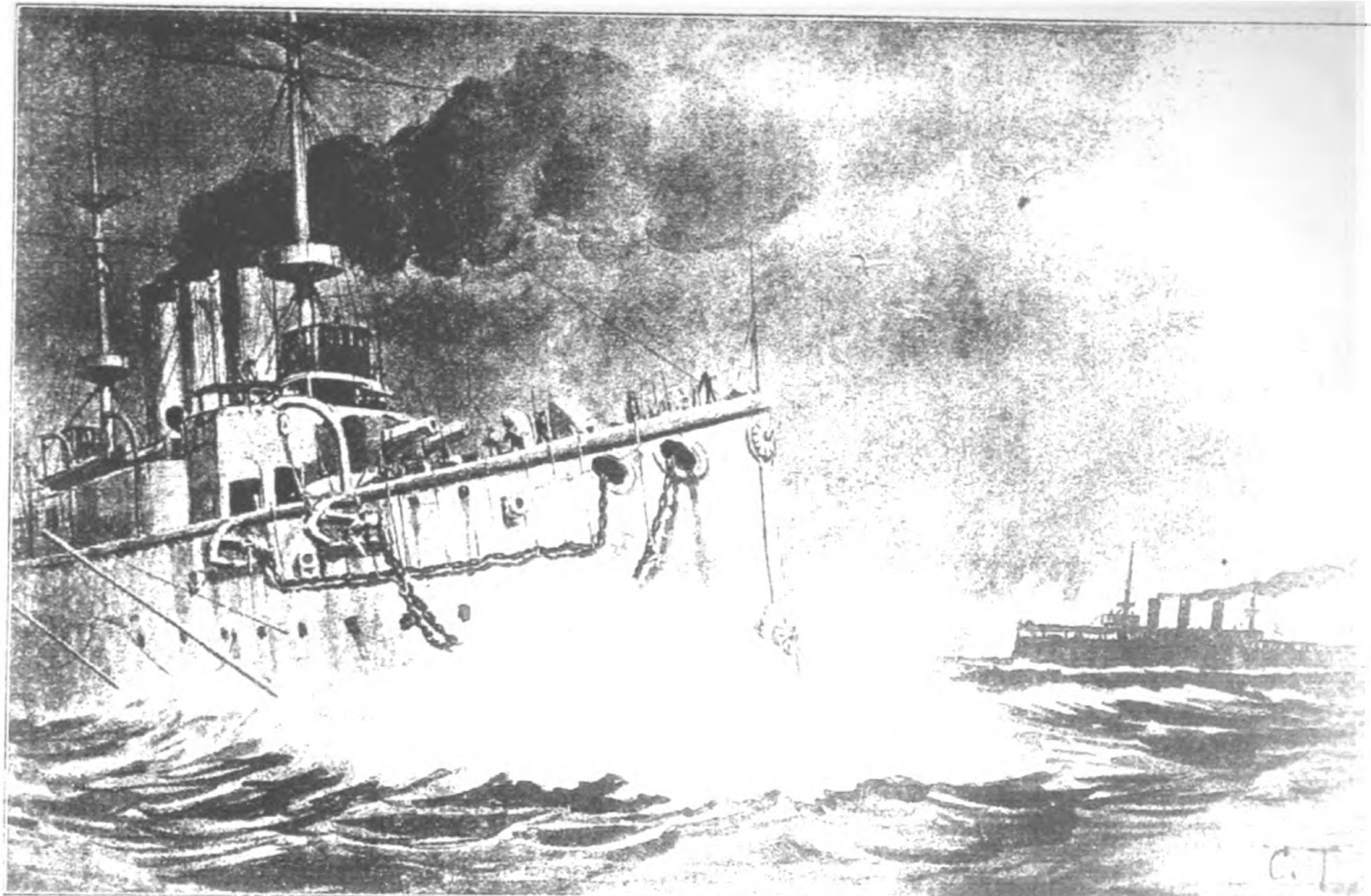
ヒゲタ印醬油釀造元

田中玄蕃

千葉縣銚子港

（乙の四）

大日本一等戦闘艦敷島(一万四千八百噸)



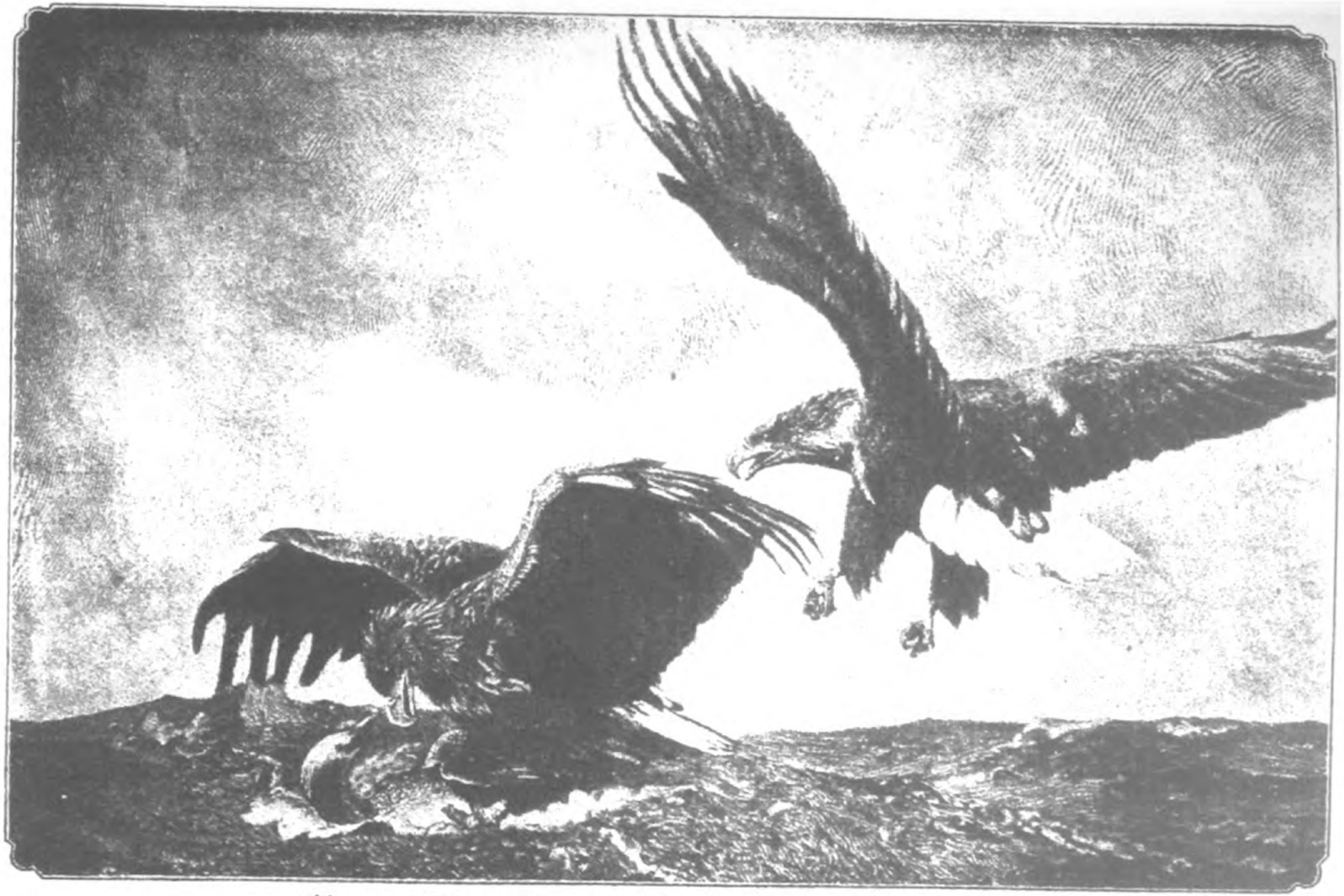
露西亜東洋艦隊一等戦闘艦セレウ、イツト(一万二千六百噸)(博進社工場印行)

危機一髪

戰塵看護婦



フロレンス、ナイチンゲール



西比利亞の荒鷲



高貴



露西亞皇后陛下

●文武堂出版書類廣告●

東久世伯爵題辭　樺山伯爵夫人題詠
佐々木信綱先生　渥美雅子女史共著

新刊

新撰女子用文

全壹冊菊判洋裝美製本　正價三十錢郵税六錢

婦女諸君の生涯を通じて、最も必要なるものは書翰文なり。しかも最も易きに似て最も難きは書翰文かくとなり。その一見易きが故に、顧らるゝこと少くして、爲によくかく人の多からぬはいと〳〵恨むべき限なり思ふにこの恨をもちつゝ、學ぶべき師なく、書なきにくるしめる人世に少なからざるべし。この女子用文は、さる人々の爲につくられしものなり。その文雅に偏せず俗にかたよらず、よく當今の女子が、以て則とすべき躰をえたれば、或は世の需むる所にかなふべきか。殊に附錄としてそへたる、作文心得、婦人百人一首、修身百人一首、近世名家歌集抄は、相まつて初學の人々を益すること尠少ならざるべし。

〜〜〜中島義式先生著　木版挿畫數十個入〜〜〜

新撰女子作法書

再版出來
全壹冊菊判美本
正價金二拾五錢
郵税六錢

著者は東京府女子師範學校其他の學校に教授せられたる教授案を高等女學校禮法教授に於て多年實地に照し削正し各種心得を丁寧懇切に緻密なる挿畫もて説明を加へたるものなれば禮法教科書として、はた家庭に於て作法を修めんとする婦女子の要書なり。

〜〜〜

若松賤子女史遺稿
櫻井鷗村君編纂　桂舟畫伯意匠

忘れかたみ

全壹冊四六判上製
金文字入頗美本
正價金壹圓
郵税拾二錢

目次

◎忘れかたみ◎雛嫁◎せーらくるー物語◎我の花◎波のまに〳〵◎いなつくあーでん物語◎宿入學前◎ひろひ兒◎林のぬし◎鼻で鮒◎邪推◎榮公の誕生日◎淋しき岩◎黃金機會◎ろーれんす◎女房演説◎お向の離れ◎おもひで……以上

元良文學博士評論　戸澤文學士譯

●小説 愛と心　正價金三拾五錢　郵税六錢

櫻井鷗村君譯
●飜譯小説 少看護婦　正價金拾五錢　郵税四錢

讀賣新聞社編纂
●明治閨秀美譚　正價金拾錢　郵税二錢

讀賣新聞社編纂
●名士の父母　正價金二拾五錢　郵税四錢

讀賣新聞社編纂
●明治の令孃　正價金三拾錢　郵税四錢

櫻井鷗村君著
●現代女氣質　正價金三拾五錢　郵税六錢

發兌元　東京日本橋區本町　博文館
發兌元　東京神田表神保町　東京堂

(丙の二)

酒は百樂の長

前衆議院議員櫻井駿君著

（製本既成）

酒量大觀

本書は財政家酒仙なる櫻井駿先生の新著なり先生政界に在て平素政務調査に多忙なるの傍ら其能く時に大酒量を實演し氣焰揚る所餘情溢れて酒量大觀の大文章となる其哲學觀を以て酒量を論ずる所眞に古今獨步の妙あり後篇は內外各地に於て先生の實例に依り酒量觀言行一致の實を示せり附錄には內外人の酒量と歐米の禁酒論賛否とを掲げて最後に內外各種酒類精分對照及分拆表あり人をして興味實益併せ得て一讀三嘆卷を措く能はざらしむ

全一册

洋裝細長形
裝幀堅牢
正價三拾錢
郵稅六錢

發兌元 東京本町 博文館

(丙の二)

水谷不倒先生著

竹本攝津大椽

巻頭竹本攝津大椽夫妻の肖像及筆蹟寫眞銅版入

東に市川團十郎、西に竹本綾路太夫、名人上手の好取組、歌舞伎と淨瑠璃の兩大關と稱へられしは實に一年前のとなりしが、團十郎は一步お先へ御免を蒙り、跡に次ぐべき名優なく、愛許御聞に達しまするは、近世義太夫節の泰斗、二代目綾路太夫改め竹本攝津大掾、先づは藝園の一人土俵入か、今の社會の横綱たる、デン通でもなく傳通でもなき著者が、大阪に居る甲斐に、吾が儘ながら讃書こと、攝り出したは此傳記、攝津大掾が少年より身を起して藝人社會に投じ、千辛萬苦、今日の大名を博したる其經歷は云までもなし、彼が平常の行狀、得意の語り物、細大漏さず一面より見れば大掾が傳にして一面より見れば實に一編の立志談、又最近五十年間、大阪に於ける人形淨瑠璃の變遷消長より文樂座の沿革を窺ふは、本書に限るべし、面白くて、爲になつて、而して事實が正確なれば、讀書社會に趣味を供すると共に、學者の參考に資すべきなり、是れ丈けは僞りなき効能なりとは著者が自白、其他の利益は讀者が攝り取り勝手次第なるは、倚千圓の大網引を引き當てるが如しと、ホヽ敬て白す

全一册

和裝極美本
中判
正價未定
郵稅未定

發兌元 東京本町 博文館

二十世紀之改良賣薬と純良煉乳

醫學士 田代義徳先生
醫學士 岡本武次先生
醫學士 田村光顯先生
協賛
研究

新發明薬

●内外各有名薬店で取次せり



本舗
薬種貿易商
東京日本橋區本石町三丁目
（電話本局二八六番）
大橋幹一

定價（郵送料各貳錢）

●太陽丹

千二百粒入	一圓
五百五十粒入	五十錢
百五十粒入	十錢
五十粒入	五錢

●太陽丸

五週分	二圓
三週分	一圓廿五錢
一週分	四十五錢
三日分	二十錢

●太陽散

四十包入	五十錢
十五包入	二十錢
七包入	十錢
三包入	五錢

●太陽劑

（内用薬）

三週分	一圓廿錢
一週分	四十五錢
三日分	二十錢

（外用薬）

三週分	七十錢
一週分	三十錢
三日分	十五錢

●太陽膏

大罐入	五十錢
小罐入	十錢
貝入	五錢

●象印ミルク

一罐百廿匁入 二十五錢
但し地方は運送費を要し候

（丙の三）

醫學士 近藤常次郎先生著

（製本既成）

續仰臥三年

一名 養病讀本

本書は近藤先生仰臥三年の續編にして一名養病讀本と稱す、蓋し本書は二卷五章より成り而して養病大意一章は本書の原理論にして、病牀隨筆、俳句記鈔、枕頭玩占の三章は合して之れが方法編を成し、仰臥禪話章は先生の經歷談なり、是れ首章と相照應して一理を構成す、寔に文壇新奇の佳編にして讀者の是非購讀せゝられざるべからさる珍册なり、前著仰臥三年は出版早々讀書界の歡賞を博し版を重ぬる數次、今亦此編成らんとす、讀者一鞭を後れされ

全壹册洋裝
菊判紙數約
二百有餘頁
正價三十五錢
郵稅六錢

目次概要

第一卷

第壹章 養病大意

●緒論●養病の本義●智識概論●人の一生●權實なる人生觀●人生の缺陷●人生死の問題●健病の二境●病的生活の要領●功名榮達の眞相●病の顧荇●病的生活の時期及方法●運命觀●結論

第貳章 病牀隨筆

●理と實●善と惡●余が今日此頃●禪友に答ふ●運命と開悟●吾が病生涯の事を記す●學者の病を論す●病牀八景●嚴頭の感を讀む●大悟徹底●學漱君に答ふ●夏の病牀●夢の治療的作用●間疾の心得●諦めと慰め●看病の大要●病牀要求●批評の答論……

第參章 俳句記鈔

●俳句五十餘首並ニ序

第四章 枕頭玩占

●某君の病を占ふ●紅葉山人に與ふる書●河西君を送る序●文學占話●附錄筮占批評

第二卷

第五章 仰臥禪話

第一回病氣に對する失敗並に愚痴の事●第二回尿閉症發現の事●第三回病苦に對する精神上の變化の事●第四回死を諦め並に恩愛を絕つ事●第五回名譽心の斷念し難き事●第六回悟道徹底の事●第七回養病十書の事……

發兌元 東京日本橋區本町三丁目 博文館

●文武堂藏版新版廣告●

西園寺陶庵侯題辭
志賀矧川君序文
飼鳥大家 川口淸五郎翁著

實地活用 諸鳥飼養全書

此書の特色は記事の正確にあり、書中片言雙語たりと雖も亦不確實なるなきは勿論、著者は宮内省動物園に於て、また土耳古帝室内動物園に於て、多年其を擔任實驗せしものなれば、以て本書の價値を想知すべきなり、されば書中挿入の圖畫の如きも何れも實物の寫生彩色畫を用ひ以て其正確を併行せしめたり、殊に附錄として鳥類の捕獲法をも添へたれば幸に本書を繙くものは、悉く鳥類の飼養法を知るのみならず、春郊に秋野に之を捕獲することをも修得せしむる實に斯道に於ける良師たるに耻ぢざる有益の珍書と云ふべし。

諸鳥寫生畫優美彩色刷四拾圖外に木版挿畫數十圖挿入

全壹册洋裝(菊版)
金文字入上製頗美本
正價金九拾錢
郵便稅拾錢

西園寺陶庵侯題辭
山縣螽湖君序文
闘球大家 小川文雄君著

新案圖解 玉突術

由來玉突の書は學理を解說するのみにして、之を實地に應用する法を講せず、是を以て讀者百讀千誦すると雖も斯道の進涉に資する頗る僅少なり、小川先生曩に著あり、爾來茲に五星霜再び此著あり、理論明晰、趣味森々、而して鋭敏の觀察能く闘球家の通癖を指摘し、精緻の筆墨能く之が矯正の道を誨述す、殊に學理を實地に引用するの道を說く所、斯界文籍中新たに一機軸をなしたるものと謂つべく、闘球家必讀の好著述なり。

玉突姿勢之圖寫眞三葉挿入圖解木版彫刻九拾餘圖挿入

全壹册洋裝(菊版)
金文字入上製頗美本
正價七拾五錢
郵便稅八錢

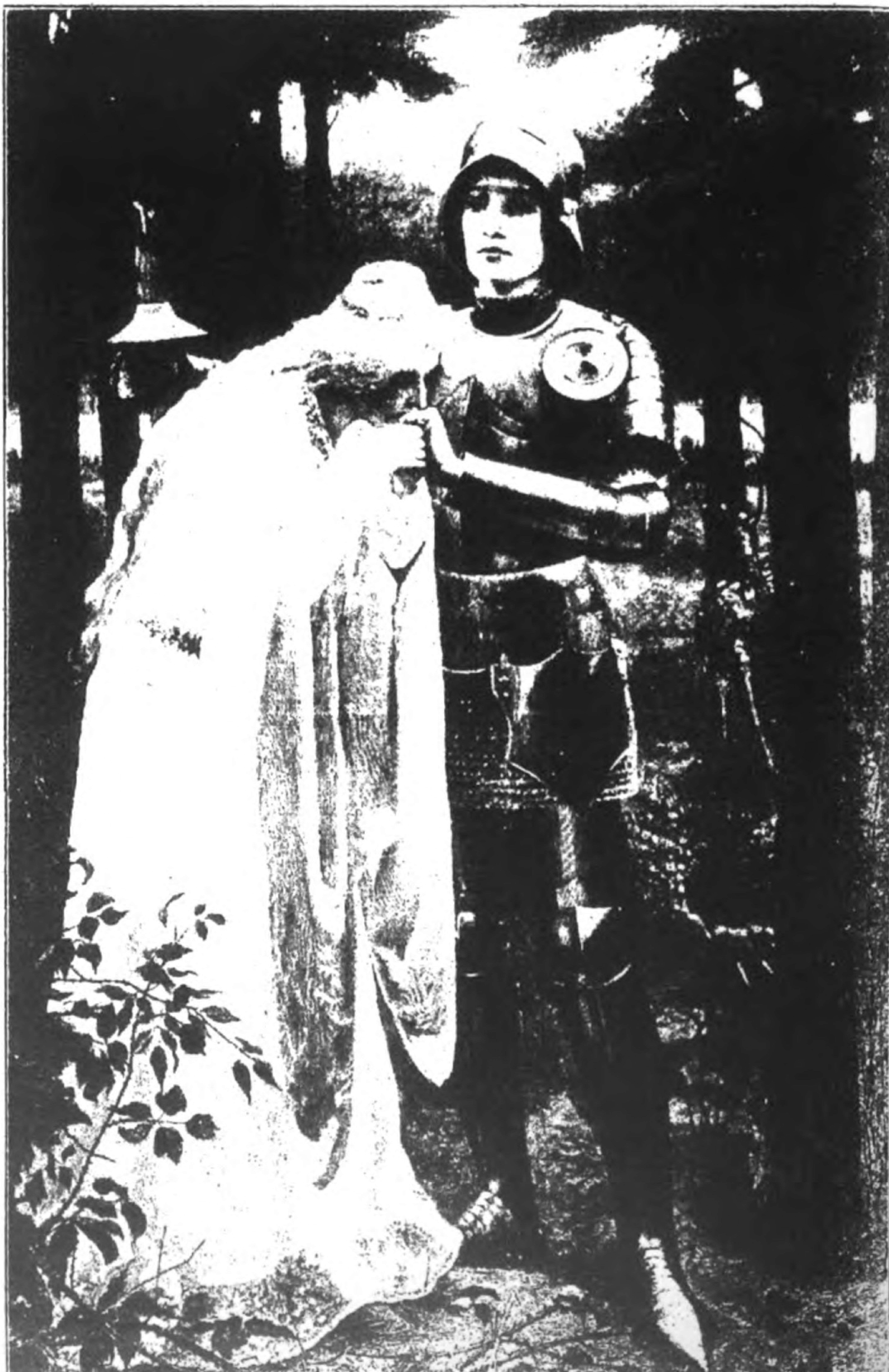
發兌元 東京日本橋區本町 博文館
東京神田表神保町 東京堂

(内の六)

（丙の七）

（丙の八）

離別（勇士と佳人）



軍國多事

伊東軍令部長



大山參謀總長





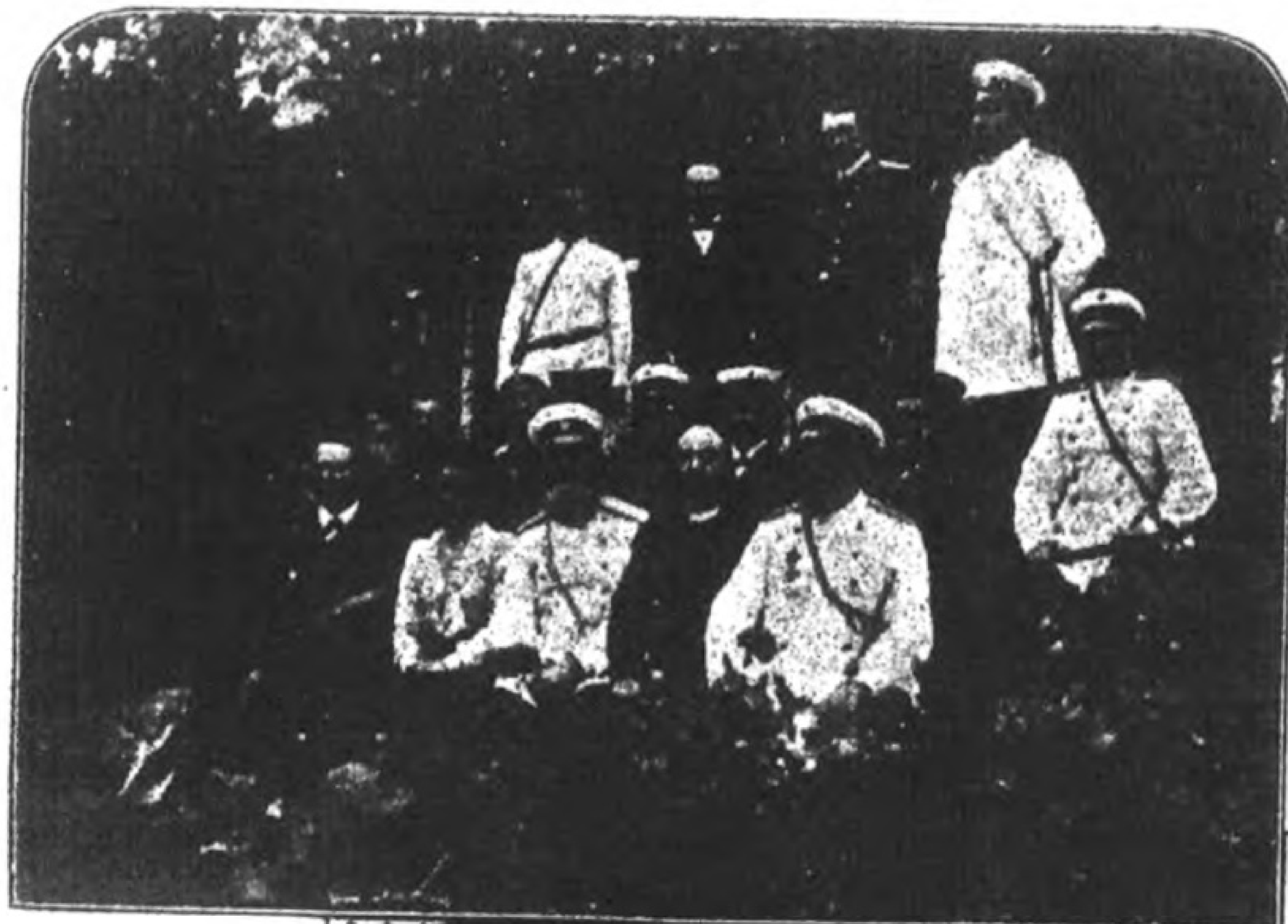
山本海軍大臣



兒玉參謀次長

露西亞人の家庭

露領サガレン島總督幷屬僚





同官吏の家族



同家庭



女子美術學校選科卒業生

名家の遺著

故文學博士　高山林次郎先生遺稿

樗牛全集

全三冊

上卷製本出來

洋装上製
クロース製
背皮金字入
正價郵稅
毎卷不同

故文學博士高山林次郎先生が、吾邦文藝界の發達に貢獻せしと甚だ多きは世人の知る處なり。其肉體は龍華寺境内、冷なる土中に横はれりと雖、文や永遠の生命を有して輝く。茲に彼れが遺文を蒐集して、彼れが思想に接して靈の泉を汲まんとする者、はた彼れが事業を研究せんとする者の便宜を計る。第一卷の納むる所は、日本美術史稿の外に、審美的論文十數篇とす。美術史稿は、彼れが後日大成せんが爲めに稿本として作りたるものなれど、觀察評論の警抜なる、吾美術發展の跡を闡明して餘蘊なし。

上卷　美術及美術史

定價壹圓五拾錢
小包送料拾五錢

卷頭……高山文學博士肖像挿入
第壹部……美學上の研究
第貳部……日本美術史稿
第壹章……總論
第貳章……奈良朝以前の美術
第參章……天平時代
第四章……平安朝時代

高山博士著

●近世美學　上製五十五錢郵稅十錢　並製四十錢郵稅八錢
●論理學　上製五十五錢郵稅十錢　並製四十錢郵稅八錢
●世界文明史　上製五十五錢郵稅十錢　並製四十錢郵稅八錢
●時代管見　正價三十錢　郵稅六錢
●文藝評論　正價三十錢　郵稅六錢
●平相國　正價十五錢　郵稅四錢

（丁の二）

發兌元　東京日本橋區本町三丁目　博文館

十洲　男爵細川潤次郎先生序
赤堀又次郎先生訂校

心學叢書

徳川氏の中世、太平既に久しくして四民奢侈に長し、淫逸に流れ、道徳殆んど地に墮つ、石田梅巖先生深く感ずる所あり、慨然として廻瀾の志を起し、心を知るとの學問の始たるを悟り、平易の話を以て其說を講ぜられき、所謂心學是れなり、手島堵庵、脇坂義堂、中澤道二、奥田頼翁、柴田鳩翁等の諸家相踵ぎて、其道を說き一世を撼起し明治の今日に及ぶ本館今回諸家の遺書を捜り、其名著を校訂して發行せんとす、其卷中には心學に關する諸種の寄書を加へ傍訓を施し、句讀を正し、一讀趣味多く資益する所を全からしむ、希くは江湖諸彥其遺志を繼きて、後進の士を稗益せられんことを

全部六册
一册大約三百頁
菊判和裝　正價一册卅五錢
全部　貳圓六錢　郵税一册

第壹編（製本既成）

●賣卜先生安樂傳授
●賣卜先生糠俵
●齊家論……石田勘平著
●塵とり……手島宗義著
●里俗教談 錢湯新話……伊藤單朴著

續刊

第貳編（一月發兌）

●民の繁業……虛白齋著
●松翁道話……八宮齋譯

以下第三編より逐次發行第六編に至りて完結すべし今や一世の人心復小康に傾き道念德操日に漸く微ならんとす今や本書刊行は全く無用の業にあらざるべし

發兌元　東京日本橋區本町　博文館

(丁の二)

新刊廣告

女子高等師範學校教諭伊藤弘一君著

女子用

教育法撮要

（特製）上等色クロース金文字入頗美本定價七拾錢郵稅拾錢

（並製）洋裝美本定價金五拾五錢郵稅八錢

全壹册

◎本書は著者が多年女子高等師範學校に於て實地に授けたる教案に本づきて記述せられたるものにして世上多數の教育學書と大にその趣を異にし全部を緒論、精神の狀態、乳兒期の教育、幼兒期の教育、兒童期の教育、青年期の教育、結論の七篇に大別し先づ簡明に教育理論の大要を說明し次に子女の發達する次第を逐ひて懇切に家庭教育、幼稚園教育、學校教育の方法を講述し終りに附錄として教育上特に必要なる現行の諸法令を掲載したれば高等女學校女子師範學校等の教科用書として最も適切なるべきは勿論一般家庭の參考用として亦頗る有益の良書たるべきを信ず

發行所　東京本郷森川町一番地（電下谷二四一四）　育成會

（丁の三）

(丁の四)

簿記書類新刊

神戸高等商業學校教授 東奭五郎君閱
長崎縣立師範學校敎諭 山下與之助君著

普通簿記教科書

全壹册

菊判洋裝背クロース紙二百餘頁
正價金三十錢
郵税金六錢

現時我邦の師範學校及高等小學校等に授くる簿記は多く高等簿記に限れり高等小學校に於て會日用簿記の一部を授くるも其會一種の家計簿記なる學生及官吏の生活内部を示したるに過ぎずして未だ實業家の計算整理法を講ずるものあるを聞かず著者茲に見るあり商業簿記に商業家の生計簿記と農業家の生計簿記とを各部互に相關聯せしめんが爲め多年此事に傾意せり、師範學校の如きは他日小學兒童の指導者を養成する所なれば無論此題意により授くる所の方針を取らざるべからず故に本書は師範學校教科用并に高等小學校簿記參考用書に充てん爲め懇切に編纂せり請ふ其眞價は一卷を得て御諒知あらんことを……

東京高等商業學校教授 佐野善作君序文
東京高等商業學校卒業 曾我部純一君著

最新家計簿記

全壹册

菊判和裝本文
四號活字紙數
二百餘頁美本
正價郵税未定

從來家計簿記に關する著書は或は簡畧に生し或は冗漫に流るゝの恐なき能はず著者茲に見る所あり高等女學校等に於ける家計簿記の教科書參考書たらしむると同時に一般家庭の主婦たる人々に家政を整理せしむる目的を以て本書を著述したり其第一章に於て帳簿を論して一讀家計簿記の何たるを知らしめ且從來其例なき豫算の編成を論したるが如き以て著者の意を見るに足るべし加ふるに上田學士の嚴密なる校訂と注意とを與へられたれば家政上欠くべからさる要書にして讀者此書によりて傳習せば其稗益せる所大なるべし……

發兌元 東京市日本橋區本町三丁目 博文館

（丁の五）

●文武堂藏版新版廣告●

肝付海軍少將序文　押川春浪君著

海國冐險奇譚　新造軍艦

山中古洞君揮毫寫眞版挿入

全壹册洋裝●袖珍　金文字入美本　正價三拾錢　郵稅四錢

押川春浪君の海底軍艦は大好評を以て既に數版を重ぬ、本書は海底軍艦に似て更に結構の雄大なる海國冐險小說なり、新造軍艦「うねび」の行衛不明は世界の最大疑問、支那海の浪荒き所に何者か潜む、南洋貿易船の出沒、露國軍事探偵の隱見、冐險奇傑の快擧等、眞に破天荒の珍事にして、今や東亞の風雲急なる時、我日本國民の一閑体は、天外万里の異境に大飛躍を試みんとしつゝあり、强大なる義勇艦隊は如何なる有樣にて世に現はるゝや、諸君お待兼の武俠之日本の續編の出づる前是非本書を讀め!!!

◎◎春浪君著類書◎◎

●英雄小說　**武俠之日本**　四版●正價四拾錢　郵稅六錢

●續武俠之日本　**義勇艦隊**　近刊●艦隊編成中

●海島冐險奇談　**海底軍艦**　七版●正價三拾錢　郵稅六錢

●海島探險奇談　**塔中の怪**　五版●正價廿五錢　郵稅四錢

●傳奇小說　**銀山王**　既刊●正價三拾錢　郵稅四錢

英雄末路　ナポレオン

烟山文學士著

全壹册（四六判）洋裝　金文字入美製本　正價三拾錢郵稅六錢

肖像。セントヘレナ島。ナポレオン住宅寫眞版別挿入

ナポレオンのセントヘレナに於ける末年の生活は世人の多く詳にせざる所なり。此書は其ヲートルローの戰敗より孤島流竄となり、終に身を終ふるに至るまでの轉變を細寫して餘蘊なし。彼がロングウッドの住宅や、其日常生活の有樣や、知事との衝突や、彼の侍臣及び侍醫との交爭や、皆之を目のあたりにするが如し。就中彼の談話、殊に古今人物評、戰爭談、冐險談、亞細亞東征論、英國觀、并に女性觀、宗敎觀等は皆頗る興味ある事項にして。大方の批讀を待つ所なり。

發兌元　東京日本橋區本町　博文館　東京神田表神保町　東京堂

（丁の六）

稀代の珍冊

河口慧海師著

世界之秘密國 西藏旅行記

（上卷二月中旬發行）

上下二卷
一冊五百頁以上
菊判總クロース
金文字入極美本
正價郵稅未定

上卷口繪

比馬羅耶山脈中世界第一の高雪峯（ゴリーサンカ）の景二頁大●慧海師出發當時の肖像●西藏語梵語博士チヤンダラダース氏肖像●タシルフンフー寺大喇嘛敎師シエンテエンドルヂエチヤン尊者肖像●慧海師入藏踏査地圖（石版着色）

河口慧海師は宇治黃檗山の僧にして夙に西藏譯の佛書を求め佛敎の眞義を極めんとの大志あり明治三十年印度に涉りて爾來三年の間幾多の艱楚を嘗め姿を喇嘛僧に變し遂に西藏に入り首府拉薩に留ること二年既にして其日本人なること發覺して咄嗟奇變の迫るに遭ひ僅かに身を以て脫出し滿六年の星霜を經て昨年五月無事歸朝するを得たり西藏は（ヒマラヤ）山北の高原國にして世界の高山峻嶺を以て其四邊を圍み且國道に關門を設けて鎖國を嚴行せり彼が完全鎖國を勵行せしより歐洲の探檢を企てし者幾數なるを知らずと雖も或は道途の險に仆れ或は彼國人に殺戮せられて一も成功せしものなし今日尙彼國內の消息を詳かにするを得ざりき是れ師の談話の最も珍重すべき所以なり時事新報記者曩に師の談話を筆記し數十日間紙上に連載して江湖の歡迎を博せり今回弊館更に師の校訂を經て前に遺漏せし所のものを悉く具備して之を上梓するに至れり然るに今や西藏は吾人の最も注意せざるべからざる境遇にあり英國は近頃遠征隊を彼國に送らんとし露國亦之れに對する運動をなさんとす若し夫れ此世界に於ける秘密國の眞相を知り英露の彼國に於ける勢力消長の如何を知り且又非常に活潑なる精神的活動を知らんと欲する者は師の辛苦經營の偉蹟を讀んで其稗益を得給ふべし

東京日本橋區 發兌元 博文館 本町三丁目

（丁の七）

工業叢書新刊

工業叢書は既刊十九書あり總目録は廣告せり

工學士 久野末五郎君著
實地土木工學
（製本既成）

全壹册

洋裝總クロース金文字入
紙數四百拾頁
正價金八拾五錢
郵税金拾錢

東海道一ヶ月の旅程を一夜の夢に縮めし鐵道扨ては大船巨船を擁する築港設備より水道下水の衛生工事は云ふも更なり文明改善の諸般工事凡て其礎を土木工事に待たざる者一として有るなく眞に土木は文明の先驅者たり而かも其施行の良否は成効の如何を賭するものにして設計書策如何に其理を盡せるわるも一たび施工を誤らんか遂に沙上の文字に歸せんのみ而して本書は土木工事全般に於ける施工本領の概要を叙述したる者にして其枠に附する所以のものは蓋し今日未だ斯る著の世に見ざるを以てなり其說述の懇到にして辭義簡明なる挿圖の精細なる近來得がたきの良書なり

工學士 矢野道也君著
繪具製造法
（製本既成）

全壹册

洋裝總クロース金文字入
紙數四百五十頁
正價八拾錢
郵税拾錢

目次

附錄

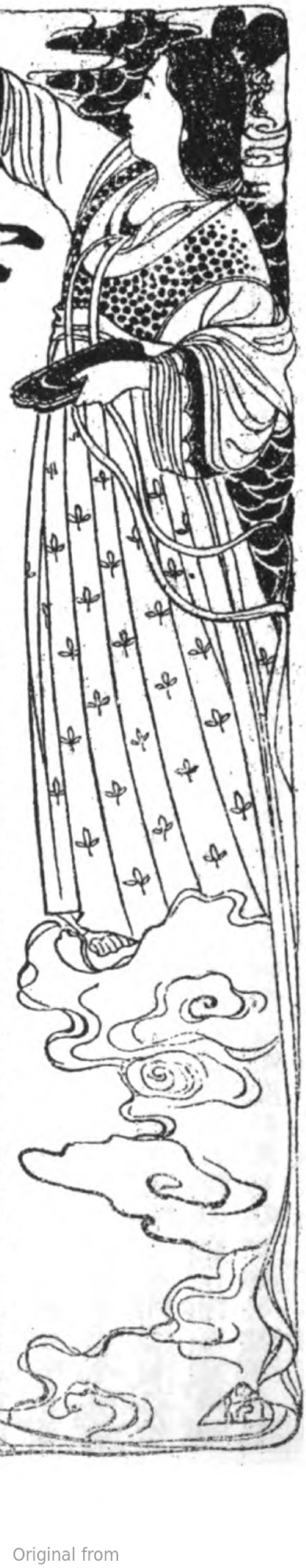
(一)顔料性質一覽(二)顔料使用に關する注意(三)新奇なるレーキ顔料數種(四)比重計比較表及苛性曹達溶液強度表(五)硫酸第一鐵溶液の強度(六)硫酸鉛溶液の強度(七)硫酸亞鉛溶液の強度(八)重クロム酸加里溶液の強度

發兌元 東京市日本橋區本町三丁目 博文館

(十の八)



第四巻第貳號二月五日發行



家庭月令（閏二月）

〔四日〕節分……各戸炒豆を撒き柊鰯の頭を戸外に挿して加齢の福事とす。〔五日〕立春。〔六日〕初午……稲荷神社の祭禮、小兒等を連れて詣づるもの夥し。〔十一日〕紀元節。〔十五日〕釋迦涅槃會〔十八日〕二の午。二十四五日頃より雛人形の市立あり、女兒ある家にては雛人形及調度類を飾り付く。

〔氣　節〕「立春」春心漸く働き初めて、梅花綻び、氷解くてふ春立つ風は吹きそよぐなれど、所謂餘寒の季節にて、人は厚衣を重ねて火邊にうづくまる。

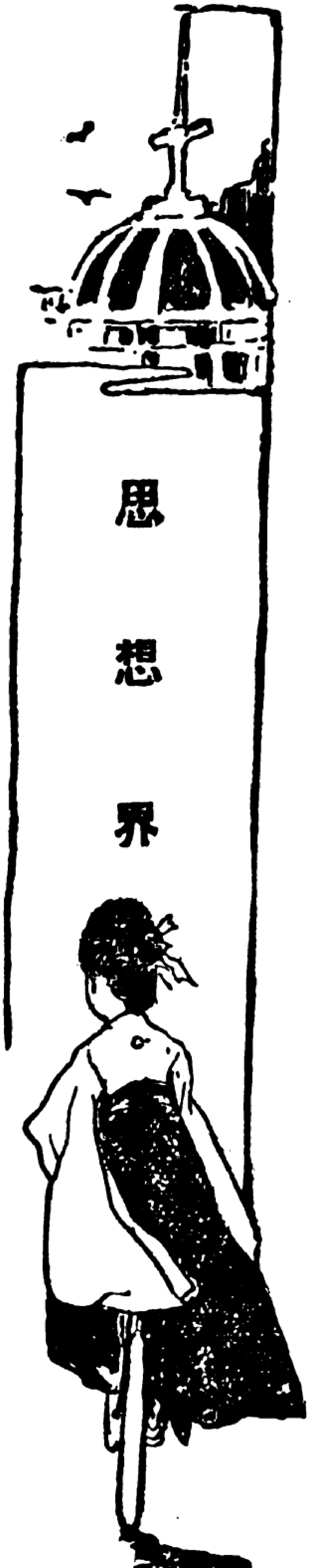
〔農　事〕農家は概して閑散なれば、農具の修繕をなし、苗床を整備し、胡瓜、茄子、蕃椒、等の早生種を播種す、又た柑橘類、桃、巴旦杏などの種蒔、移植、刈込、挿木等を行ふに宜し。

〔食　品〕蔬菜類――しゆんぎく、つくし、ふきの薹、鶯菜、◎魚介類――鱈、乾鰕、烏賊、蝦、鮭、章魚、白魚。

〔遊　樂〕室内の遊戯此月に適す、或は東野に西郊に運動を試みて、匂ひこぼるゝ梅花の木陰に逍遙するも興味一層。殊に梅花の名所なる龜井戸に杖を引かは名物の鶯餅など賞翫の頃なり

〔景　勝〕梅の名所は、東京龜井戸、小村井、木下川、蒲田、小向井、……月ヶ瀬

〔祝祭日〕十一日――紀元節。〔日曜日〕七日、十四日、二十一日、二十八日



女性壓服論

本田增次郎

婦人は男子よりも劣等な人間であるから、家庭に於ても社會に於ても、男子の權下に壓服されて居るべきものか？抑も女性が種々の點に於て男性の如く其の材能技術を伸ぶる能はざるは、永く男子に屈從せしめられた結果であるか？換言すれば女性は子供や奴隸の如きものか或は發達した自主の人間たるべきもの乎。

此問題を提起するについては男女兩性の友人數名に意見を尋ねた。無論今日の日本女子にかゝる根本問題を考へさせるは至當だと贊成するもあれば、餘り理論的で面白くない感心せぬと評するもある。婦人はさう露骨的に根本的に自分等の事を男子に研究せらるゝを歡迎せざるべしと氣遣ふもあれば、女性が女性の手前味噌を言ふのでなく、婦人を壓制した男子が其の壓制の可否を論ずるのであるから至極妙だと勸誘するもある。今の日本女學生などにそんな事を聴かすと頭腦が顚倒してしまふと心配するもあれば、いや危險な說でも何でも之を咀嚼消化しで、取るべき點があれば之を同化する見識は女性にも必要があるから、苟も人間の心に浮んだ議論は良否ともに聴かせて差支がない、いや聴かせた上で徐ろに之を取捨する彼等の態度が見ものであると喜ぶもある。しかも贊否兩論者が兩性に入りまじつて居る所など最も妙である。

さて日本に今日もし、思想の新傾向なるものありとせば、それは事物を根源まで研究し盡さんとする願望であらう。中年老年の所謂先輩なるものが兎角因循で、それは道理からはさうかも知らぬが、そんな事を露骨に發表したり唱導したりすると、人心を惑はせ社會の秩序を紊亂する本となるから、まあ〳〵奥の底までは論じ詰めぬ方が善いと糊塗彌縫の曖昧的口調を弄するに反して、腦髓の淸新活潑な若い思想家は決して之に滿足しない。眞理を研究して其の結果を發表する事は學者の本分であるのみならず、これあつて初めて世界に進步改善の端緒が開けるのである、發表の當時は空論だとか妄說だとか云つて世間の非難攻擊を受けたものが、後には天下普通の常經と認められ實行の原則となつた例が比々皆な是れなりではないか。新說を聞いて頭腦を顚倒させ社會の秩序を亂る人のあるは、取りも直さず世の敎育がまだ進步して居ない證據で、敎育を普及進捗させる必要の論據とはならうが眞理探究の精神を抑へる理由には決してならぬ。之より深く先きまでは今日の人智で考へやうがないといふ極點まで研究して置かぬから、一寸耳新しい事を聞くと直ぐ別天地を發見したやうに驚き喜んで、其の當否利害をも慮らず即座に改革を稱へる論證に用ゐやうと噪ぐ事になる。か丶る淺薄な輕躁な國民を改造するには眞理其のものに對する切なる愛と樂みを敎へねばならぬ。秩序とか治安とか云ふ美名でもつて眞理の討究を抑壓するは、やがて秩序を紊亂し治安を妨害する本源となるから、とゞの詰まりまで事物を研究し盡さうといふ思想界の新傾向は最も喜ぶべき進步の徵候であると思ふ。

ところが世の政治家が自分の内閣に立つて居る間だけ國に事なかれかしと考へて、百千年後の進步平和を理想として今日の國是を確定し、永遠の幸福安全の爲めには目下の大亂も辭せぬ、况んや自家の地位の安全など念頭に置くものかといふ氣慨が一般に乏しい如く、敎育家といふ者も概して因循姑息な老朽的枯木的頭腦しか持たないで、成るべく自分が世間の非難を受けないやうに、自分の敎育した(いぢけさせた?!)子弟がどうぞ與

論の攻擊を惹き起すやうな事をし出來さないやうにと、青年男女を治安製造器械に仕立てやうといふ殊勝な心がけであるから、自分で思ひ切つた新工夫や根本的の研究が出來やう筈がない。日本の今の女子敎育家と稱せらるゝ者などは最も不思議な怪物が多い。第一女子が何んであるかちつとも分つて居ない、それから女子をどんなものに敎育しあげやうかそれもアヤフヤである。まあアヤフヤで仕合せ！　こんな敎育家に獨特の見識があつてそれを實地に應用されたらそれこそ大變である。日本の社會人心が如何成り行きつゝあるか、世界の大勢趨向はどんな所にあるかとんと見當がついて居ない、唯文部省の定めた課程を器械的に敎へるだけであるから生徒の心を開導感化する力は更にない。まあ今日の女學生が敎師を馬鹿にする程度を御覽なさい。敎師先輩を馬鹿にするは以ての外の不心得で深く戒めねばならぬが、しかし又女生ほど立派な先生に感服隨喜する者はないといふ事も忘れてはならぬ。單純な無垢な、人を信ずる心の深い女性を感化し得ないで、娘子に似合はしからぬ輕佻粗野な風に陷らしむるは敎育者の大不德大不器量であると反省せねばならぬ。

今後女子問題は盛んに研究せねばならぬが、これ迄婦人が自家の主張や不平や感慨を公にしたものが甚だ乏しい。從來の婦人論も大抵男子が自分の立場から不完全な觀察をして、男子の都合のよいやうに立論したのが大多數であるから、これを材料として公平に女性を判斷し女子敎育の基礎を立てる事は出來ぬ。又社會や人心が變化し世界の大勢が動いて行くに伴つて、女子問題にも新解釋を下す必要も少なからぬ事であらう。何しろ婦人が自分たちの性情希望抱負を明かにしてそれを發表するといふ事がなくては、婦人問題はまるで局外觀ばかりで仕方がないとは、自分の度々口にも筆にも唱へて居る事である。倘ほ進んでは女性が男子を觀察批評し男子に對する希望要求も遠慮なく主張する事になつて來なくては、世界人類の半分は發言權を持たぬ無資格の人間で一生を終るのである。

こんな事をいふと直ぐ婦人を煽動して男子に對する戰端でも開かせるかとビクビクする好人物があつて困る。しかし能く考へて見ると今の日本の社會は誠に妙である。或る種類の繪畫彫刻が風俗を壞亂するといふてお役人が彫刻品の一部分にキレを卷かせたり、特別室に油繪を祭りこませなどして愈々人の好奇心を起させるが、西洋からどしどしと入つて來る書物雜誌彫刻品などにそんなものが幾らもあるのは一向取締らない。いや製造品はさて置いて生きた人間、しかも社會の上流に立つてる人間が風俗壞亂の活模範を示して居るのは一向取締らない。或る種類の出版や演說を治安妨害といふて禁止だの中止だのと喋ぐかと思へば、それよりも遙か過激な議論を書いた出版物は盛んに海外から輸入されて、幾千万の讀書人が中止されずにそれを平氣で讀んで居るといふやうな事がある。女子問題もこれと同樣で、少し新しい議論が出ると直ぐ賢母良妻主義の一點張りで抑え着けやうとする先生たちは、女子の高等教育の門戸を開放したといふ事が即ち敵に兵器糧食を供給した事で、腦髓の紙型になつて居る女子教育家や舊弊連が天下泰平を夢みて居る間に、靑年女子の考へは駸々と發達して事物を奥の底まで研究せねば承知しないやうなつて來るのである。どうせ兵器糧食を與へた以上は戰はせぬ譯には行かぬから、女子が男子の敵となつて戰ふが聯合軍となつて戰ふが、其處が外交政略の巧拙でどうともなる大切な機密である。女性壓服論を公にするは此邊の覺悟を男子に警告すると共に、女子が行く所まで研究を押しつめる參考にも供したい考へからである。

先づ今日女性が男子に壓服されて居る事から慥かめねばならぬが、これは多く語を費す必要のない事である。政治上社會上に婦人が發言權を有せぬのみならず、婦人の領土といはるゝ家庭の内部だけでも男子に隷屬して一向頭は上がらぬ事になつて居る。民法の制定する所だけで見ても婦人の權利は男子のよりもずつと少ないが、社會人心の調子で見ても男子は專政君主で女子はその臣隷といふ姿である。職業から云つても名譽利益の

地位は男子が獨占して、僅かに婦人に分與せられた職業は劣等でしかも骨が折れて報酬は少ない。こんな事を列擧すれば數限りもないが、かゝる不公平な待遇は抑も正義公道に合つて居るかどうか。婦人は智力劣等体力薄弱であるから自然かうなるといふ論者もあらうが、一方には又男子が壓服して奴隷の狀態に幾千年も繋いで置いたから、それで婦人の智力体力が發達しなくなつたので、婦人は男子を暴戾な公敵として恨むべき理由があるとも論ぜられる。

近頃妙な自殺が流行して、華嚴の瀧に赴いたものが既に十數名あるといふ事を某女史に話したら、自殺がもし正しい事と認められるなら、日本の今の既婚婦人中には喜んで自殺するものがどれ程あるか知れぬと謂はれた。高等の教育を受けた女子を我邦舊來の慣習中に籠城せしめんとするは、所謂新しき酒を古き革嚢に盛るので必ず破裂を免かれない。一大衝突一大破裂があつて爰に清新の空氣が流通し、そこで初めて婦人の立場も堅固になり社會の弊風も改まる端緒が開けるのではあるまいか。何しろ今のまゝでは少數の男子に能く事理の分つたのがあつても、頑冥漢の攻擊を恐れて自家の所信を發表し得ず、信ずる所と全く正反對の事を眞面目らしく實行し主張する醜態がある、頭腦の進んだ女子は勿論はがゆくて不平滿々である。論じつめ研究し盡した所で結局今の狀態が最上だといふ事に歸着するかも知らぬが、それにしても、女子が自分で研究し自分で信仰して深く自ら覺悟した上でなくては、本當の平和安心が得られぬ、平和の押し賣りは不平を挑發する根源である。

昔し奴隷制度の行はれた時代には、婦人が悉く男子の奴隷であると共に、男子の大半も他の少數男子の奴隷となつて居た。或る人種或る身分に生れた者は奴隷となつて生殺與奪の權悉く主人の手に在るのが、天下の常理だと主人の方でも奴隷の方でも信じて聊か疑はなかつたのである。しかし奴隷制度の根源は强者が弱者を

壓制する事であつて、偶然弱劣であつた人種が强優の人種に征服せられた結果に過ぎない。素より人類の中でこれは奴隷人種これは壓制人種といふ差別があらう筈がないから、近世人道の明かになると共に奴隷制度は無道の極であるといつて斷然廢してしまつた。

君主專制もこれと同様で、君家に生れた者は馬鹿でも惡逆でも一國を我意のまゝに支配し蹂躪する、臣民と生れた者は如何なる賢才達徳でも毫も政治に容喙せられぬのみならず、暴戾の君主に絶体的服從をするが君臣の大義であるといふやうな政治的奴隷制度が、聊か怪む者もなく古來世界に行はれて居たのであるが、今日文明國といはるゝ諸邦では、專政君主の存在を認めないで、或は立憲君主制或は民主自治の制度を立てゝ、一國の公事は國民自身で處理するといふ方向になつて來た。代議制とか責任内閣とかいふは即ち政治的奴隷制度に代つて起つたものである。偶然强優であつた勝者が子孫千萬代に至るまで、偶然弱劣であつた一方の負者を子孫千萬代に至るまで奴隷とする道理はない。

かゝる次第で奴隷制度も專制政治も漸次廢棄せらるゝ大勢の中に、大海の浮島の如く唯一つ殘つて居る奴隷制は男子が婦人を壓制する事である。古往今來婦人を奴隷とせざる國なく、女性は先天的に男子に屈服すべきもののやうに敎へてあるが、これも最初婦人が男子に對立拮抗する力がなかつたといふ偶然が本となつて、因襲の久しき益々婦人を劣弱にし、男子の壓制し易いものにしてしまつた結果ではないか。凡そ政治宗教道德を制定する人は、當時既に成り立つて居る社會の制度に成るべく逆らはぬやうにして、丸く平和に世が治まる事を希望して規律を設けるのであるから、男子が女子を自分の奴隷として得々たるを正面から攻擊破壞する事をしかねた爲めで、深く研究して絶對的眞理を信じて女子を隷屬の地位に置いたのではなくはないか。前言ふ通りよしそれが爭はれぬ眞理であるとしても、女性自身が能く自分を解し男子を解し、社會を解し世界の趨勢を解

した上で、成る程斯うでなくてはならぬと納得信仰して隷屬の地位に甘んずるやうにすべきではないか、男女間の奴隷制は人種上政治上の奴隷制よりも遙か忍び難きものたるを諒察してはどうであるか。男女間の奴隷制は人類の半數を奴隷とする事で、しかも其の奴隷は晝も夜も公事にも私事にも壓制者の眼ににらまれて居て、其上夫婦親子などいふ切つて切られぬ義理愛情の鐵鎖で繋いで一生涯どんなに惱んでも遁れやうのない境遇に置かれて居るのではないか。（次號完結）

女子教育私議

青柳有美

女子の用たる無用の用にして、有用の用に非ず。若し、女子教育の根本義として、女子を以て有用の用に供する材を造らんとするにありといはゞ、是れ一大誤謬なり。これ、女子をして、その天賦の本性を逆用せしむるものなり。然るに、天下の滔々たる女子教育家は、女子本然の性こゝにあるを覺らずして、切りに女子をして活動の靈物たらしめんとするものあること、眞に悲むべきなり。

假令へば、女子は空氣中の窒素の如きものなり。之を人身究理學家に聴けば、窒素は体中の營養分たらんとして、空氣中に存在するものに非ざれども、入りて以て身体中の酸化作用を營み身体活動の動力たらんとする酸素の作用を融和し、これをして其効果を收めしむるに必要欠くべからざるものなりとか。女子の用たる又實に此くの如きものにして、自ら何等の用をも天下に爲す能はざれども、たゞ、男子の活動を圓轉ならしむるに過ぎざるのみ。されば、女子の用たるや、甚だ消極的のものにして、決して積極的の用あるものに非ず。

故に又女子を教育せんと欲せば、可成その効果を内部に收めて、之を外部に發動せしめざる樣苦心せざるべか

らず。詳く言へば、女子教育の効果は女子の潜勢力たるに止まりて、その活動力たらしむべきものに非ずとのこゝろなり。女子教育に從事する人々、またこの消息に通曉することなくんば、多年其心血を灑いで教育せる女子の、一見教育なきものと大差なきを觀、失望落膽禁じ難きものあるに至らんなり。されど、其教育ある女子の、全く無教育なる女子と大差なく見ゆることの如きは、寧ろ却て天下の慶事にして、その教育の方法の女子に最も適切なるものなりしを證すともいふべきなり。

而して、教育の効果の女子内部の潜勢力となれるものは、遺傳力なり。されば、女子教育の期するところは、主として女子の腦力を發達せしめて、その腦力を子孫に遺傳せしめんとするにあるものにして、決して其發達せる腦力により、女子を天下に活動せしめんとする爲に非ず。人もし如何に其腦力を發達せしむるも、自ら其發達せる腦力を悉く消費し終らんか、その英敏なる腦力も之を子孫に遺傳するに足るべき餘力なきに至り、其子孫は甚だ劣等なる腦力を有するに過ぎざるものとなるべし。かの一代に傑出せる人士の、數々不肖の兒あるに至る所因は、蓋し皆な斯の理に基くものにして、その父祖の餘りに腦力を過勞せしめて、その遺傳すべきもの無きに至りたればなり。然るに、山間無名の士の末裔にして、往々天下を聳動するに足るべき天才を輩出することあるは、これ其父祖たるものが、種々の鍛錬と修養と經驗とにより、充分その腦力を發達せしめて英敏なるものとし、しかも社會に活動することなくして逝き、遂に其腦力を擧げて其子に遺傳し、其子又之を其子に遺傳し、此くの如くにして、益々其腦力を倍加し、其極數代の後に至りて絶頂に達し、所謂天才の發現を觀るに至れるなり。故に若し、其子孫をして一世に傑出する人士たらしめんことを欲せば、よろしく自ら活動するを止めて、しかも鍛錬と修養とに全力を注ぎ、其腦力を琢磨するに苦心すべきなり。

されど、男子をして其活動を廢せしめんとするは、これ鹽をして其味を失はしめんといふに同じく、到底望む

べくして行はるべからざることなりとす。又、行はるべしとするも、此くの如きは必ずしも祝すべきことに非ず。否な、寧ろ男子をして其琢磨せる智敏鋭覺なる腦力を猶豫なく消費し、よりて以て縦横無盡の活動を天下に試ましめ、子孫に遺傳すべき腦力の爲には、特に其男子の力を借らざるも、容易に其欠を補ふ策を講ずるの勝れるには如かじ。その策たるや他なし。女子を教育するにあり。即ち、女子を教育して其智能感情を發達せしめ、しかも此くして發達せる腦力は、濫りに之を社會に於ける活動の爲に消費することなく、これを潛勢力と成して女子の腦中に貯藏蘊蓄せしめ、以て子孫に遺傳せしむるなり。されば、女子教育の主眼とするところは、寧ろ當代の女子に非ずして、後代に現るべき人類の爲めなりといふも、敢て不可なからんか。是に至れば、女子も亦人類の恩惠主なるかな。

此く女子にして其自ら修養琢磨せる腦力を活動せしむることなくんば、男子と相婚して夫妻となり、其夫たるもの、如何に活動して其有する智能感情を消磨するも、妻の腦力の外に逸出せずして多く殘れるものあるが故に、幸に其足らざるところを充實するを得、その夫妻一對の間に生まるゝ子女の如き、素より相當に英傑なる腦力を遺傳せらるべく、男子の特に子孫を思ふて其活動を控えざるべからざる如き要なきなり。然るに、女子たるもの如何に高等なる教育を受け、其効果によりて腦力を發達せしむるも、切りに活動をこれ欣仰して、悉く自ら其腦力を使用し終るに至れば、男子と相婚するも決して良好の遺傳性腦力ある子女を產み出だすこと能はずして、其生むところ多くは不肖の兒たるべし、殊に其婚せる男子にして一世に傑出せる花役者たらんか、その夫たる男子の腦力の、殘餘となりて子孫に傳へらるべきもの、更に甚だ輕少なるべきを以て、その子女の不肖は更に又一段の甚しきものあるや必せり。

是に至れば、女子を教育して之を社會に活動せしむるは、是れ實に人類の墮落と衰滅とを計畫するに異らずと

いふべきなり。されば又、女子の教育とは、是れ女子をして力學に所謂靜力を蓄へしむるに等しきものなり。靜力や一見無力の如しと雖ども、機の來りて誘因の備はるあれば、忽ちに變じて動力となる。此の如く教育によりて獲得せられたる女子の腦力は、其一代に於て發現せらるゝことなきも、其子孫の腦髓に入りて玆に始めて發展せらるべきものなり。

かくして、女子教育の主意とするところは、後代と子孫の爲めにありとせば、特に其主意に留念せざるべからざるところは、春氣成熟期即ち廿年未滿の時期に於ける小學及高等女學校教育にあり。蓋し、ダルウヰンが精査研究せるところに依れば、女子が春氣成熟期以前に受けたる腦力の發達は、その生むところの子には男女の別なく總べて之に傳ふれども、春氣成熟期以後に於ける腦力の發達は、たゞ之を女子の子にのみ傳ふるに過ぎざるを以てなり。されば、結婚によりて後世に有爲なる男子の現はれ出でんことを希はゞ、女子の腦力をして春氣成熟期以前に充分の發達を遂げしめ置き、結婚によりて其腦力を生むところの男子に遺傳せしむるに力めざるべからず。是れ又實に當世に於て女子の小學教育と高等女學校教育とを特に奬勵せざるべからざる所以なりとす。されど、これ女子をして活動の靈物たらしめんとする爲に非ずして、有爲なる子孫を生む良器械たらしめんが爲なり。

（了）



新家庭

▲眞の贈物

巖谷小波

歳暮、年始の贈品、祝儀、これを世間の多くは、虚禮の虚儀のと云うて罵る。さりとはあまり殺風景な小言だ。

元來禮式と云ふものは、その元を煎じ詰めれば、畢竟所謂る虚禮に過ぎ無い。若し何でも實用々々と云ふ、實利主義から云つたならば、この禮儀禮式などは、一切之を廢するに如かずだ。が、それではこの世の中が、頗る勘定高いものと成つて、何の趣味も興味も無い殺風景極まる有様と成らう。

然し、退いて考へて見ると、この小言も强ち無理では無いので、到來の品をまた他所へ贈り、それからそれへと融通して、遂に自家から出た鴨が、またわが門へ舞ひ下ると云ふ仕末、例の川柳子の惡口の『遠くから貰ふ近所の菓子袋』の觀を、實際に呈するに至つては、如何にもこれは虚禮に相違あるまい。

一体人に物を贈るのは、所謂氣は心であるから、よしその物は麁末であるとも、先の人の氣に適ひ、身にふさはしい物を贈つてこそ、初めてその意も達するのである。それを更に頓着せず、下戸に贈るにビーヤの切手を以てし、冬の餞別に夏襟を以てし、『どうせ他へまた遣るのだから、この方が却つて便利であらう』などゝ餘計な斟酌をするに至つては、實に虚禮も甚しいと云ふべしだ。

所詮人に物を贈るからは、よくその人の嗜好を糺し、またその家の狀態を究めて、直ちにその用に適するものを贈るのが、元より至當であるべきで。かくてこそ貰つた者も、大きにその志を喜び、その品を大切にして、決して他に渡さぬ筈である。――否、第一人に貰つた物を、また他の人に遣るなどは、甚だ無禮な次第であるのに、遣る者もその無禮を普通の事にして、却つてその便を謀るに至つては、殆んど沙汰の限りで

は無いか。

果して斯の如き贈品であるなら、之を卑むべき虚禮として、余は之を廢するに大贊成である。が、之が爲めに他の贈答をも、一切斥けやうとは決して思はぬ。否、歳暮、年始に限らず、誕生、婚禮、餞別、土産等の贈答は、勉めて之を行ひ度いと思ふ。但し前にも繰返へす如く、その贈品たるや、必ずその用に足るべき、眞の志を籠めた物で無ければ成らぬ。

かくて眞の贈物であるなら、これを受けて不愉快と思ふ者が、果して何所にあるであらう。さてまた之を與へる事もまとに心地好いものなのである。

▲家庭と社會

家庭は樂むべきものである。それと同時に、社會も亦樂むべきものである。

それを家庭の樂しさにかまけて、社會の樂しさを忘れ、若くは社會の樂しさに耽つて、家庭を樂しむのを後にしては、共に大いなる了簡違と云はざるを得ない。

思ふに從來の日本人は、概ね社會のみを樂しんで、家庭を全く忘れて居つた。然るに近年、所謂家庭主義の行はるゝや、動もすると家庭の樂のみに泥んで、少しも社會を顧みない者がある。かくては例の世間不見、引込思案の誹を免かれず、畢竟は時勢に取り殘されて、大きな損を見るのである。

要するに、家庭は眞に樂しむべきであるが、その樂しさは個人的であるから、更にその範圍を擴めて、公共的の樂を、社會に求めるの必要はあるのだ。

公共的の樂とは何？所謂る社會の交際である。而もその交際は、決してその夫のみに留めず、出來得る限りは妻たるものも、之を共にせねば成らぬのである。

それを夫にのみ社交をさせて、妻は家に許り因循して居つては、自然とその間か隔絶して、遂には、家庭の樂さへ、次第にその度を減じられるであらう。鑑みるべき所では無いか。

▲細君と蝸牛

凡そ日本の細君は、蝸牛の如し。兎角引込思案なる點に於て、歩行の頗る遲々たる點に於て、その無口なる點に於て、その骨の無い點に於て、も一つおまけに、時々角を出す點に於て。

どうだ一所に行かうでは無いかと、夫に誘はれる塲合に、「ハイ參りませう」と、氣輕に連れ立つ細君は、十人の中一人か二人、他は大方出遽つて、「今日は髮がこわれて居ますから」とか、「羽織がまだ出來て來ないから」とか、乃至は「ちと氣分が惡う御坐いますから」と、根も無い虚病までつかつて、兎角火鉢の番のみを仕度がる。偶々御機嫌が好くて、夫と車を列ね、袖を並べて交際社會へ出ても、言語動作が緩慢だから、いつも夫に立ち後れてしまふ。夫が十言話す中に、やつと一言の挨拶が出來、夫が五歩進む間に、辛うじて三歩踰つて行く仕末。これでは夫たる者も、遂には歯痒く、おれッたく成つて、「もう此次からお供は御免だ」と成る。

で、それからは夫ばかり出る事に成る。然るにこの夫と云ふ者が、案外三歳四歳の嬰兒の如く、一人歩行の不安心なものであるから、かく傍に監視者の無い事に成ると、如何なる惡魔の誘拐に會つて、遂には家を外にする事の、必ずしも無いとは限らぬ。

それをまた日本の細君は、知つても知らざる眞似をして、敢へて之を咎めもしない。中には多少苦情も云ふが、それも多くは壁訴訟に過ぎず、よし偶々悋氣の鋒を向けても、氣安めの帯一筋買つて貰へば、忽ち軟化してしまふ事、彼の骨の無い蝸牛の、時には角を振り立てながら、物に觸れると忽ち頭を縮めて、殻の中に恐れ入ると同じだ。

あゝ日本の細君は、多く蝸牛に似て居るのである。但し、かくても蛇を恐れしむる、一種の力ありとすれば、蓋しその蛇よりも、更に執念の深い爲であらう。

▲嫁のホームシツク

凡そ昨日の客を褒める輿丁と、實家を戀しがる嫁御ほど、甚だ面白からぬものはあるまい。

全体女と生れて、一旦親の家を出で、夫の家に嫁いだからは、やがてその家が自分の家、即ちその夫の傍ほど、樂しいホームは無い筈である。

然るに世の多くの嫁御は、動もすると父母の膝下を戀しがつて、實家へ行くと泊つて歸り、實母が來るとそれを泊め度がるのがある。それを夫の口からは、まさか小言は云はれぬが、その心中を有体に云へば、決して快くは無からうでは無いか。

それも嫁いだ當座ならば、成る程それも人情として、幾分か恕すべき點もあるが、已に妻と成つて三年、四年、將た子供まで出かして居ながら、猶且つ實家を戀しがるに至つては、あまり意氣地が無さ過ぎると思ふ。

が、更に他の方面から云ふと、かくてまで猶妻をして、その實家を戀しがらせるのは、取りも直さず夫たる者の、その妻を愛する情に於て、大いに欠ける所がある故である。若し果して夫婦相愛し、琴瑟和合の實を擧げて居るなら、決してかやうな事は無い筈ではないか。

所が世の夫たる者の中には、少しも之を怪まぬ斗りか、却つて之を便利がつて、動もすると細君を實家へ祭り込め、獨り得意に成つて羽根を伸ばす者さへある。それで眞の家庭の樂があらうか。覺束無いものである。

余はまた思ふ。彼の多くの洋行者が――特に年若い留學生などが、その海外に在る間、妻をその實家に歸へし、その妻の姑たるべき、我が實の父母のみに、その淋しい留守番をさせて、少しも顧みる所の無いとは、何と云ふ不心得であらう。

否、それも所謂る事情あつて、からせねば留守が治まらぬと云ふのなら、余はまた更にその家庭の、甚だ幸福ならざるを、大いに氣の毒に思ふのである。

▲一家苦情の原

一家の苦情なるものは、多くの場合に於て、卑劣な依頼心から起つて來る。若し獨立の意氣があるならば、必ずしも同族と衝突し、一家に波瀾を起さずとも濟むのに。

「かうもして呉れさうなものを」とか、「ちつとも世話をしてくれない」とか云ふ不平は、よく親族間に起る所であるが、その元を尋ねて見ると、互ひに凭れかゝらうとする、意氣地の無い根性があればこそ、こんな愚痴も出るのである。

父子と云ひ、兄弟と云ひ、將た夫婦と云ひ、已に別々の體軀を持ち、それ〴〵の面相を有する以上は、その心性、氣質に至つても、必ず異なる點のあるのは、勢の免かれ難き所で、さう〳〵自分の思ふ通り、先方でも思ふものでは無く、此方の云ふ事斗り、相手が聞いてくれるものでも無い。

ましてや、「金錢は他人」と云ふ諺の通り、經濟上の事に成ると、互ひに利己の念の先だつのが、所謂凡夫の悲しさであるから、少くともこの點に於ては、互ひに依頼心を斥げ、獨立心を奬め度いのである。

それを、親族だからよいワと云つて、つひ金錢の融通をする、すると、その貸した方からは、他人と違つて催促が仕にくい。その催促が仕にくい丈、それ丈氣まづさが増して來る。

また、その氣まづさを避けん爲めに、寧ろ一時の云ひ惡さを忍んで、その催促を仕かけると、今度はその借り手の方が、「親類の癖に他人行儀な」と、更に氣まづく思ふに至る。借りた物を返へすのは元より當然の事であるが、そこがまた凡夫の淺ましさで、借りる時の地藏顏、返へす時の閻魔顏は、蓋し免かれぬ所であらう。

所詮初めから貸借さへせねば、こんな苦情は起らぬ筈。それには全く依頼心を排して、互ひに獨立の意氣を養へばよいのだ。



貴婦人の嗜好（八）

中村鈴子

兒島惟謙氏夫人

夫人重子は北面の武士世襲甲斐守重遠氏の女にして嘉永三年十一月を以て生れ明治七年二十五歳にて前大審院長兒島惟謙氏に嫁し仙臺長崎大阪東京と良人の法官的生涯に伴ひ今は良人の退む處に伴ふて大森に在り人と爲り貞淑にして忍耐力に富む

大森八景園を北に去る三町ばかり、神寂びた山王の社を左に見、歩むこと僅かにして右に蒼海を控へた處に前の大審院長兒島惟謙氏の御邸があります、田面の刈株は霜に瘠せて縮まり、畷道の芒穂は日増にうつむいて枯色を染め出した十二月の中旬此御閑居を訪問致したので、爪先上りの御門前は兩側に丈のよく揃つた小松がずらりつと並んで丁度衛兵のやうでありましたが、左の低地に古い百姓家が一軒稻叢の間に見へて一層嚴肅な御門側を浮起して居りました。小松の行列盡る處に冠木門があり、檜の古木に南天の紅さをあしらつた植込を廻つて御取次を乞ひ、羆熊の毛皮を敷いた御玄關より廻廊を歩んで十七疊の客室へ伺ひましたが、此處にも熊、臘虎、栗鼠の毛皮數多敷き列べ、御床の間には珍らしい大きい切株の臺上に唐製獅子の置物を据へ、違棚には卷繪の手文庫二つ三つと曲祿一脚を置かれ、前に土佐繪の金屏風あり、四方の小壁に舞樂の圖數多掛けられてあり、南東廻り椽の硝子戸から見ゆる廣い芝生の御庭先には赤松、姫小松、梅の古木など參差配列し長く延びた百日紅の枝の下に大森田甫を見渡した風情は丁度パノラマの觀がありました、此處は高臺で全村一目の中に集り群青を流したやうな海原に眞帆片帆が靜かに浮び、房總の山煙の如く沿岸の

松林淡墨色を呈して前景黄緒色の田圃と對照美しく、畷道を往來する村民の姿、軌道を疾走する汽車の煙など靜中に活動を與へ何時までも見飽かぬ妙趣のある上に、硝子越に差込む暖かい日を背に受けて殆んど樂境に入つた心地してある處へ、左手の梯子をしづしづと降り此室に來られし夫人は、鼠萬筋の紬の綿入に黒縮緬の被布を召され、白髮の少し雜つた御髮の小さい束髮に堅々と結ばれ、面長の御顏に細い切長の目元、癖のない鼻、尋常な口元は其昔緋の袴引き給ひし御俤を忍ばれ、冴へぬ御血色と御年よりふけた額の皺は、幾多精神的の艱苦を甞め玉ひし事を想像されました。靜かに坐に着かれて御挨拶あり飾りのない御話しの内に無量の御趣味を含まれ未だ脫けやらぬ京言葉の調子優しく

▲旅行

以前はよく大磯や鎌倉などへ海水浴に出掛けましたが此處へ移りましてから見晴しはよし別段旅行を致す必要も御座いませんので何處へも參りません、夏分は此處の海で海水浴を致しましたが、近頃はモー子供だけで私は入つたことは御坐いません、ハイ四季とも眺めは宜しう御坐いまして月や雪には猶更何とも言はれません、月の出は此座敷から眞正面ですが、二十六夜にはいつも待つて居る根氣が無くつて一度も見たことはありませぬ。

▲昔の旅

東海道の昔の旅は二度致しました、一度は主上の御供で江戸まで參り一度は其後京都へ引返へし取片付けを濟して自分が主人となつて江戸へ上りましたが、道中は鋲打の駕籠で通し朝は晩く立ち夕は早く旅籠屋へ着きますので、旅籠屋の座敷まで駕籠を横付けにしたもので御坐います、道中は駕籠の御簾内から外を見るだけで一寸御簾を揭げても近侍の者に八釜しう申されますので却々窮屈な事で御坐いました、尤も煙草盆は駕籠の内にチャント備へてありますので退屈を凌いで居りましたよ。警護の士は宿繼ぎにして控へろ〳〵で威張つて通りましたので、唯今皇后陛下が行幸遊ばす時

の方が却てお手輕で在らせらるゝ位、今考へますと誠に勿體ない事だと存じます、一度桑名から熱田まで仕立舟を獻上された事がありましたが、舟は黑塗で葵の紋散らし中は朱塗で衆の幔幕を張り、舟手は社杯で漕ぎました、イ、エ熱田へ參詣どころでは御坐いません、舟を上ると直に又駕籠で通したのです江戸へ着きましたつて見ますのは西丸の御内だけで、一足も外へ踏み出すことは叶ひませんから江戸は何樣な處だかよう知りませんでした。



兒島夫人

▲御奉公

八歳から廿五歳まで御所に居りました、ハイ孝明天皇樣の御殿へ御勤め致したので……御所へ上りたては年もゆきませんし何んだか夢中で勤たのですよ、昔はモー幼い御奉公人の外出は少しも叶ひませんし兩親の大病でも中々一寸歸宅の御許しは出ません。拾三歳になり

ますと三月の十三日に初めて嵯峨へ智惠もらひと申して詣るのが常例で、是れを外出の初めと致してあつたので御坐います。

▲服装

御奉公中表向きには模様物に限つて居りました、地色はいは、紫、赤など様々です。振袖は拾六歳で留めますので、拾六歳の六月十六日に御上より直徑八寸位の大きい御饅頭を頂き、其眞中に一寸付いて居る紅の處を萩の箸で突いて孔をあけ、其孔から御月様をのぞきまして夫れから袖を切るのが御定例となつて居りました、切つた袖下は皆傍輩方へ分け送つたので、若し惜んで疊み込んででも置くと室頭に大層叱られましたのです、袖留めの折は御祝儀として鯣樽、雑魚、羽二重の反物などを御上より給はるので御座います。留袖は一尺二寸位ですから初の内は窮窟のやうな氣が致しますよ、緋の袴も打着も隨分長い間着ました、洋服で御座いますか、是れも以前は可なり着ました、近頃はネー斯樣な田舍へ引込んで何誰樣とも御交際は致しませんし此通り一寸も構ひませんので……

▲髪

昔の稚子髷は唯今の令孃方の風とは違ひますネ、是れ多う御座いますが、今上帝御幼年の御頃は矢張り稚子髷に御あげ遊ばして居らしつたのですが、御前髪を廣く取り兩方の御輪が横にずつと開いた御恰好に御結ひに成つたので御座います。私共年若の折は竹の節と申して後は島田の一のやうで中程をしばり前はぐるりと擴げた髪にも結ひました。一人前になつてからは下げ下地に結つて居つたのです、束髪は流行の初めから賛成致しまして是れに計り致して居ります。

▲和歌

和歌は極好きな方です、御奉公中は歌子と一處の室に居りまして彼の人に學んだのですが、餘りむづかしさに中途で倦んで止めたくなると、御師匠さんの歌子に勵まされ〳〵致したのです。御上が御庭を御歩行の御供を致し梅林や櫻の樹の下で一寸御當坐が出ます時などは、いつも出來ないので困りきりました、偶には宿

題にして頂いた事も御座いました。

▲習字

京の梅谷流を習ひましたが近頃はさつぱり書けません今の跡見花蹊さんが初めて御前で御書きの時の樣子を私はよく覺へて居りますよ、たしか間宮豆子と一處に席上揮毫を仰せ付けられたのですが、花蹊さんの方では知りますまいが、私は御上の御側に坐つて居りましたからよく見て居りました、花蹊さんは誠に奇麗な可愛らしい御顏でした。

▲小說と新聞

御勤めの內は馬琴の作や膝栗毛なども讀みました、八犬傳は中頃までの處が極面白う御座いますネ、唯今の小說類も見ますが、一番歷史物が好きなのです、今度の文藝俱樂部にはオセロと云ふのが出る相ですから讀みたいと思ふて居ります。新聞は時事、日本、朝日、報知を取りますが、むづかしい處は讀みません。

▲能と舞樂

御所の表向の御催しは舞樂ばかりで紫宸殿で御催しに成り每度拜見致しましたが、譯がよく判りませんから矢張り能の方が面白いと存じました。此額は舞樂の繪卷でありましたのを、幾つにも切つて人樣へも分け殘りを斯樣やつて額に致したのですが、土佐流の名畫で在つたのを惜しい事を爲た物だと皆さんに笑はれたのです。

▲演劇

主人が芝居嫌ひですから私もとんと見た事は御座いません、昨年親戚の者が宅へ養生に參つて居つて其待遇の爲めに歌舞伎座へ參り初めて團十郞を見ましたが、あれが見初めの見收めだつたのです、どうも初めての芝居見物で中の樣子は少しも分りませんから娘（西園寺公成氏夫人）の案內でやつと見物したやうな次第で御座いました。

▲婚嫁

宿へ下りましたのは廿五歲でしたが、嫁入りのため宿へ下るのは私が初めで御座いました。○○は私より四つ五つ若かつたのに、其時私に向つて自分も直にあ

とより下るからと言はれたので、未だ年も若いのに最早定まつた婚嫁先があるのか知らんと私は心の内で左樣思つてたのですが、成程私が下つてから暫時の内に嫁入りされました。私は前に申した通り子供の時から長い間の御奉公で追々自分の家來を五人程も使ふやうになり、何から何まで家來任せで丁度旦那樣の如くでしたから一家の主婦となる手業は知りませず、姑は八釜しい人で其困つた事一通りではありません、御奉公の方がいくらよいか知れないと一時は媒人を怨んだ位でした。

▲針仕事

御細工物位は致しましたが、針仕事と云ふ物を少しも知りませんので實に困りました。此方へ嫁した翌年に夫婦で仙臺へ出張中丁度妊娠致したのですが、一とつ身の裁ち方が分りません、



見島家の

恥を忍んで知己の婦人に尋ね漸と拵へたやうな次第でした、夫れから一生懸命に人に聞いたり見習つたり致して何樣か斯樣か主人や子供の衣類だけは人手を借りぬやうになり主人の足袋まで縫ふ位になりました、夫れですから召使に始終言つて聞かせます、私は是々で針を覺へたのだから幾歳からでも志さへあれば乾度出來る、御前達も其積りで勉強するがよいと申して是れ丈は厳しく敎へて遣はします、畢竟自分が餘り困難した故でせう。

▲料理

料理も矢張り嫁入るまで一寸も手掛けた事は御座いませんでしたが、是れも追々の經驗で慣れるに從ふて好きにもなりまして、毎日臺所へ出て世話を致して居ります、裏の畑には野菜を作つて新らしいのを使ひます

のが樂しみの一つで、當年は又波蓮草が大層よく出來ました事。

▲錢勘定

是れにも隨分困りましたよ、御奉公中は御上より戴いた大きい御金を直に家來に渡しますから細かい御金の勘定を少しも知りません、どれが二十文錢か文久錢か丸で分りませんでしたオホヽヽ、併し只今の女官方は却々そんな迂濶では御出でなさるまいと思ひます、御勤めは昔より御骨が折れませうが又昔程御窮窟ではなからうと存じます。

▲手藝

細かしい手業は極好きな方で、絹綿から指先で糸を撚り出して銘仙を織らせたり、屑紙を細かく截つて小撚を拵へ夫れで紙布を織らせましたり、又細かい拔糸をつないで幾つも毬を作り夫れで蒲團地を織らせたりなど始終致して居ります、蠶を飼ふのも大好きで毎年邪魔にならぬ場所で養蠶をするのです。


奥座敷

▲娘

上の娘の方は大坂の梅花女學校へ遣しまして次女は、跡見さんで御世話になりました、自分が何も知らないので苦勞致しましたから娘達にだけは嚴しく申し聞かせるので御坐います。

此時學校より歸り來られし拾歳許りの令孫は、手織の布子、筒袖羽織に短かい小倉の袴を穿たれ、祖母君と記者に向つて叮嚀に御辭儀をせられました　質素な服裝と日に燒けた色澤は左して村童と異りませんが、凜とした眉目に自から品格を現はし二葉より芳しき栴檀の薫、祖母君の御樂しみ嘸かしと推測られました、夫人は見返りて輕く微笑まれ。

是れは西岡寺の總領で少さい時から此方へ引取つて私が世話を致して居ります、ハイ村の小學校へ遣はしますが、腕白盛りで着物も何も此の通り汚して參ります。

令孫は寫眞挾を持ち來り記者の前に開かれ、是れが父母君、是れが祖父君、叔母君又是れは伊達春山公ですなど指し示されし中、朝鮮にて遭難せられし夫人の長子故小松正太郎氏の撮影像がありしを指して是れが御亡れに成つた叔父樣でと云はれながら夫人の顏を仰ぎ見られました、夫人は何となく沈みたる面持にて在られましたが。

▲令息の遭難

御承知の通りあの時は夢のやうで御坐いました、皆樣に豪氣と申された主人も此の爲めにはめつきり衰へた樣であります、遭難後一ヶ月も消息が分りませんで、其間に樣々の噂に惑はされてヒヨツと無事で居るのかとも思ひ、餘り堪へ兼ねまして今考へると馬鹿氣て居ますが、召使を方々の占者にやつて判斷を乞ひました處が、何處の占者も是れは御身内の方が御出で下さらねば咄されぬと申した相ですが、其時は最早亡くなつて居たのでしたもの其筈で御坐いましたよ。ハイ遺骨は彼地から送られましたので、モー其當坐は却て涙も出ませんでした、私達は國のためと存じて諦らめましたが、次男が夫れから氣が茫乎と致しまして學問も身が入らず體も弱くなつたのには困り切ります、平生父よりも兄を賴りに思つて居た故で御坐いませう、夫れ故此節は成るたけ腦をつかはせぬ樣に氣儘に致させて置くのです。

簡潔な御物語りに絕へて凡俗老媼の繰言は含まれませんが、夫人の歷史中最も強い悲劇である事は申すまでもなく、勇烈の御氣質に淚を包む夫人の御目元を仰ぎ見ては僑更記者の同情を深からしめました。

令息の遺骨は品川海晏寺に葬むられてあり、夫人は令孫を伴ひて寺に詣づるを樂しみとせらるゝ由、御話は大阪御住居の時代に移りて。

大阪時代には幾らか交際社會へも出ましたが、彼の頃

馬車に乗つて歩いたのは、知事の奥さんと私だけだと申して大層ハイカラの様に噂されました。

◆慈善會

大阪では廣岡信五郎夫人と協力して慈善會を致しましたが、矢張春秋には能狂言とか又は生田の復習とかを催ほしたので、切符は東京の方々にまで頼んで買ふて貰ひました、東京へ移りましても澁澤さんなどと御一處に少しは會のために盡力も致しましたが、大森へ引込んでからは全然御斷り申して御交際の場所へも出掛けませずモー因循して仕舞ひました、又憖に一ヶ所へ出ますと彼方からも此方からも種々勸められて面倒で御坐いますからネ。

夫人は花の如き半生を門閥的、奥女中的の生活に過されしに似ず、獨力を以て社會に羽翼を張られし惟謙氏に嫁するに及んでは、勤儉力行平民的妻女の勞を甘んじ、能く良人を輔佐し五兒を撫育し尚進んで婦人の社會事業に先鞭を着けられたのは、其趣味百方面に行渡られた御方であると存じました。記者は興ある御話にうか〱と時を移し大森の海面黄色の薄煙りを引出した斜陽の景致に心付いて御暇申上立ち出る時、建仁寺垣の隙から廣々とした菜畑が見えました。

三宅花圃女史

舊幕府五奇の一人蓮舟田邊太一氏の長女なり明治二年を以て生れ二十四年を以て雪嶺三宅雄次郎氏に嫁す人と爲り聰敏能文善女工料理に到るまで手腕共に高し、

朝からの霜がすつかり晴れて、秋蟬の亂聲が殘りの暑さを勢ひ付けた九月五日の午前十時頃赤阪新阪町の百日紅の咲き亂れて居る御住居に伺ひました。先頃より腦と胃の神經痛に犯かされ靜養して居られる由でしたが、今日は一寸御快ひとて直に出で來られし女史は、御病中ながら天成の艶かな御肉色は少しも沈欝の窮なく、細面に鮮かな眉毛、張のある御目元に無量の愛嬌を湛へて最も簡明に御話し下さいました。丁度御書齋の虫干と見えて御椽にも御座敷にも和漢の古書新書が

算を亂して列べられてあり、床の間に堆く積まれた和洋の本は床板も見えない程でありました、四方の小壁に掛けられた日本畫、油畫、水彩畫の額に一として卒のない中にも第一目に着いたのは、外國美人油畫の寫眞で專門家の粉本によく見馴れた物、幸に女史に願ふて其由緒を伺ひました。

▲ポトカの由來

これは美人ポトカの肖像で御坐います。私の父が持て居りました畫で下らない物だと思つて藏へ押し込んで置いたのですが、主人があちらの博物館で此原圖を見又由來を聞いて參つて初めて眞價が判りまして、夫れから大切に致し初めたので御坐います。此ポトカと申す女は極卑しい身分で在つたのが、絕世の美人なので伯爵夫人にまで出世致したとかで婚禮の席などには立身の緣喜に必ず掛けるさうです、原圖は布で覆ふて大切に保護してありますと。此方の油畫はレストリーと云ふ題ですが、小牛と小馬の工合から後の人物が如何にも好く出來て居ると思ひます、一度博物館の參考室へ出しました、彼の鷗外先生の月草と云ふ本の中に大層褒めて御坐いましたよ。

▲習畫

初めは跡見女學校で習ひましたが、十六の時自分から好んで曉齋さんに就きました。其時分は實家も何樣か斯樣か暮して居つて御供が隨いて馬車で通ふと云ふ風でしたので却つて本當に修業が出來なかつたのです。曉齋さんは隨分亂暴の評判もありましたが弟子に對しては誠に深切な人でした、一體女の弟子は大抵斷つたんですが、私だけは非常に愛して呉れて、合作などする時にも先生が布袋を畫けば私が袋を畫き、先生が鐘馗を畫けば私が鬼を畫くと云ふ風で丁度子か孫のやうに致して呉れたのです、其頃は先生も僅四疊半の家で困つて居た處へ、私が相應にして參るので何か卑しい目的で教へるやうに思つた人もありましたらう。併し曉齋は其樣な情なしぢやあ在りません。實際貧富の差別なく叮嚀でした、今でも彼の先生の事は忘れられません。モット長く學べば良かつたのですが、何しろ番

町から本郷まで馬車通ひは如何にも御大層なので僅か一年半しか參りませんでした。一體私は元から洋畫の方が好きで、水彩位までは遣りましたが、一寸よい敎師が無くつて深く學べませんでした、併し子供には是非水彩畫を習はせたいと思つて居ります。主人も元來洋畫が好きでして近頃漸々嗜好が深くなつて參りました。

▲書

習字は隨分凝つて致しましたが近頃はトント出來なくなりました、ハイ顏眞卿と王羲之を學んだのですが主に王羲之を長く習ひました。松華堂や千蔭流も王羲之の別れで極宜しう御坐います。先づ女には王羲之の風がよいと思ひます、唯今の多田親愛さんの書も却々結構てす子。



三宅花圃女史

▲骨董

唯今は大抵手元に御坐いませんが、父は骨董道樂で、書畫や眞黒い物を支那からも隨分買ひ集めた位ですから鑑定も上手でした。其側で癖が付いたと云ふ譯でしようか私も以前は少し鑑定も遣りました、骨董店の前を通ると一寸立止つた位で、一度鎧を買つて來て笑はれた事がありましたつけ。

▲書見

小さい時分から様々の本を見ましたこと夫れは〳〵御話しには成りませぬ、是れは却て今より自由でしたので白縫物語、時代加賀見などの草双紙を始めとして十二三の時代には漢楚軍談、三國誌、源平盛衰記などの軍談物を好んで讀みました。馬琴の作も隨分見ましたものです、滑稽本では和合神、七變人、膝栗毛など總て何んと云ふ事はなしに好きで〳〵一生懸命に讀みました。一體小さい時から小説を亂讀するのは害があると云ふのは尤の事ですが、又讀む人に依て一槪に左樣とも申せますまいネ。私などは卑猥の處を讀む時には反動力を起して精神の修養になるやうに感じましたよ、尤も大悟の域に達した者でなければ左樣も參りますまい……左樣ですネ隨分馬鹿氣て居ると思つても感じて涙を溢す事がありますとも。此頃の作はさつぱり見ませんが子供が又私に似て非常な本好きで、時々色々の本を持て來て私にも見ろと申します、此間も不如歸を頻りに勸めましてトウ〳〵皆讀みましたが矢張り涙が出まして。昔も今も愛讀の書と御尋ねならば先づ徒然草、花月草紙などで御坐いましやうか……

▲新聞

色々參りますが私は讀賣を主に讀みます、先ア女には彼樣な新聞が適當でせう。見ますにはスッカリ見ます廣告までも……、新聞は樂んで讀むと云ふより必要で讀むのですネ。小供は數多い新聞を殘らず讀みますよ。

▲音樂

昔の風習で俗曲は女子の躾の主になつて居ました上に、私の實家の家庭は極派手でしたから七つから仕込れました、琴は山勢、長唄は杵屋お六を呼んだのです。お六は勸進帳を拵へた六翁の伯母で御座います。何ですか女にしては聲が立つとか申して熱心に親達が仕込みましたが、極嫌ひで拾四まで稽古と云ふと御線香を立てられた位でした。イエ唯今は少しも致しませんが、耳だけは巧者ですからピアノでもヴワイオリンでも譜を見るのがまだるッこしい樣で、自分の勘でズンズン彈きますから覺へは早いやうですが、却て不可相

ですよ。併し西洋人は不器用の爲めに叮嚀に譜を作つて置くのかと思ひます。一體私は歌よりも音色の方が好きなのです。

▲演劇

當節は實家の家庭とも違ひますからトント參りませんので從て嫌ひになりましたが、以前は可なり見ましたもので却々感じが強い方でした、子役が出ますと、何となく悲しくなつて千代萩など何時も泣きました。考へると馬鹿〱しいのですが、政岡だの又は鏡山のお初の忠義などを非常に感心して見物したのです。世話物は今日いくらも實際で見られますから格別……時代物の方が餘程興味が深いと思ひます。

▲動物

犬でも猫でも……云ふ中犬の方が尚好きなのです。鶏も少し斗り飼つて御座いますし小鳥でも何でも一切家中揃つて好きで御座います。主人などは動物好が進歩して人が好きです、人が好きつて何ですが、よく人の世話を致すのを樂しみに致して居ります。私の動物好な事は、以前馬琴の俊傳實々記にまで感じました。夫れはアノ猿が可哀相で涙を溢したのです。實に脆い涙だつて笑はれました。

▲食物

これは充分に趣味を申し上げたいのですが、生憎私はトント好き嫌らいが無くつて偏つた嗜好が在りません、極とくな方で御座います。夫れで居て旨い物を料理して皆なに食べさせるのは極樂しみで、色々工夫して致して居りますが、自分は夫れを食べたいと云ふ慾がありませんでよく御鹽梅を忘れますよ。

▲衣服

人様が立派に御着飾りになつたのを拜見するのは好きで、又女は奇麗にして居たいものだと始終思ふことは思つて居りますが、扨自分は元から少しも搆はないのです、つまり飾るのが下手なんですよ。夫れでも見るだけでは洋服と日本服と比べると私は洋服が宜しいと思ひます。平常は兎も角夜會などの時日本服は見られた物ぢやアありません。本當に家鴨が文庫を背負たや

うですネ。改良會もドーなりますか知らん、報知の新案にも如何も感心したのが在りません。袴は一寸よい考へで特に振り袖に袴と云ふ姿はよい物ですネ。

▲裁縫

伯母が呉服の間を勤めて居た人で隨分嚴しく仕込れましたが一向出來ません、御細工物は少は致しました。

▲髮

束髮好きで、此方へ參つてから二三度しか丸髷に結ひません。前には始終島田にして居りました。私は一人の兄が亡くなりまして丸で獨り娘の上に、母がまめ人で一切世話をやいて呉れましたのが癖になつて、何でも自分の始末をするのが下手で困ります。

▲和歌

中島歌子さんに暫く御厄介になりましたが、年が行かないと云ふ所で、特別に御歌所へ入れて頂いた次第で、唯今でも年に一度御濱御殿へ上りますが、皇后陛下より御茶菓を賜はり、合作など致すと陛下から御催促で御使が御持かへりになります。イエ平生はモー相應に家事が忙しいので暇も御座いませんし、想が浮びも致しません、和歌も左樣ですが、偶には何か筆を執つて見たいと思つても道樂の傾きになりますから、夜分主人も子供もふせつて仕舞てスッカリ用が片付いた後でなければ、自分の體になつて致す事が出來ません。

御話の興深きは私の紹介いたすまでもなく、著作時代の女史を想像さるゝ看客は、目を側てゝ女史の趣味の微を穿つことを御望みでせうが、拙い筆で萬一を盡せないのみならず、腦の御痛を御案じ申して暈みかけて伺ふ勇氣も挫け、寶の山に入りながらの喩も感じられて、殘り惜しくも御暇申し出で、術御寫眞拜借を願ひしに

皆んな方々へ借して仕舞て御座いませんが、僅一枚赤ん坊を抱いてるのが在りました。

御床の間の寫眞挾より取り出され

十年程前ので大分變つて居りませう、御書き下さいますなら、御袖の下を遣ひますから成るだけ美くしく願ひますオホヽヽヽ。

西洋畫の手ほどき

三宅克己

（初學者の心得）

繪を最初學ぶには如何なる方法が一番適當であるかと云ふにこれは矢張り模寫が大切でありませう、尤も專門に學ぶには夫々他に備つた方法がありまして單に娛樂の爲に學ぶのとは自然研究の仕方が違ひます。私はこれより單に娛樂として學ばるゝ方法の爲め一通り思ひ付た儘其筋道を御話致さうと思ひます。抑も繪を學ぶに最初は鉛筆或は木炭を用ゆるのが最も適當の順序かと思ひます、墨繪を學ばずして直に色彩畫を描かんと欲するのは極めて無理な注文で、既に修業の順序を轉倒して居るものと云はなければなりません、故に自分は繪を學ばうと志し給ふ皆樣に對して墨畫の大切なることを充分御勸めを致します、尤も自分がこれより御話致すのは專ら水彩畫に關する描法でありますが何卒水彩畫の研究と同時に墨畫の修業も大に重を置かれんことを希望致します、水彩畫を學ぶには初めセピヤ繪（セピヤとは墨炭の焦げたる色なり）より試むるのが至極可からうと信ます、複雜なる色彩を離れ單純なるセピヤ一色の研究は繪畫修業の上に最も肝要なる輪廓と陰影濃淡の調子を學ぶに便利此上も無きことゝ信じます、されば總て是等の描法等は圖を示して次號に說明することにします。

偖て模寫に就て如何なる心得が大切かと云ふと一番肝心なものが輪廓を正確に書くことでありまして、結局手本とした繪の形狀を間違無く其儘寫すのであります、これは極めて容易なる仕事の樣に考へらるゝが、實際筆を執つて書て見ると中々思ふ樣に行きません、第一初めは眼が正しく敎育されて居らぬから、餘程注意しても形の間違が多く、且つ又腕が熟練して居らぬから思ふ樣に線が引けません、夫れや是れやで出來上つた繪は多く失敗に終るのが通例です、そこで繪を稽古して見やうと云ふには先づ第一に眼を正しく敎育しなければなりません在來の日本繪風の模寫で行きますと、丁度文字を習ふ樣な工合に或は大体の形と其氣合が寫せて居れば善いのかも知れませんが、洋畫の方では決して夫れでは濟みません、假令其誤線は幾度消して書き改めても手本通り其割合の寸分も違はぬ樣に（圖の大小は各自の任意）模寫せねばなりません、尤も正確に書く爲めと云ふてコンパスや定規などを使用するのは嚴禁で、何所迄も自分々々の眼一つで正しく書くことに慣れるのです、斯樣の練習を

積む内に眼は自然に發達して終には白紙の上に物の形が現れて來る迄になり輪廓も容易に描き得る樣になる先づ如此繪を學ぶには第一眼を正確に養ふことが大切ですから此心得は常に忘れてはなりませぬ、繪を學ぶ順序として大別すれば先づ三つに區別することが出來ます、第一は輪廓を畫くことと第二陰影を附することと第三は即ち色影であります、以上の練習が積めたなれば皆樣方各自天賦の才によりて如何樣なる繪でも自由に描くことが出來樣と信じます。

小石川關口の雪景（口繪參照）

本號の口繪に畫きました畫は唯簡略なるスケッチで、彼是說明する程の繪ではありませぬが、此繪に就て一寸思ひ浮びし儘を御話致します。全体雪景など丶云ふものは、是迄日本繪等に幾何もありまして、一向嶄新なる圖柄と申すことは出來ません。然し今日まで在來の雪景の圖等を見ますると、如何にも其觀察が單純で雪は唯何時も一樣に白いものと云ふ風に極まつて居ります、且つ又觀る方でも一向深き注意をせず極めて粗雜な考で夫れで滿足をして居つた樣な譯でありました。然し世の中の進歩に連れまして繪を描く方でも段々研究が積み觀る方でも益々眼識が高くなつて雪景なども單に白い物と云ふだけでは滿足が出來ませんで種々緻密なる研究の結果から起る注文が出て來ることゝなりました。それで先づ雪の特色と云へば是は誰が考へても白に極まつて居る樣なものでありますが然し少しく緻密なる觀察によりますれば、光線や空氣の關係から多くの場合に於て單に純白と見ゆることが極めて稀でありまして、皆多少種々樣々な色彩を含むで居ります。今一例を擧げて御話致せば同じ雪景でも朝景色は多くコバルトブルー及びクリムソンレーキ等極めて艶麗なる色を含み日中の雪景には却てプロシャンブルー及びインデゴー等の寒色を帶び夕景にはバルミリオン或はコバルトブルー等の如き色彩を呈すると云ふ樣な工合に夫々心して觀察すれば是迄單に白きものとのみ思ふて居つた雪景も甚だ複雜なるもので其美妙を一層深く味ふことが出來ます。結局是等の智識も繪を學ぶと同時に自然を研究した結果であつて、甚だ面白く且つ又極めて有益な事柄と信じます。そこで自分は切に皆樣に願ます皆樣が繪を學ぶに當り單に繪其もの丶技術を學ぶのみに止めず一方に不絕一般自然の研究にも心懸給ふて益々其眼識の高からんことを希望致します。



婚禮の贐

（家妹の某醫學士に嫁せんとするに與ふる書）

法學士　島田俊雄

今茲某月吉日御身某氏に嫁せんとす、將に是れ御身が婦人としての天職を盡くし獨立自營以て報効の登龍門に昇れるもの、豈に祝せざる可けんや、況んや某氏は學德に於て地位に於て上流高雅の士、獨り御身の爲めに祝するのみならず、眷族たるを得たる我等も亦最も光榮とする所なり、豈に賀せざるべけんや。

凡そ責任は獨立と共に重きを加ふるものなり、御身が今後に於ける責任は從來父母の膝下に在るに比して百倍の重きを加ふるならん、抑も御身が性質柔順にして恭謙、着實にして至誠なることは我等が深く信じて疑はざる所、故に今御身が出でゝ某家に嫁するも其能く夫に仕へ家を治むるに於て、深く憂ふる所あるに非ずと雖も、而も一たび婚事の大切なるを思ひ、御身が今後の責任の輕からざるを考ふれば、兄姉として訓示すべき要件決して鮮しとなさず是れ長者の義務なると共に一片の婆心止む能はざるものあればなり乞ふ之を語らん。

第一　妻として心得べき事

▲夫の方針を審にする事　一家の政治は主として婦人

の力に待つもの多しと雖も、而かも夫は實に一家の主宰者なり、故に其家庭の放任的たると、共和的たると、獨裁的たると若くは立憲的たるとは一に其夫の執る所の方針如何に依つて決するものとす、是を以て一家の妻たる者が其夫に對する仕振りも某家婦として世に對する交際其の他一家の經濟にしても凡て夫の執る所の方針に從はざるべからず、若し夫れ其方針に至りては機に臨み直接夫に問ふも亦可なりと雖も、苟くも活眼留意せば不言の間に之を了得するに難からざる可し。

▲夫家の歷史を知る事　西哲言へるあり曰く一家は小なれども尙ほ一王國なりと、然り、一家は簡單なるが如くにして複雜なるものなり、伯叔あり、甥姪あり、而かも其間には父母ならずして父母の如く奉仕せざるべからざる恩人あることあり、他人にして兄弟の如く交はらざるべからざる人あり、苟も夫と同化して人たるの道を盡し他と圓滿なる交際をなさんとする者は、是等の關係を知悉することを忽にすべからず。

▲夫と同化することを心掛くる事　獨身時代には親戚朋友に對して極めて圓滿なる交際をなし來りたるに、一朝妻帶するや其交際全く一變する者なきに非ず、是れ多くは新夫の心得違に因ると雖も新婦亦其責を分たざるべからず、若し婦にして能く夫の歷史を審にすると共に夫と同化して眷族故舊に對せば決して此の如きことあるべき理なし、故に妻たるものは一に夫の心を以て己の心となし、夫の盡すべき義務、交はるべき人に就きては、妻も亦盡すべき義務あり、交はるべき人なりと覺悟して、衷心より夫の爲めに盡くす可く心掛くること肝要なり。

▲自ら夫に慰められんとせず、進んで夫を慰むることを心掛くべき事　妻を慰むるは夫の義務なりとは男子の心掛くべきことゝしての教なり、決して婦人側より妻が當然受くべき權利なりと誤解すべからず、西洋の格言に所謂受くる者たらず與ふる者たれとは婦人の常に服膺すべきことなり、人の妻たるものは

夫の勞苦を慰籍し夫をして決して内顧の患なからしむることを心掛くべし。故に我等は男子をして結婚の爲めに苦痛を加へしむることあらば是れ婦の奉仕に於て欠くる所ある也と云ふを憚らざる者なり。

▲僕婢に對する心得の事　僕婢を使役するに當ては常に是れ一種の教育なることを忘るべからず、既に教育と云へば威嚴を以て命ずることあるべく、涙を以て諭すことあるべし、然るに世の婦人教育の本義を忘れ、苛酷に流れざれば、即ち姑息に陷りて僕婢の放縱爲すが儘に任する者多し、共に中道を得ざるものと云ふ可し。主婦としての技量は又僕婢の教育に於て反影し來ることを忘るべからず。

▲經濟に關する心得　金錢は人をして大業をなさしむるものなるも、而も一たび其利用を誤らば、親戚ために離れ、故舊亦仇敵となること少からず、經濟の運用亦難い哉、實に經濟の事は主婦の天職中至難の事に屬す、主婦たるものは能く夫の方針に從ひ常識を脫せず之を料理按配せざる可らず、須らく沈思熟慮して可なり。

▲夫、婦、兩家門の連鎖たることを期すべき事　家庭の至寶は財產にあらず、智識にあらず、名門なるにあらず、主として圓滿和樂なるに在り、而も啻に夫婦兩人間の圓滿なるのみならず、夫家全體と婦門一族との圓滿をも望まざるべからず、然らずんば東洋の日本としては決して完全なる家庭と云ふ能はざるなり、而して之が和親の中心となる者は婦人其人なることを忘るべからず、我等は御身が啻に圓滿なる一家庭の主婦となるのみならず又和樂なる兩家門の中心となり連鎖となることを希ふものなり。

▲學問の退步せざることに注意すべし　婦人一たび嫁して妻となり母となるや、徒に家事に營々として學識は漸く退步し、世人をして女子教育の効果を云爲せしむるに至る、學問は人の品位を高め又他日母として家庭の教育に從事するに當りて最も必要なるものなり、宜しく家事繁忙の際と雖も餘裕を作り新聞に雜誌に學識を高かむることを勉む可し。

第二　主婦としての心得

▲夫は學士なることを忘る可らず　婦は旣に夫を助けて名を成さしむるものとすれば、夫が社會に對する位地を會得し大に自重する所なかるべからず、我等が此に學士と特稱する所以のものは、其學識の深遠なるを意味するに非ず、學士の稱號其者が最も高等なる敎育を受けたるものにして、社會の上流に立ちて、高尚なる氣品を備ふる人たるを連想すべしと云ふにあり、近來學士の價値大に下落せりと云ふ、然り、其 Price は大に下落せり、而かも其 Value は依然たり、而して其眞價の益々發揮せらるゝ實に今日以往に在りと云はざるからず、御身は高等女學校の卒業生なりと雖も、旣に某家門を踏まば躬ら學士たるの覺悟を以て適當なる言行を連想し來り、假りにも夫の名を汚す勿れ、世人能く其地位を忘るゝ故に敎育家は收賄し、軍人は分捕問題に名を偸くるなり、古人曰く自ら輕じて人之を侮ると、心すべきことにこそ。

▲夫の醫師なることを忘るべからず、之を聞く、醫師は其職務上不潔なる場裡に跼躬し、其鼻目は不快なる感に接すること多しと、故に之が妻たるものは夫を慰むる爲めに一層努力すべきことを忘るべからず。

▲某家(夫家)及某家(實家)は如何なる位置にあるかを忘るべからず　歷史の硏究は時に自重心を養ふの一捷路たることありと、夫れ然り、夫家は元と醫を以て君側に仕へ、御身が夫たるべき人の祖父某翁の英名は載せて明に文部省の編纂に係る日本敎育史料に昭々たり、嘗に蘭學に通じ某醫學校の重鎭たりしのみならず、勤王の志士として交を四方の英俊に結びたることも口傳に存して明なり、御身が將に入らんとする家は此の如く世の敬する所なり、須らく自重する所なかるべからず。且つ夫れ顧みて御身の父は如何なる名聞ある人なるかを考ふべし、曾て牧民の職に在ること十有餘年、溫厚にして篤實、到る所高

德の人として尊敬せられ今は閑職に在りと雖も其名聲却て籍甚たるものあり、嗚呼某其人の兒女の責任亦大ならずや。

▲夫は大望を抱くの人なることを忘るべからず　御身の夫たるべき某氏は醫學社會の前途に於て一の志望を有する人なりと聞く、其志望を達する爲めには幾多の資本と共に、多くの時間をも要するなるべし、之に向て遺憾なからしめ内助の功を全ふするは妻たる御身か負ふ所の最大責務なり、必すべし。

▲親戚故舊に音信を怠る勿れ　遠く去りて偕に在らざるの故舊と交誼を暖むるものは唯一の雁信あるのみ、然るに世の婦人其文字の拙きに恥ち、時間なきを口實として音信を怠るもの少からず、是れ全く事理を辨せざるものにして、恰も已は容貌美ならざるが故に親戚朋友故舊を訪問せずと云ふに同じ文字を美術視するは一種の他方面より論することなり、書簡は誠意温情を交通するの機關なりと考ふれば則ち足れり、決して陋文拙字を恥る勿れ。

以上我等自ら夫ともなり妻ともなりて、最も普通の事なりと信ずるものに就て僅に其要點を擧げたるに過ぎず、御身は此外更に新夫より數百金玉の敎を受くるならん、謹で守れ、若し其所說にして從來御身が受くる所の敎と異るものあらば、必ず之を棄て、其敎に從へ、是より御身親しく家政の實際に當らば、幾多の應用難題は御身の前に重來せん、然れども唯一の熱心は之を處決して餘力綽々たるべし、御身が受けたる四年間の中等敎育と十餘年間の家庭敎育は御身に處世の才能を與へて餘あり、何ぞ憂ふるに足らん、師の如く自ら行ひ、父母の如く家を治めば一も欠くる所なし、失策何の憂とする所ぞ、責任何の患ふる所ぞ、要は誠心の如何に在り、若し夫れ實家の事に至りては毫も心を勞す可からず、一意專心某家を唯一の己の家と定め其繁榮の爲めに熱心努力せよ。邈矣雲山數百里を隔てんとす、譬ひ温情火の如き夫に依て慰むる所あるとは云へ、而も人間の至情雨の朝吹雪の夕、夢路遙に東都に漂ふことあらんか、思へ兩親も我等も弟妹も同情を集めて

綿々御身に添ふことを、徒に妬嫉を擁して獨り御身の幸運を羨むのみならんや、聊か以て鑑となすべし。鳥海の山は高峻玲瓏として天に中し其風姿高雅にして冒す可からず、能代の川は混々羽后の平野に注で洋に入る、其情や綿々油の如し、嗚呼御身が新家庭然かく高尚に、然かく圓滿ならんことを、聊か記して御身が行を祝す可祝

（完）

兒童の天性

鶯溪女史

習慣は第二の天性也、とは幾度も言ひ古した詞ですけれども、兒童の性癖位怖しい結果を生ずるものはない、例へば兒童は樹の芽生の様な、また白糸の様なもので、曲げやうと横に仕様と、赤に染め様と黄に仕様と其持主（親御樣）の隨意で、其直線な、白糸の様な兒童が成人した後、曲つたり惡い色に染つたりするのは、始めは一寸とした癖が第二の天性となつて、何うしても直すことが出來なくなるからで、其の癖にも種々あるが、重なるものは（一）我儘、（二）高慢、（三）强情、（四）無作法、（五）神經過敏、（六）臆病、（七）懶惰、（八）忌避、（九）老成、（十）陰言、（十一）偸食、（十二）盜癖、（十三）嫉妬等でせう、これといふのも畢竟監督者たる親の惡いので、御自分の不明なのは勿論、或は愛憎、或は他の方面に向つて發すべき忿怒を、御子樣達に向つて發し、御自分が一時の惡感情から或時は無情に、或時は冷淡に、また或時は兒童がよからぬ事を致しましても何かへりみないなどいふ、其の周圍から何等の汚點もない子供にあらゆる弊、即ち終身の性癖を養成せらるるからです、（幼稚の脳に一度印象した事は終生正す事の出來ぬもの）で、此の家庭教育に就いて最も注目しなければならないのは、兒童が健全な先天的資質を開發すると同時に、疵の多い病的資質を矯正し、併せて後天的性格を養生する様に仕向ける事が肝要であらうと思ひます、精神の健全を知らうとするには先づ或る一つの新しい事柄に出逢つて、其をよくかみ碎き己が

持つて居る舊知識と連絡する事の出來るやうに、沈靜で、これ等に對してよく注意して記臆する事、今一つは其の新知識を行爲に現はす事の出來る事、及び兒童の精神は常に平靜で活潑で而して一度心意に波動を起すことがあつても、すぐに以前の平靜に立返る事の出來るものこれが健全の證據です、例へて見ると、何か一の遊戯中監督者が「お止し」との一言の下に之を制し自ら平靜な行爲をする事が出來るものは、皆健全な精神と見做して差支がない、以上によッて御自分の御子樣の行爲を二六時中、御注意になりました上で、早くから良い習慣を御附になる事は最要の手段ですが、左に兒童の性癖に就いて、少し述べませふ。

▲我　儘

我儘とは、性行の善不善に係らず、身体自然の活動と精神の快活とが、過度に高まりました時に、知らず識らず粗漫となり、他に累を及ぼす樣になるのを言ふので、凡べて此の行爲は敎育によつて如何ともなるのですから、防制の時期を失つて我儘な擧動があつても咎めず、不規律な行爲を傍觀して居る時は、また如何ともする事の出來ない深い淵に沈ませねばなりません、以上の行爲の目に當つた場合は、用捨なくびし〳〵嚴格に抑制して、物には制限があつて其れ以上を超ゆることは決して出來ないものだといふ自制心を、養成する樣に仕向るが肝要です、某家に、七歳位な女のお子樣がありますが、御夫婦の中に所謂樫の實の一粒種ですから、掌中の珠玉、簪の花と家内中寄つて集つて、ホヽヽヽと甘やかして、其のお子樣の言ふことは何樣我儘でも泣く兒と地頭でオッ通してあるから、自分の思ふ事は何でも通るものだといふ事が幼ない頭腦へ深く印象されたので、就學期が來て學校へ通ふ樣になつても、自分が一旦斯ふと思つたことは敎師の言ふことでも用ゐません、それを「ならぬ」と叱れば泣き出して如何程賺しても默らず、果ては敎師も持て餘して其儘自宅へ送り屆けるといふ始末です、これはホンの一例に過ぎませぬが、此お子樣の成人の後が思ひ遣られます。

▲高　慢

高慢とは他人を卑み、身を高くし、俗に生意氣で意張り散らすといふ事ですが、此の癖は兒童に限りません、大人にも珍らしくない事で、特に上流社會や、富有な家庭の兒により多く見受けます、乳母や小間使などに坊樣、孃樣とちやほやされた結果、自分より豪いものはないと思ひ上つて、世間の人は悉皆自分の召使ひの樣に思ふから起るのですが、これを矯正するには、高慢心の昂つた時は故意と捨てゝ置いて、一朝きいた風な事を言行に表した場合に、『今の口上は何てす、何人に向つていふことです、子供のくせに其樣生意氣をいふものではない、サア、お謝りなさい、竹の所へ行つて謝まつてお出てなさい』といつた樣に、其のお子樣が平常卑んでゐる奉公人にでも、惡るいことを仕向けた時は謝まらせる樣な、慚愧に堪へぬ程の苦痛を、味はせ自分の誤謬を悟り、自分の迷夢を破らせねばなりません。



▲强情

兒童の强情は世間ありふれた事

で、大人や老人となつても尚なほらぬものですが、これは慾望の心にかられて前後を顧みず、無理やり自分の思ふ通りを行らうとして、長上や、他人の申すことなどは中々用ゐぬものです、が兒童の中には自分の申分を立て通し、自分の欲しい物は其を得ますまでは、ひた泣きに泣きて他を困らし、手の付け樣のないまゝに、大人の方が却つて氣根まけがして、言ふがまゝにしますと、兒童は自分の欲望を充たして初めて元の機嫌に直



ると申樣な理ですから、之等の性質をして、其の芽生の中に矯正しませぬ時は、やゝもすると、他日社會の人となつた時に、まけずぎらひの心から理が非でも抵抗して見たく、少しでも他人の申言にさからはなければ、氣がすまぬと言ふ風になり、末は圓滿な交際が結ばれないで、高慢心と同じ樣に、自分ばかりが尊く剛く、社會の凡てが氣に入らぬ爲めに、厭世の心を起すとか、或は人倫道德にかなはぬ事を仕出來して、其の

了りを全くする事が出來なくなります、之等の癖は成るべく幼少の折に、愛に溺れず、かつは面倒臭いとて放任せず、何處までも氣永な心を持ち、强情を言ひ出した時は、たくみに他の方向へ轉じさせ、言ひ條は決して通させぬ樣にするのが親御樣方の勤めで御座いませう。

▲無作法

お客樣が入らしやつた時に、出しやばつてお饒舌をして、側に居る親御樣をはら〳〵させ、冷汗を流させる樣な事を臆面なしに言ふお子樣をまゝ見受けますが、一体兒童は自分の見聞した事の外に、別段の考のないものですから、周圍にある御方は兒童の面前では、成るべく事實に深く立ち入つたお話しはせぬ樣に御注意をなさらないと、兒童には自他善惡の差別觀がありませんから、他の秘事を公然吹聽して思ひ設けぬ波瀾を引き起す樣な事になります、で兒童の面前では成る可く兒童らしいお話に止めたいもので、なほ一歩進めてお客樣の席には決して兒童を出さぬ、習慣を作りたいもので御座います。

▲神經過敏

兒童が心意に受ける刺激は極めて鋭敏なもので、ために自他の別を失つて激怒したり、邪推嫉妬をするやうになる結果、他を怨むなど言ふ樣になりますから、よく愛情の極を示して、其の性向を寛げ、嚴酷な懲罰などは決して用ゐず、物に對して忍耐力と自制心とをたくみに養ひましたならば、他日同情の深い、高潔な、好人物と爲す事が出來ませうと思ひます。

▲臆病

尻込み、人見知、遲鈍など〻言ふ樣な兒童は、何事によらず物に恐れ疑ひを抱き、而して面と向つてはひどく臆して、狼狽して、羞耻んで、天眞爛熳な、兒童らしい、快活な動作が出來ませんから、凡べてが遲鈍に見えるのです、之には種々の原因もありませうが、多くは幼少の折に强く驚いたり、或は他から驚かされたり、或は屢々嚴罰に遇つて、全く精神が畏縮して、恰の暖かい御光りを受けて延び行く草木の芽が、急に嚴

冬の霜雪に逢つて萎けて了ふ樣に感覺が鈍くなつたからです、斯ういふ子は重に不具的家庭（繼父母の手に育てられるとか）に養はれるものか、孤兒に多い樣ですが、これを矯正するには何うしたら宜しいでせう、先づ平常の御話にも成るべく恐怖るやうなことや、強く叱ることなどを避けて、春風春水到つて氷雪が解ける如く、專ら暖かな愛情を注ぎ、其心に安堵を與へるやうにして、快活な動作を勸め、時折は優しく美しい談話（修身書のやうなもの）を聞せたり、或は文字が讀める兒童なら、昔時の聖賢の傳記など（それもお伽噺のやうなもの）を讀ませたりして、暖い同情を寄せさせる樣にして徐々に矯めて行きましたら、正しく美しく、而して快活な兒童となつて參りませう。

▲懶　惰

懶惰者にも數種ありまして、勞力を厭ふ者、事に當つて緩慢なもの、性來の無頓着から物事に少しの趣味すら有たぬ者、或は思想の作用が複雜に過ぎて疲れて了つた結果、無性となつたものなどでありますが、之等に對しては、兒童の心身の發達をよく見定め、而して不相當の學科の溫習や、或は琴よ、茶よ、舞よ花よ、など〻身體に不適當な重荷を負はせぬやうにしなければなりませぬ。

▲忌　避

俗に虫が好かぬなど申事は、大人にもま〻ある事ですがこれは、重に我儘から來るもので、殊に此の傾向の多いのは女の兒童でせう、何等の理由がなくつて、無暗に物を嫌ふ俗に毛嫌ひといふことはよくないことで胸の狹い、笑ふべきことです、例へ女でも餘りに愛憎の念の強いのは、決して良好の人とは申されませぬ、凡て男女に係らず、幼少の折は父親より母親に馴れ母親の性質を重に受け繼ぐもの、乃ち母親の感化を受けることが多いのですから、若し御子樣方に、此の樣な傾向が現はれましたら、お母樣方は萬事につけて、格別驚く程のことでもないのに、「サア大變だ、何うしませう」と蒼くなつたり、左程に厭でもないものを「忙がしくつて本當にくさ〳〵するよ、毎日此樣風では

厭になつちまふ」と大業に仰言つたり、或は御自分のお氣に召さぬ方が訪ねて來られますと、「あゝ厭な人が來た、面倒臭いね」と眉を顰められたりなさることを慎んで、詞や動作に愛憎の差をお示しにならぬ樣願ひたいのです。

▲老成

老成とは年齢の割に大人びて、才智が優れて巧に言語を飾つて怜悧に見える樣な兒童を申ので、前の臆病から見ると良い傾向ではありますが、凡べて早熟と言ふ事は、已に不自然を意味して居るので、幼少から何かが出來ると、親の慾目で、つまらぬ愛に溺れ、我が兒自慢に、賞められたさの一心から、難易の別なく、文字など習はせるのは能くあることで、一般親御樣方の弊風ですが、これは畢竟、可愛我が子を、陥穴に導くやうなもので、古人の口ずさみにも「十歳で神童十五歳で才子、廿歳過ぐれば、平凡の人」、と申すが如く、結局不成熟に歸着するものです、此の樣な御子樣は謂室咲の花の樣で、得て夭死が多くあるさうですから、可成、心を傾けて徐に其の才智を良い方に導たら、他日に至つて天晴有用の材となるに相違ありません。

▲蔭言

立聴き蔭言などと言ふ事は、女子の特質と申してもよい、兒童は怜悧な樣でも社會の人情が分りませんから大人の秘密を立聴して、それをまた他家樣へ行つて、「家の阿母樣がね、これ〳〵仰言つたのよ」と、さも何か功名をしたかの樣に、お饒舌をするものですが、それがため些細なことから、兒童の喧嘩に親が出ると言つた樣な騒ぎを引き起すやうな事はまゝあることで癖の中でも此樣な癖は甚だ良くありません、此の矯正の仕方はと申せば監督を厳しくするのは勿論成る可く兒童の前では秘密の話しや他人の風説などを愼み、耳へ入れぬ樣にして、假りにも「只今の事は御内分に……」などいふやうなことは、努めて避け、また兒童が他から歸宅してうすら聴して來た、他人の蔭言をいふ樣な場合には決して耳を貸さぬ樣にするのが肝要です。

▲偸食

兒童の慾望は五官の上に限られ、直接に見聞する物の外には出ぬものですから、其の嫌厭する食物を强ひて食べさせたり、又は家長にばかり、美食を進めて、若し其の子が「私にも」と强請る時は、「兒童は此樣なものを食べるものではありません」と、見せびらかす樣なことは、教育上極めて惡い手段と申さねばなりませぬ、斯ういふことを度々する樣になると、兒童の心は自然と卑しくなつて、果ては親の眼を偸んでゝも自分の口腹の慾を充さうといふ惡心を生じます、ですから兒童に與へてよいものは躊躇なく與へ、萬一惡いものは最初から見せぬ樣にするより仕方がありません、それを我子可愛さに再三逼られてから、「又泣かれると喧しいから遣りませう」とか、或は「もうこれでありませんよ」とか、又は「お行儀をよくすれば」などいふ、曖昧な條件をつけてから、始めて之を許すなどは、最も姑息の手段でございます、此の樣なことをしては兒童の慾望をして、ますく其の度を高めるばかりで、それがため利己主義と化り、嵩じては私利を得るためには譎詐慘酷の事を行ても平氣で濟す樣になり、又は偸食癖の慢性となつた場合は、慾を充たさうがためには、詐僞、窃盗などの忌むべき病弊に陥るやうになります、實に恐しい事で、之が父母兄姉たる御方は、豫め未發に防ぐやう周到な、御注意を願ひたいのでございます。

▲盜癖

兒童の盜癖は、種々の方面から生ずる疵ですが、第一の原因は慾望です、此の慾望が高度に及ぶに從つて、あらゆる方面に働き、時によると、青年に近い兒童に誘惑されて、無心に偸盜をする事がある、例へば夏秋の候、他家の畑や果園などに、桃實や、柿實が成熟しますが、年長けた兒童は自ら危險の地位に立つことを避けるため、「オイ金ちやん、彼處に柿が眞赤に成つてるだらう、あれを取らないか、美味いぜ、本當に甘いぜ」など、唆されて偸むが如き、或は先天的に其樣な心があつたり、或は父兄が日常虛僞、詐謀を事とする

のを見聞したりして、理非の差別もなく知らず識らずの内に感染して、癖となるものなどですが、これを矯めるのには前に申した通りで、飲食物の鼠食は金錢よりも確かに早く感染するのですから、よく御注意になつて、家庭に於て父母の眼を晦ます樣なことのないやう、嚴重に取締り、傍ら相應の小遣錢を與へて、他を羨まないやうに、而して其使途を嚴重に問ひ糺し、併せて人としての社會の義務を知らしめ、刑罰と罪惡とは相伴ふこと、罪人となつて監獄に容られたなら、再び人として社會に立つことの出來ぬこと、囚徒となれば凡べての自由を奪はれて其の苦痛の大いなることなどを、折々懇に話して、反省の心を起させれば、救濟する事が出來ませう。

▲嫉　妬

兒童は天性我儘で、利己的なものですが、殊に幼稚の頃は自巳といふ觀念の外、他といふ觀念は少しもありません、例へば自分の玩具は他に貸さないで、他の物は隨意に取るとか、或は自分の物だと思つて居る乳房を、他に與へる時は嫉妬し、また其の母が他兒を抱く時は泣き叫び、自分が再び抱かれざれば默らず、二人一所に抱いても承知しないといふやうに、嫉妬は人の本能といつても差支へませんので、又一面から言へば嫉妬や、猜忌やは競爭心とも申事が出來ます、乃ち人に負けまいと勉强するのが競爭心で、凡べての事業の進歩して行くのもこれがためですが、自分が別段勵みもしないで、漫りに他人の進歩を嫉み猜むのは、乃ち猜忌、嫉妬心です、で、一般に此の心のない人はありませぬが、比較的女子には通性となつてゐる樣ですが負けるのが嫌だから勉强するといふ嫉妬心（良い意味の嫉妬心）は人の禽獸と異なる點で美德でありますけれど、自分の技量の至らない爲めに、傑れてゐる人を嫉む心は極めて度量の狹い、意氣地のない考で、飽くまでも排斥しなければなりません、で、此の情が向上して來ると、不平、不滿、惡意、敵視、密訴、陰險等のあらゆる惡德を發生する動機となるものですから、萬一此樣な傾向のある兒童は、輕卒に取扱つてはなりま

せん、また、此の兒童の面前では、兄妹弟妹、朋友等の比較をしたり、一方を貶斥して一方を賞賛ると言ふやうな事や、一方を憎厭で一方を溺愛るやうなことなと、凡て偏頗の取扱を愼み、側ら他人の不幸、悲哀などに充分の同情を表さするやうに、導いたらば、一方には自重心となり、他方には愛他心（他人の爲めの嫉妬）となつて兒童道德の基となるものであります。

以上十三箇條の癖は、何れも有振れたものばかりで、親御なり、監督者なりのお眼に、二六時中觸れて居りますから、已に御承知でせうが、其の有振れた癖が、眼に馴れて多年の習慣となつてますから一寸した我儘や、强情や、虛言やは左程惡いことゝ思召さないで、『兒童のことだから今に成人したら直るだらう』と、捨て置く方がまた强ちないではありません、けれども、これは甚だ恐るべき事で、陳い比喩にもありますが、二葉にして摘まなかつたら、果ては斧を用ふる樣になつて、可惜、可愛い御子樣を、飛んでもないものになさるの悔を生じませう。

（完）

世話女房

戸板裁縫女學校長　戸板せき子

世話女房といふと、飯も炊いたり水仕事。機も織り候賃仕事。襷前垂、手拭被つた。芝居で能く出る。此家の妻といふ資格あるおかみさんか。又は、裏店、小店の貧乏世帶を背負て立つ山の神連を云ふやうなれども。そうばかりに限らず。世話女房とは何でも能く一家を整理し。衣服飲食、什具一切の事に氣を附け。內外百般の衝に當つて。落度の無いやうにする者。即ち世帶持の宜き者をいふのである。之は貧富貴賤の差別はなし。數十百万の富を有つて居る。世に謂ふ富豪の家を預る御內儀も。臣民の上流に立つ王侯貴人の令夫人も。矢張り世話女房で無ければならぬ。一家の主婦たる者の注意は。門の入口から。家の裏口隅々まで。行渡らなければなりません。夜具蒲團、衣服の洗張り。仕立直し等に至るまで。能く〳〵心を配つて置かなけ

れば。ツマリ一家の体面を立派に保つことが出來ません。兩親の世話、夫の補佐、兒女の敎育、親類緣者幷に懇意な者の交際。下女下男の使ひ振り。出入の者の取扱ひを圓滿にし。先づ第一に家の收入に應じて。奢らず吝ならず。一言にして云へば見苦しからざる暮向にして行くが簡要でムいます。去れば妻たる者は敎師、番頭、保姆、看護婦、應接掛、裁縫師、料理人の諸職までも兼ねて居らねばなりません。每號に出て居ります。中村鈴子さんの訪問錄を拜見しますと、鍋島夫人でも、大山夫人でも、岡部夫人でも、能く諸事萬端にお意を留められて。一家内の事は細大洩さず第一經濟といふことを胸中に置て處理せらるゝのには實に感服の外はありません。之等の方々は實に立派な世話女房でムいます。確か亞米利加にはハウス、ワイフ（世話女房）といふ雜誌があつたと思ひました。之れに高尙な宗敎上の事も。家庭敎育の事も書てありますが。主なる記事は人の妻として最も大切に家持の事が書てあります。之は隨分見て爲めに成る雜誌でムいます。▼

ア實に彼地は何から何まで能く行屆いた者、進歩した者です。

さて、此の良き家持、良き世話女房を造り出すには何して宜きや。之は一ツの問題でムいます。小學校を卒へたらば。嚴重な華族樣へ行儀作法見習のため奉公さすのが良きか。所が、此所なればと安心して我が可愛き娘をお托せ申すべき。御家庭の淸らかな方は滅多に無し。良しや有つたとした所で格別の効能も無からうか。寧ろ弊害がありはすまいか。其よりも出來得る限り學校敎育を授け。其から裁縫、料理其他家事向きに必要なる事を稽古させ。尙其上に家に在つて實地に一部の事を担當させ。買物の事から。客の取扱ひ。料理の献立に至るまで。たとへ兩親の滿足する程には行かずとも。暫く忍んで爲さしむれば。次第に經驗を積んで巧者になり。嫁に行きても。舅を取りても。差支への無い樣になります。斯くして始めて高尙な思想を有つた平民的の良き世話女房が出來上るのであります。或人は女子に學問をさすると家事向き一切の事が厭に

なると申しますが。成程明治の初年に高等教育を授くべき女學校として建設されたのは。女子師範學校でムいますが。之は男子の學ぶ所と學科に格別の違いがなく。又其の目的は學校教育に從事するのでムいますから。一家の主婦たるに適當した種類の者は授けませんのです。又明治十何年といふ頃に。外國宣教師の設立された女學校が諸所に現はれ出でました。所謂ミッション、スクールでムいます。私も少しの間横濱のフエリス女學校に居た事がムいましたが。何でも是等の學校は英語を第一に置きまして。和漢の學等は第二、第三、手短かに申さばドウデモ美いと云ふ風で。其外ピアノ、オルガン、ヴアイオリン、編物で持切つて居つたのでムいますから。岩本さんの奥さんになられた。島田かし子さんの如き日本一の英語の達者な方も出來ましたし。又林貞子孃の如き音樂の名人も產出されたのでありますが。其代り和漢學に至つては餘程他の學校に劣ります。英詩の諳誦は美事に出來るが。和歌の方は一向に無器用であるといふ有樣でありました。偖

又一般是等の學校を出た者は如何であるかと云ふと。大概の方々が。引籠つて家庭教育に我が兒女を相手にするよりも。學校に在つて敎鞭を執る方が嗜きであつた。家内の細々した事の世話を燒くよりも。婦人會の役員となつて。身錢を出しても車で奔走して步るく方が面白いといふ調子であつた。から人の妻となつても。家事經濟の道には暗く。昔氣質の姑には學者の嫁はドウモ家政上行屆かない。家事向きに善くないとの感覺を有たせたかも知れません。右申したのは決して是等の學校を誹謗したのではムいません。其の教育の方法が一方に偏して居りましたから。自然一方面の婦人を造り出したといふことを。在りの儘に申したのであります。尤も今日では何れの學校も其の面目を一新し。女子をして圓滿なる心的發達をなさしむるやうになつて居ります。

所が近頃では猶其でも足らずとしてか。何れの學校も家政學を重んずるやうになり。裁縫割烹等が盛んに行はれて參りました。此の如く女子に必要なる技術を授

けてこそ。公人として世に立つ所の賢女も出來。私人として家に在る所の良妻も出來るので厶います。凡そ婦人として讀書き十露盤は食物でいはゞ御飯の如きもの。他の學科はお菜の如きものでムいませう。御飯は第一必要な者ではあるが。之だけでは食事が出來ぬと同樣で。種々なる婦人に必要なる技藝を學ばねばなりません。私の學校では裁縫を專門としては居りますが。猶ほ甚だ不充分ながらも國語、家政、割烹、活花、作法、茶の湯などをも別科として敎へて居ります。尚ほ時勢の進運に伴ふて改良に改良を加へ。婦人に必須の技藝を授け。學校敎師ともなれる良き世話女房を造り出したい。之が私の希望で厶います。

偖て婦人の天職といふ者は何であらうかと考へて見ますと。矢張り人の妻となり。母となり。能く家政を料理することでありませう。さればこそ聖書には人獨り居るは宜しからずとあり。又經書には男女室に居るは人の大倫なりとも厶います。之は東西古今を通じての本筋でありませう。然るに外國には婦人が生涯夫を有たず。一身を神に献げて供物となし居る六十歳七十歳の處女がありますが。之も敢て心得違ひとして非難も出來ますまいが。併し變則といはなければなりますまい。成程女子と生れてナイチンゲールとか、エリサベス、フライとか。近代ではウイラード孃だとか又我邦では三輪田眞佐子女史。下田歌子女史、跡見花蹊女史、矢島楫子女史などの樣に男子も及はざる程の事業を仕遂げれば。其は愉快でありませう。(以上列擧した中に一旦夫を有つた方々があります)又是等の方々は多くの女子の理想と爲つても居りませうが。公共の事業に關係することが。婦人としての第一の美事とは申されません。人の妻となつて。日陰者の如くなつて居ても。貞操淑德を有つて間接に社會に大きな働きを爲す者も多くあります。又世間には人に知られない女豪傑も多くあることゝ信じます。若し一家の仁は必ず一國に及ぼすといふことが眞理なれば。良き世話女房の感化力も。決して一家に止るものではない。故に私は千万人に一人を望む女丈夫とならんことを欲するより

も。千万人悉く要する所の。又誰も成り得らるゝ所の良き世話女房とならんことを望みます　（終）

理科応用　家政廿四時

河西璞

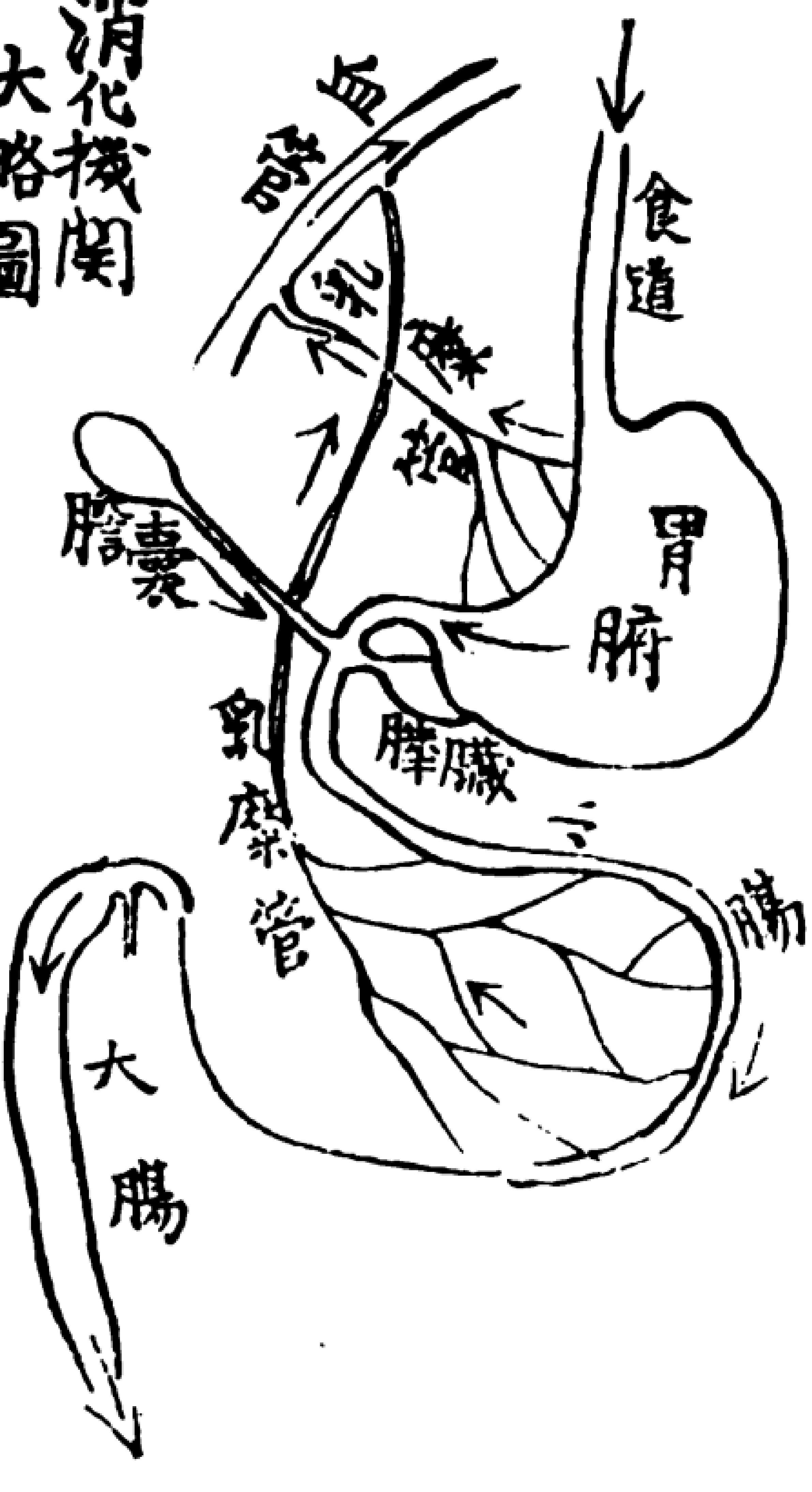
▲消化の理

健全な身体に適當な食物を甘く食べれば、滿足に消化されて、血になり、組織になり、之が徐々に燃えて体熱となり、活動の源泉になります。されば食物は先づ材料を撰んで、消化れ易いやうに料理し、口といふ第一の機關に入れて、歯でよく嚙み碎き、唾液を交せて嚥下し、あとの仕事を腹に任せますと、腹には胃腑、腸、膵臓、肝臓と陣取つて居て、胃に來た食物が胃液で揉まれ、消化れた部分は吸ひ取られて血の管へ入り殘りの部分は腸へ下つて、そこで更に腸液と膵液、肝液を交せて揉み消化し、血の管へ吸ひ取つた殘りの滓を糞として身体の外へ吐き出します。即ち口へ入れ腹へ嚥下す飲食物は、唾液と、胃液と、腸液と、膵液と、此五種の消化液で異つた物質に變て了ふので、此化學的變化が即ち人体の消化作用。思へば實に靈妙不思議の作用で、身体が一度分の食物を消化す爲にする胃腸の仕事の分量は、通常の人が一日にする器械的の仕事に匹敵するのですから、我々は此の如き大仕事をしてくれる消化機關に對しては、常に十分の注意を怠らず、出來るだけ愛撫して、餘計の苦勞をさせぬやう、言ひ換へれば、力に餘る程の不消化物を入れて無益の疲勞をさせぬやう、間食をして仕事又仕事の繼子いぢめをせぬやう氣を付くべきです。酒や藥味は消化機に取つては鞭のやうなもので、下等の馬には鞭も入るかも知れませぬが、上等の馬にビシ〳〵鞭を當てるが如きは、畢竟野蠻無智の騎者のことです。

五種の消化液は夫々受持が違つて居ます。消化機關の所有者は是非知つて居ねばなりませぬ。其受持、先づ唾液は米麥薯のやうな澱粉を消化します。次に胃液は蛋白質を消化します。膵液は腸の口元へ入つて來て、

澱粉と蛋白質と脂肪を消化します。肝液即ち膽汁、苦い汁で、腸へ入つて來て脂肪を消化し、兼て糞の腐敗を防ぎます。腸液の受持は澱粉と蛋白質です。即ち澱粉は初に唾液、次に膵液と腸液に消化され、水に溶ける糖類になつて血の管へ吸ひ取られ、蛋白質は先づ胃液、次に膵液と腸液に消化され、ペプトンといふ水に溶けるものになつて吸ひ取られ、脂肪は膵液と腸液の爲に同く水に溶ける質のものにされて吸ひ取られ、此等が合して血になり、身体を巡つて、筋肉内臟一切の組織を順次造り換へ、肺から血へ混つて巡る空氣はこれを燃して体熱を出し、此熱が仕事の根源になつて行きます。子供の身体に食物の効用は、以上の新陳代謝の外、身体を造へて大くするといふ丈餘分にいることは勿論で、従て子供の消化機關は大人のよりは比較的勢力が強いから、大人には害になる間食も、子供には正當の食事と見るべき時もございませう。即子供の食事の時間は、大人よりは短くて正當です。

消化機関大略圖



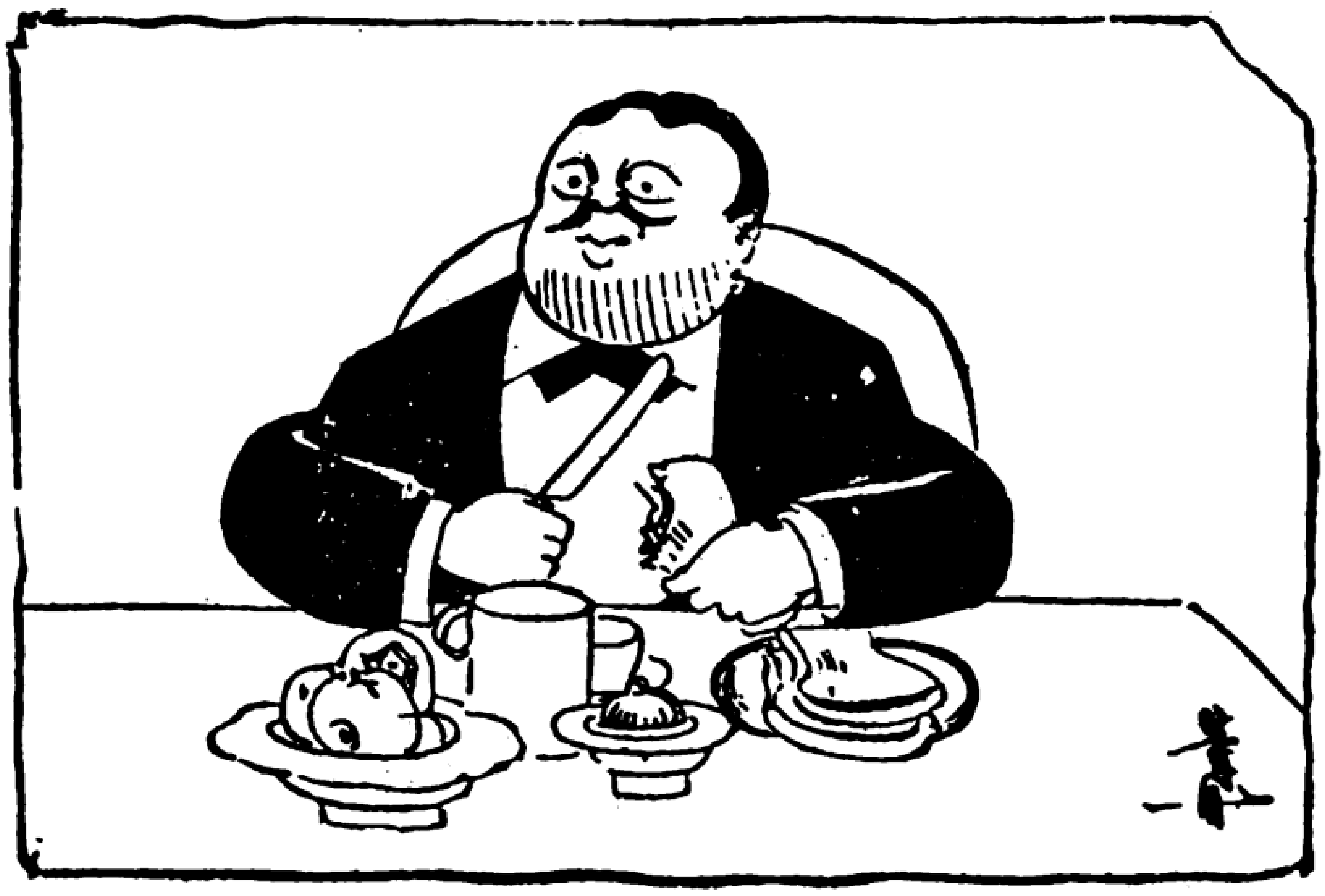
▲消化の時間

食物が消化機の内に留つて居る時間は、物により、又人により、同じ人でも身体の工合により一定しませぬが、通常の大人について見れば、胃に居る時間は一時間から六時間、小腸に居る時間は凡三時間、大腸に居る時間は凡十二時間で、主な食物の胃に居る時間は、米飯一時間、生卵一時間半、パン一時間から二時間、生乳二時間、馬鈴薯と煮豆二時間半、半熟卵、三時間、豚肉牛肉四時間、熟卵五時間、凡そこんなもので、腸へ入つてからは、消化れな

いものは早く出てしまひますが、御飯やパンなどは、一晝夜も一晝夜半も滯在します。此の如くにしてよく消化した場合には、糞の割合は、水分を除いて、米飯で百のものから六麥飯で七、西洋料理で五半だと言ひますが、胃腸の損じた者食物の成分配合の不適當なものに至つては、遙に其量が増加致しませう。消化率の増大といふとは、食事經濟上極めて大切の事です。

▲朝飯の献立

朝飯といへば何方でも御飯に味噌汁御菜が卵か黃豆か海苔、それに香の物位のあつさりした献立でせう。一通りの養分はそれに備つて居りますが、朝は身体の機關が久く休息した後で、從つて消化の力も弱つて居ますから、胃腸の弱い人などに炊き立の熱ひ御飯、消化れ難い海苔や香の



物や豆、酸敗し易い味噌汁などは如何でございませうか。まして多くの人のするやうに、御飯に味噌汁や湯茶をかけてザブ／＼呑み込むが如きは、誠に言語同斷で、朝ぱらの御茶漬といふやうな諺の存する以上、ベルツ醫師が、「日本人は三千年來米飯を食すれども、未だ之を食する法を知らぬ」と評されたのも、殘念ながら尤と御請せねばなりませぬ。朝は起きて水か白湯の一杯も呑んで、少し庭仕事でもして、夫から牛乳、半熟の卵、粥一二椀、又は新しくないパン一片か二片に、果物の一つも食べて置けば活力は十分で、一日中愉快に勞働が出來ること、經驗家の保證して居る所です。若し腸胃の弱い人なら、朝食は全く廢して、八時か九時頃に牛乳の一合も上つて居れば、大抵の醫藥よりは必と効目があり

ませう。朝の献立は出來る限り輕い物を少量、成るべくは關西風の粥（茶粥にはせずとも）に改めたいものでございます。

▲食事の心得

食事の目的と消化の次第が分つて居れば、學理に合つた食事の仕方と、改良すべき不利の習慣は自然分つて參りませう。例へば、食事には嚴に時間と分量を定むべきこと、間食及不時の飮茶、特に良き茶を禁ずべきこと、よく噛み碎きて唾液を混ぜざれば嚥下すべからざること、從つて湯茶漬、汁懸飯を禁ずべき事、食事中身体を窮屈に置くまじきこと、食ひながら物を考へ、本を讀み、腦を用ふる如き談柄を避くべき事、罪のなき笑話雜談に微笑しつゝ緩りと美味く食ふべき事、腹八分目たるべきこと、食後三十分位は安座談笑に時を移し、血液をして勢力を胃腸に集中せしむべき事、成るべくは平臥すべきこと、一切不信用の食物を食ひ、不信用の生水を用ふべからざる事、小兒には飮水の量を制限せずして存分に呑ましむべき事、（口やかましく言ふが爲に、一時に馬鹿呑みをして害を受くるものなり。制限せざれば過飮の虞なきものなり。小兒の体に水の多量を要すること言ふ迄もなし。）雪氷天水の如き純水を用ふべからざる事、柔かにて細かなれば何にても消化よしと思ふが如き、代價高ければ何にても滋養に富むと思ふが如き誤解あるべからざる事、凡そ此の如き事項が外にいくらも御座いませう。

食事にあまり消化不消化を言ふのはよくありますまい。病人や小い子供老人などなら別の事、丈夫な大人の胃腸なら、凡そ人間の食物となつて居る丈の物なら、何でも消化せる筈のものですから、貝でも、昆布でも、玄米の御飯でも、構はず御用ひになるが宜しい。不消化〳〵と氣を付け過ぎれば、人の身体は遂に之に馴れて、偶貝の一皿も食べれば直ぐに病氣になるやうな安身体になつてしまひます。それから分量もそうです。時々は大食ひをするが宜しい。人間社會には不時の事が起つて來ないと限れませぬから、時には食溜めをす

る事もあるものと、胃腸に感念させて置く必要があります。これが即賢き人体の文明的野蠻流教育で私一個の私見ではありませぬ。さて家族團欒、食後の談笑、夫から新聞の輪讀、後れて起き出る子供の世話などして居ます中に、時計が八時を報じて、家政二十四時の第一期が終ります。

それから一寸朝飯前に忘れた事がありますから茲に附け加へて置きます、それは即ち

▲煙草盆の火

煙草盆の火は分量が僅かで、熱を奪はれ易く、且つガスの出入りが火鉢のやうに自由でないから、消ね易い。右の三の理由の中、分量は致方がない、他の二は工夫次第餘程これを避け得られる。先づ灰をよく攪混ぜ、浮して、ガスの出入をよくします。此目的に向つては灰を時々藁灰に入れ代へるがようございます。灰が出來て之へ埋める火は、極上等の切炭か、さもなくば十分に起きた、成るべくは枝炭の、灰分の少いのを、二本ばかり抱き合せに立てゝ、輕く灰を寄せかけ、若し灰が濕く冷くて火を消す虞があるなら、火鉢から温灰を移すが宜しい。上手に活けて奇麗に灰をならした煙草盆で煙草を吸ふのは、煙草呑には誠に御馳走のもので、消ねて居る煙草盆を引攪廻した上句マッチで呑むなどは、呑む人の不愉快よりは、呑ませる人が顏を赤くせれぱならぬ。

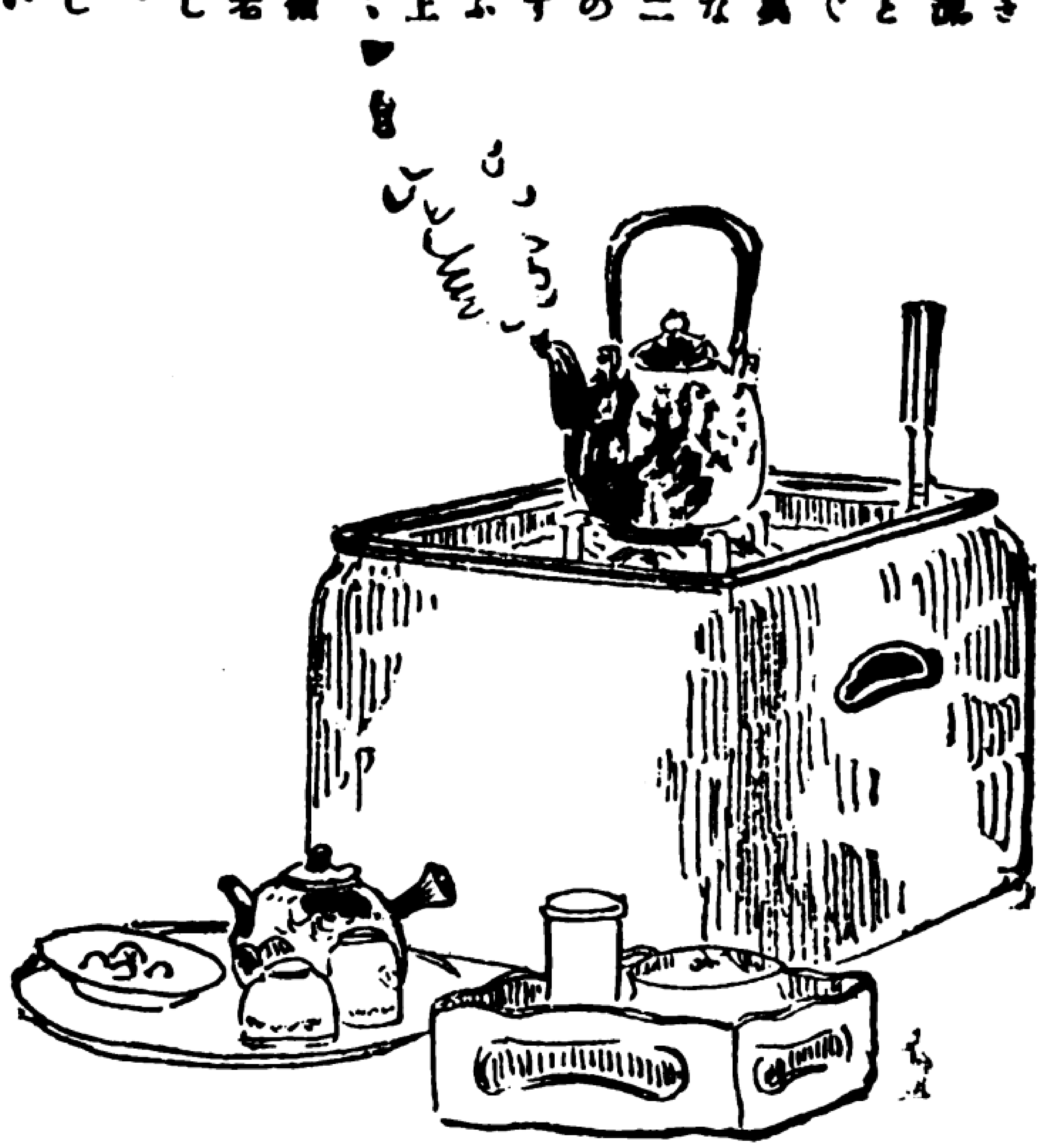


火鉢へ炭火を取る時の心得もこれに準じたもので。俗に夏下冬上と言つて、夏は炭の下へ種火を入れ、冬は炭の上へ種火を載せればよく起ると申すが、その理由は未だ確乎と思ひ付きませぬ。

▲喫　煙

吸ひ馴れた男子衆が一服やるのは、一般の習慣上、やかましく言ふ程の事もないが、若い婦人方の喫煙は、下品です。抑煙草はコロンブスのアメリカ土産で、歐洲を經て我國へ入つたのが天正頃、今からざつと三百年の昔、當時葉一枚の代銀三匁といふにも拘らず、恐ろしい勢で天下に流行し、代々の禁令も法度も、碌に釘程の利目もなく、今日では何十萬貫、其内外國への輸出もあり、又外國よりの輸入もあり、つまり我々が日々口から吐き出す煙の代價は、年々凡三千萬圓と勘定されます。此驚くべき勢を以て、猶日に增し領分を廣めて行く煙草は、どんな結構な物かと言ふに、吸ひ習ひの時は、大抵は眼が廻つて、嘔氣を催し、頭痛がし、口が渴き、津液が稠き、食慾が減り、甚しきは痙攣ける、誠に激しい毒物で、激しい毒も道理、煙草の中には、煙

草油ともいふべき一種の揮發油と、ニコチンといふ蒸氣になり易い毒物があり、猶これを煙にする時は、これらの蒸氣の外に、ピリヂン、ピコリン、青酸、酸化炭素、硫化水素などいふ毒の蒸氣ガスが一緒に出て來て、肺へ入り、血へ交つて、腦神經を刺激し、血管、筋肉、五臟六腑に働きます。性來こんな毒蒸氣に馴染まぬ潔白の身體の機關は、一滴で犬を斃すといふ程のニコチンなどの大敵を平氣で受けられる筈はなく、非常な苦みと異常を感じますが、さて人間は實に妙な動物で、こんな苦みにも辟易せず、二服三服稽古する中に段々馴れて、初の苦みは樂みになり、遂に「一日斷食すべし、半日煙草廢すべからず」といふ事になつてしまひます。さて馴れた上の煙草の效果は、學者の利害說區々で、ある人は、喫煙は神經を動して血の循環をよくし、身體の中に溜つて居る老廢物を排出すから、其結果疲勞を醫し退屈を慰め、考へる力を増すといひ、ある人は、喫煙は腦神經の力を減らし身體の發達を妨げ、消化を損れるといひ、双方共論據を備へて爭つて居ります。が、統計の結果は、子供の時から煙草の癖を付けた者は、身體の發育は明かに劣り、記憶はめつきり惡く、考へる力は鈍いといふことです。これが確かの事實と認められまして、我國でも、現に子供の喫煙を禁じてあります次第で、つまる所、子供によくない程のものは、大人にも害が多いから習癖の薄い方は我慢して御止めになるのがよろしい。



▲香の物

朝の食には香の物がつきますが。香の物には菜漬、澤庵漬、味噌漬、糠味噌漬、鹽漬、粕漬、色々ありますが、香の物の本來は、目に見えぬ細菌の醱酵作用をかりて變化させたもので、其際所謂香の物の香氣と味が出來るのですから、菜大根の成熟る爲には、第一に細菌が入用ですが。これは自然空氣中に浮遊して居るのが入つて來て殖ねますから、故ら移し入れるには及びませぬが、若し養つて置いた細菌、即ち古い糠味噌又は澤庵に付いて居る様を混ぜれば、新しい糠味噌に早くなれますし、新澤庵も早く漬きます。新蕪新もみぬか、新粟ぬかを入れても、これに付いて居る細菌が同様の結果を來します。酒樽、味噌桶、醬油樽にも、細菌が付いて居ますから早く漬きます。尤酸味のある古樽、酢樽、酸くなつた香の物や味噌を入れて置いた桶へ漬け込めば、早く酸くなりますから氣を付けねばなりませぬ。酸くなるのは酸を造る細菌が來て働くから

、で菜大根のなれたのが、暖くなると自然に酸くなるのは、矢張空氣中から酸を造る細菌が來るからです。鹽はこれらの細菌には敵藥ですから、鹽を澤山入れゝば、他の細菌も十分に働けませぬから、成熟も晩くますなり。香の物の漬込には鹽の加減が大切です。

右の理によつて、香の物漬込に新に樽を御求の節は、酒樽か味噌樽か醤油樽が至當で、去年の古いのを御用ひになるなら湯を以てよく洗ひ、其上を燒酎で御拭きになるが宜しい。さうすれば、隱れて居る惡い細菌は殺され、酒の香はよい細菌を誘ひます。若し樽が漏るならば、始に水を張つて置き、それでも止らぬならば、布か綿を漏處に詰め、若くは石灰と、粘土の乾いたのと、鐵の錆粉と、以上三品をよく篩り混ぜたものを、濃い粥位に煉つてすり込み、乾かせば、美事に止ります。菜葉には、肥料の中から、目に見えぬ十二指腸蟲の卵が付いて居て、それが腹へ入つて、蟲になつて、殖ゑて、あの恐ろしい十二指腸蟲病に罹ることがよくあります。私の宅ではこれが恐ろしいから、菜や大根葉は、必ず沸湯をくゞらせて漬け込むことに定めて居ります。これが爲色の惡くなつたのは、鹽に逢へば元に復りますし、味もさして違ひはない。只かうすれば非常に早く成熟れますから、うつかりして居ると酸くなります。早く食べるには至極妙で、遲く食べやうとには鹽を餘分に御入れなされば宜しい。



大根漬には、栗殻か寄藁を入れゝば、早く漬いて、色がよくなります。茄子の色の變りを防ぐには砂が宜しうございます。漬物に使ふ糠には、小米を篩ひ分けることが大切で、小米が混れば早く酸くなります。大根などに糖を交ぜて漬ければ、早く酸くはなりますが、早く甘く漬きます。大根を長さ三四寸に切り、竪に三つ割にして沸湯を注ぎ懸け、冷めぬ中に樽に入れ、鹽を澤山振り、酒を少々打ち、輕めに壓石をして置けば、一時間程で上等の香の物になります。大根を丸又は六角に皮をむき、小口から薄く切り、大根一本につき小柚子一つ皮ごと小口切にしたものと、同く小口から細く切つた蕃椒二本、以上三品を醤油に酒を少し入れた中に漬けて置けば、上戸などには大喝采請合です。淺漬にした大根を四つ割にして長さ二寸位に切り、煖めた酒に少時漬けて置き、冷めた時分に取出し、味噌に漬けて壓石をして、置けば二時間位で結構に食べられます。一晩置けば一段です。尤味噌漬ですから、御洗ひなさらずに布巾で御拭きなさるやうに。大根を薄く刻み、葉の極若いところを切つたものと一緒に鹽で揉み、少し壓して置いて取出し、水二三遍、沸湯一遍かけてよく絞り、醤油をかけても結構に頂けます。

一日醫者

糸左近

左に述べましたる數病は、實は一月の誌上にあらはるゝ筈でありましたが、私の筆不性から、不思遅くなり、爲に活版組立の間に合はなかつたとは、實に遺憾でありました、斯樣な次第でありますから一月二月に關する病ばかりでありますが、併し地方に依つては舊暦を守り二月になつてお雑煮に舌鼓を鳴らし、屠蘇に千鳥足を踏まるゝも、少く無いから、舊原稿のまゝを改めませぬことにしましたどうか其のお積りで讀んで頂きたいのである、

▲咽頭閉塞

〔原因〕雜煮餅の樣な粘着性の物を、大口に急いで、能く咀嚼せずに嚥下すと、咽頭に其の食塊がピタリと着附いて、ウンともスンとも動かぬのである。

〔病狀〕咽頭が非常に痛く、呼吸は絶ゆるやうになり、それが爲に目を白黒にして苦しむのである。啻に苦しむばかりで無く、其の滑り場所が惡いとそれなり呼吸が止ることがある、實に愧かしい次第である、傍に見てゐる者も甚だ氣の毒な至りである。

〔療法〕眞先に苦しむ人の左右の肩胛骨の間を手拳でトンと打つが可い。さうすれば肺臟内の空氣が急に出ようとし、其の反動で、食塊が難無く關所を通り越すのである、若しもこれでピックリとも動かぬときは、口を開かせて咽頭部を窺いて見るが肝要である、咽頭部に其の食物が見えたら箸で舌を壓へ鑷樣の物を以て撮み出せば、必ず出るに相違無い、されど其の食物の見えぬ時は酢を飮ましむ、それでも毅然として動かぬ今度は最後の手段として芥子湯を與ふるが可い、さすれば其の刺戟で胃中の物まで吐かうとし、其の影響が食塊に及び、目出度吐き出すものである、斯樣に手を盡しても効無きときは、餅は餅屋イヤ病は醫者よと走るより仕方は無い。

斯樣な譯であるから、何に限らず食物は能く嚼み碎き徐かに食はねばならぬ、急いで食へば假ひ咽頭に塞らぬとも、唾液のために變化を受けぬから其の消化甚だ惡く、胃病の基となることがある。

▲酒精中毒

〔原因〕言ふまでも無く酒の飮み過しであるが、我が國

の風俗として、目出度時にも悲しい折にも下戸も上戸も酒を食り亂酔するからである。

〔病狀〕顔色紅く――、其の揚句に却つて蒼白くなり、筋肉は次第に弛み、呼吸は鼾の樣に響きを帶び、脈の搏方は始めは速いが段々遲くなり、大いに嘔吐し、時には不隨意に大小便を洩し、劇しく亞爾個保兒の臭氣を放ち、七顚八倒苦しんだ末、遂に人事不省に沈睡し甚しきは六親眷屬慨き悲しむやうになる。嗚呼愼しむべきは酒である。

〔療法〕第一に冷室に移し、頻りに頭を氷で冷し、項部と足とに芥子泥を塗り、濃い咖啡或は茶を飲ましめ、或は腰まで溫湯に浴せしめ、背部に冷水などザブ〳〵注ぐが可い、沈睡には、

安母尼亞水

を嗅がしむ、服藥としては、

安母尼亞茴香精　三、〇　依的兒　二、〇
白糖　適宜　水　一〇〇、〇（半合）

右三十分毎に六回に分けて服ましむるが可い。

▲百日咳

〔原因〕多くは一月頃の寒さを物ともせず外出して餘念無く遊ぶ小兒を侵すのである、令ひ自ら外出せぬ稚兒でも子守の背に負はれながら、すげ無い風に長く吹かれて居れば同じことである、然らば寒い風に逢はず唯内にばかり閉ぢ籠らせておけば、決して此の病に罹らぬかと云ふに、又さうとも限られぬ、何故かと云ふに觸接傳染病であるから病者の痰や衣服などより傳染るからである、されど一度傳染れば免病質になるのである。

〔病狀〕熱は急に三十九度乃至四十度に及び、氣管内が痒いやうな痛いやうな何とも形容の出來ぬ厭な氣持がして、噴嚏が出て、それから一種異樣な咳嗽をする、即ち吸氣は長くて笛聲を帶び、吸氣は短くて強い、さうして其の吸氣時には窒息するやうに苦しむことが一晝夜に大槪二十回から五十回にも及ぶ、その度毎に、今も呼吸が絶ゆるのでは無いかと思はるゝ樣は、恰も一穗の燈火が大風に吹かるゝやうに危いのである。咳

嗽に伴うて咯く痰は、粘りの強い黄色を帶びたのである、其の痰を咯くときは食物をも吐くは免れぬことではあるが、其の母其の父の身になつて見ると、血を吐く思ひをなすものである、併しその樣に嘔吐しても左程驚くには足らぬ、嘔吐するのは比較的良いので、さうで無いと、十分に痰を吐くことが出來ぬから尙更苦しむのである。されど段々全快に赴けば窒息樣も次第に減り、從つて咳嗽や痰も少くなり、遂には何時の間にか嗚呼嬉しやと父母の愁眉を開かしむるのである、所が若しもこれと反對に益々重つて肺炎症でも合併したならば、其の苦痛譬ふるに物無く、大抵は助からぬものである、兎に角其の咳嗽をして苦しむ月日が長いから百日咳といふ名が附いたのである。

〔療法〕出來能ふ限りは海邊の温かい地に移さねばならぬ、若し左樣な手當の出來ぬ事情あらば、寒い風に逢はせぬやうにし、室内は晝夜同じ温度にし、それで室内に不潔な空氣の籠らぬやう時々換氣法を實行し、一日二回位の温浴をなさしめ、又濕布繃帶してフラネル樣の物を温湯に浸して之を胸部に卷き、油紙を以て包み、其の上に繃帶しておくのである。それは非常に功あるもので決して怠つてはならぬ、小兒若し食物を取つてゐる年ならば、消化し易い滋養品を撰び少しでも刺戟性の物を與へてはならぬ。咳嗽の劇しい時は、

依的兒　五、〇程

を布片に浸し、吸入せしむるが可い、内服藥は、

鹽酸規尼涅　〇、二　（但し五歲位な小兒の分量）

右六丸に作り一日三回一回二丸宛

これに又左の水藥を兼ね用ゐれば尙宜い。

臭剝　一、〇　白糖　適宜　水三〇、〇（二勺程）

右一日三回に分けて服ますべし

▲實扶的里（漢法の馬脾風と名づくるもの）

本病は敢て寒い時に限るといふ譯では無いが、四季の中何れかと言へば、冬に多いから、百日咳の種類として、こゝに揭げたのである。

〔原因〕「クレブス、ロフレル」といふ醫者の發見した實扶的里バチルレンであつて、一歲から七歲までの小兒

に多くある、これも間接傳染病であつて病兒の呼氣或は器物などから傳染るものである。

〔病狀〕二三日の間は、何となく常より變つた容躰をしてゐるが、其の揚句に熱は四十度にも昇り、咽頭の邊は紅くなり、續いて白い色の點が出來、飲食物の嚥下しが困難となり、食物を嘔吐し、鼻汁を漏し、續いて聲は嘶嗄れ、百日咳と同じく吸氣が長くなつて笛聲を帶ぶる樣になる、さうなると鎖骨上窩や胸廓の下部が其の吸氣時に陷沒み、面色は靑くなつて甚だ苦み悶へるものである、殊に夜間は晝間よりも重い、或る變体のものに至つては、晝間は左程苦しま無いで、常の如く戯れゐるが、夜になると非常に惱むのがある、病益々、重れば、手足に紅斑を生じ、呼吸困難の度は熱と共に高まり、遂に眠るが如く次第に衰へて、曉の燈火同樣に墓無くなるのである。

倩右の徵候を悉く備へて來れば、誰にでも本病であるといふことが了るけれど、初期には醫者ですらも、其の診斷を誤り易いものである。然るに彼是油斷してゐると、病勢俄かに重り、短きは一兩日にして斃れ、長いとしても二週間内には永眠するものである。

〔療法〕昔は吐劑を與ふる外に何の術も無つたが、其の後鹽酸加里を用ゐるやうになり、危險に迫れば氣管を切開して萬一の僥倖を頼んでゐた、然るに近年血淸療法の發明あつてからは、大抵全快するやうになつたとは、實に喜ぶべきことである、故に本病の疑ひあるときは、血淸療法を至急に施して貰はねばならぬ、然るに前にも述べたる通り、診斷の六か敷上に、血淸は高價であるから、醫者も遠慮して躊躇する間に取返しのつかぬやうになる、全体血淸は健康者に用ゐた所で、害の無いものであるから、少しでも疑ひあらば、直に實行するが、親たるものゝ義務である、其の他の療法は百日咳と畧同じことである。

▲格魯布

本病は實扶的里とすべての事が同じく、仲々容易に區別の出來るものでは無い、故に其の療法なども亦同じことゝ心得て可い。

▲皸裂

〔原因〕〔病狀〕は誰でも知つて居らるゝことであるから爰には之を略すとしよう、兎に角

あかぎれは戀しき人のかたみかは
　ふみゝるたびにあいたかりけり

と、誰やらが詠んだ通り、隨分難儀するものである、これは主に十二月から一月二月へかけて其の寒さの强い時に罹るからこゝに揭げたのである。

〔療法〕若し手ならば手袋、足ならば足袋を以て、患部を保護し、可成運動させぬやうにし、左の藥を塗布するが良い。

格魯兒談　二〇、〇　沃度丁幾　一〇、〇
　右一日數囘塗布すべし

偖今度は五病だけ述べたとは申すものゝ、一月から二月へかけて何れも伸氣なもので或は時にむべ山風に夜を深かし、或は時に客を迎へ又は客となつて日を暮すこともあらう、されば感冒イルフルエンザ消化不良などの病は、この月に多く罹るものである、されど是等は一昨年以來すでに述べたれば又繰り返さぬことにしたのである。我が懷かしきところの讀者諸君は目出度い中にも衛生といふことを守られて、この「一日醫者」を讀んで下さるならば治世に亂世を忘れぬ良將にも比すべき方々とまづはめでたし〱。



「一日醫者」に就き、質問して下さいと、一たび申してからといふものは、北は千島の端から、南は臺灣の隅に至るまでの方々が、ドシ〱手紙を遣さるゝのは、私如き者にと思へば、嬉しくはありますが、何にしても、日に五六通づゝあることなれば、其の返書を認むるので、一仕事ありますのみならず、中には同じ問が澤山ありますから、次號よりは誌上を以て、答ふることに致しませう、但し事秘密にわたるものは、郵券を添へて送られたし。

私は左記の處に移轉致しました
　東京市本鄉區森川町一番地表北裏八十一號



簡易西洋料理

季節總菜の栞



▲ポテトースープ

ポテトースープを造るには先づ材料として、牛肉百五十匁、葱一本、人參一本、ポテートー八個、牛乳一合を要す、其方法を記さんに、スープは肉、葱、人參と共に水より火に掛け、三時間ばかり煮出したる所にて、之を漉し、此中にポテトーを湯煮して裏漉になしたるを加へて煮立たしめ、之をテーブルに出す前に、牛乳を加へ、鹽胡麻を加へて加味し、一寸煮立たしめ、之に麵包の賽形に切りたるを脂にて煎たるを二三ヶ加へ、スープの身となすべし。

▲鮭のボール

之を造らんには、先づポテトー一升、鮭又鱈四十匁、卵二ケ、ラード半斤等を用意せざるべからず。かくてポテトーの皮を薄く取り、之を湯煮し、柔になりたる時、悉く之を磨りつぶすべし、鹽出しをなしたる鮭を、湯煮して皮を取り、紙に碎きたるを此の芋の中に加へ、よく掻き交ぜ、此中に卵二ケを加へて、尙ほよく掻き交せ、形を少く取り、之を丸め、之に卵を附し、パンコを附して、ラードにて脂煮になすなり、芥子少量を酢にてとき、之に少量のウルターソースを加へたるを共に掛けて、食する時は尙妙なり。

▲豚の角煮

豚二百目、味淋、又葡萄酒、スープの三種にて造る、先づ豚を切らずして煮立ちたる湯の中に入れ、よく之を湯煮し、後之を取出し、之を薄く一寸四方位の大さに切り、酒及スープを等分に加へて、弱火にて之を煮、殆ど汁の減じたる所にて鹽味を附す、(但し豚を湯煮したる汁をスープとなし、之にポテトー又トマトーを加へて用ゆ。)

▲野菜スープ

野菜スープを造る材料は、ポテトー五ケ、蕪菁一ケ、人參二ケ、葱二ケ、セロリー一本、パン一片、胡椒、鹽等なり。其方法は野菜の皮を取り、之を適宜に切り、水一升五合の中に加へて火に掛け、パンは別に火に炙りて、少しくこがし、之を水の中に入れ、徐々に煮るなり、而して凡て柔かになりたる所にて、之を裏漉にかけて、之を再び鍋に取り、之を煮立たしめ、鹽胡麻にて加味す。

▲肴のパイ

先づ材料としては、肴の肉の殘、バタ二十匁、ポテトー十ケ、アンロペイソース二食匙等を用意すべし、其の方法は魚の肉を骨より放し、之にアンコペイソースを加へて加味し、パイ皿にバタを引き置き、此の中に魚の肉を入れ、其上に少量のバタを置き、尙其上にポテトーを湯煮し裏漉となしたるにて蔽ひ、之を十五分或は二十分ストーブ中にて燒くなり。

▲ライススープ

スープストックの中に米のよく洗ひたるを加へて、之を煮るなり、而してよく煮れたる時、之を鹽味をなす、米はスープ皿に十粒位を取りて其の身となす。

▲お節句の料理

お正月もすみてまもなくまた雛節句となりました節句の御馳走の重詰物なぞ細君方が手ずから調理せらるゝもなか／＼面白かるべく、其が料理法の栞にもとてさる料理通より聞きたる處を記さんに

●口取物料理　▲きんとん　は龜甲丸、中丸、小丸(以上干栗)生栗、隱元豆等を用ゐ、品によりて調製法も種々あれど最も手輕きは慈姑の金頓なり。これは慈姑の上下を切り捨て皮を剝き恰も栗の如き形となるやう四つ切或ひは二つ切りとして、鍋に入れ其の中に梔子（藥種店にあり）なぞ二つに割りたるを投じて湯煮をなし、砂糖湯に鹽味を附けたるものを加へ、暫らく煮詰めたる上、甘藷の皮を剝き二分程の厚さに切りたるを茹でゝ(鐵鍋を忌む)裏漉にかけたるを適宜に入れ、弱き火にて充分煮たる上皿に移して冷すなり▲二色雞卵は一個の雞卵を一人宛てと見積り水より茹で、水にて冷し皮を剝き黄身と白身とを別々に分け砂糖に鹽をば程よき味に加へ、よく攪交ぜて裏漉に掛け角形の箱（鮓折又は菓子折の如き箱に美濃紙を敷詰め）に白身を下一面へざつと押しつけ黄身を少々殘して上へ押し附け、これに殘し置きたる黄身を上よりばら／＼と撒りて蒸し揚げ冷したる上よき程に庖丁して盛合すなり　▲蒲鉾は蒲鉾屋より求むるがよろし

●榮螺の木の芽和　これは獨活をば一寸程に切り皮を剝きて又二つに切り水にてアクを拔きたる上茹でゝ置き白味噌を能く擂りて裏漉に掛けこれを味醂に砂糖を加へて少々煮詰めたる鍋の中へ入れ適度の甘味として練り、青粉（藥種店にあり二錢分あれば二十人前程に用ゐらる）をば沸騰したる湯の中へ投じて堅く攪き混ぜこれを味噌の中へ入れて青色を附け置き、朝倉山椒(乾物屋にあり)をば一袋求め、丸き部を焙烙にて煎り擂鉢にて擂り潰し毛水篩にて篩ひ　たる上右の味噌の中へ入れて香ひを附け、夫より榮螺を生にて切り拔取り（榮螺は伏せて置く時は口を出すゆゑ手早く庖丁の尖にて切取るなり）水にて洗ひ適宜に切りて煮詰めたる味醂に醤油を少し加へ右の榮螺を入れざつと煮て引揚げ、これに少々煮出し汁(鰹節汁)を加へ鑵詰の筍を程よく切りたると獨活とを煮て三品味噌にて交ぜ更に丼へ盛りて食膳に供するなり

●玉子のゆでかた　玉子の半熟々々と申しますが某ドクトルの話に玉子の黄味は充分に煮ねてパサ／＼になつた方が消化よく白味は反對に和かく硬らずにある方がよいと申しますから、では別々に煎るより外に方法がないのかと思ひましたら華氏百六十度のお湯に一時間　半位入れて置きますと(常に火加減して温度に餘りの高低なき様にし)　白味は注文通半熟に黄味は充分に硬まると云ふ事ですから試めして　ましたらよく出來ました

▲二月中の野菜

京菜(上株二錢中一錢これは葛西より出る)▲細根大根(上一本一錢中七厘これは千住から出る)▲龜井戸大根(十本結び上四錢中三錢)▲みつばは千住から出ますが上一把二錢五厘中一錢七八厘もヤシみ　つばは上七厘下五厘)▲芹上八錢中六錢)▲胡瓜茄子は　珍物砂村から出ますが先胡瓜一本大十二錢小八錢茄子は(大きい處で一つ十五錢位です)▲木の芽は一袋八錢筍は上一貫目物八十錢中同六十錢　▲サヤエンドウ一貫目六十五錢これは房州三浦三崎邊から出ます　▲ツマミ菜二籠十三錢▲芽紫蘇一袋七錢人　蔘は上百本八十錢中六十錢品川在から出ます　▲午蒡は一本丸一把十五錢(上)八錢(中)新宿から出ます　▲蓮は上五本丸一把廿五錢中十八錢　▲慈姑は上一斗一圓五十錢中同一圓▲里芋は一升八錢で世多ヶ谷から出ます八ッ頭も同地出で十個廿五錢位　▲ワサビは十本大一圓十錢小八十錢位相州や横濱在より出る　▲葱は千住の大メバ一把上五十錢中三十錢

日用心得草

◉衣服取扱ひに關する便利なる法

▲衣服に油の付たるを落す法

若し衣服に油の付たる時に大根をオロシにかけて之を油の付きたる所に揉み付け置き熱湯にて洗ひ落すべし然る時は速に油を去ることを得るなり

▲衣服に澁の付きたるを落す法

衣服に澁の付きたる時には白砂糖を揉み付けて洗へば跡なく落とすことを得るなり

▲鳥もちの付きたるを落す法

衣服に鳥もちの付たる時は鰌のぬめりにて洗へば直に落つること奇妙なり

▲衣服のきばづきたるを洗はずして直す法

衣類に種々の汚點ある物を洗はずして色合に害を及ぼさゞる樣になして之を直すには大根の搾り汁を刷毛にて拂き消せば其所を直に取ることを得べし又少しの所は濡手拭にて其所を徐々に布地のいたまざる樣に拭ふべし

▲紺屋糊を用ゐずして風流模樣を隨意に染むることを得る法

此法をなさんとせば先づ絹にても木綿類にても染めんと思ふものに蠟を沸かして隨意なる下繪をかき之を染め汁の中へ入るべし其の後水にて濯げば蠟は盡く落ちて模樣風流に出來し染物屋より一層面白きものなり

◉器具に細工を施す法

▲燒物に孔をあける法

燒物などに孔をあくるには金剛砂と云ふもの（藥種屋にあり）を一摘みほど孔をあけんとする所に置きて杉の木の錐にて揉むべしひたと揉めば孔のあくものなり

▲器具を接ぐ法

破碎たる器具を接ぎて放れぬやうになすには麩を板の上に推し廣め飴色の如くにかたまりたるを粉にし貯へ置き水にて練りて接ぐべし再びはなるゝことなし

▲錫製器のくもりたるを直す法

錫器のくもりたるは砥の粉又は石灰を付けて磨くべし又木綿の布片にて磨くもよし、只新しき布片は用ゆべからず

▲青竹を白竹にする法

青竹を白竹にして花活其他竹細工に使用せんとせば自己の好む所の形に切り之を荒布と共に煮るべし　竹は直に白竹となるなり

▲塗物又は陶器の類を接ぐ法

塗物又は陶器類を接ぐにはばらやを小麥粉に加へて卵の白蛋にて練り合せて接ぐべし跡なくして永く放ることなし

◉書畫を施すに要用なる法

▲筆の永持の法

筆は使用後其儘に藏ひ置く時は毛硬ばりて直ちにわろくなるものなり故に使用後には常に鹽湯にて洗ひ所持すべし毛柔になりて蟲の生ずることなし夏は鞘をはめず冬には鞘を被ふべし

▲古紙に書く法

紙は古ければ墨付のあしきものなり若し新樣なる時には米の洗水にて墨を摺り書くべし又色紙蒔繪箔置きたるものには墨付あしゝ故に米の粉を墨にいれて書くべし

▲秘文法

人に秘して文通せんと思はゞ白紙に酒にて文字を書き乾かして後送るべし之を水中に入るれば書きたる文字悉皆あらはるゝなり此法は贈らんとする人には豫め言ひ置くべし

▲わろき墨を唐墨に似せる法

板或は紙等にわろき墨を用ゆる時は墨色あしきものなり故に惡墨にかぎらず總て墨に光澤を付けんとするには水に少許の砂糖を混じて摺り然る後に書く時は非常によき墨にて書きたる如くに光澤をなす

▲紙或は布等に書畫するに墨の散るを防ぐ法

普通にはどうさと稱して明礬と水膠とを混して水に溶かし之を紙或は布に浸し乾せば宜しきものなれども斯く手數のかゝらずして之を防ぐには大根の搾り汁にて墨を磨りて用ゆる時は墨の散る憂はなきものなり

▲誤字を拔く法

書損じたる字を拔くには燈心を沸湯に浸し搾りて誤字を擂るべし然るときは燈心に濕りありて墨を吸ひ取るなり但し濕り過ぎたるは惡し善く指にて搾り後ち施すべし

▲絹に書き損じたる時に之を消す法

絹布に書き損じたる時墨を拔かんとするには大根をわさびおろしにておろし此のおろしにて繪の上を擂るべし然る時は悉く落すことを得べし

其後に又どうさを引くべし

▲碁盤割の法

此の碁盤割の法は大なる圖を小さくするのか又は小さきものを大きくする時に見合せがたきものを容易く取る法にて先づ寫し取らんとする圖に碁の目の如く審く紙にも同じく割つて其圖の如く見合せ寫し取るなり但し其罫のす法は其時の大小によりて罫の數は同じ數になす之を碁盤割といふなり總取の時には大概此法を用ゆるなり而して總取は或は屏風の畫などを見て之れを小さく紙に引き寫すか又は小さきを見て大にする體のことなり

▲にかわ水の法

抄膠十匁明礬五匁水一升の割合にて先づ膠を水に浸し柔かになりたる時其器中に熱き湯を入て手を休めず掻き交ぜて膠のとけたる時に明礬の粉を入て掻き交ぜ冷して後に刷毛にて紙へ引くべし濕れたる紙の耳へのり付張る也

衛生顧問

質問はハガキ又は封書にて字體を明瞭に書すべし、家庭衛生、日常衛生、育兒、看護に關する事項の質問は喜んで答辨すべし。但し專門的療病に關するもの、及猥褻に渉るものは答辨を附せず。

問 生后四ヶ月になる女兒、頸内股等がタヾレて困りますが、療法を敎へて戴きたし(埼玉きぬ子)

答 石松子粉末或は枯礬末に澱粉を混じたるものを撒布し、入浴を怠らぬやうにし、浴后は必ず乾きたる手拭にて叮嚀に水分を拭き取り、殊に頸及内股等の局部は靜かに綿を濕して拭き取り、前記の粉末を撒布すればなほります。

問 そばかすを除去する藥は御座いますまいか(新潟よし子)

答 二十倍の硼酸溶液十分に安息酸丁幾一分を加へて塗布するか、或は綠石鹼又は加里石鹼を塗布しても宜うムいます。

問 前號の本誌に「タカジアスターゼ」の事が有りましたが該藥物の如き作用は、普通の酒類釀造用の麥芽若くは米麴を少々宛食用しても有りませうか、若し有りますれば、希望者の大經濟ですで、如何、御敎示を煩はします。(金澤靜枝子)

答 麥芽も、米麴も、味噌も、「タカジアスターゼ」と同じ成分を持つて居りますから、毎朝少々宛食用すれば、該藥物の如き作用は、多少有るに違ひありませんが、「タカジアスターゼ」と比べては其の量が違つて少うムますから、迚も「タカジアスターゼ」の樣な效力は得られませぬ。

問 湯屋にて入浴するものは、傳染病其他の傳染病が傳染する危險ある

由、豫防法を伺ひます。(深川杞憂女)

答 湯屋にて入浴する時は、傳染病が絶體的に傳染せぬとは申されませぬが、滅多には傳染するものではありませぬ、湯屋にて傳染病をシヨと込んだといふやうな話は未だ聞き及ひませぬ、併し必ず安心と保證する譯ではありませぬから、強いて御心配なれば、御宅で風呂を御立てになるより外は御座いますまい。

問 音聲を清らかに美しくする法を御敎示ありたし(伊豆山本かめ)

答 俗に鷄卵を吞む時は聲音を美にすると申しますけれどあまりアテに成つた話ではありませぬ、是は身體の强健を計り、咽喉頭を健全にしさへすれば、自然高らかな朗らかな美しい聲が出るやうに成ります、故に常に硼酸水等で含嗽を行つて、兼て精神を壯健ならしめ、身體諸部を强固にする法を御取りなさいまし。

問 熱湯にて火傷せし者の應急當手を敎へて戴きたい(甲州こま子)

答 熱湯で火傷した場合は、直ぐに冷水の中に入れて御冷やしなさい、若し强く水泡を生じたりとも其のうは皮を破つてはいけませぬ、泡内の水漿れ上つて疼み劇しき時は、清淨な針で、之を皆も破り中なる水を流出すやうになさい、而して火傷面は空氣に觸れないやうに包むでお置きなさい、それから橄欖油、胡麻油或はグリスリンを繃紗に浸して患部をお被ひなさい。

問 虫齒の即治療法を聞きたし(山形一恐女)

答 虫齒痛みて堪へ難き時は、揮發性の薬液即ち結晶石炭酸を少しく綿に包みて、其の穴に押込んでお置きなさい、

問 牛乳は子供に飲ますに、惡疫傳染の恐れがあると申しますが、何か牛乳の代用品とも稱する飲料を手製する事は出來ませぬか(金澤靜枝女)

答 よく乳屋を撰んで、よき牛乳を取寄せ沸器で煮立てゝ、あてがふやうにすれば、別段傳染病の、バチルスのと、いふやうな心配は厶いませぬ、何と申しましても牛乳に勝した滋養品はありませぬから、代用品の、人造品のと仰言らずに、矢張牛乳を御用ひなさるが宜しい、強いて代用品を申せば、豆乳、米乳等でありますが、牛乳と比べては、とても、とても。

問 哺乳兒より青年期に至る睡眠時間を御敎示下さい。(秋田ＳＳ)

答 哺乳兒、殆ど終日、二三歲十一時間乃至十二時間、四才以上約十一時間、七才以上約十時半、十才以上十時間、十二才以上九時間、十四才以上八時間半、十八才以上七八時間、

問 肩の疑りをなほす法を伺ひたい。(野口はま子)

答 石鹼鐵水の皮下注射が一番ださうです、けれども素人では出來ませぬから、醫者に御たのみなさい。

問 馬肉は滋養の効あるものにや。(靜陵女史)

答 馬肉は筋纖維に富み、其の滋養の價値一般の獸肉に劣りませぬ、肺病者には最も滋養の効あるさうです。

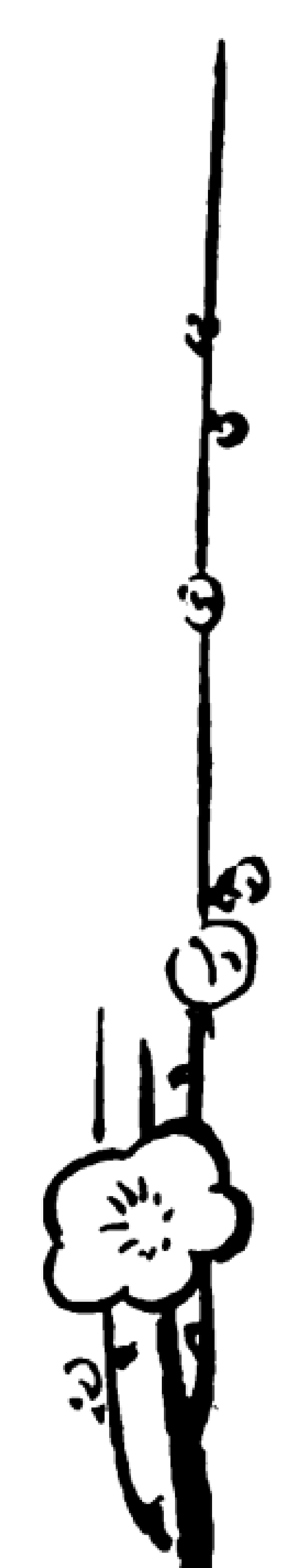
問 逆上の原因、如何其全治の法がありますか。

答 其原因たる酒類の過飲、精神の過勞、喫煙の過度、心臟病、婦人の月經閉止、其他便秘等を原因的に處置すれば全治いたしませう。

一

國母陛下の令德（承前）





女子教育

陛下が夙に女子教育を慮らせ給ふ大御心は、明治十八年十月十三日、華族女學校を設立開校せられたる御式に賜りたる、令旨にしるし。

此度新に華族女學校を設立し今日其開校の式を擧ぐつら〳〵惟ひみるに女子は婉順の德を體して善く父母舅姑に事へ又其夫人を助けて善く一家の事を理め其母たるに至りては其子を家庭の内に教育するの義務あるものなれば 其身に相應せる學識なかるべからず近來各地女學校の設あり今また特に華族の爲めに本校を新設するは皆此旨趣に基きたるものなりされば入校の女子は諸科の學術に熟達するのみならず 更に道德の源に溯り各其地位に應じて 孝順貞烈慈愛の德を修め國家教育の本旨に背かざらんことを期す又其教官は女子教育の大任を思ひ務めて教授の方法に注意し善く其學科の要領を得せしむべし 今日開校の式に臨み聊か所感を述べて前途の進歩を望む

辱くもかく懿旨を垂れ給ふ御令旨を拜して、華族の女子は勿論、天下の婦女子、如何にして此大御心に叶ひ奉つらんとするや、右の御令旨は、教育の勅語と竝べて日月の如し、萬民常に服膺すべきものなり、此時校長たりし谷子爵の祝詞、是れ亦女子教育の本旨を説きて 餘蘊なければ、左には掲げつ。恭く惟るに陰陽は天地の大道なり夫婦は人倫の大本なり 故に陰陽和せざれば寒暑時ならず五穀稔らず夫婦和せざれば家道敗れて子孫狂愚是れ自然の數なり昔人云へるあり天地の大も猶を夫婦に成すと夫婦の任亦大なり豈一は重く一は輕く一は教あり一は教なくして可ならんや本邦の女子婉麗靜淑天質美なりと雖も教育の法未だ備らず猶璞玉の磨かざるが如し之を男子の切磋琢磨に以て才智を發揮し德性を涵養せる者に比せば權衡宜きを得ず是れ大道を得大本を全ふする者と云べけんや維新以來學事日に盛に風化月に進む而して 女子教育の道亦翕然として興れり先に東京女子師範學校の設けありしより各縣相次で興る今又聖明なる 皇后宮女子教育の治道に切要なるを深く感ぜさせられ 本校の設けあり經營已に成り丘陵の如し畏くも本日を卜し臨御ありて開校の式を擧行せられ且 懿旨を賜る 嗚呼聖慮の深遠なる 聖恩の優渥なる此の如し生徒たる者益々篤實奮勵して智を磨き德を養ひ家に在つては孝子淑女と喚ばれ嫁しては貞婦良女と稱せられ家道を治めて以て兒女を教育し夫人を

助けて以て其缺陷を補はゞ乃ち陰陽兩理夫婦唱和眞に是れ文明の極君子國と云つべし畫で前途の成果を豫言して祝賀を奉る事此の如し」

これより先き、東京女子師範學校の設立あるに方り、辱くも御手許金千圓を御下賜あらせられ、尚は御詠までも賜はれり（みがかずばの御詠なり前に出づ）また近くは、三十四年、辱くも日本女子大學の設立を聞召され、御手許金二千圓を同校へ御下賜あらせられたる事は人々の記憶に新たなる所ならんかし、かくも女子教育に就ては、御心をそゝがせたまふ事並々ならず、此外難有き懿旨を拜する事しばしばなり、曾て華族女學校にて授業料引上ぐべき内議ある由を聞召し、心なき業よとて、いと難有御沙汰を下したまひき、その折の事を記せる文に「きさいのおほん宮がおんさが賢明仁慈にわたらせ給ふて女子教育の事に御心を深くとゞめさせ給ふ御事はしばしば洩れきゝてわれら臣民どもがひとしく感泣したてまつる事に侍るが此のほども華族女學校が月のものひきあぐべく議するよしほのかに聞しめさせて「こは思はざる事にも侍るかなもし學費とぼしとあらばいくばくにても手許よりぞ下しつかはすべきひきあぐるなどはあるべき事に侍らず」とのたまひ且つ同校の生徒たちが此頃服裝華美にながるゝかたむきあるは深く戒むべき事なる旨御沙汰くだし給ひにきこは月のもののみひきあげざるが上に服裝の華美をきほはゞゆたかならぬ堂上華族などの中には之にたへぬものもあるべくよしさらずとも上流のおみなが華奢をきほふは社會に害毒を流すものなりとの御心にこそおはすめれと同校つかさたちいづれも感泣して深き御おぼしめしの程を服膺し奉るとなんはぐくまるゝ幾多華たる媛たちよ朝な夕な此おふけなき御心をおのがじゝの心に畏みてかた時もな忘れたまひぞ」とあり。御仁慈の深き何物にやたとふべき。

御學問

陛下は常に女四書と曰へる書を御閲讀遊ばされ、御側に伺候する人々へ、女四書に就く〳〵の事あり杯仰せらるゝことの折々ありしを、某は當時女四書と云へる書を知らざりしを以て、所々を詮索したれども、東京の書肆に之を藏するものあるを聞かず、會々加賀の金澤に板木ありとの話を聞き、直ちに注文して漸く手に入る事を得たりと、余も亦未だ此書を閲せし事なかりし故、金澤出身の一友人に托して、其一部を得たり、由て之を一讀せしに、其女誡の如きは躬行の本あるを以て夙に記憶する所なれども、其他は初めて一見する所なり、此書は婦人たる者の金科玉條にして、就中内訓の如きは、仁孝皇后の作り給へる所にして、帝王の王妃たる者に切實なる訓戒の語多きを見れば、陛下の御熱讀あらせらる御用心の程を恐察し奉りき。

抑も陛下の御座右銘は所謂生知安行とも申し奉るべく、固より御天眞の然らしむる所なるべけれども、之に加ふるに御教育の御助けとも、なる事ありて、蓋女鑑と曰へるが如きの御座右銘となり給へる者ならん、即ち此女四書の如きも、其御教育の御助けともなりたる者の一なるべしと察し奉る、余は曾つて美術協會の副會頭として、常に同會の世話を爲し居たりしことなるが、往年美術展覽會へ行啓あらせられぬ、さて陳列品中蒔繪の書棚あり、さる富豪が巨額の金を吝まず、故柴田是眞に作らしめたる物なり、其外面は黑蒔繪にて甚だ樸素に見ゆれど、内面は全く之に反し、光華燦爛たる金蒔繪にて、楷枝に栗鼠を描きたるもの也、此の如く意匠の奇抜なるのみならず、一體の構造も雅潔なれば、陛下にも御眼な

注がせ給ひ、供本の香川皇后宮大夫をして御用品となし得べきや否やを、役員に問はしめ給ひぬ、役員は美術奨勵の難有思召なれば、同品の所有主あるに拘らず、如何にか取計ふべしと御答へ申上たるに、皇后宮大夫より、然らば左様取計ひ申すべき旨を述べられたり、時に　陛下には決して無理なる相談は致すまじとて御思留遊ばされたり。

大御歌

風光日々新

敷島やたゞしき道のはるかぜはきのふにけふと世にのどかなり

新年祝道

あらたまる年のひかりによろづたみいよ〳〵みかけ天地のみち

迎年言志

はつくにをしらししみよの歌にもたちかへりゆく年のゆたけさ

都鄙迎年

ひなみやこむかふる年ののどけきに知らず〳〵も歌ふ御代かな

新年富士山

ゆたかなる　としの光も　そへてけり　雲をときはの　ふしの芝山

松不改色

君と臣の心の色にうつさばやいつもかはらぬまつのみどりを

寄入新年祝

まつりごとおこたらぬ代と祭もとしのはつれないそぐなるらん

新年祝言

日のみはた高くかゝげて國民のあふぐやとしのひかりなるらん

園上鶴羣

いつくしみ育てる御園に住むたつはもとの雲路もおもはざるらん

竹有佳色

君が代のちぐさの操ましのくれ竹はいもとすみ同じみどりなりけり

河水久澄

あまつ日のてらさむかぎり神風やみもすそ川のすゑはにごらし

四海清

おほやしま御うつくしみのひろきよになみの千里も隣なりけり

晴天鶴

あふぎ見る朝日まばゆき大そらにたつかねたかく聞えけるかな

雪中早梅

つかさびと君をことほく大庭に雪まの梅もさきそめにけり

緑竹年久

としどしに緑そひゆくくれたけの陰こそみよのすがたなりけり

池水波靜

のどかなる年やたつらんおほ庭のみいけのきしによる波もなし

雪後松

ふる雪をしのぎてたてる松にこそ千年經ぬべきかげは見えけれ

木石契久

よろづよの巌石にこそかゝりけれながれたへせぬ宇治の川なみ

寄國祝

神代より根ざしかはらぬ米穀の國のさかえぞかぎりしられぬ

社頭祈世

神風のいせの内外のみやはしら　ゆるぎなきよを　猶いのるかな

日出山

岩戸あけしかみよおぼえて山のはをいづる朝日の影ぞまばゆき

殿上鶴

よろづ代をきみにさゝげて大庭のいは根ゆたかに鶴のあそべる

梅花先春

さしのぼる朝日のどけき大庭に春もまちあへず匂ふ梅がな

春山霞

あまつ日のひかりをうけて佐山霞のほど〱にのぼる御代かな

田家煙

われとむとみそなはすらし里遠の田づらに煙にぎはひにけり

松上鶴

さかえゆく御國の松にひなつるの千代のはじめの聲をきかばや

雪中竹

よのほどのあらしはたねてくれ竹の雪しづかにもあくる空かな

新年梅

大君の千代田の宮の梅の花ゑみほころびぬとしのはじめに

新年海

いくさ船いかりおろしてあだ浪もおとせぬ御代の年いはふらし

敬神

ひとりのみおもふ心のよしあしも照らしわくらんあめつちの神

寄露述懐

民草のうへをいかにとおもふ夜の袖にも露のこぼれけるかな

讀書言志

よるひかる玉もなにせん身を照らす書こそ人のたからなりけり

ある折

捷しとてせけば溢るゝかはづみのこゝろや民のこゝろなるらん

霜後殘菊

しもをへておほこそかをれ大君のかざしとなりししらぎくの花

こは明治十七年の冬故太政大臣岩倉公の為に追悼の歌會を紅葉館に催し霜後殘菊といふことを高崎御歌所長始め人々よみける折うち〱きこしめしてたまへりしものなり

海上春月

與謝の海あまの橋立なかたねてかすみをわたる春の夜のつき

煙草

しつのをはいまかとるらん山畑のたばこの葉いろつきにけり

寄海祝

もろこしの海もとゞろに響くなりみいくさ人のかちどきのこゑ

正心

むらきもの心にとひて恥さらば世の人ことはいかにありとも

明治廿四年の夏大和の國へ行啓ありける時畝火山なる神武天皇の御陵を拜ませ給ひて

廣前に玉ぐしとりて畝火山高き御稜威をあふぐ今日かな

同じ時吉野山に行啓ありて吉水の神社に詣でさせ後醍醐天皇の御木像を拜ませ給ひて

村雨は晴れたるけふもふりし世の宮居たづれて袖ぬらしけり

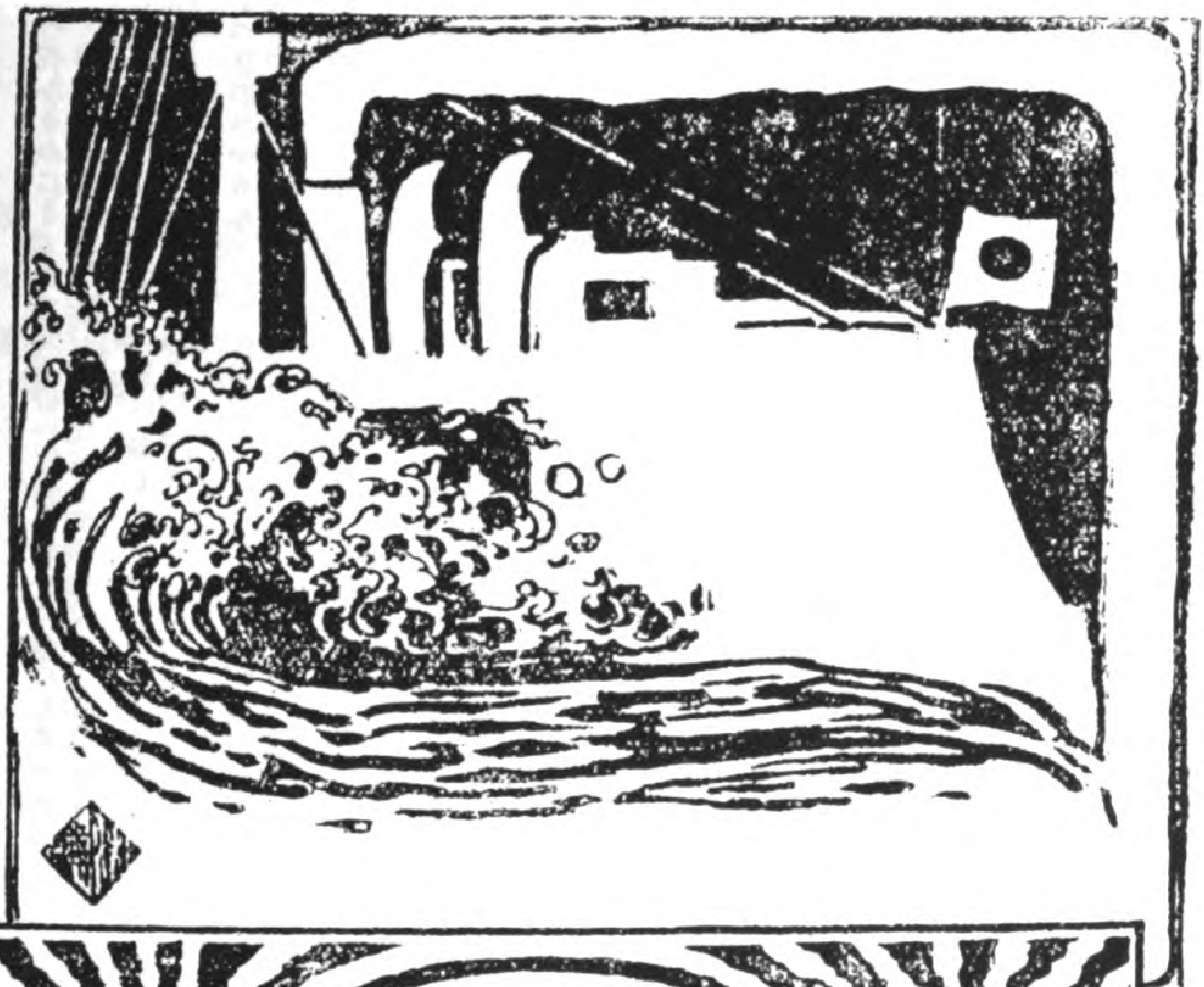
此の神社は天皇此山に潜幸し給ひし折の行宮の跡なればなり

同じ時天皇の塔の尾の御陵に詣でさせ給ひて

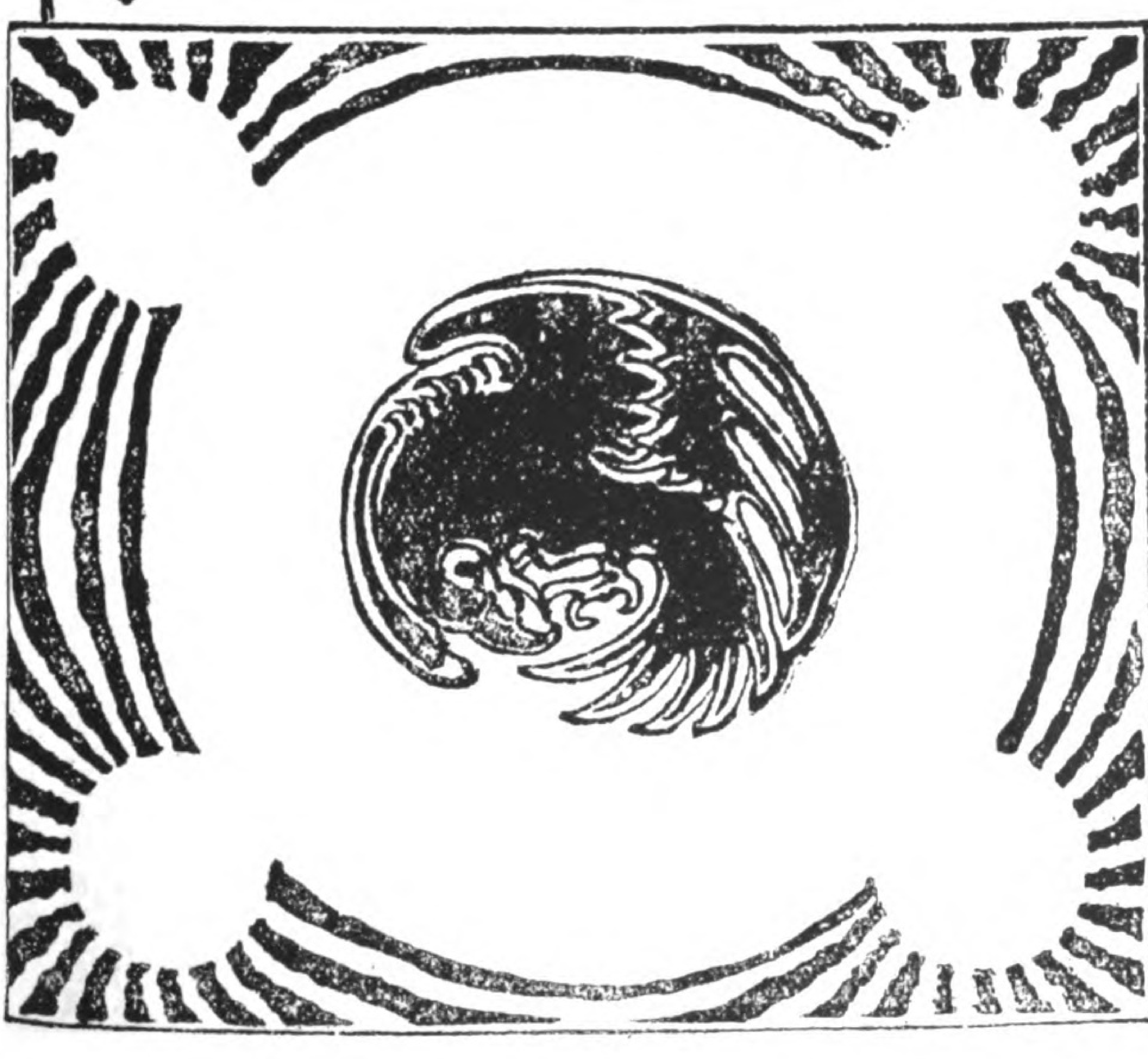
よし野山陵近くなりぬらし散りくる花もうらしめりたる

同じ行啓の時主上には御艦に召して呉佐世保の鎮守府へ行幸ましませり海上風強く霧深くして御艦進ますとの事を御途中にて聞かせて其を案じ煩はせて

日よりまつ御舟のうちやいかならん霧たちわたる荒波の上に



軍艦



日章旗畫

時局と家庭

赤十字社の準備
看護婦の義擧
コサック兵の生活
日本と露西亞(實力比較表)
出征軍人の家庭
ナイチンゲールの事蹟

大日本立憲君主國（締盟國十五ヶ國）

○全國十三師團（五十二聯隊）
●現役兵　十六萬七千六百人
●將校以上　九千三百五十人
●戰時　六十三萬二千人

○軍艦總數　八十二隻
●噸數約　二十七萬噸
●水雷艇　六十八隻
●乘組兵員　二萬三千四百人
●士官以上　千九百二人
●候補生　千八十人
●下士　六千四百三十三人

人口四千五百二十一萬七千四百人

○米穀生產額　四千六百九十萬石
●大麥　六百四十萬石
●生糸　百七十五萬貫目

○歲入　二億八千九百二十二萬圓
●歲出　二億八千百七十五萬圓

○輸出　二億五千六百三十五萬圓
●輸入　二億五千五百八十萬圓

○內國債　三億八千八百八十萬圓
●外國債　四億八千六百萬圓

師團所在地（師團長）
近衛師團（東京）＝陸軍中將男爵長谷川好道　第一師團（東京）＝陸軍中將大勳位貞愛親王
第二師團（仙臺）＝陸軍中將男爵西寬二郎　第三師團（名古屋）＝陸軍中將男爵大島義昌
第四師團（大阪）＝陸軍中將男爵小川又次　第五師團（廣島）＝陸軍中將男爵山口素臣
第六師團（熊本）＝陸軍中將大久保春野　第七師團（札幌）＝陸軍中將男爵大迫尚敏
第八師團（弘前）＝陸軍中將男爵立見尚文　第九師團（金澤）＝陸軍中將男爵大島久直
第十師團（姬路）＝陸軍中將男爵川村景明　第十一師團（丸龜）＝陸軍中將土屋光春
第十二師團（小倉）＝陸軍中將井上光

鎭守府所在地（司令長官）
橫須賀＝海軍大將男爵井上良馨　吳＝海軍中將柴山矢八
佐世保＝海軍中將鮫島員規　舞鶴＝海軍中將日高壯之丞
常備艦隊司令長官中將　東鄉平八郎

商業資本
會社數八千五百九十四　資本金八億三千萬圓
銀行數二千三百五十九　資本金三億六千百萬圓

鐵道哩數
官設線路延長千五百十八哩　私設線路延長三千七百五十五哩

船舶　九百六十九艘噸數五十七萬七千噸

都府　人口二萬以上の都會八十二

町村數　一萬四千百四十八

內閣大臣
總理大臣兼內務大臣陸軍大將桂太郎　海軍大臣山本權兵衛
陸軍大臣寺內正毅　外務大臣小村壽太郎　大藏大臣曾禰荒助
文部大臣久保田讓　遞信大臣大浦兼武　農商務大臣清浦奎吾
司法大臣波多野敬直

露西亞專制君主制

○全國九十六師團（内近衛コサック百八十二大隊コサック土民兵二十三大隊）
●現役兵　一百萬人
●將校以上　四萬二千人

○西比利亞、滿州駐屯兵約四師團半
●兵數約　五萬八千人

○軍艦總數　百三十三隻
●水雷艇　百九十三隻
●將官　七十三人
●佐官　三百五十人
●士官　千五百四十人

人口　一億四千二百萬人

○國債總計　六百五十六億萬留（ルーブル）

○經常歲入十八億八千萬留
●歲出　十八億九千七百萬留

○工業會社數　三萬一千
●一ヶ年產額　二十八億四千萬留

○輸出　六億八千萬留
●輸入　五億二千萬留

○露西亞本土耕地面積　八億二千五百萬（クエル）
●山林　五億二千萬エーケル

海軍四大艦隊
（一）バルチック海艦隊　（二）黑海艦隊　（三）裏海艦隊
（四）大平洋艦隊（東洋に於ける露西亞の海軍力其の根據地は旅順及浦潮）

陸軍省一ヶ年の經費三億二千萬留
海軍省一ヶ年經費　九千八百萬留

鐵道哩數　延長三萬六千五百哩
河川、運河延長五萬五千哩

船舶總噸數　六十二萬噸
汽船七百十艘　帆船二千三百四十二艘

行政組織　七十八府十八州
露西亞本土、波蘭、芬蘭、高加索、西比利、中央亞細亞、土其斯旦等。

都府　人口五萬以上の都會六十七
ペテルスブルグ　百三十萬人
モスコー　百萬人

內閣大臣
總理大臣兼御領地事務官　大將フリーデリツクス
司法大臣樞密顧問官　ムラビ、イヨフ。
外務大臣樞密顧問官　ラムスドルフ。
內務大臣樞密顧問官　プレーブエ。
陸軍大臣大將　クロパトキン。　海軍大臣中將　チルトツフ
文部大臣　センゲル。　農商務大臣樞密顧問官　イルモロフ。
藏相大臣樞密顧問官　キルコツフ。

日露の事局と家庭

戰爭と婦人の公共心

日露事局の低氣壓は天候頗る險惡にして、今にも大暴風雨を見んとするに至れり。若し一朝開戰とならば、日本の國家はその全力を盡して戰はざるべからず、今回の事件は日本開闢以來の大事件にして日本といへる新進の一島國を以て全世界に勇名轟き渡れる第一等の武力國たる露西亞と戰はざるべからず、五百年前の蒙古の襲來は日本に取つて大國難なりしに相違なし、又廿七八年の日淸戰役は日本に取つて大戰役なりしに相違なし、然れども、是を今回の日露事局に比すれば難易輕重の差元より同日の論にあらず、蒙古の武力恐ろしと雖も當時は今日の如く戰艦と巨砲發明なかりし時代なれば、一地方の防禦を以てよく外敵を擊退し得たり、淸國大なりと雖も老朽國の兵氣奮はず統一を欠いて遂に新銳の日本兵に敵する事能はざりし、然るに今回の相手は歐亞兩大陸に鵬翼を擴げ、世界を一呑みにせんと意氣込める。悍勇武邊の露西亞帝國にして、全國陸軍の兵數も、海軍の總噸數も日本に數倍し、國力又侮るべからず、加ふるに血に渴せる兵士の特質殘忍猛銳にして英氣當るべからざるものあり。此の勁敵を相手にして戰はんとする日本軍の覺悟は蓋し非常のものならざるべからず。軍隊の覺悟元より非常也、然かも戰爭は單に軍隊、兵士の戰爭にあらずして、國民全体の戰爭なり、啻に男子壯丁の戰爭にあらずして婦人小兒も又戰爭に對するの一大覺悟なかるべからず、而かも此戰爭一年にして局を結ぶか、二年三年乃至五年七年に亘るべきか、事局大にして日本國民全般に及ぼす影響又非常のものならん、此際に當つて婦人幷に家庭の覺悟尤も肝要なり。

出征軍隊をして士氣を激ますも婦人の覺悟にあり、兵士をして後顧の憂なからしむるも又婦人の覺悟にあり、一般婦人、別けて家庭の主宰者は此際宜しく公共に殉ずるの覺悟あらまほしけれ、而してその、覺悟といへば平素節儉を旨として餘財あれば國用の萬一に供

ふること勿論なるが、彼のボーアの婦人が、看護婦となり、軍隊の炊事方となり、後方勤務者となりて、兵士の服を縫ひ、草鞋を造り、靴下を編み、其他の食料品を調製して義捐したるが如く、専ら恤兵に務め、餘裕あれば出征軍人の留守宅を見舞、金品を贈りて寂寥を慰藉するなど尤もよき方法なるべし。

海陸軍人と家庭

時局破裂して一朝開戰ともならば、家庭といふ家庭は皆その影響を蒙むるならんが、中にも海陸軍人の家庭は最も多くこの影響を蒙るならん。苟くも身を軍籍に置くもの常にこの覺悟準備をなし置くべし、財產元より安心の手形といへども、財產よりも一層の安心は妻女の一言にあり、軍人の戰地に赴くその言辭や壯なるべし、されど其の奥底には必らず一個の秘密あらん、其の秘密とは何ぞ一家の後事なり。我れ若し戰死せば遺族たるもの如何にしてその後圖をなすべきやと、一念茲に至れば平素の鐵石心も又挫くべし。此の際に當つて「後の事は御心配に及びません、女ながらも一家の整理は屹度盡します」、との妻女の一言あらば夫婿の士氣を勵ますや又大なり、さればよろしく我夫をして後顧の憂なからしめ、戰場に臨んで花々しき働らきをなさしめんこと海陸軍人の家庭に祈る。

赤十字社の準備

日本赤十字社にては國家有事の日に際し陸海軍の病院勤務及び病傷兵の輸送勤務を補助し其他陸海軍當局者より特に委任せられたる場合には直に救護事務を執行する爲め常に戰時救護規則を設けあるが尚ほ多少の改正を加へたり

▲救護團体の編制

醫員二名、調劑員書記各一名、看護婦長(看護人長)一名、看護婦(看護人)二十名

合計二十六名を以て一箇救護班となす

▲患者輸送縱列の編制

理事醫員書記看護人長各一名、輸長看護人各三名、輸送人百二十名

合計百三十名を以て一箇患者輸送縱列と爲す

▲病院船の編制

甲種病院船は理事一名、醫員四名調劑員書記二名、調劑員補二名、看護婦長(看護人長)二名、看護婦(看護人)二十名と爲し、乙種病院船は理事一名、醫員三名內醫長書記調劑員補看護婦長(看護人長)各一名、看護婦(看護人)十名と爲す

▲患者救養所の編制

は必要に應じて患者の集合する所に設立して醫員、書記、看護婦等を以て適宜に編制する事とし材料庫は理事、調劑員各一名 書記二名と爲し目下夫々準備中なり

救護班は全國本各支部を通じて百十六救護班と內看護婦組織は全國總て二箇救護班を組織し看護人組織は東京本部に二箇、東京、北海道、京都、大阪、神奈川、兵庫、長崎、愛知、宮城、青森、石川、廣島、香川、福岡、熊本、臺灣に各一箇救護班を組織す

▲患者輸送縱列

は東京本部に三箇の組織あり病院船は甲種二艘共本部に附屬し博愛丸弘濟丸を以て之に充て乙種二艘は未定なり此の病院船には患者百名を收容し二百名を航送するの計畫なり以上は時局問題の切迫に連れ之れに應ずるに於て全く遺憾なく處理せられ居れば一令の下に直に事業を開始するを得可し命令次第先發す可き救護班は本部の五箇救護班(看護婦組織三、看護人組織二)にして其他は動員令の下りたる師團所在地の支部救護班が之れに當る筈なり、病院船に就ては目下弘濟丸は横濱より上海に向ひ航海中にして博愛丸は既に上海より横濱に歸航すべきも差當り赤十字社に於て之を引上ぐる等の事はなかるべし但し艤裝の用意は既に整へられ居り、命令次第何時にも艤裝するに差支へなく、弘濟丸理事には滋賀支部常務幹事田中亮氏、博愛丸理事には愛媛支部常務幹事吉川元雄氏內命せられたる程にて醫長其他救護團體に屬する救護員全部に對する辭令も夫々交付濟となりをれりといふ。

▲日本赤十字社の現況

最近の調査に據れば

▲救護員總數は三千〇廿四人

▲内醫長十四名▲醫員二百九十一名▲調劑員四十五名▲看護婦一千九百二十名▲看護人七百六十三名▲社員總數は八十九萬三千三百七十七名▲内名譽社員三十名▲特別社員五千二百八十七名▲正社員八十七萬七千二百四十二名



▲贊助社員一萬〇八百十八名▲年醵金二百三十六萬一千〇三十三圓三十二錢▲現在人口四千七百八十三萬八千二百四十八人に對し平均五十四人に付き一人の社員に該當す

▲赤十字篤志婦人會　同社篤志看護婦會は去十七日午後一時より本年の初會を開き閑院宮東伏見宮梨本宮各妃殿下を始め奉り會長鍋島侯爵夫人、副會長千

家男爵夫人、幹事毛利公爵母堂、花房男爵、仁禮前子爵、足立、落合、山上、清水の各夫人及び大村、山口松平三子爵毛利男爵、各夫人英人ウエスト孃等六十餘名出席し講師足立軍醫監は戰時に於ける看護者の心得と題し時節柄有益なる講述をなし午後四時半散會せり。

米國看護婦の義擧

過る歳キユーバの獨立のため米西戰爭のありし際幾多同胞の彈烟硝雨に血を流がし骨を碎くの苦痛を本國の靜けき家に在りて聞くに忍びず雄々しくも又た優しくも義心俠情の燃るが儘互に相語ふて一團となりし米國看護婦六百名あり稱して『米西戰爭看護婦協會』といひ其が會長アニラー、ニユーコムブ、マクギー夫人の下に戰地に向ひ目醒しき働きを爲せしは曾てクリミヤの戰爭に彼の有名なるフロレンス、ナイチインゲール孃の一團に劣るべくも見へざりき

然るにマクギー夫人の此の一團は日露の交渉益々困難にして戰爭の到底免るべからざるを察知するや、兼ねて日本軍隊の勇あり義あることを耳にし且つ今回の戰爭は日本が東洋の平和乃至世界の平和のため起つべきことをも覺れるものから、愈よ日露の開戰とならば是非共日本軍隊の創兵病卒のため親切なる看護の勞を取らんと決心し此の程華盛頓駐剳本邦公使高平小五郎氏に一通の書狀を送りて赤誠を披瀝せしが其の要に云ふ

妾等六百名より成る此の看護婦の團體は團員皆な米國婦等の看護婦學校を卒業せしものにして實地練習のため各々滿三ヶ年宛病院に生活しつゝ看護事業に從事せしものに御座候而して其の練習の結果は彼の米西戰爭、比律賓征服及び北清事變に於て充分に効果を示めし候ものなるにより兼てより戰場の生活と軍隊の規律とは慣れ居り候云々

此の最も好意ある書狀に對し高平公使は痛く感激しつゝ答書を載せたるが其要に云ふ

疑も無く我が日本政府は深く貴女等の從事を承認し且つ此の義擧を捧げんとする貴女等に對して感謝するところなるべく候得ども予は其の貴女等の義擧を受納すべき機會の發生すべきや否なやを疑ふものに御座候然かも之と同時に予が貴女等に對して明言し能ふは貴女等看護婦團體の氣高き行爲を犧牲たらしむる米國婦人の友誼と同情とは遍く日本に於て熱心に承認さるべきことに御座候予は數言し

て之を我が政府に報告可致候云々

此の事の直に英國倫敦に傳へらるゝや到る處米國夫人の義擧を稱賛して喧傳せざるなく殊に同地の日本婦人は本邦公使林董子夫人操子、エトウヰン、アーノルド夫人玉子を始めとし多くの人々日本公使館に集會を催し大にマクギー夫人以下六百名の米國貴婦人の義擧を稱賛し是れ實に洋の東西を一抱して人情の美帶が好意と愛情とを以て全世界を擁し得べき貴き證例なれば姉妹的愛情と女性的同情の表彰たる感謝として紀念品を贈るべく決定せりと云ふ

浦鹽の日本人

時局切迫のため各國在留民の本國に歸るもの尠からざるも獨り我在留民のみは例年結氷期間の便船たる東淸鐵道および義勇艦隊の汽船が共に航路を變更し郵便物すら滿洲を經由するの已むを得ざる場合なれば、老幼婦女を携帶せるものゝ心痛一方ならず、日々鶴首して日本の便船を待ちをるも、日々の電報は警報を齎すのみにして船は待つに甲斐なければ、互に前途を案じつつあるに、一方露人は日々益々暴行を逞うするより、居留民一般に動搖を極め、貿易事務官に向て歸國の便宜を講ぜよと迫るものあり、協同して日本より船を借入る協議をなすものあり、先日出港の英國石炭船が門司に寄港すべしとの報傳はるや我先きに乘船を申込みたるも船長は船体の構造不完全にして乘船危險なりとて謝絶したれば、一同呆然たる態實に氣の毒なり、然し貨物の輸送丈は承諾せし由なれば家財を送り返すもの多かるべし、最近の調査によれば西比利亞內地より北滿洲における我在留民は五千を下らざる由なれば、我國當局者も是等在留民のために顧みる所なかるべからず、昨年十月滿洲第三期撤兵期當時在留民が一時騷立ち何れも歸國せんと準備せし際には小村外相は特に川上貿易事務官をして諭達を發せしめ歸國を見合しめたるより考ふるも無論開戰に先だちて何等注意を加へ相應の便宜を與ふるは疑はざれども、當地附近はともかく西比利亞內地、巴府、武府地方のものは此嚴寒中

には當地へ來るには一週乃至二週の時日を要するとなれば、若し時機を失するに至らば數千の同胞は空しく西比利亞の土と化するに至るべし。

▲浦塩の情況

其後は露國艦隊の活動を見ず陸兵も亦到着せざれども過日英國石炭船マリスタアーフ號の入港後今日迄引續き五艘の石炭船入港し何れも石炭の陸揚を急ぎつゝありと

露國の義勇艦隊汽船は兵器の陸上げに忙はしき模樣なるが近日フカザック騎兵一箇中隊當地に到着すべしとの説あり現今當地の駐兵は要塞砲兵一箇聯隊、狙擊步兵一箇旅團、工兵一箇中隊のみにして騎兵は皆無なれば右の風説は或は事實ならんかと

滿洲にては昨今支那人の露人に對する擧動遽かに一變し從來服從せし樣に見えたる勞働者に至る迄も何事によらず反抗の態度を顯し露人は勞働者の使役甚だ困難しをる由なるが之れに反して日本人と見れば馳せて周圍に群がり直ちに日露の開戰談を持出し開戰となれば我は電信を切斷すべし我は鐵道を破壞すべし我は露の警部巡査を狙擊せんなど〻談するよしなるが露人は是等の狀態を見て甚はだ恐怖の念を抱き鐵道、電信の守備上に大に警戒を加へをれりと

當地にては過日來露國御用商人は防寒具、靴、毛皮類の買收をせなしが昨今にては支那商店より多數の支那服、靴、帽子等支那服の附屬品を買收せり支那商人は支那服三千五百着を賣渡せしも尚一千着の取揃を依賴し同時に朝鮮服地白金巾も數千反を買收し悉く朝鮮服に仕立てさせをれり價額は凡て平日の倍以上なりき

昨今一般外國人に對しては最も警戒を加へ軍港内の氷上も外國人の通行を禁じたり其禁に觸れ四五日前當港海軍鎭守府の仕事に從事せる日本人大工三名は仕事場より歸途氷上を通行せしに船渠を窺ひたりとの嫌疑にて拘引され目下拘留中なりと

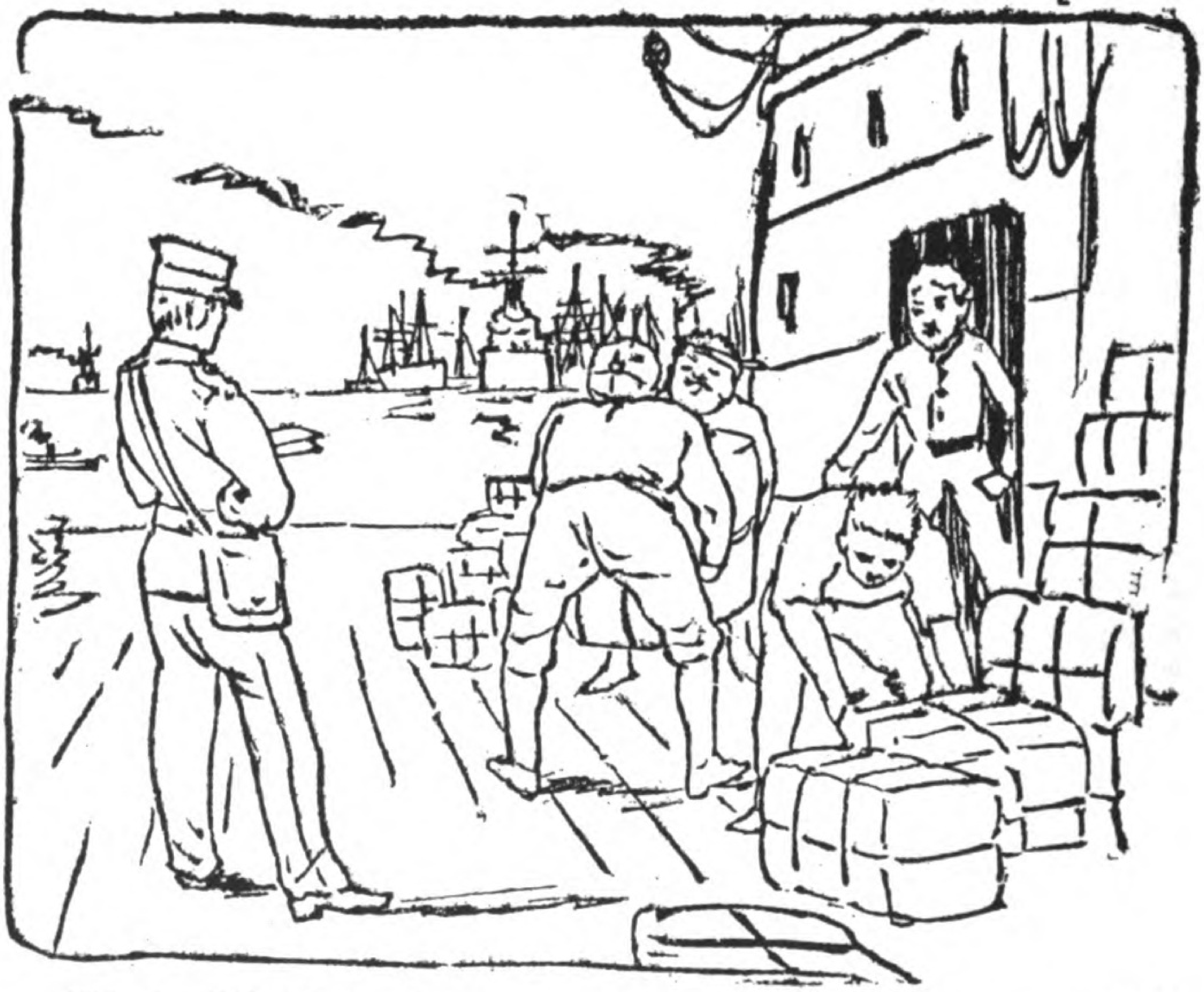
▲寒氣と船渠の閉鎖

目下同港の寒氣は零度以下九度にして海面は厚一呎以上に達し船渠の如き雄大なるもの一あり又浮船渠一あ

るも孰れも内外共に堅氷に閉鎖されて其用をなさず頗る迷惑の状况を見たり尤も海上の氷は何時にても破壊さるゝことを得る由にてリウヲツク號出港の際は六百噸と二百五十噸位の二隻破氷船來りて雜作なく航路を割り切り其音は當時碇泊中の立山丸及び瓊浦丸の棧橋横着に響きて凄まじかりきと

▲立退命令を待つ

日露開戰説は昨年四月以來のことにて同港民に於ては聞き飽き居り今回も又昨年來の風聲鶴唳かと一時は馬耳東風に聴き流し居たりし



が昨今日本よりの警報は稍耳を傾くるの價値あるのみならず露人の態度変戰的の觀あるに至りたれば三千餘の居留民は始めて覺知したるもの丶如く一に貿易事務官より何日何時までに立退け或は勝手に滯在せよとの命を待ちつゝあれど目下は敦賀にも元山にも殆んど航海杜絶なるを以て一朝開戰を布告せば敵地の西比利亞を通過して滿洲に出で山海關より秦皇島に出づるの外なしと一同憂慮し居れりと

▲旅順口の情况

此程旅順より歸りし人の語る所に依れば同港碇泊中の露艦は何れも既に艦體を塗替へ戰闘準備を整へたり、艦上の木造部は悉く撤去し又水上裝置の水雷發射管は凡て閉鎖して水雷を陸揚げせり、港口の警戒嚴重なるは勿論巡洋艦及び驅逐艦交代して晝夜港外を巡邏せり約一箇大隊の狙擊歩兵は韓國へ分遣せらるべき筈にて準備中なりき、總督府は非常の繁忙にてアレキシーフ總督は先月初め以來殆んど睡眠せざる程なりしも市中は格別騷がしからず唯本邦人は青泥窪在留者に至るまで既に概ね引揚げ醜業者以外の在留者殆んど皆無となれり清國勞働者の引揚多く爲めに船渠其他の工事に差支へ兵士を人夫に代用するに至れりと。

▲ダルニーの在留邦人

同地方に在留せる日本人は日露開戰の曉には如何なる方法にて救護さるべきやに就て同地の日本人總代は其管轄の權を握れる牛莊領事に達せる所ありしも確答を得ざりしかば總代は已むを得ず當地駐在水野領事に謀りしも同領事は、自分の管轄外の土地なるを以て公言することは得ざれども萬一の事あらば十分の力を盡すべき旨を告げ、尚ほ同地方に在る露人も上等社會の人は事件に通じ居れるを以て之に謀りては如何との事を述べられ同總代も旅順に歸り、民政廳に之を謀る筈なりと。いづれにしても心細き次第なり

義勇奉公人名
（軍資献納者）

時局切迫と共に各地軍資の献納を申出るもの少からざるが記臆に存するものゝ内百圓以上の分を擧ぐれば左の如し

一金一萬圓（外に軍事公債五萬圓應募申込）　横濱　安部幸兵衛
一金五百圓　相州鎌倉郡中和田村　美濃口源左衛門
一金五百圓　同　宮崎勘左衛門
一金千圓（別に軍事公債五千圓）　同　坪井伴之助
一剩餘金全部　名古屋　經濟會
一金五百圓　佐世保　平鍛治幸吉
一金若干　瑞典人　ウヰルソン
一金若干　清國人　鄭仁田
一金三千六百九十七圓　十六日調京都市役所取扱高
一金一千圓　津　富田金藏
一金五十圓　右店員一同
一金二千圓　函館　勝田[illegible]吉
一金五百圓　同　若山富次郎
一金二百圓　同　松實理三郎
一金百圓　伊勢　織物同業組合
一金五百圓　高崎　山崎宗平
一金五百圓　大垣町　川村長四郎

一金百圓　神戸　崎田慶治
一金百圓　同　井上保藏
一金千圓　大阪　山本保次郎
一金二百圓　同　岡島千代造
一金二百圓　同　岡島九一郎
一金二百圓　同　杉野民之助
一金百圓　同　天川佐兵衛
一金百圓　同　妻　藤枝
一金百圓　同　高田宗五郎
一金五千圓　滋賀縣神崎郡南五箇莊村大字金堂　從六位外村宇兵衛
金毎月二十圓宛（一月以後戰爭終局迄）　森下佐野右衛門
一金二百圓　同　高宮虎之助
一金百圓　同　濱生伊八郎
一金百圓　同　古賀興助
一金百圓　同　小川仁兵衛
一金百圓　大阪堂島米穀取引所仲買人代理人一同
一金百圓　同　上田市松
一金百圓　同　木林平三郎
一金百圓　同　宮川ふつ
一金百圓（向十箇月賦）　同　山崎嘉吉
一金百圓　同　田畑庄三郎
一金百圓　同　和田卯兵衛
一金百圓　同　豐岡新吉
一金五千圓　大阪株式取引所仲買人
一金三千圓　大阪堂島米穀取引所仲買人
一金千圓　同　澁谷史春
一金九百圓　同　山中吉郎兵衛
一金三百圓　同　紅谷卯兵衛
一金百圓　同　船井長四郎
一金百圓　同　山崎猶三郎

一金百圓　同　上田勝次郎
一金百圓　同　財津龜三郎
一金百圓　同　柳本善兵衛
一金百圓　同　村田菊次郎
一金千圓　同　三木佐助
一金千圓　同　加納銕三郎
一金二百圓　大阪堂島米穀取引所仲買代理人光吉佐七外七十二名
一金二百圓　同　山縣正雄
一金百圓　同　島佐兵衛
一金百圓　同　新友會
一金百圓　同　井上嘉兵衛
一金百圓　同　樋口篤三
一金百圓　同　金光教東網教會所
一金百圓　同　中川武之助
一金百圓　同　井上保藏
一金百圓　同　木村卯兵衛
一金百圓　同　藤井芳太郎
一金百圓　同　奥田梅尾
一軍事公債額面百圓　同　井川源一郎
一金百圓　同　郡山庄吉
一金百圓　同　中村龜太郎
一金百圓　同　柴田慶治
一金五百五圓　明月樓主人及仲居一同
一金百六十五圓五十錢　小西爲兵衛一家族
一金百圓　同　兒島嘉助
一金百圓　同　井川源一郎
一金百圓　同　龜井銀太郎
一金百圓　關西寫眞版株式會社及雇人一同
一金千五百圓　京都米穀商品取引所仲買人一同
一金千圓　大阪　八木龜松
（外に開戰の場合には三十八年より平和克復迄毎年金五百圓宛献納）

時局彙報

▲國民の意氣　對露開戰愈よ急を告げて、日本の武威を發揚せんとする時に到りしより我が四千萬の同胞は腕を扼して、局面の開展を待ち構へつゝあると同時に、此際當局者をして軍資缺乏に關し顧慮せしむ可からずとて各地方の有志者より其筋へ軍資獻納を出願するもの續々として現はれ、軍用品其他軍人の必要品は定價の半額にて納附せんと計畫するもの尠からず又軍人軍屬に對して關係相倚り相當の歡待法を設け志氣鼓舞に盡力するの有志者もありて今や同胞の意氣大に昂れり、頼母しき國民なる哉、此の國民あり、强敵といへど恐るゝに足らず。

▲對馬島民の敵愾心　數百年來屢々外寇の歷史を有せる對馬島民は開戰の噂若し露人の侵來するあらば全島擧つて國に殉するの覺悟を以て村々郷々相約し豫め其準備として已に男女を問はず一人每に何等かの武器を用意し居り中には白刃を覺悟せる若者もあり、壯丁は男女を問はず、一身を獻げて國難に殉ぜんと決意し、開戰と同時には老幼婦女をして門司、下關、博多等へ避難せしむる手筈まで整ひ居るやに聞く。

▲艦上の撮影　今や我帝國軍艦の精鋭佐世保に集まり居れば同港の賑ひ一入にて鎮守府設置以來今日の如きはあらず左れば之を當込みて地方より同港へ入込む者數多く不景氣とは何處を吹く風かと云ふ有樣なるが別して多忙を極め居るは同港の寫眞師にて此頃各艦に於ては何れも艦内にて撮影する事を許されたるより乘組の將校は言ふに及ばず兵曹水兵に至るまで寫眞師を招き艦内生活の有樣を故郷の父母妻子に送らんと或は砲側に立ち或は銃器を操る姿を撮るもの引きも切らざるより同港の寫眞師は朝から晩まで寸暇なき由一朝事勃すれば鯨波を蹴つて敵地に向はんとするの時に當り、紀念の寫眞を撮して、郷土に思ひを遺さゞらんとす。猛く優しき心ばゑなる哉。

▲黒海艦隊の勢力　露國は其の黒海艦隊を東洋へ増派せんと稱けるも同艦隊は、一萬噸以上の戰鬪艦三隻、一萬一千噸の巡洋艦二隻、八千噸以上の裝甲巡洋艦四隻、一千噸内外の砲艦七隻、驅逐艦十隻より成立し、本來黒海内に潛みてセバストポールを守禦する事務のものなれば、其の構造遠洋の航行に堪へず、即ち列國の故障を切抜けてダルダネルスを通過し得とも、東洋まで廻航する丈けの石炭を搭載する力なく、其れも兎に角都合して東洋迄來るとするも、別に根據地なも有せざれば到底軍艦の用には立つべくもあらず、露國が之を要するは例の恫喝手段にして、その淺薄さ加減、見ゑ透きて嗤々し。

▲時局と師範學校　滋賀縣師範學校にては日露交渉開始以來修身に地理に歷史に時間を利用し或は新聞雜誌を利用して時局の推移を説明するに勉めたりしが目下の事態に鑑み一層詳しく交渉の顛末彼我の爭點同盟國の友誼及び列國の我に寄する同情又は國際と個人交際との關係等の沿革を明かにして愛國心の發揮を圖り猶ほ近日中村聯隊長及其他の將校を聘して戰爭に關する講話を乞ふといふ何處の學校も多少此種の用意ありたし。

▲紙製の軍用釜　戰時に供する軍用釜に就ては從來大に困難を感ずる處あり夙に之が改良を圖れるも適當なる方法なく獨逸の如きは偶數釜とて兵士二人共同にて金屬製の釜を使用し居るも携帶に不便にして陸軍用として未だ完全なるものといふを得ざりしが京都大學醫院藥局主任擅上榮太郎氏は日清戰役の際威海衛に在勤し種々工夫を凝し一の紙製釜を發明し某師團長の實驗に供し其後更に改良を加へ此度陸軍省に右軍用釜採用の事を申請せし由該紙製釜は伸縮自在にして兵士の携帶上至て便利なりと。

▲戰爭と博覽會　日露兩國の開戰は、殆ど

避く可からざるの有様となりたるが、博覧會に於ける交戦國の利益は至大なるものにて、巴里博覧會の時の如き、北清に於ける日本軍の聲譽の内地に傳はるや、日本出品館を初め賣店喫茶店等俄に繁昌を來したる實例あり本年聖路易の博覧會開期中は、正に日露交戦の最中なるべけれど、一擧露國をして屈伏せしめ、世界に於ける戦勝國の名聲を博するに至らば、我國の出品が如何に同地に於て歡迎せらるべきやは、今日より想像の外にあるべく、出品の實行等も亦巴里博覧會の比にあらざるべければ、此機を逸せず商工業者は大に奮發せざるべからず云々と某當事者は語りたる由、去るにても不思議なるは萬國博覧會と戦争との關係にして、去三十三年巴里博覧會の開會あるや、英杜戦争あり、北清之變あり、本年又た聖路易博覧會の開會に際し、日露の開戦問題あるを思へば、博覧會と戦争との間には何等かの因縁あるにや。

▲軍人軍屬の生命保險　客臘以來軍人軍屬にして生命保險の契約を申込むもの非常に増加し殊に佐世保地方に於ける海軍々人最も多數を占め其金額も五六千圓乃至一萬圓に達するものあり各生命保險會社とも相當の割増を附しこれが契約に應じ居る由にて割増率は各社とも同じからず各人の官職に依て區別するものあり一般を通じて平等にするものあるが概して一割乃至一割五位割増の程度にありと。

▲軍用輕氣球　軍用輕氣球は文明國軍隊にて使用せるものにして野戰部隊にては野戰砲兵聯隊に附屬せしめ射撃の効果其他通信の用に供す殊に間接射撃に於ける彈着の狀況等を知るには欠くべからざるものなり又た要塞砲兵聯隊にても通信用として使用せり我陸軍にては未だ輕氣球隊の編成なけれど、早晩之を設くることゝなるべし。

▲菊地中尉の奮勵　南朝の忠臣として本邦史上に特筆されたる菊地武時の末孫、現貴族院議員男爵菊地武臣氏の一子武夫子には夙に士官學校を卒業し目下陸軍中尉の職に在りながらも父男爵が種々の事業に失敗を重ね、去歳の夏生國肥後に退引するの巳むなきに至りしかば、武夫氏には之が爲め頻りに心を苦しめしも別に分別の附け樣なく只此上は勉強して一身を大君に捧げ祖先の勳業を繼がんものと此頃は牛込の片ほとりに寂しき自炊の煙を上げ陸軍大學に通ひつゝ朝は疾く起き夜は晩く寢れ勤學暫しの油斷なくいざ日露開戦ともならば第一番に馳せ參じて尊氏とも思ふ露西亞の奴輩打平げ祖先に耻ぢぬ功名せんと近頃一層の勉強なりとは華族の若殿原には珍らしき好丈夫！祖先も地下に喜び居らるゝなるべし。

集會雜聞

●動物虐待防止會新年發會　客月十五日神田一ッ橋外學士會事務所に於て開會せし動物虐待防止會例會の來會者は清水彥五郎、澤柳政太郎、鈴木券太郎、高島平三郎、廣井辰太郎、櫻井美榮等の諸氏四十餘名にして席上鈴木券太郎氏は時事新報社に依て救はれたる麴町福井市太郎虐待事件の梗概より近年我邦の家庭、遊廓、工場、興行場、商家等に行はるゝ兒童虐待の事實を引き英米諸國の例に倣ひ我邦にも兒童虐待防止會設立の必要なる所以を述べ會員の贊成を得て、近々これが設立に着手する由なるが猶ほ同會にては今回動物に關する懸賞文題二つを出し一は高等科兒童(文題、人と動物)一は尋常科兒童(子供ととんぼ)に作らしむるを期し賞を十等に分ち當撰の分は總て同會機關雜誌「あはれみ」に揭載すべしと。

●修身教會設立の計畫　哲學館主文學博士井上圓了氏は歐米に於ける學校外の道德教化盛なるを見て、學校卒業以後の諸學生を導くべき特種の設備の必要なることを認め今回修身教會なるものを設立せんことを企て其方法として

先づ適當の場所に修身教會堂を設け、忠孝を本とし百般の職業に必要なる道德を訓諭し、進んで各家庭の風儀社會の習慣をも一新するの目的なりと。

●奥原晴翠女史の試筆會　女畫家奥原晴翠女史には久しく新潟縣佐渡にありて頻りに揮毫中なりしが同地方古跡の探勝を終へて舊臘歸京したるに付去月十四日を以て本郷湯島の麒岐坂館に試筆會を開きたり同日は美術家大熊氏廣、坪井晋、小林鐵畝等諸氏幹事となり男女門生來賓等五十餘名に及び橋谷、東畝、白氏、晴好、桃山の諸畫家席上揮毫を勤め餘興に福引、薩摩琵琶等あり晴翠女史外門生揮毫の展覽品を福引に出して頗る盛會なりし。

●吃音學生特別傳習會　伊澤修二氏には先頃酒匂村に於て吃音學生特別傳習會なるものを開かれしが帝國大學の學生を始め早稻田大學慶應義塾高等學校醫學專門學校商業學校陸軍幼年學校公私立中學校等の生徒及び諸學校教員等合せて三十名内外來會し其成績一般に頗好にして僅に二三名を除くの外皆殆ど全治の効果を得たりと云ふ、因に云ふ、氏の吃音矯正法は從來歐米諸國に行はるゝものと異なり一種新奇の方法なれば同氏は曾冬中視話法音字に依りて其解說を作り之を當時アレキサンドル、グラハム、ベル氏に寄せ世界何れの國にか之に類せる方法を採用せし者ありや否やを問ひ試みしに此程在米國華盛頓府ヴヲルタ局總監ヒッツ氏の手を經て返翰を送り斯る矯正法は歐米の學者も未だ曾て聞知せざる所にして全く伊澤氏創見の新法なるべしとて其原稿を同局の文書に登錄せしことを通告し來れりと。

●義勇奉公會　今回の日露問題に就て一の有志會を組織せんとて内貴市長以下重なる有志者會合し發起人を選定し其上更に發起人會を開き會名其他萬端の事を定むる豫定なりと云へるが内貴市長の意見にては會名は義勇奉公會と稱し事業は軍資金獻金勸誘の事、軍事公債の發行せらるゝ時は之が募集に盡力する事、出兵軍人家族幷に戰死者遺族扶助の事、赤十字社支部と氣脈を通じて出征軍人の便宜を計る事、慰問使派遣の事、場合に依りては義勇團を組織し國防に盡力する事、軍夫募集に盡力する事等なる由發起人も五十名以上とせん計畫なりといふ。

●篤志看護婦人會京都支會　赤十字社篤志看護婦人會京都支會本年の初會は一月九日午後一時より京都支部内に於て開會村田會長大森副會長大森支部長西澤副長臨席中村事務幹事前年中の收支決算を報告し了りて大森支長の訓示、講師竹林軍醫正の講話あり出席者百五十有餘名にして散會せしは三時三十分なりしと。

●愛國婦人會の檄文　軍人遺族の慰安癈兵院の設置等に關する事業に急速着手する決議を爲し其第一着步として去廿六日總裁閑院の宮妃殿下の御諭旨と共に一編の檄文を發表し全國各會員に頒ちたり其全文左の如し

日本全國の姉妹達に急告す

刻下の時局に鑑み、緊急に、我國二千五百万の姉妹達に申す、我等大和民族は何ぞ其れ多幸なる、稜威天日と倶に輝ける　天皇の御國に生れ、國光宇内に宣揚せる明治の聖代に遇ふ、此多幸なる國民にして一旦緩急あるに當らば、爭でか祖先の遺風を顯彰し忠愛義勇の丹心を發揮して　遐なる聖恩に報ひ奉らでやはあるべき、夫れ惟みるに國は舟の如く國民は舟子の如し、舟子努めざれば舟を行るを得ず、國民勵まざれば國を守るを得ず、況や風浪澎湃の海を航し國難喫緊の時局に際してをや、今や將に開國以來未曾有の事あらんとす、須らく擧國一致の力を以て、皇運を扶翼すべきを要す、即ち男子たると女子たるとを問はず、各其本分に任じて牢乎たる覺悟を定め、男子は背血を灑ぎて、其衝に當るべく、女子は衝に當る者の後顧の憂を慰めて士氣の振興に力むべきの秋なり

我愛國婦人會は軍人の遺族及び癈兵を救護するを趣旨にして女子が直接邦家に對する奉公の本分を完うせんために組織せる所、而して刻下の形勢に當ては大に活動を促さる、嗚呼二千五百萬の姉妹達冀くは奮つて我會に力を戮せ多幸なる日本女子の本分を竭し給へかし、若し夫れ舟子の操縱然からんか、船は風浪を凌ぐを得ず、恐れて慴れざるべけんや、希みて白す

愛國婦人會員

公爵夫人　岩倉久子
公爵夫人　島津田鶴子
侯爵夫人　大山捨松子
子爵夫人　谷玖滿子
男爵夫人　清浦錬子
公爵夫人　德川泰子
前公爵夫人　毛利安子
侯爵夫人　鍋島榮子
子爵夫人　伊東美律子
男爵夫人　千家俊子

軍陣看護婦ナイチンゲール

妙齢婦人の身を以て千軍萬馬の間に奔走し、數千の病傷者を救護して、世界に其の名を轟かしたるフロレンス、ナイチンゲール孃は、眞に戰陣看護婦たるの模範を垂れたるものと謂ふべし今や對露問題日に切迫し、彈丸硝藥を以て相見えんとする時に際す、我れ彼れと一度砲火を開かんか、日本男兒の勇猛なる、能く北方の强を粉碎せんこと、期して待つべきなり、此の時に當り、特志看護婦を志願して戰地に出張せんと欲する婦人も亦た多かるべし、而して彼等は能く日本女子の特質を發揮して、男兒の武功を助けんことは言ふまでも無けれど、猶一層其の奮勵を促さゞる可からざるものあるにより、茲に赤十字社の開祖ナイチンゲール孃の事歷を紹介して、好箇の龜鑑となすになん

▲孃の青春時

孃は今を去ること、八十九年前西暦千八百二十年の夏伊太利フロレンス府に產れぬ、孃の父は英國の豪農にして維廉ナイチンゲールと呼ばれ、母は同じくスミスと云ひ、其の鄕土にて有名なる慈善家なりし、孃は其二女にして、幼より心ざま優しく其の姿も雅やかにして、加ふるに其の父は國會議員に撰まれし程なるを以て、生活上何不足なく、いとも裕かなる家庭に人となりしかば、世の常の婦人なりせば、衣服髮飾り身邊何かに付けて、浮身を窶し、其の一生を華車風流に送り得べかりし身なるべきも、孃は若き時より父母の資性を承けつぎて、慈善忍辱の心厚く、世の貧しき人、幸なき人、若くは病める人達に、深き同情を寄せ、己が小遣錢を節約してまでも、困難の人に金錢を與ふるを、こよなき樂みとはしたり。

孃は其の靑春時代を英國デボンシャイア州カルストと呼ばれたる風光明媚の土地に過されしが、未だ世ごもれる十四五の頃迄は專ら家に在て父より高等の教育を授かり居たり、後佛蘭西に遊び、伊太利に旅行し、獨逸聯邦の各州を限なく遍歷して、到る所の貧民、病者、困窮人等を助け劬はりしかば、孃の美名は此時早

く遠き外國にまでも響き渡れり、されば倫敦に遊びし時なぞも、ハイド、パークの公園其外の遊園場へ歩を運ぶ代りに、先づ市中の數ある病院、救貧院、孤兒院などに赴き、只管力を慈惠の事業にのみ盡瘁したりけり、程なく孃は其の生涯を看護婦に托して一生を送らんとの念を起し、日耳曼萊因河畔なるラスドルフに近きルーテン病院附屬の看護婦養成所に入校することゝはなれり。

かくて學窓に在ること二年、孃は專ら實驗看護の練習に心を委ねたりしが、十八才の時、首尾克く同校を卒業して、一時カルストの我家に歸りける、折しも倫敦のパーレー街なる看護婦學校、其の資金に乏しくして維持し難しと聞くものから、孃は我身の上に思ひ比べて、急ぎ都に上り、躬ら家產の半を傾け、莫大なる維持費を支出し以て其の再興を計り、茲に再び盛大なる學校を見るに至れり、是れ實に旺盛なる公共心の結果に外なかるべきも妙齡一女子の擧動としては頗稀なることゝ謂ふべし。

抑も世人をして、不朽なる孃の生命を歌はしむるに至りしクリミヤの戰爭は正に此際に起りし出來事なりき。

▲戰地に於ける女史の働き

抑も此のクリミヤ戰爭の原因は、一時東歐に覇を稱せし土耳其帝國が巴爾幹半島の諸國に威を振ひしより露西亞と衝突を惹き起し、爲に一大戰鬪の開始を見るに至りしが、英佛兩國は利害の關係より此の戰鬪に干涉を試み、土耳其を援けて露國と對抗し遂に近代未曾有の一大戰爭とは成れり。

時しもクリミヤに於ける英國の軍隊は遠く黑海々岸へ輸送せられたるが、出師を急ぎし爲め、兵站其他の準備頗る不完全なるが上、戰地は時恰も嚴冬に當り朔風颼々として、寒威面を裂き、加ふるに附近は人烟稀にして宿泊すべき人戶とてなく、其の爲め無慮五萬の將卒は、殆んど凍死せん許の慘狀に陷りたり、然も嚴冬數月の間、陣中に此の困難を繼續せしものから、翌

年の晩春より初夏にかけて猛性なる悪疫流行し、病に罹つて死殁するもの二萬餘人の多きに及び、死尸累々として空しく曠野に曝露さるゝの慘境を呈したり、斯る程に英本國の士女等は此の悲報に接して驚き哀しむこと大方ならず、我同胞を無殘〳〵異境の骨となすの慘境を坐視するに忍びずとなし、國民擧て我も我もと財布の底を拂ひて、義捐する者踵を接したりしかば其金額一週間を出でずして、十五萬弗の巨額に達したり、かくて此恤兵金は衣服糧食は勿論、醫藥其他の必要品に代へ、直ちにクリミヤ指して輸送したり、さりながら父母兄妹に別れ、妻子の恩愛を斷ちて知らぬ他境に遠征し、病魔に惱まされてある、我が兵士等は、今如何なる人の看護を受けつゝある哉。幸ひに大方有志のなさけを以て藥餌にこそ事欠かぬやうには成りしものゝ、自己を看護し具るゝ人なかりしならんには、奈何許不便不自由を感ずる事ならん、彼等の多くは病床に在て起居自由ならず、寢返りすることも六ケ敷からんに、僅少ばかりの看護人にては、定めし行屆かぬ勝にてやあらん、思へば千里懸隔の土地、心細き限りなりかし、夫れ病兵看護の事たるや、荒くれたる男子の手よりし優しき女子の方遙に多くの慰藉を與ふべければ戰地には是非共女子の看護人を送れよといふ聲、一般の輿論となれり、乍去、砲煙彈雨の地に於ては倔強の男子さへも堪へ難く思ふ程なるに、況して纖弱なる女の、いかで、能く其の任務に堪え得べきと駭するものあり、爲めに陸軍省にては種々焦慮したりしが、ナイチンゲール孃此事を聞き、我が天職を盡すは此時なりと、同胞を愛する熱情一時に燃えて遂に從軍の決心をなし、直ちに陸軍大臣に向つて、戰地看護の大任に當り身命を捧げて傷病兵の看護に盡すべき旨を申出でたり、茲に於て孃は自ら選拔したる三十四名の看護婦を率ひ、クリミヤに向ひ出張し、マルセーユより船に搭じて、黑海の岸に辿り着きたるは恰も窮冬十一月の初旬にして、嚴霜降り堅氷結び、寒威凛烈膚を劈くの頃なりしとよ。

實に百聞は一見に如かず、戰地の有樣は聞きしに勝

るものありて本國にて想像し居たるの比にあらず二千に近き病傷兵は、設備不完全にして、殆ど露營に等しき天幕内の病室に、算を亂して收容せられ、枕を並べて氣息奄々の爲体、見るに忍びず、左れば孃等は旅の疲勞を休むる暇あらず、直ちに看護に從事して、或は藥を啣め、或は傷所を洗ひ、或は衣を繕ひ、或は寢具を濯ぐなど、一行三十四人の手を以て、數千の傷病者に當り、晝夜間斷なく殆ど寢食を忘れて、働きたり、此の如く看護を爲すの傍ら孃は又た假病院に大なる炊事場を設け、洗濯場を造らせ、本國より送り來る材料を樣々に料理して病傷兵の無聊を慰め、又た圖書館を造り、敎會を設けて、兵士の身体精神を慰愉し、或は患者の爲めに手紙の代筆をなし、其他百方病傷兵の爲に盡したれば、兵士等は恰かも孃を見ること、慈母の如く又神の如く、敬ひ親みたり、之が爲め當初傷病者の死亡率百中六十位なりしもの、後には減じて僅に百中一二位に止るに至れり、之に依て見ても孃の率ゐたる看護婦隊が、能く戰塵匆忙の間に、偉大の功を奏したる一班を知り得べきなり。

さる程に、クリミヤ戰爭は一年半ばかりにして終局を告げたりしかば、英國の士女等は孃等の殊功を賞揚して、之を感謝し、孃等の爲めに盛大なる歡迎會を催ふすべく、夫々準備する所ありしにも拘はらず、孃は國家に對する當然の義務を竭したるまでの事なり、何ぞ業々しく歡迎を受くるの理由あらんやと、言つて、飄然佛國郵船に搭じ、故郷にぞ歸り去にける。

かゝりければ、孃の歸英を待ち搆へたる倫敦の官民達は、多少張合拔の氣味なりしも、之が爲め孃の謙德を稱するの聲は一層高められき。

其后、ヴヰクトリヤ女皇陛下には、孃をバルモラル離宮へ召させ玉ひ、孃の大功に對し、御感賞の綸詞を賜はり、加之も種々の御下賜品さへありたり。剰へ英國政府は別に二十五萬弗を孃に贈つて其功勞に酬ひ、土國政府亦た黃金の腕輪を孃に贈與したり。

然るに孃は此の二十五萬金を悉く擲つて、倫敦に看護婦學校を建てたり、現今倫敦屈指の大建築物セント、

トーマス病院の中に在る一枚舎即ち是なり、こは實に嬢の功績と榮譽を永遠に記臆すべき恰好の紀念たるなり。

嬢は其の永き生涯、慈善、看護等の事業に盡して倦む所なく、殊に看護學に關しては數種の著書をさへ遺されたり、嬢は紀元千九百年、享年八十歳を以て永眠さる、實に今より五年前の事なり、嗚呼嬢は死するも、嬢の事業は永く遺りて、赤十字の旗の輝くところ、愛の光漲りて、功業とこしゑに滅する時なけん。

コサック兵の生活

露西亞兵の中に就て慓悍武勇の聞え高きコサック兵の事情を少々申上候、時節柄コサックとは如何なるものかと御話の一端とも相成候へば幸甚に候、一体コサックと申す土地は露西亞本土の南方に位する一地方（露西亞の三大河の一なるトン河の源）の總稱に有之候が、コサックは昔より、此地方に移植したる一種族に御座候、その性質勇壯、活潑、平生騎馬、射的、漁獵などを最も得意としたる人種に有之候、去れば今の露西亞人とは違ひ中央亞細亞人の血脈を傳へたるものにて、頭髪黒く眼睛茶褐色まづむかしの薩摩隼人といふ風貌を供へ居り候。

元來コサックは露西亞の領土には無之候處、今より百五十年前露西亞に征服されてその版圖に入りたるものに候が、一体露西亞といふ處ろは、廣漠たる平野の地にて天然の境界といふもの無之、随て以前は各所に各種族が部落を成して相互ひに掠奪を事とし爭鬪攻伐殆んど野獸の如き生活を成し來つたとて多年の習慣性となりて慓悍勇猛の一種族に候、然るに露西亞帝國が膨脹するに随つてコサックも自然その版圖に入り今日にては有勢なる露帝の干城と相成り、武術に勝れた壯丁をコサックより撰抜して近衛兵に編入せられ候、併し土民兵、所謂屯田兵と申すものは依然コサック地方に屯在して兵農生活を成し居り、且つ近頃は西比利亞地方へも移住を命ぜられ、滿洲方面にもコサック狙擊

兵と申すものが段々と移住する樣に相成申候。さてその兵士は殆んど世襲的のものにて官より一定の耕地を給與せられて、それを耕作し、又鹽の出る鑛山漁獵の出來る沼澤などを特別に官より貸し與へられ其處にて自由に採掘、狩獵の出來るやう特權を得て居るものに候。

コサック地方人の生活と申せば極めて未開の狀態に有之候。其の衣食住は至つて質素簡單と申すべく、其の家屋は概ね木造にて、通例僅に三室を有する小舍体のものに候へば、一見頗る不体裁には候へども、室内の掃除は割合に能く行き屆きて、器物など相應に整頓致居候、渠等の客室とも謂ふべき所は、板壁に粗末なる壁紙を貼りそこに鍍裝の神体を揭げ、形ばかりの禮拜室をしつらひあり候は蠻勇ながらも流石に候その家具と申せば四隅に長椅子一脚、椅子數脚食器、戸棚等の並べてある位に候それとて別段の裝飾は無御座候、他の二室は寢室と厨屋とに充てられたるものに御座候家の周圍には大概數畝の野菜畑と葡萄園と、造られ居候が一般にてまづ四邊寂寥たる有樣に候、扨て渠等が日常の生活を申上候へば、男子は大概銃を提げて林中に野獸を逐ひ、禽を擊ち、馬を驅り、沼澤に獵をなす等、專ら野生的生活に馴れ居候がその妻女は、耕耘牧畜を事とし、政府より與へられたる土地に葡萄を培養し、又は蔬菜を植付け、或は家畜の乳を搾り、時としては穀物を市に運びて賣買致すなど、勞働に掛ては健健しく御座候、コサック農村は概して五六十乃至二三百の部落を有し候が、其の一部落は有時の際一小隊位の兵士を組織するものに有之候。

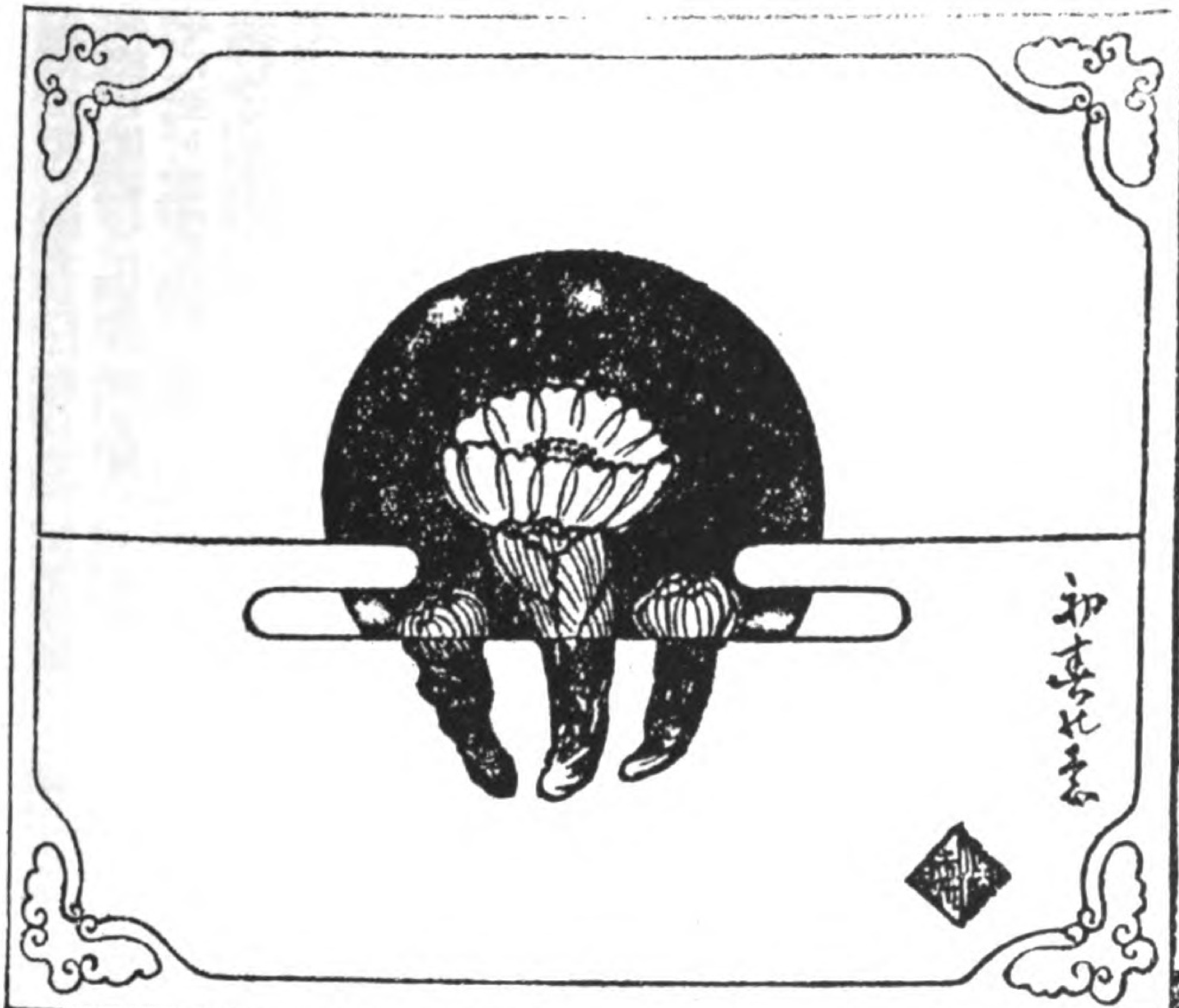
コサックの宗教は露西亞の國教以外、又一種の宗派を奉ずるものに有之候が、其の信仰力は極めて厚く加之も極めて迷信深き種族に有之候、故に渠等の市邑には巨萬の喜捨に依て建てられたる宏壯なる寺院到る所に有之候、乍去露西亞本土の爲に格別害となる憂ひも無之候へば、露國政府にても別段異教徒として排斥すること無く、信教は總て渠等の自由に任せ居候、扨又渠等の教育は甚だ幼稚なるものに有之候、宗教の爲

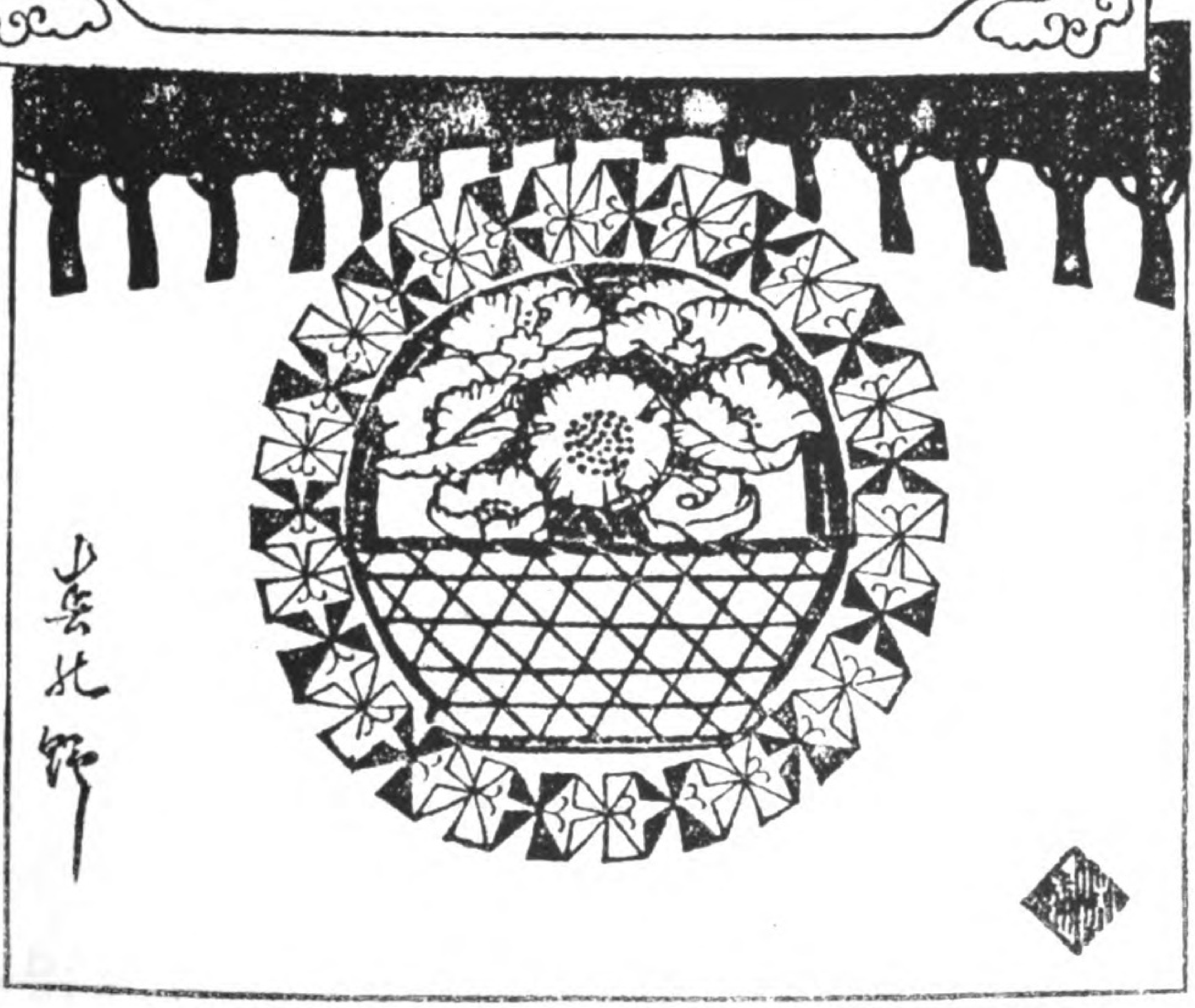
には莫大の資を投ずるに拘らず、教育の爲には醸金して一學校を建設したるの例を聞き不申候、去れば政府は近年に至り渠等の爲に漸く小學校を建設して、兒童を收容したる位のものに候、その學校教師には大概休職の武官などが之に當り居候。

　コサツクの男子は病人と不具者を除くの外、總て五ヶ年の現役に服し、除隊後十七年間、豫備軍に編入せられ、總計二十二年の兵役義務を負擔するものに候、コサツク土民兵と申すのは即ちこれに候、五ケ年の現役中、初最六ケ月は入營の上軍隊教育を受け、退營後二ケ月間は在郷のまゝ自由に農業漁獵等に從事致居候其後二年半は再び現役に服し、兵營生活に從事致候、目下ドン、コサツクの數は現役豫備を合せて總計十二萬人と聞き及び候、

扨又コサツク兵の特色とも申すべきは、文明的の戰術には元より用ゆべからず候へども單身敵に當るの蠻勇に至ては恐らく世界無双ならんと存候、渠等は第一乘馬に巧にして馬上に在ること平地と異らず、寢食起臥、鞍上にて自由自在、而も餘裕綽々の落着あるには、驚き入り候、去れば斥候は其の尤も得意とする所にて、敵勢の偵察、馬上の騎射等は頗る敏活に有之候、併當時のコサツク兵は士氣以前の如く振はず、殊に一般性質貪慾にして金錢にかけては目のなき方にて、敢て奉公的義勇心なぞと申す高尚な心掛ある譯には無之候へば、決して恐るゝには足らず候、よし一朝日露開戰の曉となつて、朔北の荒野に彼等と相見え、一騎打の格鬪致し候とも、日本武士の渠等を僵すことは、左程困難でも無之朝飯前の事と申せばあまり見くびりたる申狀かは知らねどもまづ左程困難にはあるまじく候但し騎射にかけては中々妙手に候。（完）

●露西亞の名物　ロシヤの名物は茶釜である銀、銀鍍金、ニツケル製で、下に湯を入れる處がある、上の小穴から消炭を入るゝと、五分乃至十分で湯が沸く、螺子仕懸で出すやうに成て居る。其から咖啡匕一杯位の茶を別に急須に入れ、此に右の沸た湯をコツプに半分位注ぎ、そして三四分間例の湯沸の上の小穴に懸けるのである。すると茶は眞赤に爲る、此が露人の賞翫する所で、彼等は此濃茶をコツプに注ぎ湯を薄して飲むのである。尤も此には砂糖を入るゝのみならず、橙（シトロン）を輪切にしたのを投じ、攪廻して其の風味を喜ぶもあり、中には砂糖漬杯を入るゝもあり、茶の眞風味を知るものは少いらしい。彼等は小盃の人でも一度に三碗を上ぐる。







ハムレット物語

佐藤楊柳

西洋文藝の輸入その頂點に達して、繪畫彫刻、詩歌藝術の類皆革新の氣を帶び、その面目を新たにしたる今日、演劇興行の舞臺も又舊態を墨守すべきにあらず、昨年以來劇界の氣運頓に色めきて泰西劇の舞臺に上るもの續々、新演劇勃興の氣運爰に顯はるゝや、故きを捨てゝ新らしきに就くの人情、滿都の士女爭ふて之に赴き、新演劇は今や劇界流行の魁となりぬ、此際、西洋ドラマの開山セーキスピヤの脚本中三大傑作の稱あるハムレット（既に本郷座にて興行せり）の、梗概を譯して聊か西洋劇詩の大畧を紹介せんとす

登場人名

丁抹の太子	ハムレット
太子の母君 現王の妃	ガートルード
丁抹王 太子の叔父	クロデ井アス
太子の許婚	オフエリヤ
オフエリヤの父王の老臣	ポロニアス
オフエリヤの兄	レアーテス
太子の從者	ホラチオ

右は脚本に署すべきものにて梗概には無用のものなれど須らく便宜の爲茲に拔き出しぬ

其一

丁抹の王ハムレットが不慮の崩御在らせられてより、未だ二月ともならざるに、王妃ガートルードの君は、故王の弟君なるクローデ井アスと婚儀を擧げられこゝに二代の王妃とはなられしなり、このとは、國民一統の等しく意外として、目をそば立たる事なりき。現王クロデ井アスは、其品性と言ひ、其風采と言ひ、と

ても故王ハムレットと、比ぶべくも非ず、其心の獰惡なるは、外貌の陰相なるを見ても知るべく、國民の心服する者とては無かりき。されば、彼れが王冠と王妃とを奪ひ、又王太子なるハムレットをも退けんが爲に何等かの手段を以て人知れず故王を亡きものとしたるに非ざるかとの疑ひは國民の目より目、心より心に傳はりたるも又無理ならぬとなるべし

中にも、太子ハムレットは、すぐれて孝心深く、義理を知り、名譽を重んずるものから、御母ガートルードの君の淺ましき行を、深くも悲しませ給ひ、且つは、父王の思ひがけなき崩御を傷ませ給ふの餘り、遂に安からぬ憂鬱の症にかゝらせられ花やかなる王宮の歡樂も、此の太子の心を慰むるに由なかりき。



裁縫

技藝十二種の内

太子の斯くも悲しみ斯くも歎き給ふはこの腹黒ろき叔父君の爲に當然嗣ぐべき王位を奪はれたるが爲か、否われは唯だ母后ガートルードの心强くも、故王を忘れ果て給ひて故王御存生の折は、妹背の御睦らひ、いと濃やかに拜しまつりしものを、崩

御間もなく故王の弟君と結婚遊ばしたるは餘りと言へば淺ましき御振舞なり、されば故王の崩御を傷み給ふ御様子のなきも道理なりと思ひ給ひて一しほ苦々しき事となし給ひしなり。

されば表面ながら、太子を慰さめんとし給ひし母后ガートルード、並に王クロヂオアスの苦心も水の泡にて、太子は常に喪服着て宮廷に出で賜ひ、文武百官參賀して、御母ガートルードの華燭の盛典をことぶける折にも、此の喪服をば脱ぎ給わず、且つは山海の珍味を盡したる供膳美酒、泉の如くに湛へたる、盛宴、宮廷百僚の心地よく遊び戯むれ、舞ひ歌ふこの大饗の御席にも堅く辭して出で給はざりしなり、殊に太子の嘆を重ねて金輪知らんと欲し給ひし事柄は、如何なれば我が父王は日頃さしたる病もなきにかくも敢なくかくれ給ひしかの疑問なりき、故王は、怖ろしき蛇に刺れ給ひしなりとは、現王クロヂオアスの、眞實しやかに陳べまたふ所なれど、其恐ろしき蛇とは彼クロヂオアスに非ざるか、父王を刺したる恐ろしき蛇、今や一天萬乘の君として王冠を戴き、九五の位に登りて、更らに我が身の爲めに恐ろしき巧みを巧へ居るには非らずや又思へば、御母ガートルードの君は、此の恐ろしき弑逆の企に左袒し給ひたるにや又はさる恐ろしき巧みは知ろし召さぬとなるにや、たゞしは又薄々は知り給ひつらんも、餘儀なき事のありて默したまふにや、この如く太子は、日となく夜となく思ひ詰め、迷ひ込みつゝありし。

折りしも、怪しき噂さは人の口より口に傳へられたり、そは夜毎宮門の邊りを、草木もねむる深更の刻を相圖に故王の亡靈のあらはれ出づるといふ事なりき、扨てその姿は在世の折り人々の常に見奉りたる御服裝と少しも變わりなきものをめさせ給ひ、色青白くして恐ろし氣に見へ、執念く恨むが如き形相にて、何事をか訴へんとするものゝ如くなりといふ、斯く怪しげなる噂の高まりて、遂には、太子の耳に入りければ太子は不思議のことに思ひて、斯くも故王の屢々姿を顯はし給ふは、由なくして可ならんや、何事か告げ給んとの御意

なるべしよしや他の者には知らせ給ずとも、此のハムレットには、知らせ給ざるともあるまじと、一隨に迷ひし心より、或夜ひそかに腹心の友ホラチオと二人して宮門の邊に出で今や遅しと待たせ給ひぬ。

時しも冬の初め、夜もいたく更けたれば、北氷洋の濕めりをおびたる寒風ははだえを刺すが如く一天氷を張りたるが如き大空に月影冴へて皎々たり、忽ちあれよと喚べるホラチオの聲に太子は、きつと彼方をすかし見給へば、今まで光りし月は雲に隱れて、暫時人目を暗ふなしぬ、されとあり／＼見ゆるはいたわしき故王の亡靈なりき、如何なる恨ありてこゝに迷ひ出て給ふやらんと思へば恐しけれど、しみじみ太子を打ち見てしく／＼と泣き給へり、太子は吾を忘れて、「なつかしや父君、そも如何なれば安らかに眠りて在せし白玉の宮居をば迷ひ出て給ひて、またもや此の世の月影にいたわしき、御姿を現はし給ふぞ、殘り惜しき事もあらばあきらかに語らせ給へ」と、かき口說たまへば、亡靈は、手まねもて、太子を指し招き、人なき處まで從ひ來よとの意を示し給ふ、此の時從者ホラチオは太子の身の上心元なく思ひて、强て引き留めたれと、よし命を失ふとも何かあらんとて太子はきゝ入れ給わず袂を振り拂つ



技藝十二種の内　ピアノ

て、亡靈の導くまゝに蹤追ふて行たまひぬ、折しも月は、尙ほ雲を離れず、寂寞として、四邊に人もなし、こゝに亡靈は始めて力なき聲音を振りしぼり「何を聞くぞう、吾れこそは御身の父の亡き靈、王ハムレットの靈なるぞ」「……」「我身は彼のしゆうねくも、王位を奪ひ王妃を愉まんと心をくだく、大逆無道のクロデ井アスが毒手にかゝり、無念の最後を遂げたるぞや」「……」思へば口惜し、過る日花園の午睡の夢を、窺ひ寄りたる卑怯未練のクロデ井アス、世にも恐ろしき毒汁を、吾が耳に入れたるぞ」「……」「忽ち血は燃え、五体わなゝき、見る間に總身紫色に腫れ爛だれ、世に淺猿しき非業の最後を遂げて迷深き亡鬼とはなりたるぞ、御身まこと此の父を忘れずば、必らず此の恨み報いてよ」、「……」「更らに又恨めしきは汝の母なり、佞辨邪智に長けたるクロデ井アスに惑わされ、女の操をけがせし上に、夫を殺せし仇人と、道ならぬ契を結びて、不義の



編物　　技藝十二題の內

榮華を誇るとは蔑げ果たる犬畜生、さりながらハムレットよ母は女性のことなれば、ゆめ〳〵手荒なことをなすまじきぞ、神の配劑に任せをけ、父が言葉を肝に銘じて必らず此の怨み霽せよや神樣も照覧あれ、必らず共に此のハムレットが心をし と覺束なく云ふをきゝて、さらば〳〵と亡靈は掻き消すごとく消え行きぬ、夢路を辿る心地して獨り茫然たりし太子は、漸く吾に立かへりて、さては日頃の推察に違わず、彼れクロヂ弁アスが毒手なるぞと思へば、血は沸き五臓は斷るゝ心地なり、おのれと言ひ樣ぬつくと立つて宮殿の方睨みつけたるその形相は、健氣にも又物凄かりき。

其二

かくて太子は當の敵を欺き、又敵の注意をさけんが爲めに、巧に狂人となりすまし居たれば亡靈の出たるを知らざる王と王妃は、千々に亂るゝ太子の心緒を知る由もなければ、その贋氣狂に欺き了せられて、斯は戀の煩らひに因るものならんとおもひなしたり。

太子が未だ鬱鬱の症に侵されざりし以前、家の老臣ポロニアスの娘にて、オフエリアと呼ばれたる心立優しく容姿殊に美麗わしき乙女と深くも言ひ交わしたる中なりしが、狂人のまねを裝ふに至れる頃より、わざと彼の女に逢も、すげなくもてなし諸事あら〳〵しく見せかけたり、されど、乙女は更らに恨むる樣子もなく、慘ましき御病氣故に、妾迄も見忘れ給ひしかと、涕に袖のかわく間もなく、只管太子の本復を神に祈り居たるぞ憐なる、時に太子は、太望ある身の、女の愛に引かされては、心怯れもしつらんかと思へど、遉がにオフエリアの優しき情は忘すれがたく、吾が荒〳〵しき仕打に思ひ比べては、心も心ならず、急ぎ文認ためて、前后そろはぬ氣ちがい染たる文句の内にも倘ほ君ならで誰にか見せん一點の赤き心、よしや日輪は東の山の端に沈づみ、セーヌの河は逆に流るゝ世はありとも、御身を愛する吾が心は、千代八千代の末迄も變りはなきぞ、と、言ひ寄せ給へば、オフエリア孃の父ポロニアスはこの怪し氣なる文を見て又王と王妃に見

せまつりければ、扨ては、オフエリアを戀ひ焦れて斯の始末と思ひけり、中にも王妃は、産の母とて、ハムレットの病を氣遣ふともいや深く、オフエリアが、こゝろ盡しの介抱に、太子の病癒らば、二人を婚はすはよき赤縁と思ひて其日の來るを待たりけり、されど太子が心の紛れは、斯かゝる手輕きとにて解く可くも非ず、父王の靈は、夜毎太子が枕頭に立つて、復讐を迫るが如く、事の決行を一日猶豫すれば其れ丈太子たるの道に背くが如



技藝十二種の内　琴

く思はれて太子が心の惱みは、寸時も休まるひまはなかりき。

　されど又思へば、クロデヰアスが、不倶戴天の父の仇なるとは、亡靈の告に由つて明なりとは云へ若しや其亡靈なるものが、兼てきく變化自在の惡魔には非ざるか吾が弱身につけ入りて、吾れを魔道に陷れんとするには非ざるか、よく〳〵事の實否を極めずして、吾が母の夫、現在の叔父、一國の王とも云わるゝ人を殺さば、万代までの不覺ぞと、智慮深く心優さし

きハムレットは、之れを思ひ彼を思ひて、心は麻と亂れ、とかくの思案もつかぬ折りから、兼て知る能役者の一行太子の宮殿に參候したり。

太子は心の悶をまぎらさんとて、一座の者を招き一曲を演せしめらる、曲は、昔ツロイの城、落城の際、老王は毒手に仆れ、王妃は狂ひ亂るゝ体を述べたるものにて、悲絶慘絶の光景演者の眞に迫りたる技と相待つて觀者皆悲哀の感に打たれて落淚禁せず仰ぎみる者とてはなかりけれは、ハムレットは折りも折りとて慷慨



技藝十二種の内　生花

禁ずる能はず、遂に一計を案出したり、故王の毒殺せられたる事實と似通ひたる仕組の一曲を、技眞に迫りたる此等の役者等に命して王クロデヰアスの面前にて演せしめば彼れクロデヰアス、如何に大胆不敵なりとは云へ、よも落着き振つては居られまじ、彼れが樣子を、能く〳〵うかがひ見れば確なる證據を得ると堅からじと、思ひて、腹心の友ホラチオに意中を明かし、能役者等には其々用意を命じ、期日を定めて王クロデヰアスの觀覽を仰ぎたり、王は、斯る事のありとも

知らで群臣を從へ、王妃と共に定めの席につき給へば、太子ハムレットは、王の顔色を仔細に覗わんが爲に、傍ら近かく侍りたり、さて今演せんとする曲は、王弟ルーシアナスなる者國王を花園の中に毒殺し、併せて王妃を口說き落し、王位に登るを筋としたるものなりき、程なく吹奏につれて幕あきたり、王宮花園の景よろしく、其處に、王ゴンザゴと王妃とは、いと睦つまじく手を引きつ出で來る互の親密を示す所作會話などわつて、扨て王妃は熱心に愛の盟を捧げ、陛下万歲の后に至るも神かけて二夫にまみゆるとなし、前夫を弑するが如き奸婦はいざ知らず、陛下の妻ゴンザゴ再び夫を迎ふるが如きとあらば、神よ妾の命をめし給へと云ふ、

この役者の臺詞をきゝて、王クロデアスと、王妃とは何氣なくは裝ほひたれど、落ち着かぬ樣子は、敏きハムレットの目に其れと知られたり、軈て王ゴンザゴは花園の倚子に凭れ臥し、王妃はあちらへと退く入れ違へて、王弟ルーシアナス、忍びやかに出で來り四方をうかゞひ、甘睡せる王の耳に毒汁を注がんとする段に至りて、流石の王クロデヰアスも、ひしと胸を刺されし思ひにて、顔色俄かに變じ、聲さへも振へて、「燈火を！室に！燈火を！燈火を持て」と呼びつゝ、人々に扶けられ、寢殿さして入り給へば、演技も中止となり、人々も其〳〵座をまかりたり、この有樣にハムレットはさてこそと、充分なる明證を得て久しく煩悶焦慮したる疑念全く晴れ、亡靈の告げし言葉の眞なるを確かめたれば、嬉しさに耐へ兼ねて、勇躍抃舞しつゝありき、折りしも母妃ガートルードの召により、太子は、王妃の居間へと行たまひぬ。

其三

王妃は、ハムレットの入り來れるを見て、言葉和らかに慰めて言ふ樣何故に御身は先刻の如き慘刻なる演劇を父王に見せまつりしぞ、こは穩やかならぬ事なりきと諭し、且つ、父王のいたく立腹まします由を語りければ、ハムレットは、不倶戴天の仇人を、父王と呼

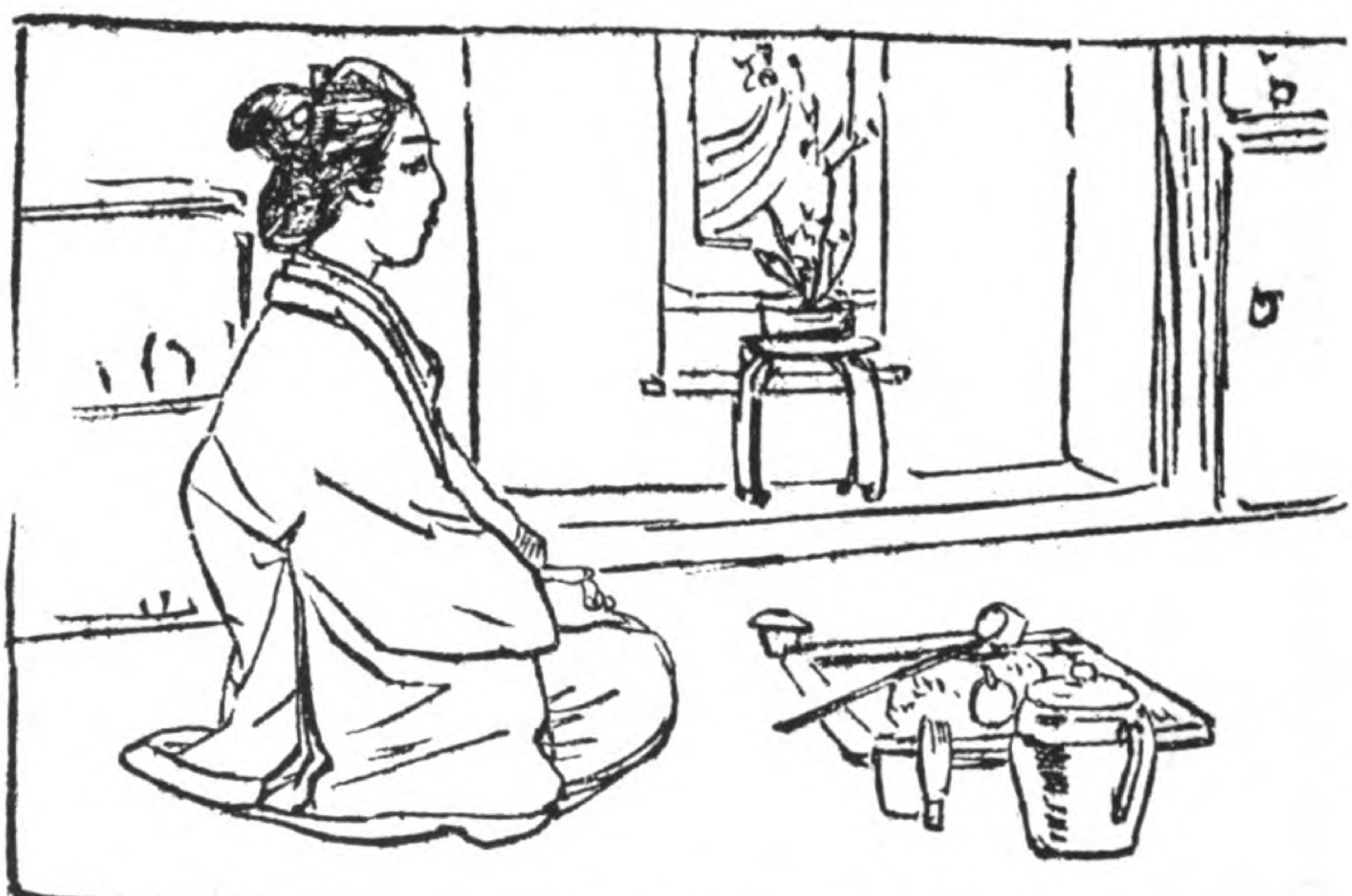
ぶさへ、心地快からねば、一図に不快の念抑へ難くなり、言葉もあら〳〵しく、『母君、あなたこそ、亡き父上の御立腹を御存じなきや』と云へば、『オヽ、よしなき事を』と紛ぎらし給ふ。『母上よしなき事とは何の御言葉、父君の御立腹とは、あなた方の御振舞をこそ』と思ひきつて激げしく責め給へば、王妃は顔色を變へて氣色だち給ひ、『テモお身はこの妾を誰れと思ひて、左樣の失言をばするぞ』と柳眉は見る〳〵逆立ちぬ、太子は臆する色なく『母上何條忘れてなるものぞ、母上は故王のお妃にあるべきを今又とゝに



技藝十二種の内　茶の湯

叔父君にかしづきまいらせし二代のお妃、なさけなや。あさましや』と答へ給ふ『えゝ、この人はまた無躾千萬何として斯る事をば口外する、アヽ餘人はなきか、こゝな不埒者めが』と、云ひ捨てゝ立ち上がり給へば、ハムレットは御袂を堅く捕らへて放し給はず、遉がに亂心の徵候ある太子の事なれば如何なる擧動に出でんも知れずと王妃は心も心ならず『あれ、狼藉ものぞ！誰か來てよ』と叫びたまへり、此時早く几帳の裡にも同じく周章たる聲音にて助けを乞ふ聲きこへぬ、太子は逸早くも、さては茲に憎くき王ク

ロデ井アス隱くれ居るなり、日頃の遺恨を晴らすは正に此時と短劒拔く手も見せず、聲をたよりにグザと突き立てたり、深手に苦しむ襟先捉へて引き出し見れば、こはそも奈何に憎くき王と思ひしその人は王にはあらで、王の老臣、我が戀人の父なる、ポロニアスならんとは。この人はクロデ井アスの命を含み王妃に萬一の事あらんも知れずとさき程より几帳の蔭に身をひそめ居たるなりき、事の意外にハムレットは驚き迷ひ、こは奈何にと仰天せしが、元より殺氣に猛る一念なれば王を見つけて一ツ劒に刺さんもの



をと血刀提げて立ち給ふ、眼力恐ろし、王妃はこの有樣を見て駈け寄り玉ひ「ア、恐しや〳〵其方はマア何とした事で」と戰き震ひ給へば、太子は怒れる顔色すさまじく「アヽ母君よ、あなたは我が父王を弑し、其弟君に昵くとは、女性に似げなき、御振舞操を破り、神を僞り榮華を貪る、あな汚らはしの御心や、天神地神の御叱りを知しめさずや」と嘆きつ、責めつ、軈がて、取り出す二枚の畫姿「これ御覽ぜよ、此の御姿は、優さしくも又勇ましく、凛々しくましますは吾が父上樣、あなた樣には以前の夫、又是な

るは今の御配遇、利欲の爲に、同胞をも弑する程の奸佞人、此の容貌、似ても似つかぬ炭と雪、よく／＼御覽せ給へ」と差し付けられてさすがに王妃は昔しを偲び、今を思へば堪へがたき羞恥の情、心弱きは女性の常とは云へ、生存へて耻かしき、吾が身かなと、熟々思ひ沈み給ふ、ハムレットは更らに言葉を改ため「過にし罪過を、懺悔したまへば、神樣も許るし給はん、何卒今より、御心を入換へて、不義の契を斷たせ給ふべし、かくて亡き父君の跡懸ろに吊ひ給ひて親子二人いつ／＼迄も、睦ませ給へ」と、涙と共にかきくどく、赤心見へて惨ましかりき、誠意の神に通じけん、母妃も今更迷ひの雲晴れて、改心の程、堅く誓ひ給ひけり。

其　四

扨て、王クロヂヤアスは、太子ハムレットを、兼てより目の上のこぶとして、人知れず之を亡きものにせんと計りたれど、流石に國民の思惑も如何ならんと且は女ながらに、ハムレットを愛する心の厚き王妃の思わくの程も計られず、旁々して、王は、ポロニアスの横死を口實として、太子を國外に放逐し其上にて人知れず除かんものをと思ひけり

斯くて王は、心利きたる二人の宮臣に、内意を含めて、太子の從者となし、當時丁抹の屬國たりし、英吉利の國王に宛てたる密旨の手紙を添へ英國さして出て行かしめ、同地へ上陸の上直ちに、刺し殺さしめんと計りたりき。されど機敏なる太子は、迅くも王の胸中を察し或夜ひそかに、密旨の手紙を披き見て、こゝにいよ／＼王の奸計を知りたればこの度は我より謀り返さんと件の手紙の中なる己が名と從者として行くべき二人の宮臣の名前とを巧みに書き換へ置きたるは機敏と云べし、斯くとも知らざる宮臣等は太子を乘せて出帆せしが、ゆくりなくも其船、海賊に襲われたるこそ奇運なれ、此時武勇勝れし太子は、衆に擢んじて、賊船に斬り込み數多の賊衆を相手に、薙ぎ立て、斬り立て給ふ折柄、惡徒一味の宮臣等は、機會こそよけれと太子を其儘賊船に殘し置きて、急ぎ英國さして遁れ行き

しはよけれども、彼の密書を英吉利國の王に奉つると等しく文句の通り否應なしに刑場へ引出され斷頭臺の露と消え行きしは、天罰覿面自業自得とや云ふべし。

話變りて、海賊等は、この武勇逞ましき若武者を何人ならんと怪しみ惑ひしがいつしか遂に丁抹の王太子ハムレットなる事を知りて、驚く事大方ならず俄かに刃を收め、厚くもてなし、丁抹に程近き左る港に、船をつけて太子を、上陸させたりけり、されば太子は不思議にも虎口をのがれて、急ぎ王宮へ歸り給へば、扨ても世は思ひ設けぬ事のみ多かり、多年我が心に許せし戀人オフエリア孃が、葬式の當日ならんとは、彼のオフエリア孃は、日頃深くも戀ひ慕ひし太子ハムレットの爲に、父ポロニアスが、非業の最後を遂げてより心狂わしくなり行きしが、遂に眞の狂人になりて日となく夜となく泣き叫めき時には戀の歌など、節おかしく唄ひつゝけ、父の葬式にあひて、弔みいふ人毎に、花束を分ち與へ、から〳〵と打ち笑ふなど變わり果てたる姿、見るもいぢらしく實に涙の種なりき。



技藝十二種の内　打球

或日の事、オフエリアは、人々の氣附かぬ間に室を迷ひ出で、美事に作りし花環を池の面に差し出でたる柳

の枝につるさんとして足踏誤りつ、ざんぶとばかり、花諸共に池に陷入りける、その時衣服の裾にさゝへられし、オフエリアはしばし身の浮べるものから、今ぞ死の神の御手に導びかれつゝ、節面白く妙なる聲して、歌ひつゝ、歸らぬ旅路に趣きぬ、これぞこの美くしき戀人の最後なりき、悲慘といふも愚かなり。」

ハムレツトは王宮にかへる道すがら城外の墓地近く來りし時、葬式の一列、導師の僧を先きにして、オフエリア孃の兄なるレアーテスを始めとして、王クロデ井アスも王妃も、他の宮人等と一樣に列に從ひ打ち萎ほれて行くにぞある。

さても不思議と木陰に忍びて伺へば、讀經も式の如く濟みて、王妃は力なく歩み出で、手にせる花束を靈前に供へて、悲しき聲をしぼりつゝ『オゝさても、乙女の中の乙女よ、ハムレツトが未來の妃なりしオフエリアよ、我れは我花嫁を飾ぐ爲めにと作りし此の花束を今この靈前の手向にせんものとは、今が今迄思はざりしよ、』と涙にまじる聲とぎれ〳〵に述べ給ふ、聞いて愕ろくハムレツト、さては我が戀人も斯くなりしかと氣は狂ひ頭は亂れ吾れを忘れて走り出づれば、『ヤア父の讐、妹の仇、覺悟をせよや』と飛び付くレアーテス、(オフエリアの兄)太子と向ひて火花を散らし戰わんとす、これを見たる人々、こは狼狽なり場所もあるにと急そぎ二人を引き分けつ、双方共に樣々に押しなだめて、其の場は漸く濟ませたり、されど濟まぬは王クロデ井アスが胸の内なり、英國へ旅立せて亡はんとしたる太子の再び歸り來つて面のあたりこの活劇を見んとは思ひ設けぬ事なり、如何にしても此まゝ活かし置きては、毒持つ心の安すからねば、今しもレアーテスと鬪ひたるこそ幸ひ、この機はづさず息の根止むるに若ずと巧める心を色にも見せずハムレツトとレアーテスが和睦の爲とて、言葉巧みに説きすゝめ、日頃好めるとて、眞劍の仕合を爲しむることとなしぬ。

扨て其日と成りたれば、王は王妃と共に、居並ぶ宮臣の面々、吾も〳〵と馳せ付けたれば、流石に廣き道場も、溢るゝ計りになりける、さて十數番の仕合ありて

やがてハムレツトとレアーテスが番とはなりぬ、何れ劣らぬ若武者が晴れの仕合なれば、喝采暫時は止まざりき、レアーテスは、仕度も甲斐々々しく、兼ねての王の指圖通り、密かに毒を塗りたる劍をひつさげ、父の仇、妹の讐を酬ゆるも今日此の時ぞと、渾身の勇氣を奮つて、演場の眞中に待居たりけり、太子は斯かる計畧の有とも知らで、常々用ゆる仕合の鈍刀携へて徐々と出會ひ、互に隙をねらひて、寄らば打たんと構へたり、忽



技藝十二種の内　割烹

ち擊ち下す一刀、發矢と受けては返し、打ち拂ひては退ぞき、受け流がしては突き込む、手練の早業名手と名手の出會なれば容易すくは勝負の程も見えざりける、されど、太子の業や勝れけん、一番、二番上手に出でしかば、レアーテスが死物狂ひになりて切り込む太刀に、疵を受けたる太子は、カツと怒りてむづと取り組む機みに、互の劍を取り違へ、引き放して正面より太子が擊ち込む太刀先き、流石のレアーテス深手を負ひて怯む折しも

あれ、最前より勝負如何にと見てありし王妃は、突然其處に倒れて、『あゝ、毒を飲まされました、恨めしいは、クロデホアス殿』と、云ひたるを最後に、毒の効目や强かりけん、見る〳〵うちに悶だえ〳〵て死に給ふ（是は豫て王クロデホアスが萬一レアーチスの毒刄其効を奏せざる事あるも、ハムレットが激鬪の末、渇を覺ゆるは、必定、其折り太子に飮ませんと計りて、兼て毒酒を調のへ置けるものなるを、王妃は其れとも知らずして王の知らざる間に飮みたるなり。）

正面より打込まれたるレアーチスは、苦るしき息の下より、『あゝ許させ賜へハムレット貴殿も最早半時とも保たぬ御命、吾が刄に塗りし、毒の强ければ、如何なる靈藥あればとて、もう助からぬ御命、王の命とは云ひながら、武士の道も忘れて、劍の刄に、毒をば塗れる天罰は、忽ち此の身に報ひ來て、自業自得の此の苦み、あゝ恐ろしや〳〵……………元はと云へばあの王が………』と、罪を悔ひつゝ息たえたり。

刄に毒を塗らせしも、王妃の飮みし毒酒も、皆王の奸計なりしを知りたるハムレットは、怒氣心頭に迸り、手近かに有し毒刄を取る手も見せず、起ち騷ぐ家臣等には目もくれず、『ヤア重なる恨み、天の罰、思ひ知れや』と計り、王を目懸けて突き立てぬ。惡逆無道のクロデホアスいかでか防ぎ得べけんさしもの惡運爰に竭きて、可憐帝座を血に汚して逝きぬ。

死期の近づけるを知りたる、ハムレットは、忠實無二の從者ホラシオが、死なば一緒と、雙肌ぬぎて、あわや自害せんとするを見てその手を押へ『榮枯を以て操をか易へず、生死を共にせんとする友情は、ハムレット身に餘りて忝けなけれど、此の場に於て、其方迄むざむざと、命を斷たば誰れか事の眞相を世に傳へ、後世までも、吾が苦衷を明かし、汚名を雪ぎ與るゝものゝあるべきや、之れ吾が臨終の心懸にこそ、かまへて自から害ひぞ』と云ひ終つて眼を瞑りぬ、最後の樣を見て、ホラシオは、確乎と太子を抱きしめ『おゝお心安く思召せ、必らず〳〵ホラシオが』と、呼ばれる聲のきこえけん、さしもに志操高く、才能兼備はりて、國

民の重望を負ひたまへる太子ハムレットも、親友ホラシオが腕に抱かれたるまゝ、空しく歸らぬ旅路につき給へり、（終）

米國大統領の家庭（承前）

女子大學教授　松浦政泰

やがて收穫時は來て、重げなる穂は、莖も撓わに垂れ、黄雲滿載、車の運びも鈍く、久しく飢餓の狼と苦戰して、終に勝を奏したる、寡婦の喜や如何ならん。寡婦は日々詩篇第二十三篇を口誦さみぬ。『エホバはわが牧者なり。われ乏しきことあらじ。エホバは我を綠の野に臥させ、いこひの汀に伴ひ給ふ。たとひわれ死かげの谷を歩むとも、禍害をおそれじ。爾われと共に在せばなり。爾の笞爾の杖われを慰さむ。』

千八百三十八年の春、其近邊に家を移せしが、此處はガーフィルドの一家に取り都合よく、母の内職としては裁縫の賃仕事あり、トマスも時に雇れて他の耕作を助け、金を設くる事もあり　。トマスが始めて金を得て歸りし時は、いと嬉しげに、敷居を跨ぐや跨がぬに母に之を渡して『サア靴屋を呼んで來て、ジムミーの靴を造らせることが出來ますね。』母も喜び『そうよく、ジムミーも汝の御蔭で、始めて靴を穿くことが出來て嘸喜ふであらう。』『早くから穿かせたかつたのですよ、若し御金さへ出來たなら。』『善は急げだ、早く靴屋を呼びなさい。』ゼームスは年僅に三歲半靴を穿つはこれが始めてなり、其喜びや知るべきなり。余は已に久しくジムミー等が學校に行きし留守の間に、其入校以前の記事を記るせしが、今ははや皆學校より歸り來る時刻なり。いざ諸君と共に、彼等が歸りを迎へん。

子供等に己のが手織の着物着せんとて、母がビーンビーンと糸車を廻はせる中に、子供等は學校より歸り來れり。メヘタベルはゼームスと妹を伴れて、戶を排して入るや否や『嗚呼實に面白いでしたよ』と叫び、小さき妹も其尻について、『二十一人の生徒でした、ラン

ダーの子逹も見えましたが、其の道途は我等の倍で、三哩を通はれるのです」と嬉しそうに語れるを、母はやう〳〵語を挿んで「ジムミーは、どうでした。」メヘタベルは言下に答へて、「ジムミーも好きですと。アルハベットの御稽古があつたが、ジムミーはRの字を知つてると、先生にいひました。」折から子供等の歸れるを見て入り來りたるトマスは、「ジミーの言ひそうなことだね。シヲ先生は何といはれたの。」メヘタベルは答へて「先生は私も丁度同じ年頃の時、學校でRの字を習つたといはれました」と言ひつゝ、尙も頻りに其日の事を話し、ジムミーも尙語數も知らぬ癖に、眞赤な顔にて、在りし事共を大袈裟に語りたりしが、トマスは之に調戯つて、ゼームスを雙手で高く差あげつゝメヘタベルに向ひ、「此の野郎學校で靜に坐つて居たかね。」「マー靜にしたがね。一度席を立て、對席の子供と御馴親にならうとやつていた。」「先生は何とおつしやつたか。」「先生は皆を見て笑ひながら、ヂツト手を取て原席へ戻し、皆さん銘々に御席が定めてありますから、立つてはなりませんよと言はれました。」「ジムミー汝は豪傑ね」といひつゝ、再び之を高々と擧げて調戯ひたり。

最前より心をつけて、此の有樣を聽きたりし母親は、「汝逹はそんなに、學校を好きますか、御母さんは嬉しいです。こんな森の中では、十分な學校に送ることも出來ないから、成りたけ自分で骨折つて進んで行かねばなりませんよ。」

寂びしき森の無隣庵の、圍爐裡に焚ゆる四尺許りの粗朶一把。廣からぬ小舍の空氣は、瞬く内に春めきて、眞冬のやうな心地せず。クワツト照らす赤き光に、我れを忘れて母子五人が、温かそうな團欒。一際高く聽くはゼームスが讀書聲なり。

ゼームスが此冬の間の進歩は、實に著るしく、春風の吹き初むる頃には、貰ひたりしか借りたりしか、小學讀本を抱へて、嬉しそうにボツ〳〵讀み行く程になりね。或日の事、例の如く聲高らかに「雨ははら〳〵と屋根の上に降りましたが」と讀み行きしが、忽ち鬼の首

取りしが如く、喜び叫んで「御母、私は雨のばら〳〵いふ音を、自分で聞いたことがありますよ。」「そうですか。」「そうです聴きました。と、何にか大に悟る所ありしが如く、再び前よりも一入聲を張りあげて、朗讀して曰く『雨はばら〳〵と屋根の上に降りました。御母さん私が聴いたのも宛然其通りでした。』嗚呼彼れは始めて外界の事物を其の儘紙上に寫し出す方法を會得せしなり。夫より一生懸命讀書に耽り、英語讀本を智識開拓



技藝十二種の内　習字

の虎の巻として、樹の下に見、草の上に讀み、己のが心の田を開きしこと兄が鍬の先の働のそれにも劣らざりけり。

寡婦ガーフイルドは、兒童教育の爲に學校を近くに建るの利益を感じ、隣人とも相談して、終に廣くもあらぬ己のが所有の田地の内を其敷地に寄附し、疎末なる木小舎の校舎を建て、己のが故郷のニユーハムプシイヤより、敎師をも聘したれば、ゼームスの喜びも一方ならざりけり。開校の日此の新先生はゼ

ームスの頭に手を置き『汝能く勉強しなさい、大きくなつたら將軍となることが、出來るから。』將軍とは、ゼームスの未だ曾て聞かざりし語なれど、何しろ偉大い者ぞとは臆に推測しつ、其日は一日將軍の語は其念頭を離れず我家に歸ると唯今と挨拶することすら打ち忘れ唐突叫んで『御母さん「しよんぐん」て何ですか。』母は之を解しかね『何ですて』ゼームスは前よりは少し鮮かに『「しよんぐん」て何ですか。』『嗚呼將軍か、將軍が知りたいの。』『そうです、先生が私に勉強さへすれば「しよんぐん」になれると言はれました。』母は笑ひながら『そうでしたか眞實に將軍になりたいのか、どうだか、汝にも分明るまいよ。』『何ういふものですか知りたいです。』『宜ろしい、言ふて聽かせませう。汝の曾祖父樣は、將軍に就て革命の戰爭で戰はれた。將軍の事も將軍の事だがね、御先祖の事も、ちと汝も知つて居らねばならないよ。』夫より母は先祖エドワード、ガーフイルドが宗教上の迫害を避くる爲、他の清教徒と英國より此國に逃れ來りし事、終に獨立の戰爭起り、移住民は皆銃を執て、勇しく戰ひしが、ゼームスの曾祖父ソロモン、ガーフイルドも、其一人にして、コンコルドの役には、祖父アブラハム、ガーフイルドも出陣せし事。味方の軍勢は、皆靑き上衣を着け、ワシントンの如き、有名の將軍に、引率せられし事、將軍は皆金の縁の絢爛なる服を着け、肩には肩總を垂れ、帽には曆の畵にあるやうな羽などを飾り、銃の代りに劍を帶び、馬に跨りて陣頭に諸軍を指揮せし事を語り、『將軍は人を殺すものだから、今此國に澤山ほしくはないが能く勉强すると汝も將軍のやうな偉大ものになつて、人を殺さくても、人から褒めらるゝやうになることが出來るよ。』尙又夫れより祖父と父との事を陳べ、『極記臆易いでせう、汝の曾祖父樣は革命戰爭の兵士で、祖父樣は紐育州の開拓者、又其子のアブラハムも、オハヨ州の開拓者で、これが汝の御父樣です。汝の御先祖には、將軍は一人も無いけれど、將軍と同じ位の方はあつたのです。汝が若し將軍となつたら、我家の系圖の分つて居るだけ、即ち二百五十年間にては、誰れもな

られなかつた者に、なるのですよ。」不思議そうに母の話を聴きたりしゼームス、己のれは唯此の森の外には、何の關係もなかりし者と思ひの外、我家も殖民の歴史に、由々しき貢獻をなしたる者かとゼームスの敏活なる頭惱は忽ち輝き、其稚なき心は忽ち燃えぬ。日逝き月流れて早ゼームスは八歳となりしが、兄トマスは專ら他に雇れて賃錢を得、大に家計を助けしかば、家の仕事は木割り、乳搾り、玉蜀黍剥き、野菜の栽培何くれとなく、ゼームスの小さき腕の上に落ちぬ、一日ゼームスは例の如く、畑に汗を流しけるが、稼げども稼げども何ほ働きは山の如く、いつ果つべうも思はれず。母は之を見て慰め顔に「ゼームスよ何事でも遣りきれると思ふた時は、最早半分は出來たのも同然です。祖父樣は、いつも、古めかしい諺だけれど精神一到何事不成と言ふて、働いてゝしたよ。」『精神一到』それはどういふ意味ですか。」『夫は何でも爲とうと決心た事はきつ



技藝十二種の内　造花

と出來るといふ意味です。即ち小供でも、精一杯自分の力を出して、困難くても之をやり遂やうと決心したなら、何でも出來ぬことはないです。汝今仕事が捗らんとて失望はしまいね。』「御母さん、遣りますとも、遣りますとも。』「又決して人を頼みにせず、自分でやる精神が大切です。是れ位の事は何でもないと思つたら、きつと出來るのです。『天は自から助くる者を助く』と申します、現に御父さんが亡くなられた時は、寂しい森の中で、外に倚頼になる者もなく、何うしたら善いやら、實に途方に暮れましけれど、神樣と自分の力とに倚頼て遣りかけて見れば、想の外に樂でした。これも私が精神一到何事不成と感じたからです。一生懸命に掛る時は、きつと神樣は惠んで下さいます。』ゼームスは大いに悟る所ありしが如く、今眼の前の仕事にも、己のれのみが働くにあらず、神が力を合はせて助け給ふが如く感じて、いと勇しく鍬を取りぬ。母は尙語を添へて『一つの事を能く爲れば、又外の事も能く爲ることが出來ます。何事を爲るにも、努力することが肝腎で、自分の力を信頼にする習慣を作らねばなりませぬ。これより外に、自身をよくする道はないです。』賢なる哉母や、かゝる精神を吹き込むべき時に吹き込みたり。

已にしてトマスは開墾の爲、ミシガンに行き、七ケ月の間に、七十五弗を携へ歸りて、家屋新築に取掛り、トマスもゼームスも、大工ツリートを助けて、上階二室下階三室の家を建てあげたり。家の建つと共に、トマスは直にミシガンに歸り、ゼームスは例の如く田畑に働きしが、ゼームスは冬期の如き農事閑散の折には、大工の手傳ひして、家計を助くべきことを考へ、之を母に計り、直に大工ツリートに頼みしに、ツリート快く之を承諾し、板一枚につき削り賃一仙を拂ふことを約し、明日より始むべきことを話しぬ。ゼームスは滿面に喜を表はして歸り來り、母に其顛末を語り『今度のが、私が始めて儲けた金です』。『汝御金儲けには、年が若か過ぎるが、仕事が出來たことは喜びます。六ケしかろうと思つたのに』。『遣つて見て出來ました』

と、ゼームスが鼻も高げに聲高く呼びしは、母が日頃遣つて見ることの大切なることを、度々諭したればなり。「ツヮートさんは態々汝の爲に仕事を拵らへて下さつたのであらう。そうして何日から始めるのですか」。「明日から、成り丈早く行きますよ」。「能く氣を付けて働き過ぎないやうになさいよ。二時間でい〻でせう。多くて三時間ね」。「明日はきつと六時間働きます。三時間ばかし働いたとて、赤兒のやうに泣いて歸へられるものですか、御母さん可笑いですは。ツヮートさんは笑ふでせうよ」。「小供は過度に働いてはなりません。ツヮートさんもそう御考になるでせう。汝は働き氣が立ち過ぎる性質だから、誰か外から注意しないと、知らず〱働き過ぎるです」。母が思慮深き忠告には、不朽の眞理籠りたれど血氣にはやるゼームスは仲々之を聞かばこそ、「御母さん明日若し二時間や三時間で、歸つて來ましたら、私が片腕を亡くしたのだと思つて



技藝十二種の內　繪畫

下さい」と、いと婉曲に其決心の程を示したり。

かくて翌朝、朝未明より大工の家に至り、襯衣と股引になりて、終日シユー／＼と削づる鉋の音絶へず、額の汗は珠を成しぬ。日の入る頃、ゼームスはツリートに向ひ、ツリートさん、百枚出來ましたよ」。「エヽ百枚ですて。間違ひではありませんか」。「數へて見て下さい、私が數へたのでは百枚です」。大工は之を數へて、「慥かに百枚あります。汝位の年齢で、一日の仕事としては太したものです。餘りやり過ぎです」。「でも一向拔れては居りません」。頓がてゼームスは一仙銅貨百個を受取り、之を衣嚢の内に　ち込めば、太く脹れて重くしげなり。嗚呼家路に向ひしゼームスが、當時の感想や如何ならん。「一百仙、而かも唯一日の内に」。ゼームスの鼻の高さは、一寸を増しぬ。「これが七十五日續いたなら、兄さんがミシガンより持つて歸つたと同額」。思へば我れながら夢に夢みし心地。「兄さんがミシガンに居つた日數の、半分にも足らないのに」。ゼームス益々得意なり。嗚呼誰れか知らん、其の汚穢ろしき着的と木綿の股引は、偉大なる一個の心を包みしことぞ。

ゼームスは家に着せしや、直に銅貨をざら／＼と衣嚢より母の前垂の上に移したり。「御母さん、汝のですよ」。「みんな」。「百仙あります」。「何ゝ今日一弗儲けたのですか」。「そうです板を百枚削りました」母は惘然として語も出でず、唯嬉れし泣きに涙ぐむのみ。ゼームスは、兄を眞似せしか、小さき小供は、大なる小供の爲す所に倣ふものよ。母は唯ゼームスを抱きしめたるのみ、何と語もなく許りなり。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

嗚呼千八百八十一年四月四日は、是れ如何なる吉日ぞや。當年の森小舍住居の貧しき小童が、合衆國第一の光榮ある人を容るべき、白館といへる大統領の官邸に入るが爲に、盛大なる儀式の執り行はれたりし日なり。其日十時半の報鐘と共に、前大統領ヘイスと新大統領ガーフイルドは、白館より徐々と式場なる政事堂さし

て車を驅らせけるが、之に續きて第一の車には、ガーフイルドの母と夫人とあり、第二の車以下、其數幾輛といふを知らず。頓て式場に到れば、但見る廣やかなる室内、立錐の地なきまでに、知名の淑女紳士の、此日を晴れと盛裝したるが、燦爛に居並べるを。一坐肅然たる中に、新大統領は徐に壇上に上り、明快なる辯を振つて、就任の演説をなせしが、其終り方に、折りしも雲を破りたる太陽の光の、其頭上を照らせしは、天も祝意を表せしか、勇ましなんど言ふばかりなし。演説終りて、高等法院の院長ウエート、一卷の聖書を之に渡せば、大統領は之に接吻して、神明に誓盟をなし、之を院長に返へしつ、已に其演説中よりして喜の餘り涙に咽びて、傍に立ちたる老母に向ひ、其臉に愛の接吻を印し、天地も割るゝ拍手喝采の中に、しづしづ席を退きたり。



梅花一枝友におくる

嗚呼良妻エリザよ、賢母ガーフイルドよ、汝は此の日出たき時より、正に三ヶ月を經たりし後、此の喜に打たれし心臟の鼓動の尙靜まらぬ中に、第二十回大統領たる愛兒ゼームスを、凶漢の毒手に斃されて、老の涙に咽びつゝ、冷たき柩を送るの不幸に遭遇せしとはいへ、必らず心の底より滿足して、此世を終りたるなるべし。巳のが薫育の効果著るしく現はれて、小大工のジムー船曳のゼームスが、合衆國に於ける最高の椅子を占むるに至りたれば、殊には國家の爲に身を殉じ、榮譽の死を遂ぐるに至りたれば。（完）

落合直文先生の事

國分操子

嗚呼恩師落合直文先生逝き給ひぬおのれ先生にはじめて見えしは去にし廿三年の夏先生の池邊義象先生と共に伊勢參宮せられし折津の有志者兩先生を招待して歌迎會を開きし席なりきおのれかねてより先生の御名をしたひまつりて年頃門人の席末を汚さまほしう思ひ渡りし意中を述べて賴み聞えつるに誠に國學を研究せんとならば都に上りなばとにかくに教導の勞を辭せざるべしとうけひき給ひぬいとうれしくて其年の奉職を辭して歸京し直に先生を小石川大門町の御住居におどろかしまつりてかねての約束にしたがひて上京したるよしを述べたるに今年は早餘日なければ正月六日頃よりはじむべしとて直に文題及歌題を賜はりぬやかて其の日行きたるに一人の女學生を紹介せられこは國語傳習所の生徒木原某といふもの國語にいと熱心なれば君の學の友とすべく招きたり今より共に勉め勵みてゆめおこたりぞといましめ給ひぬかくて木原氏と共に常にまゐりて御歌を乞ひまつりしに父君は折々おはしておのれらにもいと親しう語らひたまへど他に御家族とてはおはしまさぬ樣なるいぶかしさにある日御物語の序にいかで内君に見參をゆるしたまへと乞ひまつりしに先生はしばしものそものたまはずあまた度歎息してつゝむとも遂にかくれなかるべければとて語り給ひけ

るはわれは本性鮎貝氏幼にして落合家に養はれ後家の女と婚して三人の子をまうけしが長子はやがて身まかりぬわが妻は學問を好みて歌などもいとよく詠みしが長子を產みて後心地やゝ狂はしくなりぬさま〳〵療養の甲斐ありて一時平癒せしが三人目の子をまうけし後再心地狂はしうなりて日に月につのり行きぬよしといふ醫師の治療を乞ひよしといふ方法の數を盡して看護數年に渡りしが更に快復のしるし見えず醫師は盡く口を揃へてその不治の病なるをときて今はたゞ閑地に靜養して成るべく心地をしづむるの他術なきよしを語れば詮方なく府下千駄谷の地をえらび家を建てゝ養父母及わが二子と共に彼處に徙きぬ年老いたまひし父母のたゞ一人子のかくなりしを朝夕歎きたまふをきくにつけ幼き子等の何心もなく戯るゝを見るにつけ病める妻の心地もなく狂ふをなだめわびてわが膓はちぎるゝごとき心地するを察してよと涙をはら〳〵とこぼしたまへるによしなき事をとひまゐらせていとゞしく物思はせ奉りし罪さり處なくはた慰め奉らむ言の葉もおほえ

でおのれもよゝと泣きぬしばしありて又のたまふ樣父母はかゝる歎きの中にもわか身の上を深く憫ませたまひてとてもかくても快復の見込なきわか女は離別して別に妻をむかへよとしば〳〵勸めたまひしがおのれは常にいなみたりされど父母はさてはわれらの心を安んずること能はねば家のためわれらがためまげて承引せよとすゝめてやみたまはねば遂に其御心に從ふべくこの頃決心しつさるにより父君はこれよけむ彼はいかにとさま〳〵の候補者を求めて日毎に相談におはするなりあるは華族の姫君ありあるは官位高き人さては財に富める人の女など多くあれどおのれは華族の姫君はわれらか家庭にふさはしからねば第一に辭したり官位高きは他日わか志を得たらん折舅の力によりたりなどいはれむは口惜しく財產家はた其財寶に望をかけたりなど沙汰せられむも殘念なればいつれも斷りぬおのれはたゞ其家柄だに正しからんには普通の家庭にして一わたりの教育を受けたる年の若からんを望めりその故はわか思ふ樣に教育してわが家風にならはしめむには

年の若きにしく事なければなりとやがてこの御望によりて娶りたまひしは即ち今の夫人菊川氏なりけりこのほど御兩親のさま／＼心盡したまへる御慈愛先生の御兩親に仕へたまへる御孝心聞かずして誰か其まことの御親子ならざるを知らむおのれまのあたりこれを見これをきゝて感殊に深かりきあはれ思へば早十四年の昔の夢なりけりあゝ

いにし廿五年の春なりき雪の降りたる朝師の君がりまゐりたりしにかゝる歌よみつとて示めされしを見れば

　わきも子にねやの板戸をあけさせて
　　寢なから今朝のゆきを見るかな

去年の春は御病によりて駿河臺の高田病院におはして雪の降りたるを見てよませたまひける

　まくらへに藥をおきてふしなから
　　つく／＼見たり春のあわゆき

おなしく雪の御歌ながら一つは樂しくおもしろく一はかなしくあはれなる折からの感情目に見ゆる心地してなむ

續閨秀美術家

森芳宜園

閨秀美術家と題して定期増刊花にしきに記載せしもの、外猶左に近世作家の洩れたるもの二三を補はん

▲櫻井秋山

遊女大橋より前の氷仙に至るまでは、いづれも京畿の女子でありますが、この頃は、江戸の方も、櫻井雪關とか、渡邊玄對さては森蘭齋、谷文晁、立原杏所などの名家が出てましたにつれて、女子の畫を巧にする者も多くなりました。そが中でも、櫻井雪關の娘の秋山などは錚々たる者です。

秋山は、名を雪保、字を桂月と申しますが、能く乃父の法を受けて、山水も人物も兼ねて作り、その筆がいかにも磊落に雄健で、これが婦女の手に成つたものかと疑ふほどであつた。ことに屏風とか大幅などに畫かすと、筆力いよ／＼旺にして、男子も及ぶことが出來なかつた。唯だ逸韻のないのが瑕で、識者の惜む所で

あつたのです。書にかけては、男子も及ばぬほどの腕のある秋山ですが、天二物を與へずとの喩にもれず、容貌は、非常に醜くかつたさうです。ある時のことで、何處かの書會で、酒間なるに當つて、秋山が自らその技倆に誇つて、日本國廣しといへど、妾の所天とするほどの書家は一人もないと云ふと、一座の者がどッと吹出して、お生憎さま、天下にはお前さんほどの醜い男がないから、所天のないのを御心配なさるなと云ふたので、さすがの秋山女史もぎやふんとまいつたと云ふ話があります。才色双美は得難いものと見えます。

▲町田玉嫺

秋山につゞいては、町田玉嫺などが稱すべきものであらふと思ふ。玉嫺は、名を麗花と申して、上野國の士町田某の娘で、松井某といふ士の妻になりましたが、その說の通り、まことに嫻雅の女史であつたさうです。

私が聞いた所に依ると、玉嫺の父がその主に從ふて大阪に行いた時に、玉嫺も共に從ひまして、書法を森蘭齋に受けたといふことです。玉嫺がつねに作つたのは四君子でありますが、中にも墨竹に巧で、頗る李用雲の風致を得て居りますやうです。

▲緗桃

玉嫺と列んで、巧に四君子を作つたのは、緗雲といふ女である。緗雲は、儒中の俠と稱せられた山本北山の女房で、字を如電とか申しました。玉嫺に劣らずに、太く雅趣があつたといひますが、私はまだあまり見たことがありませぬ。

▲寫山一家

谷文晁は、江戸では探幽以來の名匠で、一時天下を風靡いたしましたが、その一家の父子兄弟姉妹みな共に意を繪事に留めて、名を藝苑に擅まゝにしました。これと申すも、文晁の父の鹿谷が文學を好み、風流韻事を以て生涯を終へ、おのづと一家の者を薫陶した故に外ならふと思はれます。

文晁には、妹が二人ありました。第一の妹の秋香、名

は舜炎、字は小香といひまして、長じて中田粲堂の妻になりましたが、得意に作つたのは山水で、その筆が細くて韻致がありました。つぎの妹紅藍、名は棠子といひ、洞齋の妻になりましたが、これも畫名がありました。

文兒の妻は、林氏の女で、名は波子、號を幹々といひましたが、能く所天に學んで、蘭または竹などを作りました。またこの腹に出來た橘二といふ娘も、また蘭竹を作つて、頗る名があつたさうです。一家の女子が斯く打揃ふて、畫を以て名あつたのは、先づめづらしいと申して好い。

▲杏所の二女

また谷文兒や渡邊華山などに往來した水戸の立原杏所は、奇節のある士で、畫もなか／＼巧なものでありました。この杏所に二人の娘があつて、一人は春沙といひ、一人は春洲といひまして、杏所や華山について畫を學びまして、花鳥や草蟲を作り、大に乃父の風があつたといふことです。二人の内どちらかゞ、加州家の奥に仕へたとか聞きましたが、委しい事は存じませぬ。

▲張氏紅蘭

文政天保以後は、畫を以て名を得た女子が諸國にありました。先づ美濃で有名なのが、梁川星巖の妻の張氏紅蘭であります。紅蘭は、名は景婉、字は道華とかいひまして、何でも年の十四五の時に、星巖に嫁きましたが、能く星巖の爲す所を學び、詩を巧に作りました。その風流、氣節ともに星巖の妻たるに愧ぢないめでたい女史でありました。

紅蘭の畫は、中林竹洞に學んだといふことで、山水花鳥を兼ねて作り、風神のやさしいものです。私の家にも、亡父の囑に依つて畫いてくれた嵐峽の圖一幅を藏して居ります。

▲江馬細香

紅蘭と同じく美濃の女で、相對して名のあつたのは、大垣藩士江馬蘭齋の娘細香であります。細香、名は裊、別に湘夢と號しまして、幼時から書を讀み、頼山陽について詩を學び、また雄圖の志もあつた女史で、紅

蘭と好い一對であります。

山陽が大垣に來た時は、まだ妻がなかつたから、蘭齋が心に細香を配はしたいといふことで、内々人を賴んで細香の意見を伺はしました所が、細香が申すには、山陽先生は、姿が師であります、弟子にして師に配するやうなことが出來ませぬと、きつぱり斷つたといひます。この後も如何なる故でか、一生嫁せず、たゞ文墨を以て世を送りました。

細香の畫は、初め僧玉潾に從ふて六法を受けたと申すことで、好んで竹や蘭を寫しましたが、その筆が太く洒落で韻致があります。中にも竹は尤も手に入つたものであります。



早梅を挿して友をまつ

▲香夢

尾張の方では、勾田臺嶺の妻の香夢が畫を巧にしました。この臺嶺と申す人は、名は寛、字は文饒といひ、中林竹洞の門から出でまして、元明の古蹟を慕ひ、高致のある山水を作りました。一体、性質が淡泊で、

自ら荼貧を甘んじ、欲のない畫家であります。その詩に、「負郭曾無二二頃田一。江山賣レ畫度二年々一。荆妻猶道先生僻。幾日稀疎潤筆錢」。といふのがある。これでその平生が知られます。

この香夢は、つねに臺嶺と共に諸國に遊びましたが、尤も得意なるが白描の美人で、花卉もまた奇麗に作りました。臺嶺に死なれてからは、四方に流寓しまして、何處で死んだのかわかりませぬ。

▲吉田袖蘭

それからまた京都の方にては、大倉笠山の妻吉田袖蘭、名は佐登子といふのがある。この笠山は、一名は穀、字は國寶といひ、竹洞の門下であつて、一雙箭と呼ばれた人で、山水も花卉も共に巧なものでありました。袖蘭は、笠山の畫法を受けたものと見えて、山水や梅竹などが好いやうです。

この女は、餘ほど才女であつたさうで、畫ばかりではない、年のゆかない時から詩を作り、また書にも巧で、その外いろ〳〵の技能があつたといふことです。

▲栖鳳

その頃また和泉國の堺には、栖鳳といふ女がありました。つねに多く墨竹を作りましたが、その風神清雅なるので、世人の爲めに珍賞されました。年長じてから、一向僧の梵妻になつたといふ說があります。佳人は兎かく薄命の嘆を免れませぬ。

▲玉蘊

中國になると、先づ玉蘊を推さねばならぬ。この玉蘊は、名を豊子といひまして。備後の尾之道の人です。八田古秀について圓山派の畫法を學び、山水、人物、花鳥などを作り、その筆いかにも勁秀で、少しも脂粉くさい所がない。近世の閨秀畫家では、錚々たる者の内に數へても差支がない。

田能村竹田の書いた卜夜快語の中に、「備後小野道邑女玉蘊。姻事不レ諧。終歸二其郷一。爾後耻レ之。不二再至一京矣。山陽曰。信可レ憐也。吾實負了」。といふことがある。これで見ますると、山陽と婚姻の話でもあつたか、山陽が斷つて破談にでもしたのであらふか。それとも他の人のことでありますか。

（をわり）

科學

熱の話

女子大學講師　高田濱子

不肖なる私に科學に就いて何か話す樣にと、再三の御勸により、筆を執ることゝは成りました。去れば可成簡易に分り易く御話したいと思ひます。偖て先づ何ぞの儀式にも縁喜を祝ふて松竹梅等を飾り立てゝ、無病息災をと願ふは是人情の常で御座ります。眞に身体が何時も健かにして、頭に霜を戴くまで、天壽を全ふし、家內安全國運長久と願ふなら、第一人身に最も關係深き熱、光、空氣、食物等の事を研究し、其理を家庭の日常に應用する事が最も大切であります、故に今日は先づ熱が私共の生活に何樣な關係を有つて居るかといふことからお話致しませう。

▲熱に關する吾人の智識

一寸火鉢の上か「ストーブ」の上に手をかざして御覽なさい、一種の暖かい感が起りませう、又氷に手を觸れて御覽なさい、冷いた感覺が致しませう、此の二樣の感覺が起る原因を討ねて見ますと畢竟初めの時には或る刺激が火鉢から手の方へ參り、二度目には手から氷に移つたのであり實に此の暖と冷の感覺は氣候に夏冬の差を生ぜしむる所以であります、人は之を熱と名つけて居りますが、其本性本質に至つては未だに誰も發見した人は無いのです。或人は之は極稀薄な、重量のない、一種の流動体で、萬物の中にあつて凡ての物質に結びつく性質があるものと信んじて之を「カロリック」と名づけました。然るに近頃では又之は物質ではない唯波動である、「エテル」の中或は諸物質の分子間に起る振動が一物から他物へ段々傳はるのだと信んじられ

て居ります、斯ういふ樣な譯で私共にはまだ熱の本体が果して何物であるか判明致しませぬので、單に其現はれた結果に就て研究する樣な次第であります。

借て此奇妙不可思議なる熱は何處に存在するものかと尋ねますと之は物質の中に在つて其物質の中を自由自在に往來致し、其結果あらゆる物質の形を種々に變化せしめます。實に此熱なるものは私共の身邊に非常な變化を起します所の大勢力であります、で、此大勢力こそ即ち萬有の監督者で有らうと思はれます、而して此の驚くべき大勢力が一朝其の暴力を恣にして氣随氣儘に暴れ出した日になると夫れこそ宇宙は堪つたものでありませぬが、其處が造化の妙といふもので、之には之を支配する法則があつて、之に從つて居りますから、暴れる處が却て柔順な僕となりて、宇宙に非常な功徳を積み、人生を裨益して居るのです。

▲太陽より地上に來る熱量

夫れでは此熱の根源はと申せば誰しも先づ太陽に指を屈します通り、實に此太陽から光線と共に注ぎ出さるる熱線の分量は中々大したものです。夫れは地球上一尺四方の面積の處に一年間受ける太陽の熱量で、五千四百斤の氷を熔解する事が出來ると申す位ですから此の氷一立方尺の目方が五十四斤と致しますと、一年には一尺角で百尺の高さの氷柱を熔解して了ふ勘定です言換れば、假りに私共の地球を覆ふ百尺の厚さの氷殻があるとすれば、一年中地球が受くる太陽熱で、其氷殻を悉く熔解して了ふ事が出來るのです。

而して又御承知の通り太陽は二十五日毎に一回づゝ自轉を致しますから、太陽の何れの方面からも同樣に熱を發射して居ると考ふる事が出來ます。して見ると太陽が年々發射致します熱の總量をも容易に計算する事が出來ます。即ち假りに茲に太陽の周圍を地球の軌道位の距離の處で全く包む百尺の厚さの大氷球があるとすれば、太陽は年々此氷球を熔解する丈の熱を發散して居ります。何と大した事ではありませぬか。

斯う考へて參りますと私共は私共が普通熱する最

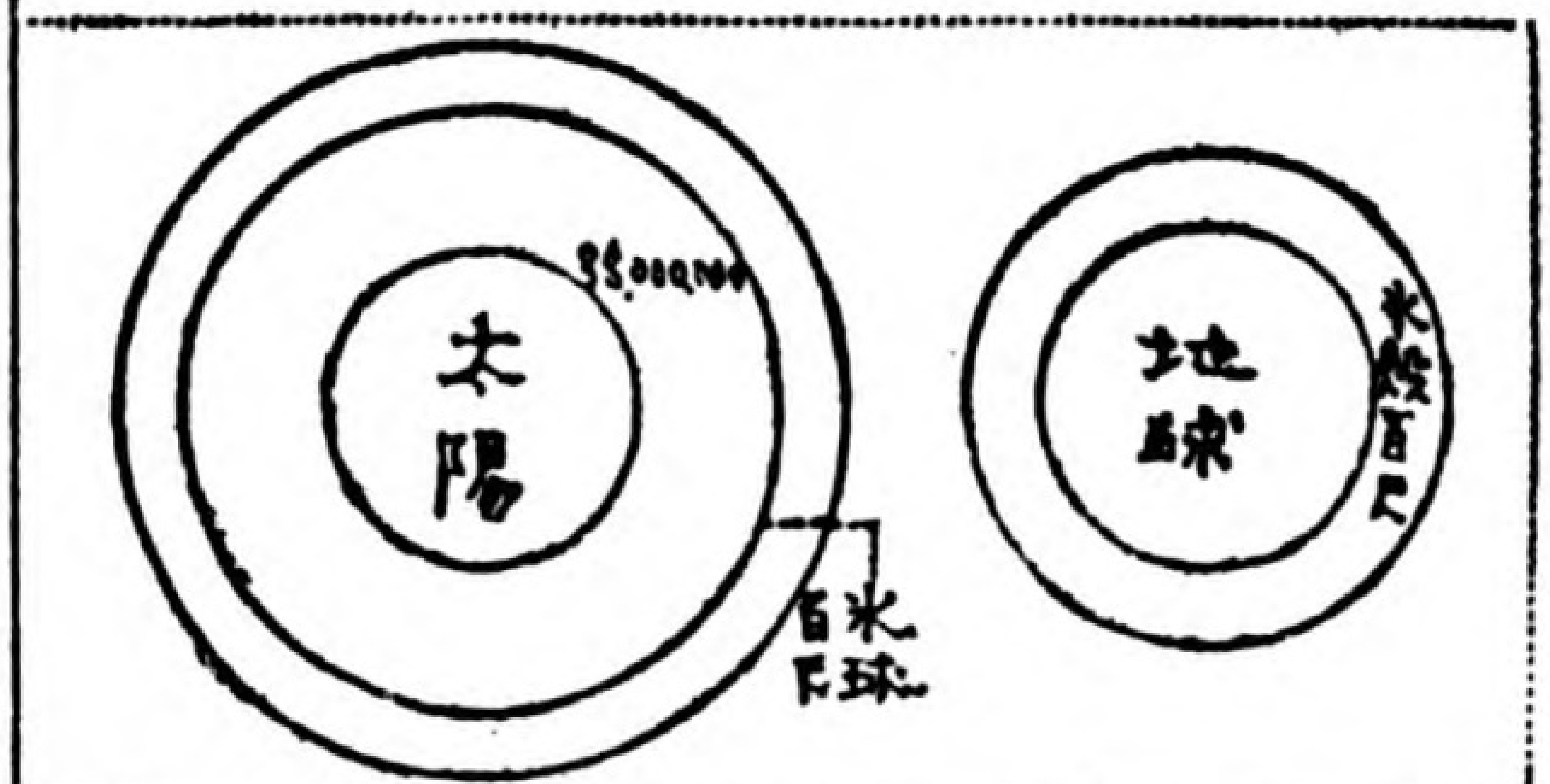
も熱き爐よりも七倍も強い熱度を有てる大爐――其火の表面が千五百万方哩の廣さを有する大火球から、百億萬哩の空間を射通して私の地球に熱が送らるるのです。此の大きな數の想像が出來ますか。何と宇宙は廣いものではありませぬか。

兎角女は量見が小さく、瑣細の事にも屈托致すものでありますから、少しは天地の宏大なる所以を知て氣分を大きく持ち、又其子女を敎育致しますにも宇內の深妙なる構造に就て敎ゆる等の事が至極大切と存じます。

▲吾人は星よりも熱を受く

太陽と熱

太陽は實に非常なる熱量を間斷なく發射するものなるが其の熱は如何にして保持せらるゝか、勿論、燃燒によりて保持せらるゝにあらず、又熱體が冷却することにより發射するにあらず、是れ全くマツスエネルギーが分子エネルギに變ずる理學的方則によるものなりといふ。又一說には太陽の熱は徐々に收縮して瓦斯狀より順次液狀或は固體に變ずるによりて補充せらるゝなりともいふ。



前にも述べました通り太陽は私共の第一の暖め主ですが、地球は此の太陽熱ばかりで暖めらるるものではありませぬ。太陽の様な大火球であれば其の放出熱量も從て多いのではありますが、其の大部分は四方の空間に發散せられまして私共の受くる量は確かに其一小部分に過ぎないのであります。併し此の四方に發散せられた熱は決して無駄に成ては了ひませぬ、廣い〳〵空間を進み〳〵んで他の星星を暖めます、すると他の星は又同じ様に自分の受け取た熱を發射しまして、所謂熱の交換が行はるゝのであります。私共の地球も此様にして單に太陽計り

でなく、凡ての羣星から熱を受けて居るのですが。其量の多き事は、若し今此星より來る熱を悉く取り去つたならば、とても此地上に動植物が生きてゐる事が出來ない程寒くなつて了ふのを見ても推し量られるのです、或人が之を研究しまして一年に太陽から地球が受ける熱が百尺の氷殼を熔融す力ありとすれば諸恒星から來る熱は能く八十五尺の厚さの氷殼を熔融しますと申します。してみれば先づ殆んど太陽と星との熱は半々と言つて宜いのであります。是れは一寸聞きますと餘り不可議に思はれて信じられぬ樣ですが、其數の多き事をお考へになつたなら御合點が參りませう。夫の夏の夜の空に銀線の流を畫し、古來幾多の詩人をして種々の想像を描かしめた、銀河でも、一度望遠鏡の力を藉りて御覽なさい、極遙かの場處に幾千萬の恒星が燦然光輝を發つて居るのを認められませう。

そして見ますと天の樣な高き處に美はしく、氣昂く、而も冷かな眼で地上の私共を瞰下す計りて何の關係もなき樣に冴へかへつて居る羣星は、其實私共に温かき熱を與へて私共の地上の幸福を増さしむる非常の助けを爲て居るのですから、此理を知て彼等を見れば其光輝は一層燦然として、イスラエルの詩仙と共に「諸の天は神の榮光をあらはし穹蒼はその手のわざをしめす」と讃美せずには居られませぬ。

▲地上に於ける熱の散布は不平均なり

御承知の通り地球は毎日地軸の上を回轉すると共に、又一年かゝつて太陽の周圍を一周致しますから、其結果熱の分布に差を生じます即ち或る處では晝は八九十度に登つても夜間は氷點近くに冷却します、又赤道近傍では一年平均温度が八十一度半、東京では十四五度であるのに、ずつと北のラブラドーと申す處では年中氷點以下になつて居ります、又同じ緯度の處でも隨分温度が異ふのであります。斯う云ふ樣に熱の散布は頗る不平均なのであります、是には種々の原因がありますが只今は申しませぬ。

▲熱は地球上の動植物分布に與りて力あり

熱帶地方では棕櫚の大木や、葉の濶い芭蕉や、又は幹から幹と攀ぢ登て、船の索繩の樣になつて居る纏繞莖の植物などが青々と繁つて居ます。夫れから少し南又は北に向つて進むに從ひ、蜜柑、佛手柑等の常綠木が處得顏に繁茂して居ります。其次には落葉樹で櫟、胡桃の樣なものがあり常春藤の類もあります。夫れより兩極に近づくに從ひ羊齒、松等の針葉樹となり、段々小さき灌木となり、次には蘚苔の如き小植物が雪の間に僅に生存してゐるのを見ますが、果ては唯一面皚々たる白雪の曠原になつて了ふのです。

熱と動物の關係も之と同じで、赤道から兩極に至る間、氣候の異なるに從ひ、種々な種類が繁殖して居ります。例へば熱帶の沙漠中には獅子が棲息し、寒帶の氷原中には白熊が生活して居るやうに。それから或種類になりますと夏冬其身に纏ふ衣を着替へます、又鳥などでも氣候に從ふて處を移します。併し是等の動物の堪へ得る温度には限りがあるから、夫れ以外の處に移されると非常に苦んで、終には死んで了ひます、

▲熱と人の發達との關係

人類も亦此温度の制裁を免るゝ事が出來ませぬ。國の異なるに從ひ其國民の容貌、性質等が大に異なつて居る事は人の皆知る處ですが、其重なる原因は矢張熱の關係によるのであります。兩極地方の嚴寒は、住民の生長を妨げ身丈は低く頭ばかり大きく、四肢は短くして實に無格向極る姿、それに狼や熊の毛皮を着し居りますから、恰然眞の獸が出て來た樣に見えて實に憫然に思はれますが、是に引かへて百千鳥囀り、蒲公英、菫菜の咲き亂るゝ暖國に成りまするとー般に住民の丈も高くなり、四肢の形も釣合よくなり、容貌も美はしくなり、動作も自由になります、故に之を前者に比較しますと、同じ人類でも、數等上に位してゐるのであります。

▲熱。と。衣。服。

各人種の經驗致します溫度の差を、最も、能く現はすものは衣服であります。西印度諸島に住む土人は布片を一つ身に纏ふ許ですが、それでさへ倘は暑さに苦しみ、グリインランドの人は時には氷點以下百度にもなる事があるから、狐羊狸熊等の毛皮を幾重となく着用して居ますが、夫でもまだ堪へ切れないで凍死する相です。此憐な土人の鬚髯には、鼻息か凝結して、氷柱が下つてゐる、夫れで氷上を蹣跚て居る有様は恰も死の王と非常な苦戰でもして居るものとしか思はれないと或人が申した事があります。

▲溫。度。と。人。の。性。質。

溫度の私共に及ぼす影響を申しますと寒氣は身体を麻痺させ、又感覺を鈍らせますが、熱は血管を膨脹させて、血液の循環を助け、外部の感覺をも受け易からしむるものであります。故に寒國の人は概して感情鈍く、性質愚昧にして、其住する土地の空漠なるが如く、其思想力も活動力も乏しく、極冷淡な無頓着なものです。之に反して熱帶地方の人種は非常に感じ易く、怠惰で柔弱でありますが物に激する時には往々驚く様な恐ろしき事をも仕兼ねないのであります。故に感情とか想像とかは劇しくて大袈裟で、理性の之を支配することなく。何でも目立つた奇らしき事を好む質であります。又溫帶の人には此兩極端の特質に偏して居りませぬ故に、怜悧で、穩かで活潑で、事を處置するにも激烈な事なく、主義もあり、忍耐もあり、思想も高倘で、想像も道理が支配して居りますから常道を離れませぬ。如斯る有樣ですから外界の影響は單に人身の上にのみ止まらずして、其精神上にも大なる影響を及す事が分ります。是は私達でも氣候の變化につれて幾分か經驗する處であります。

此樣に氣候と人の性質との間には大なる關係があるとしますれば、由來歷史上の大人物は如何なる地方から重に出て居るかと云ふ問が起ります。併し私が申す

偉大の人物とは何か一時の出來事の爲めに俄に花火の如くポッと顯はれ直きに消えて了ふ種類の人ではなく、眞に其國民の指導者として、其言行若くは其威風が人を感化し人を導いて之を支配した處の大人物を申すのです。此樣な人物は中々屢々は出ませぬ。一世紀に一人とか三百年即ち三世紀に二人とか、天が格別の仕事ある場合に起たしむるのであります。斯樣の偉人は未だ南半球には皆無とは申しませぬが殆んど見ない位で、大抵は皆北半球に然も溫帶地方の僅かの緯度の間に屬して居ります。

▲薪炭の供給と社會の有樣

薪炭は人造熱を起す材料でありますから、其供給の多寡は種々な方面から大した影響を社會に及ぼします、一國民の性質までが之に依て變化される位であります。先づ薪炭の材料の少き處では、家屋は小さく、多人數の家族が、其中に群居して、成丈け外氣を室內に入れぬ樣にと工夫致しますから、自然と其人々は身体が矮小になり、智覺が愚鈍になります。夫のラプランド人の如きは長い冬の間油煙の甚い魚燈の「ランプ」を用ゐて、漸く暖を取りますから、其結果そこに住ふ人は皆眼病に惱まされてゐます。又佛國に薪炭の不充分なのは、彼の粹を氣取る巴里人を驅つて、演劇場コーヒー店に娛樂を求むる惡風習を造らしめし一大原因とは成つたのですが、若し是れが薪炭の澤山ある處なれば、家庭に於て暖き火爐を擁して一家團欒の快を取るに至らしめた事だらうと思はれます。

▲溫度と言語

熱と空氣は唯に人身に影響を及ぼすのみならで、言語の上にも大なる影響を及ぼします假令ば北國の人は物を言ふ時に大く口を開きませんで、其言語の中に子音の多いのは何故かと申すと、寒い冷い空氣を吸込む事を恐れるが爲め知らず識らず口を開かぬ習慣がついたのであります。之に反して暖國の人の言語は、何となく柔かで母音に富んで居ます。斯いふ譯ですから彼の

温和な心地よい空氣を呼吸した希臘人が、雄辨術で一時世界の人々を驚愕せしめたのも偶然ではないのであります。

▲人は自ら氣候を造り得るか

前述の如く熱は實に非常な大勢力を有て居るものですが、人は身に之れが侵襲を防ぐの具なく、又其破壞力を防禦する策もなく、唯其爲す所に任せねばならぬ樣な次第ではありますが、人には智識が與へられて居りますから、之を錬磨すれば又能く宇宙をも支配し得るものであります。既に人は熱に關する性質結果等を了知して、自ら熱を起し、且つ之を調節するの法則迄も研究して、或程度迄は氣候温度の變化より來る害を免れ得る樣になつて居るのです。此人造氣候の調節宜しきを得ると得ざると、即ち暖室法の奈何に據て其國の進歩の程度が大抵卜知せらるゝと申す位ですから、餘程大切なことであります。

是迄の所は熱の根源と、地上幷に人類上に及ぼす影響を御話致したのですが、是よりは此の熱が私共の家庭にとつて最も善良なる僕として如何に使用し得べきや、又我國の家庭をして眞に温かき一家團欒の場處たらしむるには如何にして可なるかを聊か研究して見やうと思ひます。

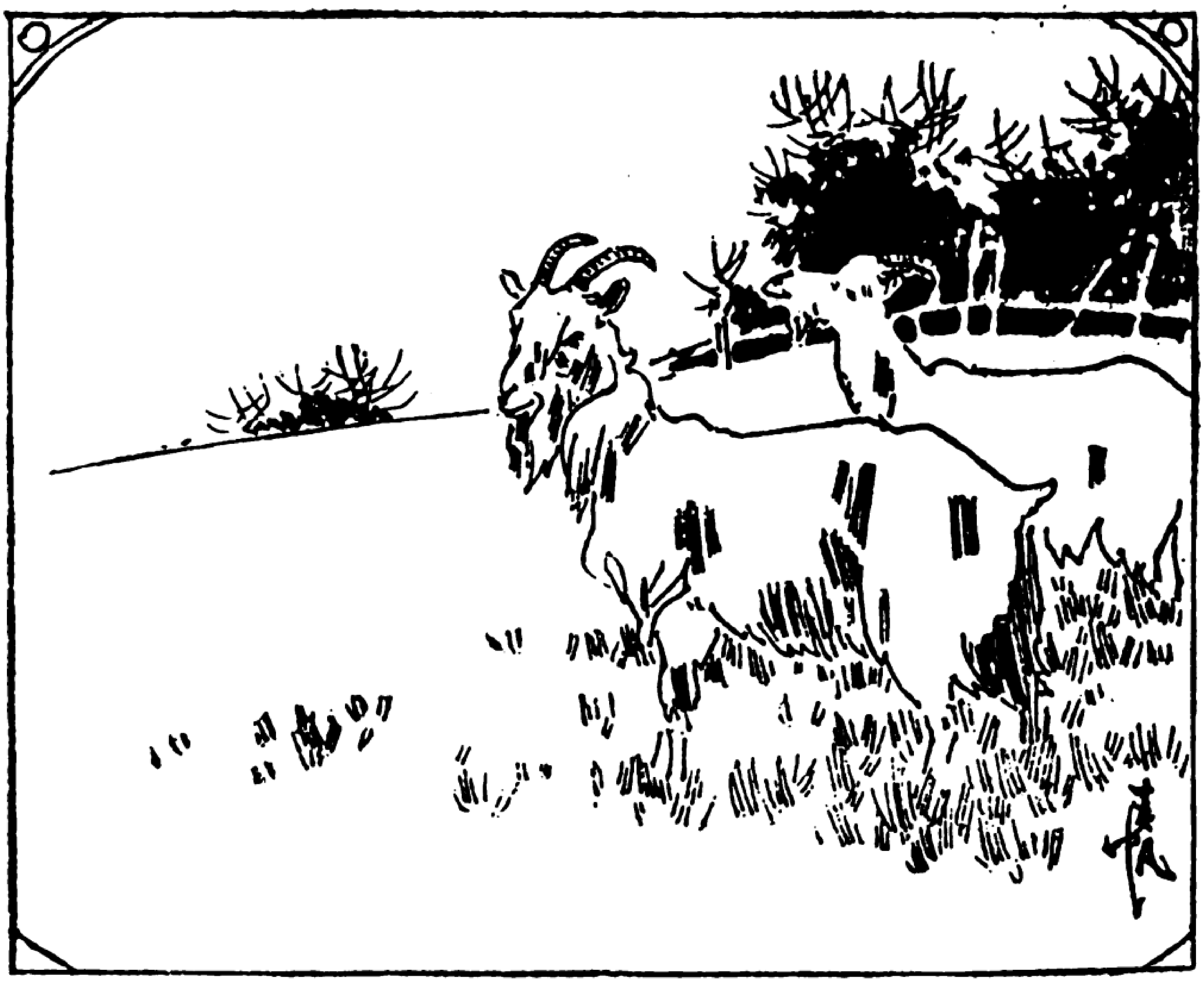
滿洲の動物

佐藤禮介

羊は滿洲蒙古の特種産物でその毛は毛布となり織物となりその肉は食物となりて需用は實に廣いものですが扨その体は大きい犬位で、全身には極めて柔かな長い毛が澤山あります、其の毛には脂を含んで居りますから。兎角塵埃が附き易いので、見たところが大層穢い頭は割合に小さく、誠に優しくおとなしい形をして居ります、頭の上には二本の角を持つて居るのもあり全く角を持たぬ種類もある、角のある種類でも其の角は牛の角の樣な形でなく螺旋の樣に曲つて其の先が後の

方に向つて居ります、脚は隨分細く弱々しく尾は甚だ短く外から殆んど見えぬ程です、各々の脚の先には大きな蹄があつて地面を走り廻わつても傷まぬ樣になつて居ります。

動物園などに行ひて羊が物を食べる處を注意して見た人は羊の口には上顎に前齒のないことに氣がつくでしやう、羊は實に齒の列びの奇妙な獸で下顎には前齒が揃つて居りますが上顎には之と嚙み合すべき前齒がなくて只堅い顎ばかりがあるのみです、其れで羊が草を食べる時は唇で草の葉や莖



などを上顎の堅い所と下顎の前齒とでむしり取つて奥齒で嚙むのであります。

△羊は何んな性質の獸ですか

羊は草食獸ですが、其の食べ方が犬や馬など〻異つて居ります、即ち犬や馬は一度呑み下した食物は直に胃の腑で消化しますが、羊は草を食べる時に只大急ぎでロク〱嚙みもせずに呑み込みまして、其の後、地面に横はつて前に呑み込んだ草を胃の腑から口の中に吐き戻します、此の度こそは、

よく〳〵食物を細かに嚙み砕いて呑みます、其れは牛の食物を食べるのと同じ仕方で之を反芻と申します、羊、牛は勿論鹿や駱駝なども皆斯樣な性質の獸ですから是等を總稱して反芻獸と云ひます。

羊は温順な性質で多數が群をなして生活することを好むものです、至つて臆病な性質ですから猫に出逢つても犬に吠されても直に逃げて仕舞ひます、群をなして居つても喧嘩、爭鬪をすることなく、皆仲よく連れ立つて遊んで居ります、又智慧は餘りないもので一疋の羊が側路に迷ひ込めば他の殘りのものも皆之に附き從て全体の群が遠方に迷つて行くことなどがあります、扨て蒙古で牧畜の法は皆放任主義です、これは古來の遺法で山野に放ち飼にして置くのです始めて蒙古へ旅したものは見渡す限りの山々の半腹に雪の降つたかと思ふばかり白くうごめくものがあるこれは皆羊の群です、この羊群を監督するのは犬で朝夕羊群を保護してよく其の勤めを盡すのは感心なものです、歐羅巴や亞米利加などの寒い所では牝羊が兒を生むこと一年に一度ですが、暖い所では一年に二回產むことがある、兒を孕んでから五ヶ月目で分娩します、兒は生れると只乳ばかりを飲んで居りますが、十日か十二日目から初めて軟かな草を食ひ始めます、生れてから二三ヶ月の間は乳と草とで養はれますが其の後は全く乳を離れて草ばかりを食べます。

羊は大層成長の速かなもので今年の春に生れた兒は翌年の春になれば兒を生みます、丁寧に飼ひ置けば十四五歲までは生きる、通例九歲か十歲になれば齒が大抵無くなり、体力もだん〳〵衰へて良い羊毛を生せぬ樣になりますから、斯樣になる前に充分肥やして肉用にする。

△羊毛と其の剪み方

野原に自然に棲んで居る羊では毛に二種あります、即ち剛い毛が澤山あつて柔い毛は少い然るに人に飼はれた羊では其の反對で柔い毛が非常に多く剛い毛は極めて少い、柔毛は多少曲がつて居て柔かく剛毛は眞直で頗る剛くあります、羊毛の色は白、茶、黒などの

種類ありますが其の内、白色のものが最も多く且つ最も貴ばれて居ります。

西洋諸國で羊毛を剪む前には羊を奇麗な小川に追ひ入れて能く其の毛を洗つて躰に着いてある塵や泥を落すのであります、毛洗は毎年六月頃に致します、毛洗が濟むと直に毛を剪むこともありますが通例は毛洗が濟んでから三四日も過ぎてから行ひます、羊は大層、毛を剪まるゝのを厭がりますが之を押へて体を傷けぬ樣に且つ毛の剪み殘りがない樣にするには中々熟練を要する。又蒙古人が羊を屠るには極めて簡單な方法を取る、決して人に惡感情を起さす樣な事はない、それは唯一個の小刀を用ゆるのみ小刀を用ゐて腋の部を切開するそして手をさし入れて心臟を抜き出すのみである、それ故羊は一聲だも出さずに斃れて仕舞ひます、誠に單簡なものです。

羊毛を剪み取るのは一年に一度が通例ですが又一年に二回行ふこともある一回剪むよりも二回剪む方が無論毛を得る分量が多くて飼主には利益である、二度目に剪む時は時節が遲くなつて間もなく冬になるので、羊は寒さを感じて病にかゝります。

△羊は吾等に何を與へますか

羊は吾々に大なる効益を與へる、羊毛の縮みて柔かなものは羅紗、フランネルを織り。毛の縮みが少ないものでは毛絲、モスリン、肩掛等を織ります。

羊の肉は中々美味なるもので支那でも大層之を賞美し「羊頭を掲げて狗肉を賣る」など申す言葉もある位です、又其の脂肪も甚だ必要なる產物で或る種類では肋や腰の部分に二三寸の厚さのある脂肪の層がある、此の脂肪は精製して牛酪の代用としたり又は蠟燭を作る原料とします、毛を切り去つた皮は革として書籍の表紙や手袋を作るに用ひられます、其の蹄からは膠を製し骨は肥料に供します、体の各部分何れも捨る所がなく、實に有用な獸であります、で彼の蒙古地方では土人唯一の食物はこの羊で、一戸多きは千頭以上少くも五六十頭を必ず飼育します、故に北京へ輸出する羊毛羊皮の數は實に非常なもので毎日駱駝數千頭絡繹と

して織るがことしてである。滿洲は非常に寒い處であるから冬より春へかけて土人の服には皆裏へ羊皮をつけて寒を凌いでゐます。

△羊と山羊との比較

羊は体質の弱いもので我が國に廣く繁殖しませぬが、山羊は之に反して体頗る強いから、我が國の各地方で少しづゝ飼つて居ります、今羊と山羊とを比べて見ると山羊は羊よりも体はやゝ細く脚は羊よりも丈夫です頭には牝牡とも大きい角がありて其の角は羊の角の樣に圓筒の形をせずに左右から押つぶされた樣に扁くなつて、曲りが甚しくありませぬ、牡の顎の下には長い鬚がある、

羊は近世に外國から輸入したものであるが山羊は古代から我が國で飼つた樣です、琉球大島などでは昔から之を飼つて居つたものです、しかしその目的は只兒供の遊戲の伴とする位でした、

山羊も亦羊に似て中々効用の多い家畜で毛の長くて良い種類では羊毛にも劣らぬ良質の毛を生じます、之で以て種々な織物を作ります、俗にカシメルと稱する織物は印度のカシミヤ地方有名なヒマラヤ山の麓に產する山羊の毛で織つたものです。羊の類に乳汁を澤山出すものがあるが、乳を搾る爲には餘り用ひませぬ、然るに此の山羊は隨分多量の乳を出すので乳用山羊と稱するものは一日に二三升を出す蒙古では羊の乳を唯一の飲料としてゐます。山羊の革は上等の手袋又は靴に作られますし、其の肉も中々美味であります。

羊に比べると山羊は餘程丈夫であつて寒氣に堪へ、飼料が惡しくても体が弱ることなく羊よりは餘程飼ひ易くあります。滿洲地方では草といつても日本内地の如く軟草でなくて恰も芝のやうな草ですが、それでも羊はよくこれを噛みこなします。

（完）

入輸の羊

我が國には昔時羊は、なかつたのですが、維新前に支那から輸入したこと、和蘭から輸入したことがあります、併し其の頃は只珍しい動物として飼つて置いただけに過ぎないのです、然るに明治八年に大久保利通公が歐羅巴から多數の羊を輸入して下總國に牧羊場を設けたのが、我が國で毛用、肉用の羊を飼つた始であります。

譯 解 實 習

Queen Victoria.

ヴォクトリア女王

今回よりは、英國のさきの女王ヴォクトリア陛下が未だ王位に登られない幼時の、所謂“お孃さま”の時の御話しを掲げます。原文は Walton といふ人の書いたのを餘程改訂して掲げ、極めて平易に、幼少の孃さまがたにも讀まれるやうにしたものです。

It was in the month of May, in the year 1819, that the little girl of whom I am going to write was born. But I do not think any one guessed at that time how much she would be loved, nor how many would keep her birthday in years to come.

これから私が書かんとする小さい孃さまのお生まれになつたのは千八百十九年の五月の月でした。併し未來に如何ばかり此お方が愛せられ、また如何ばかり多數の人々がこの人の誕生日を行ふだろうか、といふ事を其當時に誰かが推量したとは私は思ひませぬ。

She was born in the solemn old palace of Kenshington. Her Father and Mother were the Duke and Duchess of Kent, and her Grandfather was the good old King George the Third.

この方はケンシントンの莊嚴な古き宮でお生れになりました。その父君と母君とはケントの公爵及び夫人で、そしてお祖父樣は、善良な老王ジョーヂ三世でございました。

When the little princess was about six months old, she was taken by her mother to a pretty palace in Devonshire, and whilst they were there, the poor baby was very nearly killed. Her nurse was carrying her about the nursery, when suddenly she was started by the sound of a gun, and the shot came whizzing in at the nursery window, and passed just over the head of the little Princess.

小さい姬樣が殆むど六ヶ月にお成りなすつた時、御母君がデヴォンシャイア州の奇麗な宮に姬君をお連れになりました。そして皆その處に居られました間に、あはれお兒さまは、おほかた殺されかけました。姬の乳母は養育所内を抱き歩るいて居りました。その時不意に姬君は鐵砲の音で驚かされました。そして丸はヒューといつて養育所の窓から中へ入り來り、ちやうど、小さいお姬さまの頭上を掠めて飛びました。

Who had fired the gun? A mischievous boy, who was amusing himself by shooting sparrows near the house, and who little guessed the mischief he had so nearly done. It would have been a sad day for the Duke and Duchess of Kent if their little one had been shot. And it would have been a day of terrible loss for England. But God watched over the fair little head, and the child was unhurt, and knew nothing of her danger.

誰が鐵砲を打たのでしたか？ひとりの惡戯な小供が、其家の近傍で雀を打って慰みにして居たので、むはや爲でかさうとした其惡戯は思ひも寄らなかつたのです。ケントの公爵も夫人も、(即ち女皇の兩親)若しその小さいお方が鐵砲に射られなすつたら大變なお悲嘆でしたらう。また英吉利の國に取ては恐ろしき損害の塲合であつたでしやう。併しながら神様は美しき小さいお頭の上で御照覽あつたので、お小供さまは傷もうけず、其危險かつた事も少しも御存知ありませんでした。

此の度各女學生の作文或ひはてがみの文なぞを撰みて讀者へ御紹介致し度きかんがへにて始めに立教女學校生の内より一名の御作文を頂きましたが元よりなる可く教師方の御筆の入らぬまゝにて出し其御實力のある所を其のまゝ掲載致す方が宜しき事と存じます金玉の如き文とは違ひ或ひはあやまちがあるかも知れません其の御つもりにて御覽を願ひます

(てい子)

東京築地立教女學校高等第二年生　樫澤かれ

No. 26 Akashicho,
Kyobashiku, Tokyo.
Jan. 13th. 1904.

My dear Miss Sone.

I can hardly tell you of the real joy that your last letter gave me. I read and re-read it.

I am very glad that you and misses Saito and Hoshi are quite well.

Ever since I parted from you, I have missed you very much indeed.

How do you like Sendai? Did you visit Matsushima?

先日の御文いかばかり嬉しく拜見いたせしかは筆にも盡されず唯々繰り返し拜讀致し候。御許様はじめ星様にも齋藤様にも御機嫌美はしくおはします由御目出度存し上候。過ぐる日御別れ申せしより日日御なつかしく思ひ暮し居り候。

仙臺は如何に候や。松島はゝや御見物遊され候や。毎週ピアノの御稽古は誠に御結構の御事に御座候さぞ々々おもしろき御事ならんと御察し申し上候が、さにては候は

I am so glad to hear that you have Piano lessons every week. It must be very interesting. How do you like it?

How I wish I could just come to see you all and have a nice talk!

I have much to tell you, but I can not now, as I have no time, so I will write you more next time.

Please give my kind regards to misses Saito and Hoshi.

With my best wishes to you,

Your loving friend,
Kane Umezawa.

すや。御地に參り御目もじの上くさぐさの御話致し度と、それのみ願はしく御座候。

申上度事は山々御座候へども、今は時も御座なく候まゝ、重ねて申上ぐべく候。乍憚星様齋藤様へくれぐれも宜しく御傳言下され度願上候。

一月十三日

梅澤かね

曾根榮子様
御許に

東京築地立教女學校高等第二年生　武富きく

Spring.

Spring has come. All the trees have put forth their green leaves and tender twigs. The sky is so clear, and the wind is very soft, and the birds are singing merrily here and there. Now the cherry blossoms, Japan's pride, are nearly all out. Mukojima and Koganei are very famous for cherries, and people are going there to see them. How pleasant it is to go to see those beautiful blossoms or to go out to the meadows with some friends and gather pretty wild flowers smiling there in the grass!

Undoubtedly spring is the nicest time of the year.

春

春は來りぬ、草木はみな綠葉嫩芽を生しぬ、空には塵ばかりのくもりもなく、吹く風もそよそよと、百鳥のをちこちに囀るこゑもおかし、我日の本のほこりの花とめづる櫻花はさきそろひぬ、向島、小金井はこの花に名高きところなれば、花見んとて行く人多し、このうるはしき花見んとて出て行くも、友打かたらひて、野邊に足をはこび、笑める草花など摘むも、げに樂しきわざぞかし、一とせの中に、いとも樂しきは春なりかし。

眼の記臆 (博物の部)



ウサギ



ネズミ



キツネ



イノコ



ヒヽ



ヰノシヽ

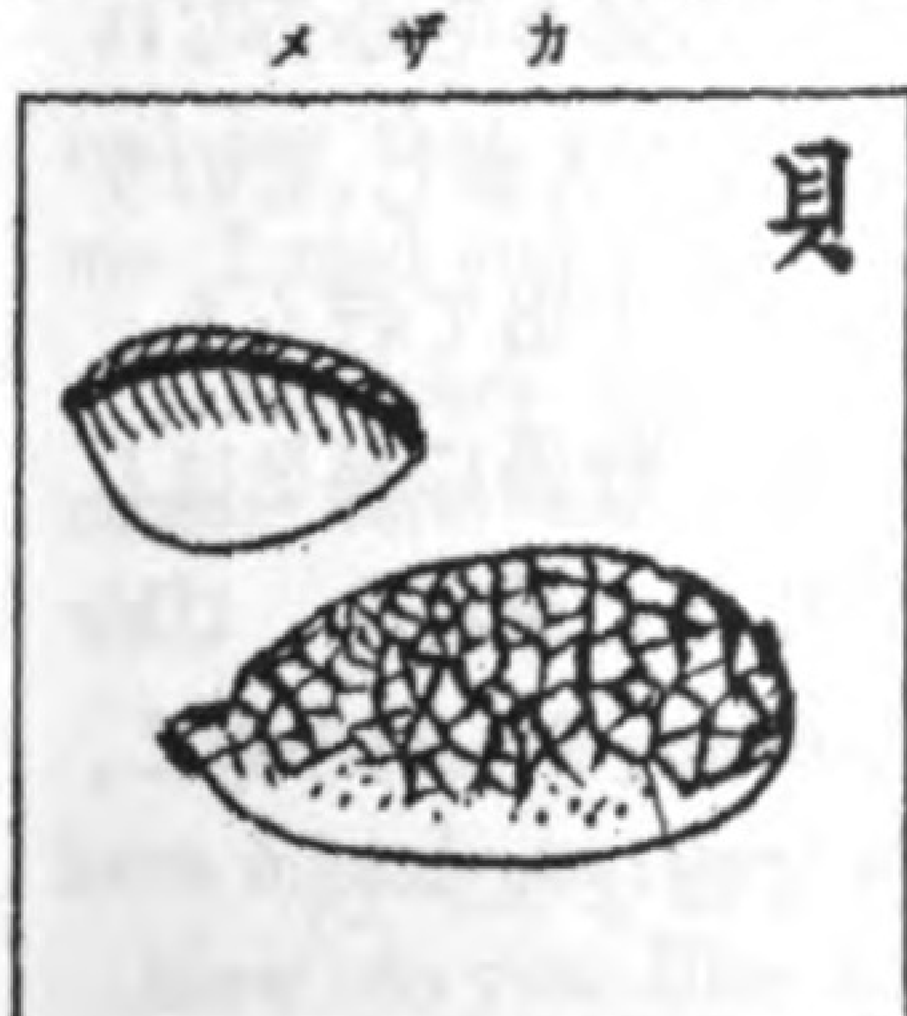

カザメ



ホタテガヒ



カブトガニ



カヒ



ニナ



ヤドカリ

月旦

家庭所見　新年の新聞雜誌

本年は辰年といふを以て全國各新聞いづれも「龍」に因める記事、繪畫を以て紙面を飾りたるは例年の趣向にして一々いふまでもなく又御題によりて「岩上松」を様々に意匠したるも多かりしが家庭の讀物として妙趣向の記事も隨分多種なりし、まづ

▲日本新聞

本紙二十頁、繪附錄は尤も鮮麗高潔なるアートタイプ三色版の花譜、是れは本文「近世の印刷術」に因みたるものにて日本印刷術の進歩を徵證すべき好個の標本なりし、一見友仙摸樣の如く極めて精巧緻密のものにして人の色眼を喜ばすに足るべきものなるも、繪附錄として奇拔の趣向かは知らねど素人眼には物足らぬ心地す、扨本文は日本新聞獨特の考證的記事多かりしが、就中世の讀書眼を飽かしむるに足るべきは雪嶺氏の「龍史」を始めとして「龍百題」――「群芳競研」――「近世の印刷術」――「名家の大學意見」――「新桃源」等なりし特に雪嶺先生の「龍史」は引證該博、考據明確にして古來龍に對する世界各國人の觀念を網羅採集し、幷にその起原、由來を祥述したるものにして記事尤も力あるものなりし。

▲時事新報

本紙二十八頁、繪附錄は「こだま」と題する洋畫額面大の石版刷、記事中の見物は「龍と繪摸樣」――「未開人の船」――「水仙花かゞみ」――「北京の正月」――「貧民の正月」――「懸賞間違ひ繪さがし」等にて材料豐富趣味多饒なりし。

△北京の正月

時事新報の社交的記事數ある中に北京の正月は家庭の讀物として極てよし今其一節を轉載せん

△年始廻り　大概は一日から五日迄の間に拜年と云つて親戚知人の家へ年始廻りをするが日本の樣に到る所膳を据ゑて飲むなどの事は殆どない隨て特別に酒肴の用意はしてない、先づ家へはいると俯佛

……國旗や親位牌などを飾つてある所……の前に並で其れから家人に對し新年々々と唱へながら三拜禮をする尤も親戚のものならば何よりも先きに祖先の位牌のある所へ行つて此所では三拜ではない四拜して四本線香を立てると定めてある、其れから又家の下僕などが御挨拶に出て來ると必ず何か御年玉を與る事になつて居る是れはなか／＼迷惑する其れが爲め年始には行きたくても懐の温くない爲めに見合はす連中もある自身で廻らないものは名刺丈けを送る自身で行つても門の外から名刺を投げ込んで歸るものも多い、官吏は五日間の内一日を擇んで夫々所屬の役所に集まりて互に年賀を述べる丁度日本の互禮會と同じもので之を團拜と云ふ但し此所にも酒肴の用意はないのである、女は如何事があつても決して年始廻りをしない是れは女は陰險であるからお目出たい正月に人の家へはいるのは不吉であるといふ理由だろうである、假令ひ五日を過ぎても正月一杯は年始廻り差支ないのであるが妙に元日に歩き廻はるものが少ない是は其替で大晦日は誰でも皆徹夜をする例になつて居るのであるから歩きたくも睡くて歩けるものでない元日早々昼寝をやるものが隨分澤山ある

△**財神の祭り**　流石は支那丈けあつて何處の家へ行つても財神を祭つてない家はない二日には早朝果物菓子杯の御供物をして香をたいて御祭りをなし其れから財神廟へ詣り馬蹄銀の形を紙で拵らへたものを神前に御供へをする是れは　進財と云つて去年の正月に神様から御金を借りた御陰で去年一年は大變御金が儲かつたから今元金を御返却致すと云ふ意味である譯で又借財と云つて今年御金が儲かる樣に暫時拜借して參りますと云つて供へてある銀子の馬蹄銀を頂いて行く奴もある隨分馬鹿げた御話であるが商賣人は眞面目でやつて居るのである此日は市中が中々賑やかである

△**食事**　元日から五日までは全く飯を炊はない上は皇帝より下庶民に至るまで餑々と云つて外が饂飩粉、餡が豚肉と韮若しくは羊肉と葱で編笠の樣な形の長一寸位の饅頭見た樣なものを食ふ是れは御目出度と云ふ意味でなく全く餘儀ないのである、と云ふのは刃物は兇器であるから之を動かすは不吉である、だから厨刀も正月五日間は決して用ひる事はならないと云ふ事になつて居る其れで菜の料理が出來ない、されぱとて五日分の菜を前以て用意して置く事も出來なければ又菜なしで五日間飯を食ふのも苦しい、所が餑々ならば前以て五日分の用意をして置くことが出來、いざ食ふ段になつて湯煮をすれば宜しいのみならず誰も好きな饂飩と豚とを一時に食ふのであると云ふ理由から來たのだろうであるが五日間これぱかりでは飽くので近頃は二日からは内所で料理をやると云ふ事である

▲**讀賣新聞**

本紙十八頁、此新聞には新年記事の外懸賞短篇小説、懸賞喜劇脚本、懸賞繪畫、懸賞論文等にて紙面を賑はしたるが就中婦人の讀むべきは女子の新職業なりし、これは女子大學の生徒の記述に成りたるものなるが女子の職業に就て別段新方面の開拓を唱道したるものにはあらざれども、今日新日本の婦人が家庭に處し社會に處するに就てこれに伴ふ職業を如何に見るか

といふの點を說明したるものなりか說は平凡にして奇拔ならざれ共、よく我國現在の事情に適應したる穩當の議論たるを失はざりし、他の一篇は女子の職業に就て婦人の天性、固有の性情より說き及ぼしたるものにて前者に比すれば稍や斬新の說なるも女子の職業に就て刻下の須要に應ずべき實際的の讀物としては滿足し難きものなりし。

▲東京朝日新聞

本紙十二頁、附錄「君が代」は各皇族方十五名の御寄せ書にして本文中趣味ある記事は志賀學士の「巖上松」——坪井博士の「木の葉」——本田博士の「松の話」——神保博士の「岩の話」——本居侍講の「歌の話」等いづれも吾人の讀みて飽かざる有益の記事なりき即ち神保博士の岩に就ての話の一片を玆に紹介せん

△岩の質

岩の外形が時として蛙の如きも、夫婦の如きも、是れ決して學問上の價値あるに非ずして、空しく歌人、詩人、其他俗輩を喜ばしむに過ぎず、之に反して其天然の割れ方、裂け方の如きは、大に岩石の生じたる時の有樣を知らしめ、且つ岩石を區別するの價あり、

然れども、其區別に於て最も肝要なるは、岩石の質にありて、岩石を成したる細粗各種の粒が、果して如何なる物なるやを知るを以て、第一の要件とす、

何を以てか之を知る、顯微鏡を用ひ岩石を見て、之を知り得るなり、人或は頤はん、是れ「葭の髓から天井を覗く」と何の異る所かある、「顯微鏡は細粒を見るに適して大山を望むの具に非ず」と、然れども一種の岩石皆く大山を成し、一細片の岩石能く其全體の質を表はす、更に之を顯微鏡にて覗けば其中に在りて全岩を爲す所の細粒をも盡く明かにし得るなり、

黑くして薄く割り易き岩は決して學校用の石盤の石に限らず、專門家は顯微鏡に因りて、之を類別して、多くの種類に分つ、蓋し一々其質を詳にするが故なり、

「某國」に金色の石あり、丸き粒を爲して岩の間に交れり、是れ何者なるや」と問ふが如きは、俗談中に屢々耳にする處なれ共、問題の條件雖々を解するに足らず、蓋し彼者は石の質を知らざるなり、岩石を顯微鏡にて見る時は、之を磨りて薄き物に造り、自然透明になりて、之を通じて新聞紙をも讀み得るに至らしめざるべからず、此薄き物を硝子板に貼りて「薄片」と名づけ、之を見るに適する顯微鏡は、其管に多くの裝置を加へ又多くの附屬品ありて價高く、之に比すれば普通の生物學用の小さき簡單の顯微鏡は、殆んど庖厨の火吹竹を眼に當て、物を觀るの感あり、

岩石用の顯微鏡にて、岩石の薄片を見れば、其中の粒を見分け、且つ其粒の集まりたる組織の狀態を知り得るなり、其一々の粒を鑛物と名づく、然るに鑛物の名稱に簡單なる俗稱少ければ、其鑛物に依り命名せる岩石名も亦困難にして、田夫野人の耳に入り難きは岩石

學の一大短所なりと言はざるを得ず、借て岩石に名を下すには顯微鏡のみにて足るや、否々然らず、此上に尚は其天然に現はれたる樣を見ざるべからず化學上の分析も亦時に必要なり、

▲大阪毎日新聞

本紙二十八頁、繪附錄「都の花」、「大双六」記事尤も豐富、中に就て重野博士の「龍の話」——松村奮伯の「天龍寺の龍」——奥村氏の「新美人國」——「龍を實見したる人の話」——「英國男女の交際」——等社會 幷に家庭の讀物として尤も趣味深きものなりし

△新婦人國

◎男女孰れか優る

一傑巴里に負ぬ氣の女性ありて、これも物好の若紳士を捉へて、男女優劣を論らひたることあんめり、頸に二三本の青筋をぬたくらせ、釣上つたる目元に嘲高を示して、例の辯舌にツベコベと、「解せられな紳士、女性が殿方に劣りたるは神の約束にて候ぞ、神世界を造り給へる時何んと曰ひしや、卑きより漸く貴きに及びて萬物を作爲せりと、かくて最初には地球、次では魚、鳥および動物と經て、夫より男性、然る後女性といへる順序なりしならずや、而かも殿方は土にて造り給へりしかど、女性はその土にて造りたる殿方より、更にその肋骨を取つて造られしこと、創世紀には明記されたり」と意氣昂然とは述べしなる、紳士カラ／＼と打笑ひ「いしくもいひけるよ、されどこの世界にあつて、何者が淋しく林檎の盗喰をばしたりしか、そはアダムにあらずしてイブなり、夫の誡を得聞ずして、はしたなく盗喰したるは妻なり、アヽ女性は由來情硬の意地強き、それは／＼度し難き代物なりと知り給へ」ダツと許にシャンパンの杯を煽りて憎さげに打見やる、女性塔りかれて膝逆ませ、「否、否如何に歎き給ふとも、女性こそ神の造物中最高位に置かれたるものなれ、來るべき時代の養育者なる大責任は、氣随氣儘懶惰放逸の殿方に托し申さるべき、神は人を造り給へり、女性は人を養育す、殿方は唯パンを求むるのみにて事足れり」。

◎理想の夫

女性の氣焔稍高まりて、頰には早く紅を潮しつゝ、常から男前を鼻にかけて、ともすれば飾り勝の紳士が面、今日こそは散々に引剝して臭うすと、鋭鋒に嘲り立つ、「アノ小鳥を見給はずや、雌鳥が巢に籠めて、養兒の務をなせる間、雄鳥は毎日その傍に添うて、絶間なく囀高く吟じては、ひたぶるにその妻を慰籍せんとはなせるなり、倶樂部にては一日に二磅を費しながら、その妻には一磅の小使錢すら與へざる當今の紳士は、小鳥にだも劣れるなり、巴里といはず倫敦といはず、紳士の言葉なるものを聞くに、若し人ありてわが馬わが犬を偸まば、直様訴出でゝ、假令數月の禁錮なりと求刑せんも、妻を偸まれしとあつては詮方もあらず、まゝよ其儘に捨て置かんかと、アヽ紳士はその面目を保持せんとして妻の偸まれたるをも打捨てんとす、實にもかくして我等は馬、犬にも劣りたる取扱を受くるなり」「口惜しさに堪へずやありけん握ひたる手巾は爪、齒なんとにて、ズタ／＼には裂かれたり、「我等が理想の夫は、學識ある人にもあらず、才能ある者も欲しからず、地位ある方も氣に協はず、唯無芳無識の屑男こそ望しけれ」、件の紳士流石に驚きて「ヘツ子」と

許り、その故如何にとならば、地位を得て仕事に忙しき人、又は才能ありて職に忠實なる者は、その方面にのみ氣を集中するものから、傍に妻あるを忘れたり、頭腦の空虚なるは、他に意を用ゆるとの多からねば、從ふて妻の意を諒し、妻のなすまゝにぞ服すべけれ、苟しくも我等は世に多くの夫なる人と語らひ、表面の綿羊の如くにして内心の獅の如きが多きを知り、夫は唯凡庸人を撰ぶに如くなきを悟り得たるなり」。

▲國民新聞

本紙二十頁、繪附錄久保田米齋氏の揮毫になりたる額面大の元祿式美人、記事は井上通泰氏の「古歌の話」―坪井博士の「貝塚話」―巖谷小波氏の「龍ケ岩」―「新年曲」―「遊戲三昧」等

▲報知新聞

本紙十二頁、繪附錄「時局パノラマ」本紙二頁大、滿州朝鮮北清の要部を活動的に寫出したるもの戰爭說當込の趣向極めておもしろし此新聞は新年初刷として他新聞の如く莫大の紙數は出さゞりしも弦齋居士の「食卓奇談」小波山人の「家庭小說合せ鏡」渡米中の船中」等有益にして趣味ある記事に富み婦女子の愛讀を受くべき磁石力は依然として强大なるを見るべし。弦齋居士の「食卓奇談」不相變奥樣方の好伴侶とや言はん茲に其一節を紹介せん

△貴夫人の失敗

近頃は交際社會の晩餐會に大抵西洋料理が用ゐられます、上流社會の貴夫人中には我邦固有の茶の湯生花の會合にこそ慣れて居てもその割合に西洋風の食事法や交際法に慣れて居られない人もありますから折々無邪氣な失敗談を演ぜられます、名前だけは遠慮するとして或る貴夫人が外國紳士の家へ小人數の晩餐會に招かれた時御自分が第一の上席へ坐りました故持廻りのお料理も一番先へ自分の前へ出て來ましたカナペールとかスープとか云ふ者は銘々に出ますけれども外のお料理は多く給仕人が大きな出し皿の儘持廻つてお客に切取つて貰ひます其皿に在る品物も時によつて大小があるもので、お料理の番數が多ければ能と品物の分量を少くして一度にお腹へ充ちない樣に主人の方で工風します、此時も御馳走の品數が多かつたと見えてボーイがオムレツを第一に上席の貴夫人へ差出すと出し皿の中央に小さく上品に盛つてありますから一人前の料理だと思つて一塊そつくり自分の皿へ取つて了ひました、ところがそれは六人前に割り當てゝあるので、一度に取られると外のお客へ出すものがありません、と云つてお客に其事を話して取戻す事もならず、主人や外の人もそれを知つて居ながら貴夫人に愧をかゝせるのも氣の毒と思つて可笑しさを忍んで默つて居ます、ボーイは大急ぎで臺所へ驅けて行つて急に今の品物を別に拵へさせて次の人へ持つて來たそうですが同席に居た日本人が困つたの困らんのと顏から火の出る心持がしたそうです、是れは全く交際法に慣れないで失敗したのですが今の

供の貴夫人中には極く生意氣で無闇に出過ぎる事を西洋風と心得て居る人もあります、數年以前上流社會の令孃中に大層生意氣な女ハイカラがありました、外國人と交際して居ますから食事や禮式の失儀はありませんけれども無闇に出過ぎて生意氣な口を利く爲め外國人仲間でも評判の鼻摘みになつて居ました、或る外國人の家で内外賓客が會合した時今のハイカラ令孃が得意の洋語を以て獨りでペラ〱生意氣な事を饒舌つて居ると外國人達も片腹痛く思つて窃に冷笑する中に或る外國公使が玩具の狐の尾をそつと持つて來て御本人の知らない樣にその後方へ置いて狐だ〱と外の人に小聲で叫びました、外の人も忽ち喝采して手を拍つたと云ふ奇談が外國人中に殘つて居ます、外國人も女の生意氣を大層嫌ひますからハイカラ風は決して何處にでも好かれるものでありません、もしや外國人の家へ晩餐會にでも呼ばれて食べ方や取り方が分らなかつた時には傍の人にでも小聲で何うするものですと尋ねるのが一番です、尋ねるのは決して耻でも失禮でもありません、知つた風をして失策するのが却て耻辱です

それに食事法の習慣も國々で少し宛違ひますから西洋風と云つて大抵に申されませんボーイが順々に御馳走を出す時自分の好かないものは斷つて取らない人もありますけれどもあれでは主人の心を無にする樣なもので心ある人は肉を取らない迄もソースだけホンの言譯に取つて置きます、その代り自分の皿へ取つたものを殘す事は何とも云ひません、或る一派の人は取つたゞけ必ず食べなければならんと思つて無理に口へ押し込んで甚だしいのはパンで皿の中を掃除する樣な事もありますが外國人中にはそれを下品だと云つて嫌ふものもあります、今の話の樣に一番先の人が六人前を取つて了ふのも困りますが一番後の人も殘つた品物を皆んな自分の皿へ取るのは心無いとしてあります、假令ひ自分が最後にもせよ少しは皿へ殘して置かなければなりません

つまり食事法の心得は一言にして足ります即ち知らない事は聞くに在るのです(弦齋居士)

▲東京日々新聞

本紙二十四頁、繪附錄としては「所翁筆龍の圖」記事讀むべきものは井上博士「書齋の樂」――川上音次郎の「新演劇の話」――林中の「常盤津の話」等なりしが、殊に「舊藩主の正月」は鍋島侯爵の談むかし忍ばれてゆかしき心地する。

△舊藩の正月

私は御承知の通り舊肥前藩主であつて二百五十年以來の習慣で育つたものですが今其頃の御話をするのはトント夢の樣な心持ちがしますがその夢の中で少しく覺えて居る事丈けを御話し致しましよう、で其頃の習として江戸に出て登城し將軍に面會するのが先例でありましたから御尋ねの本題とは違ひますが少し其時の模樣をさきに御話し致しましよう、それで私は丁度十五歳の時藩を出で江戸に上り文久元年二月の十五日に登城しました、其時代は將軍家に於ても待遇が人によりて異つてゐまして京都にて傳奏關白を經て宣下を蒙り從四位以上であつたものを客大名と稱へられて普通の譜代大名と待遇を異にしてゐたものです私などは先祖の御陰で國持大名即ち國守

といふ例であつたから一般の城主格とも亦待遇が異つてゐたやうで
ありました、
偖て年始の登城の時の服裝は四位以上の者は狩衣にて烏帽子直垂で行列
いかめしくれりたてゝ參つて供の者の幾分は今の桔梗門或は大手門
の外で控へて輿も下ろしましてそれから中の門から下乘してずーッ
と上りました其の時は直垂の裾をくゝりながら上り上にておろし殿
上の間に控へましたが目付役の者が出て參つて一寸挨拶をして「只
今公方樣がおあひになりますから」といはれましてそれから大廣間
に參り將軍に面會しました其時將軍には上段の間の疊の上に座られ
小納戸樣のものが刀を持つて高家の從四位以上のものが接待せられ
ました上段の下の間にて禮をしまして大判と太刀とを進物として進
上に及びますすると將軍の飮まれた盞を公家が長柄の上にのせて持
て來たのを受けて之を飮みその儘持歸りました大老老中列座[illegible]番
より肥前守とも鍋島とも申ませんで只肥前どのみ披露せられて元の
間に下つて退出しましたが此は客大名といふ風の待遇を受けました
ので他の譜代大名又は城主大名はその次の間より數人禮をするので
あります、で肥前守といふ資格で正月に面會したのは其時只の一度
でありましたそれから話は一寸變りますが婚禮の時は白書院で將軍
に面會しますので其の時も亦前の如く只奏者番より肥前とのみ披露
せられますが家督相續の時は將軍と同じ間に入れて熨斗を賜はるの
で其時は横に筋違ひに座はつて面會する譯でありましたがそれは將
軍家に於ても國持大名に對する待遇は存外鄭重であつたかと思はれ
ます
それから舊藩主の正月ですかそれは藩に依つて各々違つてゐまして
私の舊藩即ち佐賀は種々の歷史からなり立つた國守格であつたから
割合ひに八釜しかつたものです一寸珍事と年始の御話しを致します
が年寄役側頭側目付といふ役がありまして其の中より選び男といふ
ものを一人命じて年始の事を受持てやらせます晦日には鯛の庖丁と
申す事があつてその料理人は上下を着て藩主の前にて鄭重に之を料
理し藩主よりその鯛のゐるしのみを手づからそば近き役々のものに與
へたものですこれは昨年贈位の御沙汰を蒙つた私の先祖直茂が朝鮮
征伐を終り凱旋の折肥前の伊萬里灣へ着船しました時鰤といふ魚が
躍てその船に飛び込みましたので一同武威が上つたと申して喜びま
したそうですこれは佐賀の方言ではりといふ音を讀てイと申すとこ
ろから鰤(ぶり)を武威(ぶゐ)と轉訛し非常に縁喜がよい目出度いこ
とだと申し合つて直茂が伊萬里の常光寺とかいふ寺に參陣して兵士
を勞はり其時寺の和尚にも今夕は特別ゆゑ精進をやめて肴を食へと
申したそうで維新頃迄そこの和尚になつた者は例になつて大晦日に
は鰤を食べるといふことになつて居たそうです私の家では鯛の庖丁
といふ一の吉例になつて居ります
それから元日の朝になりますが總べて元旦は男のみの手で少しも女
の手を借らず沐浴更衣をなして熨斗目長裃上下といふ風の禮服を着小
さな刀をさします若水といふて六尺計の柄付のひしやくを以てつ小
姓の者にかけさせる水にて清め座敷の床に向つて三拜するのが例で
あつたそれがすむと膳の上に座し祝ひの膳といふ式があります屠蘇
を小姓が長上下着用にて三つ組杯にて長柄加へ持ち出でます畢ると
撤下して更に年の餅と申して二つを重ねて摘みますそれがすむと廣
間にて正式の料理を食し雜煮并にかん酒を用ゐ畢つて座の間で御年
寄から小姓までの祝儀を受けますに續て小書院にて親類筋のもの又
は家老并にその次の格のもの一人つゝの禮を受けます私どもの將軍

へ面會した時は御前とのみ披露せられましたが國の方では祇ひ男といふものより其時には名を披露せずして河内とか安藝とかいふ名を呼びますが親類には殿を付けますそれから外番院では諸組(即外様の士)の暇を受け大組頭より披露す此の暇を受くろは士、手明鎗迄と思ひました次に別間にて側役人の士手明鎗の暇を受けました是は多數の事ですから二番座三番座と別けて居りました(鍋島侯爵談)

▲大阪朝日新聞

本紙三十六頁、附錄「貴婦人觀花の圖」「年中重寶記」、「新案遊戲」等あり記事は「御伽芝居龍宮話」——「龍宮通信」——「小說日露の戰爭」——「岩上の松」——等なりしが就中附錄「貴婦人の圖」は浮世繪派の泰斗勝春艸の筆にして優美、艷麗、用筆の高尙なる實に浮世繪中の逸品たるべし

又當新聞には新年三百圓の懸賞小說募集の催あり

△松の話

松は昔から千代經ても緑の色をかへぬ御目出度い木となつて居て詩に賦し歌に詠じ誰れでも知らないものはない位な木で、極々世間にありふれた種類ですから此木に就て聊か申し述べたいのですけれど學術的の事柄に亙つてはお正月には不向きではあり且自然素人方には理解し難い術語や原語杯を用ひなくてはならないで却て面白味も少からうと思ひますから今日は單に日本にある松の種類の事だけをお話し致しませう、

扨正月のお飾りにする松ばかりでなく色々な種類があります、先づ日本にあります主な種類が六種、それから亞米利加、歐洲、亞細亞大陸等にありますものが少くも六七十はあります、けれども松の種類はどれも大概役に立つ木で唯風致上から庭木の王として持てはやされるばかりでなく人間の生活にはなか〳〵大切なものですが、此事は又別にお話し致すことに致しませう、

先づ葉の數で大體分けて見ますと日本の松は二葉と五葉の二ツがあります、それで前申した六種とは、

あかまつ、くろまつ、てうせんまつ、ひめこまつ、ごえふまつ、はひまつ

で(落葉松は松類の中にはひりません、植物學上別の類に屬します)初めの二ツ「あかまつ」「くろまつ」が二葉であとの四種は五葉です、

○其一「あかまつ」(赤松)は「めまつ」「おかまつ」などゝも申します、此松は日本の松類の内で一番多く廣がつて居る種類で普通の庭などに植はつて居る「見越の松」などは大概これです一寸見てもすぐわかりますが樹の皮に赤味があつて樹の全體の形もなんとなくやさしくすなほです葉もさほど剛くなくさはつて見てもいたくない、大木になりますと十二丈、幹の周圍二丈位になります山手の地で松林を仕立てますには大概此松を植ます、此樹は山に植ますには至極重寶な木で痩地や水氣の足らない處で外の杉や檜が育たない様な處にも善く育ちますから植ますし又自然にも種子がこぼれて澤山生ねて、ちつとも人手をからずに立派になつて居る處があります、又此赤松の林の多くなり行く事に就ては大に國土の生産力上考へねばならぬ事がありますが今日は元日ですから其の話は止めます、

▲太陽

新年大附錄「滿韓新圖」は時局當込のもの、滿州朝鮮、北淸の各地山河の景象海澳の遠邇、交通の槪要歷々指點すべし、本文人物評論より「名家談叢」「文藝雜俎」に至るまでいづれも當代名家の執筆、議論雄大、筆路暢達、一々いふまでもなし小說「新思想」は廣津柳浪子の作、これは時弊を諷したものにや、才子といへる女敎師の身の上さりとは輕薄千萬、婦人が折角學問してこういふ事になりては困つたもの也、新智識に傾く婦人達、わけても當世のエビ茶式部諸君へよろしく反省を乞ふべきものなり。

▲文藝倶樂部

創刊以來滿十年に達して、而して發賣部數天下に冠たる文藝倶樂部の運命又多幸なりといふべし。我が日本雜誌ありて以來未曾有の催したる千圓の福引誤つて風紀官の非認する處ろとなりしが是れが爲めに同誌の人氣は却て舊に倍し年末年初へかけて發行數十萬部を呼ぶに至れり、内容の健全不健全今悉く是れを問ふの必要なし、露西亞帝國の勢力が宇內に橫溢するの時文藝倶樂部が雜誌界に鵬翼を擴ぐる又偶然の事なりとせず、口繪「江戶藝者」の妍麗なる、三色版「今年の惠方」の姿致ある、寫眞銅版「男舞」の妖々たる本誌の特色豈唯是れに限りたりとせんや、小說、脚本、時文、雜錄、世態、詞苑、皆讀むべし、「臨時增刊」は一月十五日の發行、これは現代文豪十家の新作を集め一と昔と題せり。

▲中學世界

新年一月裝ひを新たにしたるもの水彩畫手本これは巴里新歸朝の和田英作氏の筆に成りたる「富士」「廟門」の二葉、畫風新活俗腸を洗ふに足るべし。本文各名家執筆の記事材料の精選一としていふまでもなし、附錄「現代七將軍」は伊東海軍大將の濶達にして大度ある大山陸軍大將の大度にして雅量ある、山本海軍中將の俊敏にして猛氣ある、福島陸軍少將の克己耐忍にして而かも智術に富める、野津陸軍大將の驍勇にして剛膽なる、樺山海軍大將の沈毅にして雄心鬱勃たる、兒玉

陸軍中將の英靈にして敏活なる、七將軍一將星の性格を細叙し、事歴を詳記し以て縱横活寫せしめたりき、吾人密かに思ふ現時國際の紛糾、事局の艱難に當りて猶この當路將軍諸公あり、聊か以て意を强ふするに足らんか。

▲少年世界

新年大附錄巖谷小波氏立案「海戰將棋」は他に類なき新案、少年の春遊びとして興味深きもの、本文「龍宮土産」「うそ蛇」「龍づくし」「小波小言」「關八州」等いづれも讀んで飽かず見ておもしろく、挿畫の奇拔、意匠の嶄新此雜誌の特色なり卷中の「少年新聞」流石は凝つたもの但し二頁では物足らぬ心地、奮發して四頁作られたらば如何にや卷末の「學事顧問」「學事通信」「交詢」「研究資料」等編纂の整へる事敬服々々、臨時增刊は「滿十歲」と題して少年文學十大家の妙作を集め、就中小波翁の「十色の玉」は少年少女の引張風なるべし。

▲近事畫報

これは前の淸國公使とまで申さずとも經國美談以來聲名天下に隱なき矢野龍溪翁が退隱中のなぐさみとして作らるゝ雜誌にして中々のおもひつきなり、小は都門の雜鬧より大は世界各國に起れる最近の著るしき事件を繪畫若しくは寫眞もて顯はしたるものなるが彼の繪そら言とて實際なき事物を誠しやかに描き出したる戯れにはあらで、事實の出來事を想像にもせよ、瞥見にもせよ、斯くありしと人に思はしむるやう巧みに描寫して事實の慘憺なりしものは如何にも慘憺に、奇異なりし事は如何にも奇異に、よくその實境を描き出すに務めたるもの近事畫報の特色とす。本文龍溪翁の雜話は雍容典雅の中に多少の機智を卸み玩讀倦ましめざるは流石に大踏家の筆といふべし。新年附錄石版彩色刷は大奮發。

▲婦人界

金港堂發兌の雜誌中俗趣味なき好雜誌は此婦人界なるべし。卷頭のかるた遊び艶美にして淸新、記事「豊太閤の奥方」「細川忠興夫人」「メリー、カアペンター嬢」

等史傳欄尤も豐富、「春の東京」「西陣織」「結婚の準備」「病院だより」等社會的記事又讀むべし、附錄小說二種いづれも家庭に向つて新らしき趣味を供給せり、唯惜むらくは文學的記事多くして家庭并に婦人の讀むべき材料に乏しきは遺憾なり。

▲日本婦人

帝國婦人協會の機關雜誌にして下田歌子女史の監督の下にある同誌今春その第五十一號を發行するに至る、材料は豐富にあらざるも體裁淸楚にして記事蕪雜ならず、卷中「東京だより」「地方だより」等全國婦人團體の消息を網羅して一欄の下に瞭然たらしむ。

▲新聲

文壇の梁山泊、早稻田攻擊の急先鋒たる旗幟を押立てて文界に縱横の論陣を張る者を雜誌「新聲」とす中央亞細亞横行の色男森山吐虹と婦人征伐を以て有名なる正岡藝陽之れが牛耳を執る、登張竹風、靑柳有美、千葉江東、宮崎來城等一騎當千の荒武者やら若殿原やらの集合にていたづらに人の惡い事を以て特色とするかと思へど中には間々現代の婦人觀察に就て嶄新奇拔の新說なきにあらず、十六號卷頭の婦人論幷に伊藤銀月の女性研究の如きは、表題徒らに大にして內容の荒蕪見るに足らざる近頃の文界にこの寸鐵殺人的の好喩を示す、「新聲」眞に「新聲」たるの題目に背かずといふべし。

△女性の研究

來つて予を訪ふ二靑年あり、一は滿面ニキビにして、焼き損れたる金鍔の如く、一は靑白くヒヨロ長くして、店晒しの胡瓜に似たり、共に所謂文士なり

金鍔君曰く、願くは僕等の誌上に、足下が女性の研究に關する文字を掲げん、胡瓜君曰く强ゐて乞はざるべからず

予曰く、眞平御免なり

二君又曰く、需らば則ち口述あれ、僕等乞ふ筆記せん

予曰く、益す御免なり、予は二君の筆記を煩はすべき意見を有する大家先生にあらず、書生ッポなり、小僧ッ子なり、靑二才なり、予を買ひ被る勿れ

二君語無く、相顧みて苦笑す

此に於て予はいさゝか氣の毒の情あり、破顏して而して曰く、予はズウ〳〵しき東北人なり、駄鳥の少しく毛の抜けたる者なり、辛うじて日本語を操る者なり、元來二君の如きイキな話の出來る柄にあらず、然れども亦感見なきにあらず

金鈴君曰く、ブレーズー（聲色を其儘）

予曰く、二君は女なるものを知れりや、二君若し理想の海老茶式は御太鼓に遭ひ、相互の電氣多少相通じたるが如き兆ある時、他より來つて其競爭者たらんとする男あらば、果して如何の態度を以て之に對すべきや

二君は必ず、藪から棒に其男の噂をなし、口を極めて痛罵し、以て女の熱を冷まさんことを試むるなるべし、されど女は妙な動物なり、己れの重きを置く此人に、斯程迄色を變じ聲を變じて痛罵せらるゝ彼人は、或は此人以上に齒答へある、男らしき男ならずや、彼人は此人を左程迄口汚く罵りはせざりしと、帶に手を挿んで沈思一番、頷呑々々、毛を吹いて疵を求むるは二君の流なり

女は然らず、若し己れの物を横取せんとする競爭者を認めたる時は、湯に入り、髮を結ひ、紅を塗り、白粉を塗り、而して後從容として男に向ひ、何子さんの美を譽り、其才を譽り、一轉愁然として蛾眉を顰め、親御さん達は隱して被入いますが、御可哀相に癲癇を患らす病がおあんなすつてと、俯向いて目をしばたゝくこと三十秒時、男はそれア困るだらうなと云ふて巻煙草の吸ひさしを投ず、妙々

男は多くの場合に於て女より正直ならずや二君

其筆記なるものに予が口調を寫して、某雜誌紙上に掲載さるゝの噂を聞くべく、こゝに此紙端を借る、敢て金鈴君と胡瓜君に謝す乞ふ復讐する勿れ（鰻月）

▲家庭の友

菊版三十二ページの小冊子なれども、記事は凡て實用的なるを主としたれば家政を司どる主婦の參考としては極めて適實の雜誌なり、口絵トルストイ家の會食は歐州文豪が一家團欒の趣き見へてゆかし、記事「新年所感」——「中等生活の標準」——「家政問答」——「新年料理」等いづれも有益にして趣味清新、今本誌中の呼物たる

△中等生活の標準

は波多野夫人の談話の要領に曰ふ明治十三四年の頃には月三十圓の收入にて中等の生活を成し得たるも其頃の三十圓は今の六十圓以上に相當するなり、又それより以前の生活の標準は野菜と味噌、醬油薪炭代を合せしもの丁度米代に相當し米代一人分一圓五十錢、副食物一圓五十錢、家賃は米代と副食と合計せし一人分（三圓）にて相當なりし由、されど今の生活には到底當てはむべからず、されどこれを基礎として計算せば大なる誤なからん、まづ家族を普通五人として米代十圓、野菜、味噌、薪炭十圓、更に肉類玉子の如き滋養物料を加へて總計三十圓ならば不足なからん、是に家賃十圓合計四十圓にして其外二十圓にて衣服、交際費、雜費、教育費、を支辨し、病氣の用意、保險にも入らば餘程巧みならざるべからず、今日は五十圓の收入にて十五圓位の家賃を出し居る方々もあるなり、されど肝要の食物を節し、又は道ならぬ收入を作りてまで體裁を張るが如きは弊風といはざるべからず、次に衣服は主人夫婦夏冬とも各禮服の一揃は持たざるべからず、勿論禮服の地質には頓着なく婦人の禮服に紬にても何にても紋を欠かない丈の用意にて充分、それに糸織の銘仙位の外出着にて不斷着は綿服にて足るべし、この頃の衣服は男女共に贅澤過ぎる様なり例へば或る婦人の集會などにて數十萬圓の金満家も四五十圓の生活の人も一寸見たる處ろにては殆んど同一の

分限者の如くに見ゆ、この如く日常の食物を節りてまで贅澤な作り子女の教育費を節約して衣服を新調するなどは少しく考ふべき事なり云々

▲女子敎育

高等師範校敎官諸氏の發起になりたる雜誌にして專ら女子敎育の鼓吹に力む、新年一月その第一卷に顯はれたる記事は下田次郎氏の「女子敎育の目的」山口酒造氏の「學校衞生」井口女史の「米國に於ける我生活」等卷中の讀物なるべし。俗趣味のなき好雜誌なれども記事の高尙にして堅實なるだけそれだけ多數の婦人に讀まるべき材料の少きは聊か物足らぬ心地さる。

▲時好

三井吳服店の機關にして歐洲新歸朝者久保田米齋畫伯の主宰さるゝだけありて一種嶄新なる好雜誌なり、時好、即ち時の好みに應じて案出さるゝ衣裳の模樣を座ながらにして世人に知らしむるの趣向極めてよし、世の富あり財ある人が流行に先んじて衣裳を調進するは顧客の實利として奮發すべき處ろなるが、これには東京第一否、日本第一の吳服店たる三井の意匠部より案出されたる好意匠を採用するが尤も其の望みに叶ふたるものといふべし、本誌は即ちこの希望に應ずべく意匠のいろ〳〵を採集しこれを精巧なる寫眞板として挿入したれば讀者は一見して現今如何なる新形が流行しつゝあるかを知る事を得べし、卷中「鹽瀨友禪の肩入」「應擧筆の狗兒」、「海老茶さや形の紋羽二重の羽織裏」、「鹽瀨の振袖」等實に當代流行の魁たるべし。

▲女子大學學報

女子大學の機關にして四季に發行する雜誌なり新年に發行されたるはその第二號にして、成瀨校長の「演說」、三宅博士の「衞生談」、科外講演として島田三郎氏の「婦人の力」、中濱博士の「家庭に於ける淸潔法」等有益の記事たり文苑には、小杉博士、鹽井文學士、戶川殘花諸氏の文、松浦政泰氏の「齊家小言」、岡部文學士の「佛敎渡來前の女性」等有益なる記事多し。

△齊家小言

一家の經營上第一の秘訣は入るを計つて出づるを定むることなり。

御浮説國の諺にも人の身代を能くする秘傳は千石收入の家九百石にて賄ひ百石をあまし置くにあり、と即ち月一割を貯ふべし、今百圓收入ある家にて衣食住の三者を如何に支出すべきかといふに大要左のごとし、

▲四十五圓食費▲十八圓家賃▲十八圓衣服料▲九圓雜費▲十圓貯蓄

▲家庭料理講義錄

西洋料理は外務大臣官舍庖厨主任宇野氏、日本料理は女子職業學校の割烹教師井上氏この二人が主幹として專ら内外の料理法獻立、食卓の飾りつけ、庖厨の整理に就て專門的の記載をなせる好雜誌なりされば家庭に於て割烹上の智識を得んと欲する者には必要の好雜誌にして本誌によつて季節料理を按排すれば日々の獻立に差支ふる事なかるべし。「食卓小言」、「廢物利用」、「女中問題」等趣味ある記事少からず。

△女中問題

東京市は料理店の女中に課税するとの問題あるが今日の女中なるものは給仕の本意を失ひて居るもの多く藝妓と同様にして普通なる家庭には元より近くべきものにあらず、されば日本の[illegible]には如何にせば庖人の作りし料理を客へ供し得らるべきやといふに著者、女中の外にこれを專門にすべきものなし、随分困つたものなりされば給仕業の組合を立て男女共に服裝、作法を正して食膳を周旋するものを作らざるべからず云々

▲太平洋

四六二倍を菊版二倍大にして内容を整頓したる太平洋

新年第一號は近藤廉平、松本重太郎實業界東西二雄の平生を紹介して時代人物の一斑尤も見るべし、雜錄の「金儲秘訣」「實業家の隠し藝」「新式の實業行商」等實業に志ある子弟をして是を讀ましめば娛樂の裡に奮發の志を起さしむる事必定なり附錄「日本工業全圖」は精確なる工業界の分野なり。

▲婦女新聞

本紙十六ページ、記事には「理想の男子」(嘉悦孝子)「公德の養成」(大隈伯)「南京だより」(河原操子)「新年遊戯」等にして別に雛形割方法といふ色刷の有益なる附錄を添へたり

應募數百六十八篇の内秀逸二篇を左に掲ぐ

△理想の男子

△

情は谷川の流れのごと、清きさゝやきをひめて色にいでず、またはへ岩木ならぬ意志あくまで強くて決斷力にとみ、明晰なる頭腦、男らしき容貌、財産はスヰートホームを作るに關せざるまでにて。

むつかしきみ願かな

△

おもれらず朽ちずうつらぬ雄々しさの、そはわれ山の巖にして見つ、さりとても胸なる血潮のもゆては、岩をも人をも燒きつくさなん君な、誰が世に待つべきか。あはれ、むつかしきみ願かな。

評、春の夜のおぼろの月になか〳〵捨てがたき味あり(?)

修養

青年に對する希望

黒岩周六君談

左の一篇は一月十日發行中學世界に出でたる名家談叢の一節にして論旨專ら青年男子に向つて警告する處、用意周到丁寧親切を極めたるものなるが單に若年男子の心得たるのみならず、一般婦人にして苟くも世に處せんとするもの亦這般の用意あらまほしく思ふまゝ同誌の承諾を得てこゝに轉載するものなり。

▲人格の養成

前略次に青年が職業を求める方からいふと、是れは予の如き職業に從事して居ると、隨分職業を求めに來る者が多い、甚だ氣の毒な次第である、勿論一般には云へぬが、おしなべて職業に有りつけぬ人といふものは、有りつけぬ丈けの缺點がドコかに在るからである、其缺點は何かと云ふと、其人格の惡いことである所謂氣象で、其氣象の足らないのである、先づ學識とか智識とかいふものは、大變必要な樣ではあるが、併し社會で職業を求むるに方つては、人格ほど尊いものはない、所謂人格とは、英語でいふキャラクターである、然るに今日の青年は、概して交際させれば上手でもあり、又繁劇な事務に當らせれば、誠に才智があつて、敏捷な青年は少くないが、さて之れに金錢を任せて置かれる青年があるかといへば、かゝる青年は實に少ない、之れが即ちキャラクターであらうと思ふ、要するに學識や智識には乏しいけれども、何しろ人間が確かであり、眞實であり、不安心でない、恰も自分が自分を信ずるが如く信ずるが出來る青年ならば、職業がないどころではない、隨分社會に需要がある、今日は社會の方は幾らも需要するのだけれども、其需要に應ずる資格ある人物、即ち性格の高き確かな人物がないのである、現に社會の事業は次第に殖えて行くので、到る處さういふ人物を求めて居る、信任の出來る安心の出來る人を、而も其人は甚だ少ない、單に事務を器用に執るといふては、決して安心の出來る所以ではない、さういふ人は才智餘りあつて人格足らずといふ人である。今日の青年が人格の足らない原因には、或は道德の思想に乏しいとか、宗教が衰へて居るとかいふ樣な、又他にも種々な原因もあらうが、兎に角青年自から心掛けなければならぬ事は、其學業を修めると同時に、自分の確かな性質——苟も情實の

爲めに動かない、飽くまでも義務を盡し、飽くまでも責任を盡すといふ確かな性質を養つて行かなければ、社會は如何ほど事業が殖えても、矢張り用ゐない、爲めに終生汲々として職業を求めて求め得ない結果に終らうと思ふ、故に人格を養ふことが、今日の青年の急務で、人格さへ養つて置けば、必ずしも職業のない事を憂ふるには及ぶまいと思ふ、先づ職業を求めて得ない者は、退いて己れの人格如何を顧みるが宜い。

▲獨立の精神

又職業を求める前に先づ自分で職業を作るといふ考を起して貰ひたい、即ち獨立の精神である。

今日まで獨立の精神といふ言葉は、聞き飽きる程、盛に唱へられて居るけれども、世間では獨立の意義を餘り立派に解釋し過ぎるもだから、ドーも實際に用をなさない、でモー少し低く解釋して、單に自營と考へて見ると、分り易いだらうと思ふ、即ち人に雇つて貰ふことを考へずに、自分で何か業を營むといふことを考へれば、別に資本といふ程の資本はなくとも、或は煎餅を賣つても、若し間違つたら立ン坊をした所で一つの自營の主義に叶つて行く譯であるから、必ずしも喪家の狗の如く彼方此方と職業を求めて歩かなくても宜からうと思ふ又一たび自營をして見ると、初めて職業の味が分る、其味が分つてから職業を求めると、幾分か求め易いことになる、然るに更に自營の經驗のない人をつれて來て、直ぐ使ふといふ事は殆んど出來ない事であつて、寧ろ使ふ方が骨が折れる、予の如きも親戚の關係や友人からの依賴で、已むなく此經驗のない人を世話して見たこともあるが、實際使ふより使はるゝで、其骨の折れることは非常である、されば餘程よい傳手でもなければ、自營の經驗のない人は、地位を得ることが難い、而も自營の經驗さへあらば、よしや地位を得ないにしても、獨立の氣象を發して、その自營でやり上げるといふ考になれば、其人は頭を下げたり何かせずとも、成功するであらうと思ふ。

たゞ世故に慣れない青年は、自營の尊ぶべきことを知らない、例へば煎餅を賣る如きつまらない職業をすることを、大變恥しい樣に思ふけれども、他人の給金に衣食するよりは、煎餅屋であらうが、何であらうが、自分の營んで拵へた金で衣食するといふことは、非常に尊い事であつて、更に恥づべき次第はない、阿米利加の如きは、餘程此思想がある、之れをノーブルといふ、ノーブルといふは丁度英吉利の貴族といふ字で、

貴いといふ意、即ち卑いの反對であるから、實に稱贊するに足る精神である、いかに收入が少くとも、いかに職業が低くとも、獨立の精神を以て、自營して生活して行くといふ、こんな名譽な又貴いことはない、此思想を今日の青年に充分吹き込まなければ、青年の前途は、只暗黑あるのみ、光明なく希望なきものにあらうと思ふ。

▲名譽心

加之、我邦では名譽といふ事を大に誤解して居る、名譽とは我邦では「ほまれ」といふ字で、ほまれは即ち「ほめられる」といふ事で、自分の名を人に知られてほめられる事を名譽と考へて居る、隨つて人が褒めて吳れなければ、善い事をしても名譽でないと思つて居る、之れは大變な間違ひで、名譽は社會の表面に於てする仕事にもあると同じく、誰れも知らない所で働く、即ち人に見ねない、働きにも、矢張り名譽はあるので、善事をなし功績ある者には、其何れを問はず名譽は之れに伴ふものである、英語にいふオノアといふ字は、之れは決して人に知られる意味ではない、オノアブルといふと不正な事をしないといふ意味になる、故に其獨立自營の事をして居れば、それが即ちオノアブルなので、併し我邦の所謂名譽ではない、若し名譽といふ事を、我邦の人が解するが如く、人にほめられるに在るのだとすると、自然人の機嫌や意見に投ずるに是れ汲々として居なければならぬ譯だから、夫れでは決して自營などいふ事が出來る筈はない、又夫れでは青年の前途をして希望多き前途たらしむる事は出來ない。

されば青年は飽くまでも英語でいふオノアを重んじなければならぬ、日本語でいふほめられるといふ事を重んずるのは贊成が出來ない、若し自分が正しい働きをなして、夫れが人に知られたならば、必ず人が褒めるといふ事柄があるならば、目前に褒められずとも、他日必ず酬ひられ且つ名譽を得られる、つまり英語でいふオノアを先きにすれば、後ちに日本語のほまれは來るのである、即ち譽れは自然の結果であるから、事を爲すに方つては之れを眼中に置かずに、只自分の心をオノアブルに持して行けば、それが人間の本分を盡すのである。

然るに之れを誤解して只自分の名前を人に嘖々と稱せられるといふ事を名譽とする我邦の名譽思想は甚だ宜しくない、且つ有害であるから、此區別は明かに青年に知らせて置きたいと思ふ。

此東洋の名譽といふのに儒教が戰國時代に養はれて來たので――戰國時代とは支那の近世までの有樣をいふので、英雄豪傑四方に蝟起して紛々天下を取つたりいろ〳〵な事をしたが爲めに、人間が身を立てるには、戰ひによつてするといふ時代に養はれて來たのであるから、名を竹帛に垂れるなどいふ事が非常な事になつて居る、隨つてほめられるといふ事が、非常に好い事になつたのであるけれども、儒教の本來を見ると名譽などいふ事は別に說いてない、人にほめられるのを道德などといふ事は更にない。

一體我邦の父兄は、自分の子の名が新聞に出たとか或は學校で褒美を貰つたとかいふ事を非常に嬉しがる、勿論成績の好いのは嬉しいけれども、成績の爲めに褒與を與ふといふ事は、大した事ではない、名譽は褒與にあるのではなくして、實際の成績に止まるものと心得て居なければ不可ないと思ふ。（茅原生筆記）

女子修養錄

永廻鰔江

▲今の高等女學校の敎科が、あまりに分科に過ぐるが爲め、女子としての修養に不十分なる結果あるを見て、高等女學校最後の二ヶ年乃至三ヶ年間は、敎科目の數を減じ、專ら今日の女子に適切なる學藝のみを授くべしと言へるに對して、論者或はいはむ。是れ强ちその敎科目の多きが故にあらず。これを敎授する敎員その人を得ざるに在り。若し敎員その人にして、學殖豐富、加ふるに、家事万般の事に通曉したらむには、理科を敎ふるにも、數學を敎ふるにも、乃至地理歷史を授くるにも、女子必須の知識と敎訓とを適切に與ふることを得べし。されば敎科目の數を減せむよりは、寧ろ良敎員を作ることを先務となすべしと。

▲這般の議論一應道理ある事ながら、高等女學校の敎員をして、今少しく社會の事情に通じ、今一歩家庭の事理に明るくなりたらむには、かほどまでに吾人は急激なる改革呼はりはなすまじ。されど、良敎員を得むことは、頗る難事に屬す。論者のいへるが如き良敎員のみにて高等女學校を組織せむこと、遠き將來に於いてはいざ知らず、五年後十年後の近き未來に於いては現實せらるべき理想とも覺えず。然れども數十年後の日本は今日の日本にあらず、文明の趨向する所社會家庭兩者共これを今日に比して大に見るべきの進步あるべきや必せり。この時に當りては、女子の社會に於ける地位亦大に面目を改むべきが故に、今日の女子敎育制度は寧ろ未來の社會には適切ならむも計り難しといへども、その進步したる狀態に達するまでの我女子敎育としては、今日の儘に捨て置き難きものあればこそ、吾人は改革を斷行せざるべからずと絕叫したるなれ。

▲修身科の敎ふる所、人道實踐の軌範、座作進退の規矩にある勿論なりといへども、女子敎育上特に留意すべきは、女子の理想をして高潔ならしむるにあり、兼れて主婦として妻女としての心掛を完全無缺ならしむるに在り。されば女子の社會に於ける地位を自覺せしめ、その大なる責務を果さむ信念の確立を初めとして、家人婢僕に對する主婦の任務、さては、良人の職務に同情を表し、陰に陽にこれを扶助奬勵し、傍ら家庭の歡樂を保持する等の諸德を養成せさる可からず、女子敎育の要點は實に茲に在り。その多少文字を解し、動もすれば屁理屈を捏ね廻すが如き女子の輩出は、決して女子敎育の目的にあらざるなり。

▲今の高等女學校敎員にして、よく修身科の師表たるべき人物、果して幾人かある。修身科を受持つべき

敎員は、可成く社會の潮流に漂ひ、幾多の風波を凌ぎたる底の人を上乘とす。他語以てこれをいへば、所謂酸いも甘いも御存知の人ならざるべからず。徒に青表紙を繙きて、四角四面の事を喋々する世の所謂學者先生の謂にあらざるなり。故に學校にして若しも適當なる修身科の良敎員を得ること能はずんば、宜しく土地の德望ある紳士若くは敎育ある良家の夫人に乞ひて、その講話を囑托するも可なり。

▲國語科の敎材は常識を養成し得る材料を撰擇し、次いで、その韻文たり散文たるを論せず、女子として必要なる溫順しき情操を養ふに足るものを輯めざるべからず、徒に古文死文にのみ重きを置きて、何等常識の涵養に資する所なき今日の讀本は寧ろこれを燒き捨つるに若かず。溫和健全なる感情を包含せざる詩歌文章の如きは、斷然放棄するをよしとす、この用意ありてこそ、初めて女子敎育上完全なる國語科の價値を認め得べきなり。

▲家事科の敎ふべき所、高等女學校にありては頗る重要の地位を占むるものなること多言を要せずして明かなり。されど、特に注意したきは、その受持敎員の撰擇と、家事科實習の方案とに關することこれなり。

即ち吾人の宿論は、家庭を形成したることなき敎員は家事科の敎員たる資格なきものとなすにあり。抑も家事のこと、これを概論すれば、事頗る簡易なるが如しといへども、而も實地その局に當らば、實に複雜にして、一片の理論遂に何等の役にも立たず。是を以て、この複雜至難なる家事一切の事理に通じ、身親しくその局に當りたる人を得て、家事科の敎員たらしめざるべからず。

▲家事實習の方法として、寄宿舍にては、或る種のことに限り、日々これを課することを得べけれども、通學生は唯家庭にありて、不規則不秩序なる練習をなすのみ。否寧ろ學科の復習等に追はれて、親しく實習せざるもの少からず。されば、學校は、種々の方案を工夫して、通學生にも、これを練習する機會を與へざるべからず。一例を擧ぐれば、通學生の辨當持參を廢し、當番を定めて炊事に從事せしめ、各生徒の中食は必ず學校にてなさしむるが如きは、即ち其の一策なり。その他洒掃應對給仕のこと等、少しく意を用ふれば、毎日三時間位の實習を課し得られざるの筈なし。今日の如く十有餘科の學科を課する場合には六ケ敷からんも、吾人の所見の如く、僅に四五の科目となさ

ば、優に實習の時間を割り出し得べし。

▲育兒の實習としては、附屬保育園を設くべし。歐米の都府にては、市立又は私立の慈善的保育園ありて、勞働者は朝に幼兒を茲に依托して、職務に出掛け夕にこれを受け取りて伴れ歸るを例とすといへり。我邦の如きは未だこの設備を見ずといへども、設備さへあらば、人その便と利とを知りて、保育を依托するもの相當に多かるべし。而して此の保育園には、保姆と小兒科醫とを置き、高等女學校上級の女生徒をして實地に保育の事を練習せしむるの用に充つることゝせば、啻に社會的事業として、好個の成績あるのみならず、女子教育の爲に、頗る有力なる效果を收めんこと必せり。師範學校に附屬小學校及び幼稚園を置きながら、高等女學校に保育園を附屬せしめざるは、豈一大矛盾ならずや。

▲高等女學校に教育科を加ふべしといへば、人或はこれを異說として退けむも計り難し。されども、女子の天職が果して良妻賢母たるにありとせば、實にその半面は教育者たるべき責務あること亦當然の事なりとす。抑も家庭教育の人生に重大なる影響ある事は、心あるもの、等しく首肯する所なり。然るを我邦の學校教育は、年を追うて進歩の實蹟を見るに反して家庭教育は僅少なる一部の人士によりて、注意せらるゝのみにて、其他は依然舊態を存するにあらずや。殊に學校教育の效果は家庭教育の多大なる共力を要することなるに今日は啻は共力の效なきのみならず却て妨害破壞を來りつゝあるなり、而も家庭教育の舊式なる、甚しきは學校教育の效果を薄弱ならしめ、朝に温めて夕に冷すの觀あり、是れ今日の女子に教育思想なきの致す所なり。

▲加之、女子は教育者として適當なる天性を有す、元來教育の事たる半ば慈善的の献身事業なるを以て、女子の如く愛情に富み、而も細密なる思慮ある者に於て初めて之を克くすべきが故に、幼兒訓陶の任は宜しく女子の本職たらしむべし。由來我國の教育事業は大半男子の掌裡に在りたれども、これ社會の狀態未だ女子の教育者を多く出すまでに進歩せざりしに由るものにして、世は益々分業の必要を生じ、男子の盡すべき職務は次第に分岐するが故早晩教育事業の大半は、米國のそれの如く、女子の本職たるに至るや必せり。されば、高等女學校の卒業生は、仝時に官府より教員たるべき資格をも與へて、盛にこれを採用するの道を開くべし。從來は、女子師範部の卒業生にのみ、教員たるべき資格を與へたれども、高等女學校本科の女學生にも、その資格を免許して、何時にても當人の希望によりて教員たることを得しむることゝなさば、啻に多くの女教員を得るのみならず、女子其自身の爲にも恰好なる立脚地を得べきが故に、最も成功し易き社會

策の一手段たるべきなり。以上二つの理由より吾人は教育科を高等女學校の教科目中に編入する事の、頗る時宜に適ひたるものと信ず。

▲技藝科及び運動の二科は、その必要いふまでもなく、前者は一面家事整理の手腕を得しむると同時に、他面に於いては、女子獨立生活の準備即ち渡世の技能をも得しむるにあり。故に裁縫縫物造花刺繍圖畫等を主として學ばしめよ。音曲茶の湯生花の如きは蓋し末枝のみ。隨意科的にして可なり後者にありては、不健全なる女子を少からしめ、姿勢動作を自然的に美ならしむることを勉むるにあり。

▲以上六科の教授か、果してよく女子に適切なるものとならば、地理歷史の觀念の如きは、高等小學校と高等女學校最初の一二年にて學びたる知識にて十分なり。まして、國語科に於いて、此後なほ之を補習し得るなや。理科算術の如きも亦然り。殊に家事上最も適切なる理科算數の如きは、家 科に於いて、更に實用的に補習せしむべきか故に、吾人は今日の高等女學校最後の二ヶ年乃自三ヶ年間は、學科の數を減じて、女子専門の學藝を授くべしといへる所以なり。實に今日の高等女學校は、進んで高等教育を受くる僅少の女子には適切なれども、退きて家庭を作るべき女子若くは獨立すべき女子には不適當なればなり。」

机上の栞

▲女子の心得

女學界の先達下田歌子女史の著なり、表題は平凡なれども內容は決して平凡ならず、卷中形のと丶のへ、心のと丶のへと二樣に區別し、婦人の德性行狀を形心二樣の方面より說き及ぼしたるものなり。流石は學・和洋を兼ね、文章現代を蔽へる女史の筆になりしこととて、一事を說くに必らず一個の故事を引證して其の境遇、場合を示し、智見の狹きもの、學の淺きもの、修業の未熟なるものをして一讀成程とうなづかしむる樣に書かれたり、女子の讀物として誠に奥床しき書なり。

▲美姬遺蹟

美人は概ね薄命のものなり、西洋、支那、日本の歷史上に顯はれたる美人の生涯を見るに其終りを善くせるもの極めて稀れなり、彼れ世に出づる既に榮華の翫弄物となりしか、抑も又彼れ榮華を翫ばんとして出でし

か、槿花一朝の榮華は瓔珞の御輿もて彼れを迎へ、秋風一陣これが鬢髮を吹いて忽ち無常を觀せしむ、彼れは終に紅涙を絞るの薄命兒となりて畢る、美姫遺蹟は我が平安朝より南北朝に至る歴史上に顯はれたる美人の薄命史なり、衰亡史なり、又紅涙事蹟なり、清盛入道に捨られたる祇王、祇女、佛、義朝、義經を擁へる常盤、靜、曾我兄弟に愛されたる虎、又九重の奥深く玉體に近づきまつりし小督の局、建禮門院、辨の内侍など尤も運命の數奇を進せし美人貴妃の事蹟を情的方面より記述したるものなり著者は國文界に聲名ある池邊義象氏の事故、駈出しの作者と違ひ、人物の出所來歴を究むる所ろ極て詳細にしてその情を描くや優婉、筆端涙あり、紙上聲あり、一讀昔への美人を眼前に浮ばしむ、家庭情育の好著といふべし。

▲遊學の案内

これは内外出版協會にて編みしものなり男女學生の東都に遊學せんと欲するもの、好便覽なり、上京の準備、着京の心得、學費の豫算、試驗の格例、下宿の探撰、府下諸學校の案内等苟くも都下に遊學せんと欲するもの、あらゆる心得を網羅して一々丁寧に記述せり、

▲我觀婦人

婦人は社會の調和者なり、補助者なり、男子の働きに對して之を補助し融和し以て男子の活動を圓滑ならしむるものなり、又男子は恰も酒精の如し、劇藥のごとし、危險にして飲用すべからず婦人は恰も水のごとし、故に酒精劇藥の如き男子の活動を融和して飲料に適せしめ藥用に供せしむるものなりとは我觀婦人の一節なり、この如き筆法を以て之れを觀察し記述したるものにて婦人美、男女の關係、婦人の罪惡、戀愛等中々奇秘の議論多し著者は日本新聞の酒前茶後といへる隨筆をものせる虚心窟主人といふ人なり



彙報

●金剛石婚夫婦の古刀獻上　兵庫縣多紀郡城南村の內眞南條中村木庄達右衞門氏は本年八十七歲の高齡なるに至て健全にして學務委員等の名譽職を勤め且妻を娶りて以來恰も本年六十一年に相當し夫婦等しく壯健にして君恩を享受するの擴大なるを感激し今回傳家秘藏の古刀則重の銘刀一口を天皇陛下に獻上せんとて兵庫縣知事に傳獻方出願せしよし

●高等女子自修學校の支那生徒　牛込白銀町の同校へ四月頃には支那婦人十數名渡來し入學すべし

●新流行の襟飾　ヌメ形俗にハンケチ形と稱する恰もハンケチを結びて下げたる如き形の結びの極めて小さきを貴び地は概ね青味を帶びたる絹布にてアールヌボー風の模樣あるもの最も流行し古代更紗の模樣も可なりの好あり代價は一圓五六十錢より二三圓位までなりと

●教育障害事項調査會　東京府教育會にて嚴に兒童の感化に惡影響を及ぼすべき事項を調査して之を防止し或は改善せしむる方法を講究せんが爲め教育障害事項調査會を設置したりしが此程帝國教育會、東京市教育會、日本弘道會、大日本私立衞生會、大日本婦人衞生會、兒童研究會、大日本監獄協會、風俗改良會、婦人矯風會、日本聾啞協會、動物虐待防止會、理想團、日本體育會等に向て委員の選定を委囑したりと

●女子實業學校設立の計畫　東京府教育會にては此程神田橋外元東京府立第一高等女學校の全部を借用し來る四月の新學期より女子に實務を教ふる中等の女學校を設立せんとて其設置に關する諸般の方法を取調ぶる爲め林晉一、伊藤眞靜、谷田部順子、後藤東、小林盈、小谷野千代子、日下部三之助、井上守久、篠田利英、山崎彥八、杉浦恂太郎、山岸寶嶺郎の諸氏を委員に擧げたり

●東洋女醫學校　今回神田區仲猿樂町に設け去廿日より開校せり

●戶板裁縫女學校の科外講筵　芝公園なる同校にては更に家計簿記看護學育兒學等の諸科を加へ大八木女醫を聘したり

●女子商業學校の擴張　神田錦町の同校は設立日尙淺きも入學希望者甚だ多く前途頗る多望なりと

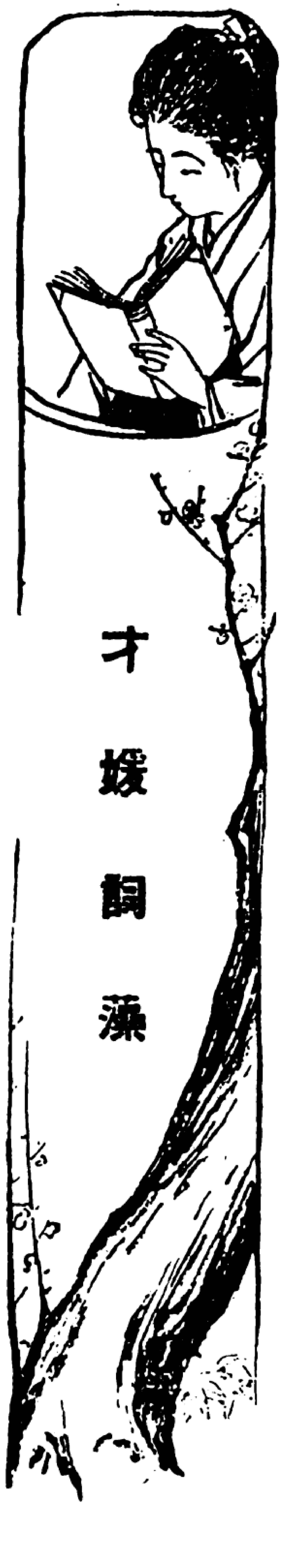
●故潮田千勢子女史追悼會　東京婦人鑛毒救濟會長故潮田千勢子女史追悼會は去十五日午前十時栃木縣下都賀郡藤岡町泉光寺に於て執行し當日は下流十三ヶ町村被害民は弔旗を押立てゝ參列し上流九ヶ村被害民一同も參列せり

●安井哲子氏の送別會　同女史は今回暹羅國皇后陛下の招聘により同國華族女學校設立主任者として中島富子、河野濟子を伴ひ赴任の途に就くに付き東洋婦人會を始め大日本婦人教育會、大日本女學會、日本女子教育會の四團体發起にて去る十八日上野精養軒に右三氏を招待し、盛なる送別會を開けり

●教員檢定試驗期日　文部省に於て執行する師範學校中學校高等女學校教員檢定本試驗の日時割は左の如し

學科	月日	時限
修身筆記 法制及經濟筆記	二月九日	(午前九時ゟ正午迄 同八時卅分ゟ零時卅分)
法制及經濟口頭		午前九時より
教育筆記 口頭	二月十日	(前八時卅分より零時卅分迄 午後一時ゟ)
英語(綴音、書取、文法)	二月十二日	(午前八時ゟ)
歷史(日本史 西洋史)筆記	二月十三日	(午前八時卅分より後零時卅分迄)
歷史(西洋史筆記) 國語口頭	二月十五日	(午前九時ゟ十二時迄 午前九時より)
國語及漢文	二月十六日	前八時卅分より〇零時卅分迄
同上	二月十七日	同上
地理　筆記	二月十八日	同上
修身　口頭	二月十九日	午前九時より
英語　教授法	二月廿日	同上
歷史(日本史 東洋史 西洋史)教授法	二月廿二日	同上
地理　示物、教授法	二月廿三日	同上
國語及漢文　教授法	二月廿四日	同上
同上	二月廿五日	同上
同上	二月廿六日	同上

●貯金管理所女子採用の成績　近來銀行會社其他諸官署に於て女子を採用すること流行し現に郵便貯金管理所の如きは二百餘名を使用し居れるが今其の成績を聞くに俸給の點に於ては男子よりも四割方を節減するを得又た事務上に於ては經算及び帳簿整理の如き緻密を要するものは寧ろ男子よりも好成績を奏すと



才媛詞藻

（天）海邊眺望　備中　大西益子

荒鷲の行く方や何處夕かけて
　宗谷か崎に吹雪するなり

評。句意壯烈、海風雲を捲くの槪あり。以て日露國際間に於ける昨今の險惡を喩ふるに足る。（[illegible]）

（地）名所春　京都　三の宮露子

往く船のあとだに見えず霞みけり
　ひれふる山の春のあけぼの

評。何等の含蓄ぞ、何等の餘韻ぞ。此の含蓄餘韻ありて、遺に別情の長さを見る。眞に「水遠山長愁殺人」のもの。又。「領巾振山」の一語を點して、千古の餘哀あり。

（人）名所春　河内　大矢たね子

野に山に春はあれども櫻咲く
　墨田川原の有明の空

評。たけ高きこと甚し。

秀逸

○○海邊眺望　東京　中村八千子

汐風に浪の浮霧吹き靡れて
　月に見え行く佐渡が島山

壯絶高絶。

○○海邊眺望　東京　櫻山八重子

入海の霞むともなき有明を
　浪間に淡き月の影かな

餘韻無窮。

○○名所初春　備中　鷲塚とよ子

賑はしき賤が竈の烟より
　難波の春やかすみそむらむ

大阪市街の烟突林立を望むの趣あり。

故事用ゐ得て奇警。

○○海邊眺望　備中　大西政代子

軍艦の行く方や何處門司が關屋霞る夜を船出すらしも

霞に見れ艦隊夜營の景、甲板上に「壯士雄不還」ものあるは、實はすして明か也。

○海邊眺望　讃岐　丸山照子

島かげに帆おろしゝ軍艦に二十日の月の影おぼろなり

壯景沈々たる夜色と相待て饒味あり。

○海邊眺望　秋田　佐藤ちよの子

しばらくは行くとも來ともわかぬまで帆影靜けき春の海原

春の海のなき歿りたる景を叙して、殆ど遺憾なし。

○海邊眺望　駿河　山本使子

壹岐對馬ほのぼの見ねて筑紫潟三十六里を波靜かなり

意氣豪邁と共に壯絶。

○名所春　山口　石田ちま子

水しわり岩しわりての晴かな月の瀬十里春のおぼろ夜

多趣多致。

○名所春　河内　矢守はぎ子

春霞榛鳥そめて昨日今日花さくら井の水かほるなり

用調巧妙。

○名所春　島根　岸崎瀬子

むら消ゆの雪間綠に萌えいでゝ若草山は春めきにけり

妙々。

○海邊眺望　東京　中村入千子

天離る空の影さへ見ねずなりて百里の大灘只濤の音

靜穩無沈の日、萬頃口外此の景趣あるべしと云ふ。

○名所春　京都　笑浦ゆき

梓弓春立ちけらしほのぼのと三保の松原霞たなびく

句格高し。

○海邊眺望　仙臺　梅村まつ子

かへり來る片帆おぼろに暮れ行きて月さし昇る春の港江

景趣知レ春。

○海邊眺望　河内　竹内敬子

須磨寺の鐘の響の長くひきて夕霧深し瀬戸の内海

清調。

○初　鶯　淡路　紫苑女史

鶯の聲をしるべに尋ね見む處定めぬ春のありかを

「處定めぬ」の語妙。

○名所春　香川　前田きみ子

春なれば去年の名殘の雪ながら花とも見ゆるみ芳野の山

凡ならず。

○名所春　京都　笑浦みつを

吉野山峯の雪かつ消ゐて山本くらき春のあけぼの

下句妙。

○名所春　水戸　榊　春子

こゝかしこ鳴く鶯の聲はして花になり行く月が瀬の里

下句面白し。花月の二字響くも妙。

○初　鶯　茨城　大橋夏子

峯かげに身は見ゐれども聞ゆなりおぼつかなげな鶯の聲

「おぼつかなげ」の一語にて、初鶯の意確か也。

○海邊眺望　東京　佐々木富江子

暮殘る山の端見ねて家見ねて波の上遠く月出むとす

海上月出の景見るが如し。

○名所春　越後　原　子

梅の花散りなば人の訪はざらむ杉田の春は今盛りなり

春を惜むの意深し。

レ名所春　安藝　松坂梅子

水車廻つく杵の音もして淀の川瀬の春の日長き

春日遲々の景歌ひ得て好し。

○名所春　遠江　栗松暎子

うすくこく霞棚曳く鹽竈の浦静かなる春の曙

眞に春曙の景。

○名所春　名古屋　森井せき子

うらうらと朝日のどかに鶯の啼く音もやさし嵯峨の古寺

「嵯峨の古寺」の一語に至て「やさし」の字活くるのみならず、全篇爲に趣味を生ず。

レ初鶯　横須賀　木村親子

何事もおくれがちなる山里に嬉しきものは鶯の聲

「おくれがち」の語を出して、句凡ならず。

レ海邊眺望　河内　矢寺はぎ子

繪筆手にとり見つ今日もうつし得じ朝日輝く艦の一列

巧に帝國艦隊の意氣を歌へるもの。

レ初鶯　千葉　平田すゞ子

春霞谷のとざしはつゝめども今日もれそむる鶯の聲

「もれそむる」の語「とざし」の字に響き、語意に切也。

レ名所春　伊勢　岸田智恵子

霞み行く小舟の外に音もなし須磨の浦わの春深くして

趣味深し。

○海邊眺望　和歌山　森　頂子

風呼び大濤咆ける荒海の飛沫の中を鷗群れ飛ぶ

眞に是れ大波洪濤の景。

レ○初鶯　美濃　栗田はる子

かなふべくは梅の便りにこめ遣らむなのり嬉しき鶯の聲

着想凡ならず。「梅の便りにこめやらむ」の意妙。

レ○海邊眺望　伊勢　奥田くら子

力なき月の光は濱に殘り百八十舟は朝びらきせり

曉海舟出の跡、眞に情趣多し。「力なき」の語自ら別後の情をなするを見る。

○初鶯　美濃　後藤まさを

めづらしく谷の鶯音づれて梅が香寒し夕暮の窓

「梅が香寒し」の語奇峭。初鶯の意言外に躍若たり。

○名所春　伊勢　林　俊子

心あらむ人に見せばや伊勢の國の二見浦邊の春の景色を

たけ高きもの。

レ海邊眺望　大阪　島　君代

語りつゝ沖邊ながめて眞帆片帆かずを爭ふ妹と背の中

恐くは新婚旅中の夫妻ならむ。

○名所春　水戸　上曾せん

消え殘る雪より淡く月影のかすむ信夫の春の夕暮

清婉。

○名所春　山城　葉山みさを
さな鹿もいでゝ若菜や摘ぬらむ風暖き春の春日野
才氣あり。

○初鶯　甲府　遠藤あい子
をちこちに初鶯の聲もして山懐つゞき春未だ淺し
初春の景。

▷初鶯　淡路　秋雨女
たま〳〵に雪ふるさとに歸り來て嬉しくも聞く鶯の聲
「雪ふるさと」の語ありて、全篇活く。

▷○海邊眺望　備前　小林つれ子
風多き波の上過ぐる彩雲のうするゝあたり水禽の飛ぶ
寒磯飛雪木葉々。

▷海邊眺望　石見　ゆり子
乗捨てし小舟のあたり波立ちて鷗むれ飛ぶ離島の磯
實景。

ゝ海邊眺望　長門　飯田はる
ほの〳〵と二見があたりあけそめて沖つ浪に白帆三つ四つ

○海邊眺望　長崎　山口水芽子
朝夕にうつりかはりてなか〳〵に眺めあかぬは海邊なりけり
此くの如くにして平板ならず。

▷名所春　靜岡　佐藤ひでよ子
天津乙女衣乾れし磯松に霞かぎろう時は來にけり

○海邊眺望　石見　宮内登美子
海原のみどりと共に霞むかな沖の小島の松のむら立
佳。

▷初鶯　岩代　齊藤菖子
一たびはそゝろに耳を疑ひき春まだわかき鶯のこゑ
初鶯の意明か也。

▷名所春　熊本　山室さだ
水清く花さかりなる堤の上をあまた乙女のほゝゑみて行く

▷名所春　東京　千代子
唐崎の松は霞に浮びつゝ春のひゞきをさゞなみに聞く
巧妙多し。

▷海邊眺望　神戸　中村きよし
高麗の海霧破りて軍艦行かひ榮ゆ頃にもあるかな

▷海邊眺望　伊勢　岡島いは子
名も知らぬ濱邊に立てば故郷に似たる島より月は出でけり
「故郷に似たる」の語ありて、句見るに足る。

○海邊眺望　三重　淺瀬とし子
雲重き多々良が濱の夕暮を北へと急ぐ雁の一列

▷海邊眺望　兵庫　柳田鶴子
日は西に海の上やゝに暮れそめて淡路島山たゞ墨繪のごと

佳　調

名所春、初鶯、海邊眺望　豐後　吉川よし子
立ちのぼる烟に都はとざゝれて煙突五十いま出んとす

●　大阪　西島喜美子
湯あがりの夕まど近き山茶花に初音うれしき鶯を聞く

●　芝　鈴木なばな

●うす霞む安房の連山ほの見えて帆船むれゐる竹芝の浦
長崎　古賀秀子

●うちなびく夜中の霞の絶間より海士のいさり火おぼろげに見ゆ
越後　坪井わか

●いぶせかる磯か藻やも昔の御神訪ひましけんかうくひすの聲
越中　村木すゞ子

●白いふな寄せてはかへす荒磯の松原つゞき霞はれけり
相州　池田みれ子

●水とりのかげ二つ三つ波にきえて沖の小島に日はなゝめなり
備前　村田さく子

●無き数に入りにし人の香を籠めて今年も匂ふみ吉野の花
東京　草間はる子

●新潮の匂ひむがしにたゞよひて霞みの靄の色新なり
信州　錦織幸子

●アルプスの層は雲にほの／＼とたくゐもあらしセ子バ湖の春
熊本　安田文子

●梅が香のたよりもまたてわかやとに春をつけ來し鶯の聲
茨城　作山美子

●ゆらり／＼白帆つゞきて紫の海のひんがし鷗鳴き渡る
小石川　常盤千代

●鳥かともまがふ白帆は久方の霞のおくに見えつかくれつ
河内　櫻井喜子

●後峯手に綾錦たゝすめり濱松の梢にかゝる白帆かそへて
山梨　原津多惠

●生ゝみの野邊の黄々春たちて雲井に翔る富士川の水
京都　井上らい子

●春の夜はたゞ淡墨の壹岐對馬玄海わたり月おぼろなり
信州　山崎春枝子

●春來ればちぬの浦浪靜にて霞にまがう淡路島山
紀伊　大石濱子

●わだつみの宮に女神や通ひけむしほすじ匂ふ春の海原
岩代　横山きつ子

●たゆまなく行かふ舟のけぶりにもみくにの富みぞ見えにけるかな
横濱　雲常子

●谷の戸もまだあけやらぬ朝まだき初音ゆかしき鶯の聲
高崎　細野春子

●自から水ゆるやかに流れけり花さかりなる江戸川の春
美濃　高森とし子

●霞いそぐ韓山かけて對馬がたすぎゆくふれや我が國の艦
肥前　渡邊しげ子

●あわ雲のところ／＼は消えうせてかすが野わたり春たちにけり
信州　安孫子絃

●露と消へし武士の青名はなくて花にのみ醉ふみよしのゝ山
芝　齋藤節子

●白雲もまたきえやらぬ山里にはやうぐひすのきつゝなくなり
静岡　寺西美子

●うつすとも筆は及ばじ富士の根の霞たなびくあけぼのゝ空
千葉　藤田波子

●西へ行く海士の小舟に日は落ちて海原千里霞になりゆく
青木　戸田英子

波白うさわぐ入江に風さえて夕ぐれさむく鴫なくなり
大阪　辻岡もと子

待ちわびし初鶯の聲すなりうれしき春は今や来ぬらむ
京都　四辻清子

夕づく日沈む波間にかげおちて空よりかへる海士のつり舟
下総　春野すみれ

年々に散らぬものと知りながら花の上野の花に暮れけり
山梨　芦澤とめ子

かもめ白く松原くろく波青く片帆の見えて風消えんとす
山梨　塩田高子

駒とめて物思ふ武者が緋威に花みだれちる下嵯峨の里
神戸　岩松まさ子

もしほやく煙一すじ立つ見えて海士の子歸る夕暮の空
福井　内藤正子

けさはゝやすそのゝ原を見渡せばすみれつむ子の見えわかぬなり
越後　清水みゆき

春がすみたなびき渡る沖が島かもめの羽も花とぞまがふ
秋田　近江谷はる子

東雲の鷲のはたてを羽ばたくに日本海上浪いかりたつ
博多　わたなべ

夕日さす志賀のあたりの夕なぎに白帆の二つ島かくれ行く
小倉　森木なみ

ほこりかに都の友にぞ書き送る今朝うぐひすの初音きゝつと
岩代　菅野和子

たゞ望む大海原は風なきに木の葉と見えて帆船群れ居る
島根　小泉てふ子

霞にあけ霞に暮るゝ隠岐の島黒木の御所に春たそがるゝ
伊豫　石王義子

海士の子の歌ふ舟歌たそがれて静けき海はたゞおぼろ也
熊本　はる子

三つ五つ咲ける庭面の梅が枝に初音ゆかしくうぐひすのなく
佐賀　松岡榮子

誰がやの軒端の梅に鶯の初音をきくや春のあけぼの
上野　塚越晰子

比叡が嶺はまだ雪消えず三井寺の鐘の音ゆるう春の風ふく
越前　宮川清子

いざといはゞ火蓋きらんと待つ艦のみ旗ひらめく瀬戸の海
近江　林まさ子

見渡せば淡路島山舟も海もひとつにかすむ春のあけぼの
群馬　鳳岩米子

古への大宮人を慕ひてや今も咲くなり志賀の花園
和歌山　今村濱子

和かの浦四方のながめも春めきぬ名草の山にかすみかゝりて
京都　西澤まつ子

何地にか急ぎ行くらむ軍艦沖へはるかに煙残して
兵庫　春山鶴子

はしりよる子等をとゞめて鶯にも初音きゝ得ぬみんなみの窓
神戸　山下とめ

文にして友が許へや云ひやらむ今朝めづらしき鶯のこゑ
神奈川　川井あさ子

潮ぎ歸る海人が船歌遠くなりて朧にくるゝ沖の島山 ●
淺草　増田とき代

はうき目もしるく殘りしわが門に初鶯のなくあした哉 ●
栃木　澄江子

夕日うけて入江にかへるつりぶねのはさまをぬひてかもめとひかふ ●
岡山　橋本芳子

朝な／＼歌麿ふまどに梅咲きてけさうぐひすの初音もらしぬ ●
神戸　今村竹子

朝風にはるゝ霞の絶間よりかつ／＼見ゆる沖の島山 ●
近江　林まさ子

夕去れは沖の片帆のかげ消ねておぼろにかすむ淡路島山 ●
筑前　瀬井きぬ子

名にしむふるい府の宮の御園生に清くもかほる白梅の花 ●
千葉　藤田のぶ子

往來する海士の小舟の影たへて碧海萬里唯波の音 ●
門司　伊澤見ふさ子

ひとつ／＼漁火消ねてながき夜の夢よりさめし淡路島山 ●
日本橋　行形よし

幾とせの風になびきし磯馴松の枝のかひより眞帆二つ見ゆ ●
岡山　きよ子

日は暮れぬ人は返りぬ吉野山殘るは月と花と我のみ ●
信州　飯田ちう子

新玉の年のたち枝に鶯の初音匂ひて日の昇るなり ●
千葉　平川遊貴子

霜とけの山路とぼ／＼辿る翁鳴く鶯に耳傾けつ ●
長門　原田糸子

島山も霞のうちにつゝまれていよ／＼廣き春の海原 ●
長門　梅田せい子

梅の花いまだ開かぬ山里に春をたづぬる鶯の聲 ●
岩代　菅野湘子

谷の戸をけさ出でそめてうぐひすは春たちけりとつくるひとこゑ ●
筑前　朱雀絹江子

荒磯もとゞろによする白浪の今日は靜けく靄に明けゆく ●
定子

紅の空にそびへて見ゆるかな海をへだてし富士の神山 ●
下毛　阿部ちか子

霞晴れて朝日かゞやく梅が枝に初音ゆかしく鶯のなく ●
東京　角田春子

霞なびく繪島のあたり風見ねて眞帆片帆行く夕映の海 ●
越後　東井時

大井川かすみのうちにいかだ士の船歌もれて落花一ひら ●
肥前　立野階子

見渡せばかすみこめたる海原にほの／＼みゆる海人のつり舟 ●
本郷　郷田直枝子

ほの／＼とあけ渡りゆく梅はやしけさあたらしく鶯のなく ●
淺草　増田とき代

み社の杉の林に鶯のさゝなきさむき朝月夜かな ●
八王子　中村静子

かすみこめし赤石が浦も今はれて入り來る舟の勇しく見ゆ ●
尾張　市川くに子

吉野山八重九重に咲きそろひ峯よりつゞく花の白雲　東京　柳原みや子

谷の戸をいついでにけん鶯の初音ゆかしき春のあけぼの　千葉　森　春子

み吉野の山の白雲晴れ果て霞とかはる春の曙　前橋　清　美子

谷間より庭なる梅をたずね來て春來ぬとつぐ鶯の聲　千葉　中村玉子

沖遠くのぼる初日の長閑さに濱の上さへ春めきにけり　高田　小林靜枝

夕まぐれ濱邊にいでゝ眺むれば入日淋しく白帆ゆくなり　美作　太田加女乃

沖つ邊に波をけたてゝ勇ましくかちどき高く軍ふね歸る　長野　山本こまつ

北の國のゑひす討つべく軍船に我背は乘りて今船出しつ　千葉　木川千里

春寒むみまたき布干を重れつゝ花のこゝろの岡島かな　秋田　竹内かれよ

靜なる波にてりそう朝日かげほにもうけゆくあまの釣ふね　越前　高橋みよし

窓近くおとづる今朝の鶯は春來と告ぐる初音なるらし　備後　木村政子

末遠く雲かと見ねて海原は波間靜かに白ほ行なり　大阪　藤田春江

淡路島今日は霞に包まれて波音ひくしちぬの海づら

東京　小池はな

梅咲きて母の病もおこたりぬこの春うれし鶯の鳴く　山口　岡村喜久

雪ふかきみ山の古巣ぬけいてゝ花にさきだつ今朝のうぐひす　四日市　鷲野通子

梅が香にさそはれ來るうぐひすの初音をきゝてふるさとを思ふ　信濃　みつ子

漁歌絶へていさり火消へて濱松原風の來て彈く琴の音高し　仙臺　高木いち子

朝きりに船出の櫓の音遠なりて濱の村々紫の色　本郷　江藤隆子

弟のはつ鶯を聞きたりと譲らぬ筆にかきて來にけり　明石　白菊

春の日の暮るゝもおそく眞帆片帆のどけく渡る須磨の浦かな　伊勢　清水かつ子

松風のやむ時波も音たえて靜にしづむ沖のうき島　千葉　平川遊蝶子

姉君よ犬吠岬はあれかとて妹指さしぬ九十九里の濱　青森　松尾ふみ子

かもめかとまがふ白帆の遠見にて春日は高く波靜なり　信州　中島二葉

梅の花にほへる頃となりぬれどまだ鶯のこゑそまれなる　信濃　松野すみ子

淡雪の花かとまどふ梅か枝にうぐひす鳴きぬあけぼのゝ園　群馬　佐藤松枝

我宿の梅が枝になく鶯の初音を君に聞せてと思ふ　●　千葉　小出ふみ子

契られし鶯の聲もうまやぢもかすみけぶれり月が瀬の里　●　千葉　小出君子

わかき姿となりのゞゝもすこやかにわれをむかふる淺江の春　●　播府　和田くみ

白帆一ツまた一ツ見えて日は暮れて漁火白き播州灘かな　●　鎮枝　和歌田露子

夜ゐの間に谷をや出でし鶯のけさ我やどに初音告げゝり　●　岐阜　井川松枝

見渡せば去年の雪だに消えなくに早鶯の春を告ぐなり　●　木曾道　瀧せん子

雲間よりこぎくる舟のかげ見えて夕日まともに舟歌きこゆ　●　姫路　三俣千代子

春かすみおちこち山にたなびきてはなに埋るゝみよし野の里　●　岩手　小林つう子

梅はまだ匂ひ初めねど春さればそこともわかず鶯のなく　●　岩手　小野寺明子

霞の江の岸うつなみものどかにて海人が網引のいさましげなる　●　名古屋　大岩たか子

松浦かた砂路はるかに霞はれて長閑に見ゆるもろこしの山　●　淡路　岡野こま

冬枯れてながめん色もなき宿をうれしくもとふうぐひすのこゑ　●　千葉　稲垣ちとせ

春の日のなぎたる海の彼方よりあやしき雲の見えつかくれつ

和歌兼題

桃　軍艦　殘雪

（〆切二月十五日）
（披露三月五日）

◎賞品天、地、人、の外秀逸二十種に呈す

▲家庭日記
▲新體詩
▲寫生文

（〆切二月十五日）

懸賞文規程

投稿用紙は半紙又は罫紙二つ折（和歌は端書に限る）の事▲題目の下には必ず住所姓名を明記すべし▲文字は必ず楷書又は行書にして叮嚀鮮明なるを要す一種にして數葉に亘るものは必らず右方の上部一ヶ所を紙撚に綴るべし▲原稿は博文館編輯局女學世界とせらるべし▲投書原稿は一切返却せず

峠越え

湘南　葉山しげ子

苔滑らかなる岩山路、鎌倉幕府が要害の地と頼まれしも理りや。さらでも危き七曲りの喩は、きのふの強雨に崖崩れ滴水流れ、一足登れば二足下りて杖と共に汗を握り、供の女と顔見合して唯太息つく許りなり。曲りくゝて牛道も登りたるべし、猶行方はと仰ぎ見れば大樹枝を重ねてほの暗く、かくても道のありやと疑はる。鵯にやあるらん、けたゝましく鳴く聲の、こだまに響きて物淒し。恐ろしのけしきやと思はず呟けば、供の女は強て打笑ひ、まだ夕暮には程もあり、小坪迄は上下一里とこそ承りて候へ今少しにて登り盡き申すべし絶頂の景色いかに美しくや候はん、かゝる嶮岨の峠越ゐ都にては夢にも見られぬ面白さ、などお當座は遊さぬぞなど勵まされて、あたり見廻せば麓の方より一人の老翁、是も杖に縋りて登り來けるが、かゝる山路に我等の行惱むを訝しげに見まもるさま、逗子、鎌倉あたりの漁夫なるべし。卒爾ながら小坪迄は猶何里に候ふと問へば立止まりて、偖は小坪へ行かるゝ旅人か、はや牛道と申せども女性の足にては小一里も候ふべし



此翁こそ小坪の在迄參るものなれ、道連れになり候ふべし、通ひ馴れたる我等さへ、ともすれば辷りかれたる此山の雨あがり、よくゝ足を踏みしめて拂へて辿り給ふなと懇しき言葉まづ嬉し。供なる女はゝや押れて、のう御身は此あたりの漁士かと問へば、さん候、田越の濱に年經るものにて候、若き時は魚を荷ひて江戸迄十三里日附に走りし事も候ひしが、老いたる今に至りてあゝ此不幸……と何思ひ出してか沈吟す。そは何事のと我も訊ぬれば、翁は眉目の間に悲しみの色を浮べつゝ、聞き給ひしか、きのふ別莊潰れて人死に多く候ひしな……悲慘の話しに感せまりてか、翁の聲は絶々なり。嗚呼委しくは語るに忍びず、抑その別莊と申は材木座村の南隅にて、後は峨々たる斷崖、前は茫々たる海に臨みて風致第一と聞ゐて候が、昨日は未明よりの大雨に山は鳴動し、海は怒り狂うて恐ろしき限りもなかりけるに、午前十時頃俄然！　後の山の墜ち來つて、あなやと思ふ間もなく一

家七人、さながら土に埋れて空しくなりけるこそ悲しけれ。や。今日の入日の鮮さ― よしなき物語のうちにはや是が絶頂なり、御覧候へ片瀬腰越、稲村が崎、また彼方に當つて遠く淡きは足柄箱根、富士の高嶺は江の島の上に見ゆて候と、指す方を見渡せば、げに絶景かな〳〵、夕陽波に輝きて沖に小さき白帆の影は、釣の小船か、江の島がよひの遊船が水の面に游を眺めつゝ下り坂に至れば、侯の女は後より、扨今の物語りは如何にと藤澤震災の有様なほも聞かんとす。翁は物思ひにや耽るらん幾度かすべらんとする身を杖に支へつゝ、されば候、潰れし家は立處に掘りかへして、五人迄は無惨なる亡骸をも見出して候が殘る二人は如何なりしか、瞬く間の椿事よも逃れ出たるには候はじ、嗚呼思ふもうたて此翁が杖とも柱とも頼みつる一人の孫此春より彼の藤澤に奉公住致させしが、うきには漏れて其七人の中に……涙にや咽ぶらん暫し聲は杜絶ぬ。稍久しくして語をつぎ、あはれ此間迄もものふ泣も、いとほし可愛の顔見たるに老が身を厭ひなく、此山越ゆて逢ひにこそ参りしが、今は引かへて悲しきしらせ歸へん身、同じ道過ぎて親類がり急くなり、さるにても旅人よ家には御上案じ給ふ親御達もおわすらん、いかなる御用のあれば名も恐ろしき此七曲り、夕暮かけては越ゆ給ふ、あれ〳〵鎌の里も見ゆそめぬ、はや三町餘りにて町へ出申すべし、是よりはよき道なれども何がさて黄昏近し、お二人とも御注意肝要と能迄あはれなる翁慰むべき言葉も出ればこそ。

既に此日も暮ぐれて身にしむ風に散るは涙か、あらぬか、袂濕ひて冷かなり。

下り盡せば平らなる追分道に出づ。翁は小川の橋の上に立ちて、此處にてお別れ申すべし此川傳ひに何處迄も〳〵眞直に行かせ給ふべし。暮しさらば當世稀さ若人よ、火宅の貫は我も人も異らぬものを、いたくな嘆きて身を損ひぞと、和むる言葉の嬉しくてや淋しき笑みをたゝへつゝ、力なき踵かへす〳〵も氣をつけ給へさらば、さらばと夕霧迷ふ野山路を彼方は右へ此方は左へ

袈裟の傳を讀て

京都　矢野隨子

嗚呼人たるものゝ最も重んずべき道とは何ぞや。忠ならむか孝ならむか忠孝固より重んずべく尊むべしと雖も節操より重んずべきはなかろべし。節操とは何ぞや。世人は唯節操を以て世の女子の其夫に盡す誠なりとのみ思ひなすめれどさのみにはあらず。男子たると女子たるとを問はず其心正しく其行よく道にかなひ己の信じて守るところ堅く如何なる艱事に遭ふも如何なる誘惑の來るとも終始一貫其心を變ずることなきを云ふなり。されば此節操は君に仕へては忠となり將べく親に對しては孝となり或は夫に貞となり兄弟に友朋友に信をつくすなどあらゆる諸徳の根本をなすものなり若し節操の心なくして忠たり孝たりはた其他の諸徳を全くせんと欲するも一旦艱事に遭ひては志挫け氣折れて又如何ともする能はず。ゆゝかくの如くは如何で忠孝貞信の道を全くすることを得むや。

そもそも我國の宇内万國に卓絶として秀づる所以のものは何ぞや。唯一の大和魂てふものあればなり。人はかはり世は變れりといへどもこの大和魂のみは古よりかはることなく其つもりつもりて發るゝ所は神功皇后の三韓征伐となり或は文祿慶長の役となり近くはまた二十七八年戰役となり來りて朝鮮の獨立を全くせしめたり。あゝ尊むべきかな大和魂哉

呼貴んずべきかな大和魂此重んずべく尊むべき大和魂の本領とは何ぞ。即節操なり。而して女子の節操を表はすには貞操を以てするを最も優とす。我國古より貞節を以て數千歳の今日まで其芳はしき名を賞せらるゝもの數ふるに遑あらず。されど其中にて感じてもあまりあるは源渡の妻なる袈裟なり。如何にかしこき人と雖も二の事あるに際し其二つながらを全くせんことは甚だかたし。袈裟の盛遠に難せらるゝや。事を全うして盛遠に從はんか。夫渡に貞ならず。夫に從ひて操を全くせんか。母は盛遠に害せらるゝを如何にせむ。あゝ事ならんと欲すれば貞ならず。貞ならむと欲すれば事ならず。袈裟が進退もこゝに至りてきはまれりと言ふべし。此時に當りて決然として意を定め謀を以て盛遠を欺き終に己は身をすてて事と貞とを全うしたるが如き如何で尋常女子のよくすべき所ならんや。然も袈裟や年齒未だ二八にみたずしてこの智あり。この勇あり。遂に暴戾無道の盛遠をして悔悟發憤の極死せむと乞ふに至らしめたる實に千載女子の龜鑑とすべきにあらずや。宜なるかな後世貞婦を稱するもの必らず先づ指を袈裟に屈するをや。あゝ感ずべきの至りなるかな。



つらつら方今女子の狀態を見るに一意脩學びすべき學生にありてすら徒に虛飾を競ひ綺羅を飾りて破顏嬋娟をきそひ一笑百媚をてらひ節操の何たるをかへり見ずして口に男女同權自由結婚等とさかしくあげつらひて操を破りて墮落の惡聲に高からしむ。高等の教育を受けたるものかくの如し。況んや。普通女子をや。其男子の玩弄物たるを甘受し或は朝に嫁を求めて嫁ぐも夕に去りて恬として恥づる色なきも宜なりや。あゝ明治の聖代に生れたる女子にして之等の行あるもの如何で袈裟に對して恥づるならむや。已等亦女子の一人この渦中に葬られて可ならんや不肖なりとも毅然として節操を守り躬行實踐世の模範となりて方今女子社會の改良を期せでやは。

死のかげ

大坂　すみれ

あゝ寂涙！

夜は森々とふけわたり宇宙萬象皆ねしづまりさしもひる間は車馬のゆきかひしげき都大路もたゞ折々にとほぼゆする犬のこゑ、吹きすさぶ木枯の音のみ、折しも最終の夜嵐は來りぬ、これよ聖歌百九十七、わか病苦になやむ妹の口よりもれし也、あゝ美妙なるかな！

されど刻一刻に細り行きて折しも吹きすさむ風のしらべに消ねゆきぬ、みれば久しき病苦に青ざめはてし頰のあたり肉そげて細きかいなをむれのあたりにくみたる實にばらよ小蝶よとたゝへられしかの妹ともおもほへずされど平和はいまもなほゑみしれがほにのこりて、

瞬間、一夕……二夕……三夕くるしげなるいきつき。とこしへにねむりぬ、よべどさけべどいらへなし。あゝゆたけき死のかげ今はまさに神のみつばさにすがりて天つみ國をさすらむ、

あゝわれは夏の夜のみ空にかゞやく星のと前途希望にみち〳〵たる乙女を失ひぬ春の野のすみれの如きそれに似たる愛らしき妹はゆきぬ、人々はかなしみ我もかなしみぬ、常へにかのあいらしきゑがほを見じとおもへば、されどわれはよろこびぬ常への あたゝかき春に常への愛のみ手のもとにかの乙女のたびだちしとおもへばおゝ神よかの女の上にめぐみをたまへ

世の人は何をうらみ何をかこつや
天には神のいますなるを
われはかなしまじうらまじ浮世のはかなきを
あゝ平和なるかなクリスチャン！

初日の出

湘南　三浦柳子

初日の出拜まんとて當郡第一の高山に登りしは、月落ちて星まだらなる宙の一天。霜にすべる木の下闇の寒さと恐ろしさとは身にしみ渡りて、提灯持つ手もおのづから戰き、思はずも時を費しぬ。山頂に至りし頃は、はやしら〳〵と明けそめて、東には松越、横須賀、金澤入江、野島の松原のかなたには、水天境もわかぬ東京灣、西には遠山の末に相模の海夢のごとく直下に淡く、霧をぼかしたる富士の嶺は、大宮に織り出したるかとも見ゆるが、恰も一段づゝ夜の衣を脱き行くけしき、我に寫生の筆なきこそ恨みなれ。際へゐが如く茫然たるもの半時あまり、東天次第に紅くなるよと見れば、只黑かりし此山の木立は皆松なりけり、背かりし海の面はみる〳〵臙脂を流したらんやうになりぬ。今こそ日の出よと矜かき合せ、そなたに向ひて合掌す。横雲眩くたなびきて金色の光りを、先づ我が眼底におくりつゝ、天つ日影はしづ〳〵と昇ります。恐ろしき迄にけだかくて、定かには見もやらざりき。かくて卅七年の元朝とはなりつ。はや立歸りて雑煮の用意をと思へ共、あかぬながめの見捨てがたう

家土產にと根ながらぬきとりし、藪柑子二三本、持ち添ふる袖に吹く風も今は寒からぬ心地して

自然

小西雅子

はかなくにごりゆく世よあさましく下りゆく世よ、とこしへに我等が友

としてとこしへに變らざるものをいづこにか求めむたゞ自然にしてそを求め得べきのみ。

あゝ自然ー大いなるかな美しきかな。そが大いなるうつくしき中にいくたのさとしいくたの樂しみを人の世にあたふるを見ずや。

月かげ霞かにさきみだれたる花は靈か　とばかりよものけしきのたゞのどけく美しき春の頃よ。

自然の美はやごとなき玉のうてなよりいぶせき埴生の窗にいたるまでいづこも同し錦をかざりて姫君が琴の音にあはせてなく鶯は賤がくむ水音にもなほおなじはつ音のうるはしかるべし。

さはれ樂しき春のいつまでかつゞくべき。やがて花はうつろひ若葉のみどりほとゝぎすの初音春の夢さませといふにも似たらずや。

あらかれもきくてふ夏の頃よ、したゝらむばかりの青葉はあまねく世をおほひてあて人が扇とる高どのゝあたりといはず賤が鎌とる畑のあたりと云はず一つみどりにしげるらむ。夕ぐれ、野べをさまよへば青々と清らけき自然のよそほひの目もさめむばかりなるに夕風のすが／＼しくて心のちりもあらひ去られつべし。

秋風ふきそめてやう／＼草も木も衰へゆく秋の頃よ、尾花が袖しら萩が花露になく虫の音などあはれにやさしきの景色とはなりぬ。すみわたる月かげよ、高どのにくみかはす盃にやどりては何をかいましむるに似たり糸つむぐやれ檐にさし入りては何をかなぐさむるに似たり。文よむ獄をてらしては何をかはげますに似たり。おとろへはてゝとふ人もなきむぐらの宿にかはらぬ光をなげては共にうれひ共にかなしむにも似たるかな。

あゝ月ーそのかげのいかに清くいかにやさしくいかに尊げなるよ、君にむかへば心おのづから澄みわたり志おのづから正さるゝぞかし。

よものけしきのさびれはてし冬の頃よ。白雪は宮もわらやもひとしうま白にうつめて身も切れむばかりの木がらしの音をきかずや。「さむきを忍べ。苦しきを堪へよ。かくて後にこそ花さく春にもあふらめ。」とさけびて草に木につげゆくを心あらむ人はきくならむ。木がらしの責を草も木も守りてにや風にたわね霜をしのぎて春をまつらむさまなり。

あゝ富める人よ、榮華の夢よりさめて自然の敎へをさとらずや。あゝ貧しき人よ。富を羨まで自然のかぎりなき樂みを求めずや。

あゝさとし、自然の深きさとしはいく千とせ人の世をめぐり／＼てはてを知らず。

あはれ自然、にごりゆく世にそまずかはりゆく世にならはずかくていくもゝとせおなじ笑みもておなしきさとしをくりかへすらむ。清くうつくしき自然はとこしへに變らざる我等が友なり。

あゝうた人よ人の世のけがれし夢にな泣きそうたはずや大いなる自然の美を！

亡き弟を想ふ

尾張　小擴やす子

終日降りしきりし雪は、午後七時よりやみ、星さへ現れ出てにけり。風も吹かざれば窓の障子おし開き、庭の方を眺むれば、南天の木に巣をしめし雀なるらん、驚きて何處にか飛び立ち去りたり。あな心にしなき、罪のわざしてけりと思へども、今更に悔ゆとてせんなき事なり。暫くありつるに、東の山より、寒月しづ／＼と昇り出てゝ、今迄の暗かりし庭も一入の眺めとはなりぬ。嗚呼此景色を眺むる每に、思ひ出すは去年に

みまかりたる、懐しきいとしの弟の事にこそ。彼を抱きかゝへて庭に出て、さまよひ歩きつゝ、梅の花を見せては、此の梅の花のやうに、忍耐強く香りゆかしき人となりてよと教へ、あるは、松の下に行きては、松の四季緑なすが如く、いつまでもかはらぬ心もて、忠孝の道を守りてよと訓へ、あるは竹、あるは柳、あるは岩といろいろ庭にあるものにつきて、彼を導き教へしが、皆水の泡草葉の朝露と消えはて、今其樹木岩石は、昔のまゝに、雪をいたゞき、月の影うけて美しき眺めなるに、弟はかなしや今はあらず。嗚呼今頃は、何處に何事して居るやらん、何處にて此の美しき景色を眺めてあるか、今にして此處に彼あらば、又いろ〳〵と教へきかせて、共に嬉しく雪見せんに、あなかなしの事どもや。天地は彼に生命をかし與へずして奪ひ去るとは、いかなればかくも情無の事をなし玉ふらん。若しも此世に有りとし聞かば、いかなる難儀に出合ふとも、更に厭はで、深山こえて尋ね出ださんにと、獨り文机に凭りかゝり、涙にかきくれてありしに、彼の襖おし開きて、友どちの伊志川くに子の君入り來り玉ひて、花の稽古にと、誘ひ玉へば、涙おしかくし急ぎ身仕度なして、共に行きぬ。然れども悲しき心の失せやらで、今宵は快く花も、挿すを得ざりき。

雪の暮

備後　枝廣たかお

時は早や夕陽西山に傾き備後の夕風さもそれならで ヒユー〳〵と吹き荒し牡丹の様な雪花は此處彼處に飛び散り製糸場歸りの工女も今日のみは得手の「ストサイキ節」も出ないか水色唐縮緬を頭高に巻き無言のまゝ足を我が家に急がして居る

時しも六時卅五分の列車は此の吹雪も厭はで滿員一聲數千の客を乘せて勢ひ勇ましくはや姿を鐵山に隱して仕舞た向ふの畦道には小鳥五六羽揚げた農夫の寒風に此方へ足を早めて居る其の筋向ひの庵寺には五六人の小學校生徒がさも面白氣に「いざや我友よ冬の野に出でて雪を蹈まん北風如何に寒くとも」と聲張り上げて居る其の傍には三四人の見守女の兒守唄が寒想に聞へた

兎角する内日はずんぶり暮れて何處にも戸を閉ぢて微かに節穴から光が大道の雪を照して居るのみで雪は増々降りしきり誰一人此の町内を歩むるものもなかつたのに女の子の愛らしい呼び聲に「運性緣談待人戀の辻占」と呼ばわりつゝ段々近ついて來た嗚呼此の寒空に辻占賣かとふと見れば足袋も穿かで素足の儘身に木綿の盲目縞のつぎ〳〵着物を着た丸顔の愛らしい七八つの女の子であつた妾は思はずアー可愛想にと叫んだ

人の噂にこの可憐の少女の父は或る會社の小使を勤めて居て裏長屋に親子三人睦じく暮して居たが不幸にも三年前此の少女が四つ五つの時父は虎列剌病に罹り遂に歸らぬ人となり其後は母の手一つに微に煙を立てゝ我が子の養育に餘念なかつた

兎角する内我が子も次第に成長して今の年になりやれ嬉しやと悦ぶ舌の根かわかぬ内忘れもしない去年の夏「トラホーム」の爲に兩眼を失し哀れ路頭に彷徨ふべき境遇に陷つた

今は誰あつて此の盲目の母を養ひ此の盲目の母を慰むるべき人あらん即ち此の孱弱少女が身一つに晝は「マツチ」の箱を賣り黄昏よりは辻占賣りなしてそして僅かに粥の湯を啜りつゝあるとのことであつたアー如何に憫むべき痛むべき少女の身上ではないか妾は此の話を耳にして

一層哀れを感じたのである

かるたあそび

大國すみれ

おむかひの花さんは來ましぬ、羽子もつきあきたれば諸共にかるた遊びをせむとて木村も三浦も松も竹も梅も來よと命じぬ、玄關のたれかれ、臺所の下女どもは何はさて擎に應じてつどひ來るはては隣のお三までもいろはのやう／＼よめるをものしりがほにほゝ笑みつつはせ來る、何を生意氣ッとつぶやきしは日頃にくめる書生の某也、

やがて日あたりよき奥の八疊に味方の陣はとられて男ぐみは源氏、女ぐみは平氏とわかれぬかなたは積かきあげてのぢもあらはにあらく／＼しうまちかまへたる刀こそもたれ、鋒こそとられいづれ頑丈なるつはもの其かみ辨慶の荒武者もかくこそとおもひやられぬ、こなたも女ながらの武者きどりいきこみたるさま中々にいさましかりけり、



やがて消ふすみわたりたるみこゑもて母君はずしいだし給ふ、打ちならべつゝ何の歌は味方にあり、くれの歌は敵にありなど暗じたりしがさてむのみあせりてかひなし、みこゑ聞きもおへずありはべりぬとてとりいだしたるは花さん也味方のつよきにやゝ力を得つ、さりとてお三のみかたには、しづ心もとなくてやう／＼戰ひもなかとなりぬれは「わが衣手に雪はふりつゝ」とわが衣手は露にぬれつゝとをとりたがへ、「今ひとたびのみゆきまたなむ」と「今一度のあふこともがな」ととりたがへてつぶやくものもあり、

進軍に心のみせかれてふいうちをくらひわびしがるもあり、

一の谷の戰ひならねど熊鷹を主義としよせてふせぎつゝ彼かの突進におどろくもあり、

卑怯つはもの、よせ手をおそれて除々に退軍し人かげに四五枚の札を手もてとりかこみよみこゑするまゝにヒヨ／＼するもあり、

さる程に「おとめのすがた」とずしんでたるにあなた、こなたより諸手さしいだしてとらむ、やらじとかたみにゆすりあふ、しばしありて强き

方とりたてゝうれしげにほゝ笑む、やがて勝負は決しぬ義經公は在さぬや源氏の面々に白旗ならで黒はたは立てられぬおもひもかけずうれしともうれしうて、ドットときのこゑはあがりぬ、味方はけましつゝ、またつゞけぬ、驕る平氏久しからずとやこたびはひたまけにまけぬいとくちをし、みればうつくしうきよらに梳けづりてありし顔がみもあさましうみだれ或は筆に黒々塗も手きづをいて今更心づきていたみをかこつもあり、正月にとて新調せし衣の袖のほころびて、花さそう嵐の庭の雪ならでぶりつくものはお三なりき、さてまたいくたびもつゞけしが花さんのあまりにおそなはりてはとのたまひしにふと氣づきてみれば夜は森々とふけわたりて、うどん屋のこゑのみ寂寞を破りてきこえぬ。

初春

周防　中谷鳥羽子

あら玉の年立ちかへるあしたの空、四方の梢もほのかに霞みそめ、香なり床しき軒端の早梅の時を得顔に、三つ四つ匂ひ出でたる、何となう氣高し。えも云はれぬ花の香をりは霞と共に天つみ空にも滿ちぬらん。峰の嵐やいたづらに吹きな亂し給ひそ。とつぶやく折しも谷の戸をいつか出でけん鶯のゆくりなく飛び來りて春告げ顔に。ほゝと一聲初音もらしぬ。あな懐かしと立ち寄れば、はやいづちいにけん影だに見えぬはいと〳〵口惜しき限りになむ。

四方の景色昨日に引かへ物めづらしき心地ぞする。家毎に門松立て波して祝ふ様めでたしともめでたし、或はしめなは日の御旗の吹く朝風にひら〳〵と打靡くは、さすがにかれらも治まる御代のめでたさをことぶくにやといと嬉し

折しも花やかなる日影は東山の端にさし昇り數ならぬ垣根の内迄照らしけり。いつしかと氣色だつ庭に、木の芽も打ちけぶり、おのづから人の心ものびらかにぞ見ゆるかし

折しも隣の鳥ちやんの優しき聲にて一ー二ー三ー四と手まり歌のこゑも長閑に聞えて。向ひの文ちやんは愛らしきさげ髪に紅のりぼん蝶々に結び。友禪縮緬の着物に紫どんすの被服。長き袂を吹く風にひるがへしもみぢの様な優しき手には美くしき羽子板持ち、そこかしこを餘念なく一ー二ー三ー四と羽子つき遊ぶ姿の、愛らしさ氣高さ其美くしさ、さながらエンゼルの舞ひ下りしかと怪しまれ。我を忘れて眺め居しが不圖彼方を見やれば數多の學生はいづれも「君が代」の唱歌いとめでたく歌ひつゝ通り過ぐるなり、あな勇ましと心浮立ち我知らず門邊に走り出で行くを見送り居たりしがふと此方を見返れば。あないぶかし、美くしきエンゼルの姿は再び見えざりき、

火事

京都　矢野ミチ子

あたりの寂寞を破りて、亂打せる半鐘の音、つゞいて起るけたゝましき火事よ〳〵の叫び聲に、夢破る如く戸を開き見しに、驚きぬ數町とは隔てぬ隣村の、とある家よりもえたつ、くれないの火炎に。

はや街道へは、わめく人のゝしる人、どもかしこの辻にはた、こゝの岡邊に群り、人山を築きぬ。

「風やゝ吹きそめぬ」と思ふ間もなく、火はこれに勢を得てか、いたくもねつきて、あたりもやがては嘗め盡すべく、漲る黒煙は、折柄さやけき十五夜の月をおほひ隱し、あとは暗黒の世界に、眞紅のほのをのみとなしぬ。大なる荷物を脊にしてにぐる男あり、女あり、菓子箱つかみて號哭せる童あり、一方には、消防夫がこゝを先途とぽんぷの水そゝぐありかしこには、とび口兩手に隣の家をつぶすあり、棟のやけて落つる物音など地獄もかくはと扱ふまじと身の毛もよだつれど女のかなしさ、心のみは徒らにあせるとも手傳ふすべもなし。人々の心盡しの効見えて大方消えぬと思へば又もや空焦さんばかりの勢、もえるかと思へばきえ、消ゆるかと思へばもえ、無情なる火の神は幾多のあせれる人を弄びぬ。火出しの家はいふ迄もなく其あたりの人の心の程如何なりしならん／＼。

されども、精神一到何事か成らざらんやの格言の如く、案夫の誠實に防禦するに恐れてや、漸く威を治めて鎭りぬ。

あゝさても恐ろしきは、火事なるよ、おのれ一家の不注意よりして、數多き人を煩し、苦しませ、あたらきのふ迄は、玉の臺にすみしものも、今日はおぞくも路頭に迷ふの大不幸を見る、これを小にしては一家、一村大にしては、一國の損失となる、あゝ恐ろしきは火事なるかな、火を取締るは、實に女子にあり、女子たるものふかく、意をこゝに用ふべき事にこそ。



新年

播州　はらだ

めでたしや、今日新たなる、
年をむかへて、さるにても、
思ひ出さるゝ、友やいかに、
朝まだき、まづ起き出でゝ、
眺めやりぬ、君がさとを、
さとの御里は、白みそめたり
あな、めでたく／＼、このあした
君もまた、われを思ふや。
初日影、東の山の端に笑む、
きらめきて、香にきつるは、
なさけこき、君が福音か、
あなめでたく／＼この朝、
君もまた、見たまふや、
君が邊にある、わが靈を。

月の歌

上總　齋藤美智子

夕ふべ花散らる欄干に
悲哀の顔を照しては
すゝろそむ姫君の
儚き魂を諸共に

咲きし者は我ぞかし
紅葉淋しき夏の夕
深けき糸を彈しては
彈し巧みも我ぞかし
セントヘレナの秋の暮
幽暗の庵を照しては
歌はれたるも我ぞかし
木枯巻き曠野原
征衣の袖を照しては
月影こそは我ぞかし
あはれ下界に苦しめる
乙女よ孤兒よ青年よ
紹ひしホープや失しラヴ
塵世の運命に泣かむより
永久に變らぬ我が膝に
來つて愛に遊ばずや
淸けき戀もこもれるに

軒端に眠る侘寮の
あまの苫家に玉簾
榮華のはての詫び住ひ
儚き運命に泣く詩人に
太刀を枕に益荒雄が
故郷の空を忍ばせし

見よや胡蝶の夢さめて　野べのみ神がみ手づから
抱きましつる若草の　花の樹にさゝやぐを
見よや夕べの色こめて　夕つゞ空にまたゝけば
紫香ふ花びらに　露のま玉のれぶれるを
絢しき影とくしき香と　神秘を綾に織りなして
あまりに奇しき春の色　神も自ら讃ふらむ
あゝかくてこそ人の世に　幸繁き慕も繁かれず
「樂しき世や」とさゝやけ　晉はやれてほゝゑみぬ

春は來ぬ

磐城　作山　美子

浪をわけ來る汐風の
曇り曇らぬくまもなく
ほの〴〵霞むをちの空
大天地にみち〳〵て

温かき香を誘ひ來て
野にも山にも春は來ぬ
若草けぶる香も高く
我世たのしき春は來ぬ

朝の海

遠江　乘松　暎子

すさびくるひし海原の　さゞめき靜し音たえて
紫匂ふ潮の香は　空と水とに溢れたり
ひきし霞のうすらぎて　たゞ見る蒼き大洋の
波にいくその秘ごとも　白きしはよをそれと散る
雲井はるけき沖の江に　帆船二つ走りゆく
青瀾永の夢さめて　今平和なる海の面
そこに小船の四ツ五ツ　眞帆に片帆にはらうつゝ
遠き島根にまぎれゆく　春のどかなる海の面
見よ美はしき朝ぼらけ　光る黄金の波遠く
はねある色の浮びては　新らしき希望音に湧く
霧には殘る星のかげ　白き鷗や濱千鳥
見しものごとに微笑めて　憂ひの人もよみがへる
あゝ靜かなる春の海　霞は靜和の色ふかく
波は千古の影たゞふ　いかに景色を讀み得てむ

なつかしき學びや をとひて

肥前　嬉野　粂子

花咲く園をとひながら　などて流るゝ我が涙
花や知るらん我が學ひ　今はみとせの其の昔
戀しき友と手をとりて　咲きみつ花の下かげに
好みし道をかたりつゝ　文の山路ものかはと
いと頼もしく學びしを　み情け深き師の君と
學びの庭をさまよひつ　賢き教へきゝつるも
春の彌生の頃なりき　友高樓のおばしまに
二人イすみきしかたや　行末こそはちぎりしも
今は海山隔てつゝ　雁の便りのそれのみを
まつ身となりし我身哉　花よあはれと思はずや
父なき後の父君と　仰ぎまつりし師の君も
今は數里を隔つなる　片山里のふみのやに
老ひの御身も忘れまし　色うるはしき撫し子に
培かひますと聞くものを　我のみなどていつ迄か
幸なき身をば歎くらん　あゝ情けなき浮世かな
今はかたみの學びやも　家はくづれて跡もなし
あゝおもほへば〳〵　なにも昔の春の夢
消えて跡なき今朝の空　うつろひ易き塵の世に
なれのみ獨いにし日に　かはらず春を迎ふるか
我は汝をばとこしへに　峯の嵐にうるはしき
折しもあれやふき下す　友と思はん園の花
花は吹雪と散りにけり　隨流るゝさゝら川
行衞やいづく花のやど　幸も望みもあらぬ身の
我らもともにさゝら川　流れ行衞のふちのべに
たゞずみてけり夕まぐれ



紅葉山人昔がたり

田中夕風女史

あはれ、紅葉山人は、終に果敢なくならせ給ひぬ。昔物語にも、秋こそは人の亡せためれど、かゝれとしても、紅葉の御名は附け給はざりけむ。夢のやうなる御訃音の後、さすがに暫のほどは忙がしきに紛れぬ。人静まりし夜半、御戒名に打向へば、その事かの事思ひ出で奉るにつけて、あはれ都ならましかば、折節の御介抱も仕う奉りけむ、御臨終にも逢ひ奉りけむ、など取返さるゝものならぬが、いとゞ懐しうも悔しうも、さまぐ\に思ひ亂れぬ。わが思ある限り、思へば辛き御訣れにもありけるかな。古りたる枕詞なれど、賤の小田卷繰返しても、はるけ處なきが、いと苦しきぞ、いでや端々記しゆかなむ。

本日、北田うすらひ參り、せひ、一度は、御前樣に御目にかゝり度と申候に付、正月四日午後一時頃に參らるべし、其節、田中氏も見えらるゝやう都合いたしおかむ、と申置候間、不都合無くば、右時刻に來らるべし。尤も、雨天ならば、遠方ゆゑ、順延したしと申居候。御返事待居申候。（廿八年十二月廿八日）

二間續きたる二階の御書齋の日あたりよきに、例も快活なる限なき御性の、一際御氣色麗はしう、御

机により給へる此方に、眼覺むるばかり美き奥様の、其の折廿三とか仰せし、漆と黒きつやゝかなる御髮を、貴婦人形の丸髷に、赤き手柄の映えて、糸織の御衣服に、小豆色更紗縮緬を襲ね給ひて、黒縮緬の御羽織に、撫肩のいひしらず懷かしきさまし給へるが、二番目の孃樣抱かせ給ひて、今日は御書齋に在せる側へに、憂世なれや、是も、今は故人となりつるうすらひ子が、こちたからぬほどの高髷に、銀鼠玉糸縮緬の衣二つ襲ねて、らんけいの帶をお太皷に結び上げたる、肉附よく、背も延らかに、これも美きに、遅れてゆきしわれは、端の方に坐りて、花の傍の深山木の、それにも劣りたらむ。そゝけ勝なる束髮なりしも、とり〳〵に似つかはしかりけむかし。

先生が、何か仰せつる折、お衣裳にも、澤山色紙があたりて居りますから。と虫喰齒のちらと見えて、片ゑくぼのたとしへなく美き奥様の、笑ませ給ひしを、呵々とて、銘仙のお衣服の、御膝のあたり見給へるを、よく覺えぬ。

お壽司、安倍川など、女に相應しきものもてなし給ひて、春陽堂より、明れば暮に出でたる、片齒と、喜劇の戀の病とを、われらに賜ひけるよ。歸さは、神樂坂の賑はしきを共に下りて、われは江戸川の方へ、かれは淺草なれば、例は神田の方へ出づれど。とて、わが方へ打連れつゝ、逢見ぬほどは、いかさまの人なるらむ、麻糸のよりつき難くなどあらば、など、心を苦めつるなど、同じ思ひを語り交して、初見なれど十年の友の心地に、父母のありなし、同胞の、男幾人、女幾人まで語りて、江戸川の橋の上に、いつしかも立ちそめたる霞の間に、枝垂柳のおぼろ〳〵と見えて、向ひなる同人社の瓦斯の點燈るまで立盡しゝ後、見送り勝に別れたりき。

其後、われは、淺草までは、まれ〳〵ならではえ往かねど、彼方は、牛込の歸さには、大方立よりて、口重き人の、わがいふ事には答へつゝ、されど、此度はかゝる趣向のもの書きたりなど語り出でゝは、

やがて、いと委う、三時四時の久しきを遊びて歸りぬ。

友は仍あれど、われは實に、御身を姉上と頼めるを。など、しみ〴〵とやさしう、此の、自らさへ思ひ捨てつる幸なき身を頼めて、夫定めの事何くれも、包まず語りにし。

互ひの心に變りなくて、何時も一つ年の心地すれど、羽なくて疾く、六年七年過ぎたる十二月のそれの日、われは遺子の三歳なるを連れて、新婚の夫の任地なる富山へ啓行つなる、渠を見送るべく、上野の停車場に到りぬ。

から風寒き中に立盡したれど、渠の一行は見え來ず。時間や變更りけむ、と下谷なる家に訪ひしに、送りゆく兄の都合ありて、明日に延しぬ。とて、前日、共に撮影させしを持出で丶、昨日送り來しぬ。見給へ、君はいとよく寫り給へるを。われはいとをかしうて。など笑ふ傍へに、打捨てらる丶妹の君の、心細げにまつはりて、同じく寫眞など取りては見居たる。彼方へ往つてお出でなさいよ、私のあとばかりついて來て、いやな人だ。とて、優しう睨むに、そんな惨い事を、もう一日しかなきを、たんと〳〵引ついて、お巾着におなりなされ。と言ふわれさへに涙ぐまれて、折から悲しき身の上に、此の友さへに打捨てゆくよ。と端へ情なくて、西子の君の、彼方に立たれしほど、何となき身の上も打出でられて、泣くに、彼方も、桃色の絹の手巾眼を放たざりしが、やがて、君のやさしき心も、天もあはれみ給ふ折あるべし。御子の爲にも、後見なくては不便なるを、頼もしきを見定めて、よすがを定め給へ。遠く隔たらむとも、われも、今かならず計らひ參らすべし。など、つく〴〵といひ與る丶に、斯斗りの宿世と思ひ絶えて、今は唯、小兒一つに繋けたる命なれども、涙の眼に思はず彼方を打目戍られて、わが咄の糸くり出すにすら、さばかり渉々しうは答へで、只管世ごもりたる少女のやうなりし人の、人婦となりしといふばかりに、いたくも大人びたる言を、とかつは

あやしうさへきゝし。

今日は日曜なれば、折よしと思ひし。明日となりては、職務ある身の、送り難ければ。とわかれしが、思へば、それぞ、かれを見ることの終なりける。

かくして、渠が、富山に一年あるほど、われは、静岡の學校に、赴くことゝなりぬるなり。

餘りに遠々しく折絶えさせられ候故、其後は、いかが御暮し被成候やと、折々は思出で、御案じ申居候處、本日の御手紙にて、御起居を詳に致し候。御變りも無く、益御出精の趣、何より結構の事に御坐候。此後とも、御油斷なく、勤むる所は御勤め被成、餘力有る時は、筆執る事を忘れざるやう被成度、希望に不堪候。

北田氏は、辨天町に引越し被居候が、昨年男子を擧げ候てより、引續きぶら／＼と煩ひ、此の夏初頃より、腦結核に罹り、不治の重症に陷り、逐日むづかしき容体に有之候へば、とても、來春迄の命は有るまじくと、氣の毒に御坐候。

さぞ／＼、御驚きの事と存候。人の身の上ほど、計られぬものは無之候。又無き好き緣と思ひ候へば、其身如此、憂き世のさまに御坐候。

此方にては、本年三月、又々女子生れ候。「三千代」と名け申候。女の子三人の世話にて、妻は瘦せおとろへ、小生も何かと手を取られ、困入申候。それに、去年の夏より、慢性の胃病にて、著作に慵く、新聞も休みがちにて、是又困入り候。

實は、其許の御身の上も、陰ながら御案じ申居候。その後は、いかなる御様子にむかはれ、愉快なる家庭を作り被居候か、御次手の節、御洩し被下度候。

門生は、皆發達いたし候やうにて、安心に御坐候。小栗も、本年は、結婚可致話に有之、目下は、惣勢七人、出入を致し居り候。

小波洋行致候て少しは寂と感じ申候

是より出掛け候事とて、取急ぎ候へば、色々書遺し申候。早々（三十四年一月三十日）

祖母は、去年の秋、胃病にて歿し申候。

物語書かせ給ふにも、女の上の多ければ、一向に、たわけたる柔弱男子と、誤り思ふ人もあるべし。五分がりのさかやき短かう、御身体も大きだ、さりとて、痩くれても、はた在さぬが、竹をわりたるやうの御氣性に、虚飾、あるは氣取るなどいふ事は、まことに、卯の毛の先の露ばかりもおはさゞりき。似たる者夫婦とやらん、比ふべき方なく美き奥様の、それも、世にいふ美人めかすなどいふ御事は、露おはしまさで、さはやかなる御言語の、あまり重くろしからず、さりとて、口敏く品なきなどにはあらで、まことの程よしとは、實にかゝる御様ならむと、いつも〳〵見奉りし。品行に欠けたる處ありたらんには、いかに、金玉の名文なりとて、誰も、眼ふるゝものあらじ。とは、常に仰せし御詞なりき。虚飾といふとの、いみじく御きらひに在すと、文章の、いさゝかなる疵も、えのがし給はぬと、時として、一夜作りのあしきもの御眼にふるゝ時は、文章といふものぞ、何と心得ての業ぞ。など、鳴りはためく雷のやうに、叱らせ給ふとすれば、此方の心より詫び奉るを見給ひては、また、野分のあとの朝日の如くなり給ふ處とは、あへて、似せ奉るにはあらねど、われの生徒に對するさまの、おのづから似奉りたる心地ぞする。

人は何と見るらむ知らず。しかく、叱り給ふも赤心、ほめ給ふも赤心、御心になき事は、露も御口に出し給はず、否え出し給はぬ師の、此の御文を見奉る御弟子の身に、泣かずと言はゞ、そは虚僞なり。長き〳〵御心は、此の御文の丈にも餘り、深き〳〵御いつくしみは、實に、紙背に徹すとも、申さまし。われはかりにはあらず、誰にも斯くぞ在すなる。

秋の野に、蜘蛛の、露の玉ぬきたるやうに、警句の打しきる御口もて、よく怒り、よく笑ひ給ふも、皆、御心の底より迸り出づる赤心の、玉の響なりけるなり。

其の道にきはめて忠實なる御心は、「勤むる處は勤めて」に、よく顯はれ給へり。書などかく人のともすれば、勤めの方は怠りざまになるを見ぬ。されど、まことに 苦きほどの病ならねば欠勤といふ事え爲ぬほどの小さき心に、歸ればやがて、家の事、小兒の扱ひに暮れぬ。何處に、興の乘るなどいふ、暇なければ、鈍き筆の、いよいよ、硯に遠ざかり果てゝ、まれ〳〵、日曜と、大祭と、打續ける折など、つゞくりものゝ手もあきぬ、かゝる折と、有繁に、昔思ひ出でゝ、筆とる頃は、其の二日目の夕べなりけり。眼を閉ぢて、何者かより來るやうなるを、捉へむ捉へむと焦慮るほどに、夜は深けて、やがて眠うなりぬこゝまで浮びつれば、又明日の夜續けなむ。と打おくに、翌日は、又一日の職に勞れて、扨、机に對ふ折は、昨日の興は、いづかたへ逃れ去りけむ。遂へども〳〵、影も捉へず。かくして、又一週間を、匆々として過ごしつ。積りては、一年となり、三年となり、五年七年となり、さては、一生をも、かくて果たしつべきなり。

又なきよき緣とて、媒人し給ひしを、憂世のさまと、かこたせ給へる。來春までは、の御詞あやまたで、其年十一月六日黑枠の端書に、「昨五日午後六時死去。」とて、良人の君梶田半古氏と、亡き人の嚴父なる、北田正董氏との、連名なるが、わが宛名は、先生の御手して書かせ給へる訃音來りぬ。物思ひに死すといふこと眞實ならば、われこそは、先づ消ぬべかりしものぞ。

其の暮まうでし時、奥樣の、實に、御美しさは變らずながら、例へば、昔は、柳の枝に咲かせたる櫻のやうにおはせしを、そのほどは、雪間に匂ふ白梅の、まことに少し面瘦せ給へるが、ねびとゝのほりて、却、神々しきまで見え給ひき。三月に生れ給ひしを彌生子四月なりしを藤枝子、此度のぞ、桃の節句の、三千代子とは命け給ひしなりけり。わが家庭のさま、愉快にか。とて、御心にかけ給へる。本家は、判事なる人の、茶座敷に一間建て添へたる、まことに、

其地の名物なる、竹細工めきたる家に、庭のさまも、四邊の景色も、思ふやうにて、富士さへ、椽より正面に見ゆるが、朝暮の慰めにて、昔鎗術の免許うけて歩兵指揮役頭取とやらん、緋羅紗に、白綸子の裏つけたる陣羽織に、裏金の笠被ぎつる名殘は、腕節の逞きにのみ殘りて、白き鬚ならぬ處には、浮世の波形のひまもなく、彫られたる老人と、歸れば、珍らしがりて、傍へを去らぬ、振分髮のいわけなきを敵に、身一つをたけきものにて、日毎に、同じ事して日を送りつるなり。

多き御弟子の、實に、面の變りたる如く、物語の構へも、筆づかひも、とり〲に異れるは、秋野の千種にも似たらむかし。さるを、萩は萩に、紫苑は紫苑に、たわめず、曲げず、生うし給へるなり。御友の上を、われらにさへ、御友情の溢れたりや。祖母とは仰せつれど、いと若やかに、物淸げに、それも、いとめやすき方におはして、折節御不在に參う上りつる時など、「德太郎が、かく申置きまして。」など、仰せられし、御本名仰せ給はずとも。と、畏く承りしかば、忘れぬなり。

別紙、二六新報にて、病狀大方御察し被下度、死は覺悟の上にて、攝生大事に、病と鬪ひて、彼をば殪す勇氣滿候。せめては、これなりと、御安心下され度。氣分にはかはりなく、胃の腫物も、さしては痛みなく、唯、消化不良の爲に、體力衰へ候が、困入申候。又々可申入候。草々（三十六年三月廿三日）

勇ましき御氣性に、彼を殪すと仰せしは、いと賴もしかりしを、終に、打負け給ひしぞ、口惜しき。

いづれに似給ひても、花のやうなる美き三人の孃樣に、四人目は、玉の如き坊樣にさへ在せしを、いかに、嬉しと見給ひけむ。されど、そは、まことに、泡雪の消ぬるほどにて、やがて、不治の憎き病症と、宣告され給へる御心地情深き御性に、いかばかり、御遺族の爲も、悲しう思し染みけむ。其の二六なる、「鶯の、啼音悲しと、夢に見し。」御實況なりけむかし。

其後病況よろしきにはあらねど、あしといふにもあら

す。一兩年の後、御逢ひ可申、其日の來らむことを、望居申候。又々可申入候。草々。（三十六年六月廿四日）

海苔麁朶繁く立てる遠景に、帆をはりたる船大きく、船夫に、客も一人乘りたる、油畫風の繪端書に、ペンもて書き給へる。前なると、此は、石見なる濱田の、わが寓居に宛て給へるなり。

いつしかも歳暮の來よかし。さらば、疾く上りて、年來心に籠めたる要も、名殘なう聞え奉り、なつかしき御氣色も、拜み奉らむ。と頼むにつけて、かたがたに、都の遠きが本意なき餘り、折から病氣にさへ冐されしかば、強ちに乞ひて、やう／＼馴染みつる學校にも別れ、生徒をも振捨て、此處に轉じつるを、然ても、悲しき御便りを空しく聞きにしこととの、返す返す、口惜しう悲しきに、あはれ、一と申さば、十は愚か十五六



まで、推しはかり給ふほどの、智者にはおはしながら、さすがに、神ならぬ御身は唯、その四月の後冷き墓穴に入り給はむを、知らせ給はざりけむ。と言はん方なし。

うむ、その奈良といふ處が、剝げた椀のやうな處なんだ。

こは、わが任地の、靜岡に定まる前、奈良へ往くべ



かりしが、先方の人、辭職を思ひ留まりしとて、われに言越せしを語り參らせし折、友が申て居りました。見物に參りた時、一寸したる家にて、晝食したるに、味なきものを、はげたる椀に盛りて出せしよし。よき家は、他にもありけむを生憎なる家に入りしにか。と申もあへぬに、仰せし御詞なりき。

尾崎行雄が近所へ越して來たんで、郵便配達夫が、よく間違へて、おれの處へ持つて來るから、衆議院の議長の尾崎は、こんな裏家に借家住居はして居ないよつて、笑つて返して遣る。

年來、何くれの先生の御許にも、あまた詣づる中には、御庭、いと廣やかに美うて、種々の木石どものたゝずまゐ、折曲りたる御椽のさまも、昔の、何の守の邸などいふも、かゝりけむ。と思はるゝあり。然るを、これは、御玄關の三疊に、鏡花風葉春葉などの方々在して、北の次の間に、御二階の御書齋への御許可得るまで、控へて、隣れる御茶の間より、奥様の、御手づから、茶など賜はるを頂きつゝ、御庭の無きにはあらず。御書齋の、必ずしも、あしとにはあらねども、わが慾眼には、それに、十倍、二十倍もあらせたくて、いひしらぬ心に、くらべられけるなり。

文士の報酬といふもの、西の國のやうにはあらで、萬に、御心にそはぬ事も多くありけむ。御勞力の、百分の一もせで、さりとも、富に誇れる、俄分限などもある世に、悔しとも思したらで、御臨終に、七生まで文書かむと仰せつる、尊さ。人は、自己に適したる職業に從事して、死するまで悔なきを、偉人とす。との格言は、やがて、先生の御上を言へるにはあらずや。

髮が六かしう御座んしてね、昨日は、少し根が上りましたら、歸つて來ると、直ぐに、何んだ、今日の頭髮は、まるで、鳥羽繪の女房のやうだ。と散々に申ますから私もいやになりまして、丁度、結はせてくれ、結はせて呉れ、と申のがありましたから、それに、結ひ直させましたら、生憎、夜、お湯で、例の髮結に逢ひましてね、おや、お髮が變りましたねつて言はれました時は、もう、氣の毒で堪りませんでした。着物でも何でも喧しう御座んしてね、私が買つてゝも歸るものなら、種々な事を申て、けなしますから、何時でも、もう、貴夫に御任せ申しますつて、頼みますんですよ。これは、誠に、健康で御座いますが、惣領のが、此節

は、それでも、御蔭様で、大分丈夫にはなりましたが一時は、三日に上げず、實家へ連れて參りましてね、もう眞個に困りました。

まことや、御實家は、神明前の、樺島とて、御兄なる君の、國手にて在すなり。語尾につけ給ふ「ね」が、些、音高く、短く、引締りたる。御言語さへに、なつかしき さまし給へり。稚きばかりを、右に、左に、啼きよわる虫の音の、御言がましき夜半、壁に伴ふ御自らの影に、わが、斯く、種々に、思出で奉るに、幾そばく增りたる御歎きを、繰返し給ふなるべし。

セントヘレナの古英雄をも殪しけむ、病にこそは、負け給ひけめ。然許り、猛く雄々しく、思す事果さでは、止み給はぬ師の、七生まで。と仰せつる頼もしさ。あはれ、今よりは、知らぬ赤兒の面も、床しう打目成られむなり。

露西亞小話

櫻塘山人

其一

富豪の隱居エプ井ム、シエヴエレツフと、百姓の老人エリシヤ、ボドロツフとの間に、いつか有名なジエルサレムの靈場へ巡禮の約束が出來ました。

そもこの豪富の隱居と云ふのは、極めて溫順しい、品格のある性で酒も飲まなければ、煙草も喫まず、世間から誰一人此隱居を誹謗した者がないと云ふ有樣二度まで村會議長に撰まれたが、此間でも村は尠らず此隱居の恩惠を蒙つた。

家には二人の伜と、嫁のある孫まであつて、今年七十の腰も曲らねば齒も落ちず、至極の健康で、長い髯を垂れて頭は未だ胡麻塩の矍鑠たるものである。

エリシヤの方はさまで富んでは居ないが、またさまで貧乏でもない、若い時には相應の大工であつたが、年を老つた今は蜜蜂の番をして其日々々を送つて居る、

倅は二人ある、一人は遠方へ出稼に行つて居るし、他は家に居る。嗅煙草も嗅げば酒も飲む、陽氣な事が好きで隨分歌を唄ふやうな事があるが、何分好く出來たお爺さんで、近所の評判は惡くない、容貌から云つたらみすぼらしい縮れた髭をまばらに生して、五分刈の頭の毛が無闇に延びた工合と云つたら、哲學者とも云ふべき風で、人は哲學者と命んで居る。

二個の老人はジエルサレムの巡禮を約束したがまだ何日實行と云ふ模樣は見えぬ。それは隱居エフ井ムが、大家だけにそれ相應の用がある。やれ孫に嫁が來るの、やれ末の子が兵營から除隊されるの、新しい小舍を立てるのと云ふ理由で、つひ〳〵延々になつて居る。

ある祝日の事、二個の老人は材木の上で空話に耽つた。

「隱居さん、まア何日になつたらジエルサレムへ巡禮が出來ませうかな。

哲學者先生がかう云つて隱居の顏を瞻ると。

「さうさな、俺もお前と約束して、折角思立つた巡禮ぢやから、行きたくは思つて居るが、あれ御覽、あの小舍を建てるに就いても相應に金が懸つて居るし、其前にも色々な入費が祟んで居るし、今と云つて道連れになる理由にも行かんが、來年の夏になつたら、まア、行はれやう。

隱居は新らしく建つた小舍の方を指したのである。

「そんな事を云はないで、一所に行かうぢやがアせんか、春が巡禮にはもつて來いと云ふ時ですもの」

「そりやア巡禮は春に限るが、あの通りの仕末だもの普請中に出懸ける理由にも行くまいて。

「いゝぢやがアせんか、何も貴郎が番をしないからつて、息子さんが放擲つちやアて置きなさるめえと思ふんだがね。

「成程俺が居なくつても、普請奉行位、倅がするだらう、だが家を委しては置けないのさあの醉漢め何をしでかすか解つたものぢやアないからの。

「そう心配しちやア限がない、今こゝで俺等二人が死んだからつて、後は什麼にかなりませう、貴郎の息

子さんに悉皆後を頼んで行つたら、滅多に間違もありますまいよ。

「けれども俺が居てさへ手脱りがあるのだから、隨分怪しいものだて。

「貴郎がいくら剛いからつて、さう何でも出來るものぢやアない、家の嬶が、ま、祝日にやア少とでも綺麗にしやうッてね、あらひざらひ掃くものは掃き、拭くものは拭きしてね、さアやつてしまふと、また伜の嫁が側に居てさう阿母さんやきもきしたつて出來るものぢやアない、まア妾に任せてお置きなさい、それからお前さん、嫁が代つて綺麗にしちまつた。と云ふやうな理由でね、貴郎が居ないからつて、そりやア間違なく出來まさアな。

隱居の心は少しく動いたやうである。

「まアそれはいゝとした所が、あの小舍の普請の爲に大分錢が入つたから、手元にはもう百ルーブルしか無いのだ、それで巡禮はちと覺束なからうよ。

エヲシヤは高く笑つた。

「アハヽヽ、百ルーブルで未だ足りない。若干まア入るものですか、俺ア貴郎の一割も持つて行かない積ですせ。

「俺の一割をお前が持つて行く、それは剛氣だな、俺は今迄お前がそんな富豪とは思はなかつた、どうして那麼に金を持つて居るのだえ、

「そりやア貴郎、家にあるものを洗ひ浚ひ掻き纏めて賣れば、少しの金にやアなりますし、それで足りなけりやア蜜蜂の半分を抵當に金を借りたつて、旅費位の事は什麼にかなりまさアね。

「蜜蜂を抵當にして金を借りちまつて、若其蜜蜂が先きの家で澤山蜜を作つたら、お前は哀しく思ふだらう。

「少しも哀い事はごわせん、罪は犯した時の外俺ア一切哀いとは思ひませんな、罪と云ふもの程恐ろしいものはないから、

「そりやアお前の云ふ通り、家で罪な事をした時位心持ちの惡い事はないからな。

「心に不平があつては、死でも面白くはないです、だから、思ひ切つて出懸けやうぢやありませんか、

其二

百姓老爺は遂に隱居の心を動かした、隱居は何となく沈み勝ちに其日は別れたが、翌る朝になるとエリシャの家へ遣つて來た。

「お早う、俺は憤發して出懸ける事にしたよお前の云ふ事は眞個だ、死ぬも生きるも皆神樣次第だからな、丈夫な中に行つて來る事に極めたよ。

そこで一週間の中に悉皆仕度をする事に極つたが、隱居エフヰムは家に金があるだけに、自分は百ループルを持つて行く事にし、年を老つた女房には留守中の費用に二百ループルを殘す事にした。エリシャは新らしい蜜蜂を近所に賣つて七ループルを拵へ、後の三十ループルは親類から借り込んだが、感心な事に女房は自分の葬式料を旅費に出すし、從妹はまた自分の小遣ひを餞別にやつた。

エフヰムは家の監督から、普請小舍の奉行から悉皆息子に吩咐けるし、エリシャは蜜蜂の事を女房に頼んで、いざ出立と云ふ間際になる、女房達は各々老人の好きな菓子を袋へ入れるやら、輕い半靴を用意するやら、靴足袋の代りに露西亞の農夫が使ふ脛當の紐をとりかへるやら、ヤッさもッさの騷ぎをして、村端まで親族の誰彼に送られながら『さやうなら、御機嫌よう！』と云ふを名殘に、二個は淋しい旅に就いた。

老爺エリシャは村を出ると、もう悉皆家の事を忘れてしまつて、嬉しさうに歩行いて居るが、只心配なのは隱居の事で、かうして旅へは出たもの丶、嘸家の事が氣懸りだらう、家の事が氣になるやうでは、旅をしたからつて面白い事はない、什麼かして家の事を考へないやうにしてやらう、と途中人に遇つた時とか夜宿屋へ着いた時などには、面白い噺をしだして慰めるやうにして居るが、自分で少し困つたのは家を出る時に喫煙草を忘れて來た事で、外に何の心配もないのである。

エフヰムの方はまた一生懸命になつて歩行いて餘り噺

はないが、別に何處が惡いと云ふ事もなく、至極達者ではあるが、何分家の事が氣に懸る、伜は能く自分の吩咐を守つて居るだらうか、もう俺が居ないとなると、酒ばかり飲んで居て、俺の云つた事なんぞは忘れてしまひはしないかと考へると、さア心配で堪らぬ、道の側で蕪を植つけたり、肥料をやつたり、採取れたりして居るのを見ると『俺の伜も俺の云ふ事を聞いて、あゝして稼いで居るだらうかな！』と嘆ずばかりならいいが、やゝともすると引かへして行かうとする。

其　三

斯て隱居エフヰムと老爺エリシヤの二個は夜を日に次いで步行たが、もう其村を出てから五週間になるので、小露西亞へ來た時には、始めの靴は破壞れてしまひ、別に新らしい靴を購はなければならない事になつた。が、小露西亞の人達は巡禮には極めて親切で、五百里（日本里數の三十里）ばかりの間と云ふもの、飯も只食べさせてくれゝば、夜も只泊めてくれますから、二個は一文入らずに急いで行くと、やがて他領へ出た。此領地は二三年以來饑饉がつゞいて居る處であるから、錢なしに飯を食はさうと云ふものもなければ、只泊めてやらうと云ふものもない。それも其筈で、此領地の故老に聞いて見ると、いやもう酷い饑饉で、富豪もこれが爲めに貧乏してしまふし、貧乏人はなほの事蹤跡の知れなくなつたものもあれば、乞食になつたものもある。夏は米殼を食ひ、冬は木の皮を拷つて食ふと云ふ仕末である。

ある朝二個の老人は澤山の麵麭を買込んで、熱くならない中に少しでも先きへ行かうと、ずん〳〵步行て、やがて七里ばかり來て一つの溪へ出た。咽喉も隨分渴いて居るから、其處の岸へ休憩む事にして、麵麭も食へば、水も飲んで、一呼吸ついたが、エリシヤは何日の間に買つたものか、衣袋から嗅煙草を出して嗅ぎ始めた。エフヰムは第一煙草は嫌だ、煙草は罪なものであると信じて居るから、これを見ると、もう默つて居られぬ。

『何故お前はそんな汚いものを嗅ぐのだえ、それだけ

は廢して貰ひたいね。
エリシヤは有繋捨てない理由にも行かないので、思切つて捌て、『さア、出懸けやうぢやアごわせんか。
二個は立上つて歩行き出したが、先刻逅つた大きな村まで來ると、エリシヤはやう疲勞て咽が渴いて來た。
エフ弁ムはエリシヤよりも達者で、此まゝでは到底も追つく事が出來ないから、
『どうです、咽喉が渴きやアしませんかね。俺は水が飲みたくつて、もう歩行けませんよ。
エリシヤはかう云つて立どまると。『水が飲みたきやア飲んで來るがい〻、俺は未だ欲しくないから—
『ぢやア、俺はあの向ふの小舍へ行つて水を貰つて來ますから、貴郎は先きへ行つて戴きませう、直きに追つきますよ。
エリシヤが息を切つて駛つけた小舍と云ふのは、それは隨分酷いもので、周圍の荒壁には處々穴が開いて、中は塵で咽せるやう、根太はもう片方が落ちてしまつて居るのを見ても此小舍は長くはもつまいと思はれる程汚穢いもので、戶の隙間から覗いて見ると、腰掛の側の床の上に一人の憔悴けた男が小露西亞流の寢衣を着て、ごろりと臥て居る。これは日を避けて態々床の上へ臥たのであらうが、屋根が處々破壞れて居るので、眞直に病人の顏の上へ日が映して居るのである。
はゝア病人だな、とエリシヤが考へて居る中に、病人の側には小兒の聲がする。入口の鈴を鳴らして、『御主人！
と呼んだが返事がない、今度は持つて居る洋杖で戶を叩いて『奉敎人！』と呼んだが返事がない『神夫！』と呼んだが返事がない、もう駄目だと引返しかけた時に『うゝん！』とばかり呻いた聲が聞えたので、また戶の側へ來て耳を澄した。（次號完結）

下婢の滊車旅行

江見水蔭

全く目に一丁の字なく、此上もない無敎育の下女を、

先年神戸に居る時逢つた事が有りました。しかし、心掛けの好い女で、如何かして勉强して、普通の學問だけでも修めたいといふ心は、始終持つて居つたのです其内私の一家は東京へ歸る事になりました。其下女は假に名をキシと申しませう是非東京へ連れて行つて與れろと云ふ事でしたが、親がゆるしませんので、彼の女の願は達しませなんだ。

それから五年の後、唯只勉强が仕たい、東京へ出たいが一心で、裁縫や洗濯で溜めた金子を持つて、親の許を拔け出して、然うして東京――と云つても郡部の品川、其私の宅へ便つて來ましたのは二月ほど前。親に無斷の家出は咎むべしですが、其志は感ずべきで有りますから、それ〳〵に手續きを濟まして、宅で及ばずながら敎育して居りますが、その下女が方角さへも知らず、唯只品川とのみ目的に、汽車で神戸から來た旅行談は、頗る興味が多ふ御座いますから、實話を有りの儘に語らせて、それを江湖に紹介する事と致しました。

キシは全く神戸在の某村に產れた許りで、世間を丸で知らぬので有ります。神戸の市中へすら餘り出た事が無いのであります。だから、東京どころでは無い、大阪も西京も知らぬのであります。どの位里程があるか汽車で何時間掛るかなんど、一向知らぬので有りました。

四月某日の夕方、親達が外出したのを幸ひに、手當り次第に荷物をこしらえて、周章て居るものですから、差當つて役に立たぬ物なんど無闇に詰めて、大布呂敷の包を拵えて家を飛出しました。

好いあんばいに空俥が通りかけましたから、價を極めて停車場まで走らして、扨て品川までの切符を買つて與れと車夫に依賴をしました處が、車夫は親切な者でして、未だ新橋行の滊車が出るまでには二時間餘りあるから、切符は賣るまいと敎へて與れました。

キシは途方に暮れました。若し此所にまご〳〵して居ると、家から追手が來て引戾される。然うしたら折角の苦心が水の泡。如何したら好いだらうと考へて居る

内に、車夫は最う居なくなつて了ひました。大きな包を抱へて構内をうろ〳〵して居ましたが、折柄汽車が何處へやら出る様子。驛夫に聽いて見ると、大阪行といふ事であつたので、此所に居て待つよりは大阪まで乘出して待つた方が好いと考へて、キシは大急ぎでそれへ乘りました。

これは先づ大出來でありました。

大阪まで行きました時には、ホッと息を吐いて、先づこれなら追手は大丈夫と思つたのですが、それから又品川までの切符を買ふ苦心、これも一通りではありませなんだが、如何か斯うか十一時何分發の汽車に乘る事が出來て、やれ〳〵と本統の安心は仕たものゝです又新しく心配は、何處で降りたら品川であらうか、乘り過ぎたら大變であると、斯う考へたので、停車場へ着くたびに一生懸命耳を立て、驛夫の呼聲を聽いて居ました、未だ品川といふ聲は中々です。それも其筈、京都へも着かぬのですから。

少し落着いたので、汽車の中を見廻しますと、どの人を見ても掏摸のやうに思はれて、少しも油斷が出來ないと思つたのです。あの人はポン引といふのでは無いだらうか、あの人は誘拐者では無いだらうか、とそんな事ばかり苦勞して居ると、他の人はそろ〳〵椅子に倚れた儘、こくり〳〵睡り始めました。

如何してキシに眠られませう。寢て居る間に品川を通り越して了つたなら、如何しやうといふ考へですから其内京都へ着きました。ドヤ〳〵上り下りが有つて、人が大方變つて了ひましたので、又心配です『人を見たら胡麻灰と思へ』と旅の話を小耳に入れて居るので中々油斷が出來ません。

しかし、京都と神戸、此間は餘程遠いと思つて居たのでありますから、其遠い京都を越したからには、品川も最う近からうと、斯うキシは考へまして、今に驛夫が『品川』といふだらうと、待てど〳〵との驛でも、其なつかしい『品川』といふ聲は聽かれませなんだ。

餘りに辛抱が仕切れぬので、向側の老人――此人なら大丈夫らしいと思つて――其人に『未だ品川へは餘程

有りますか」と恐る〳〵訊ねて見ると「や、それは未だ中々遠い」と答へました「それでは何個所停車場を越すのですか」と聴くと「何個所と云つて澤山々々の數だから、直ぐに何個所と答へる事は出來ぬけれど、何しろ未だ大變だから、一寢入り仕たら好からう」と云つて呉れました。

「眠りましたら其内に乘過ぎは致しませんか」と又聞うて見ましたら「如何して〳〵乘過ぎる處ではない、翌日の朝眼が覺めて、顔を洗つて、それから正午飯を食つても、未だ着がない」と云はれた時には、まアそんなに遠いのかと思つて、益々心細く、留度の無い程涙が出ましたと、キシは、それを語る時にも、實際涙含んで居ました。

地理を知らぬと斯ういふ苦勞をせねばなりません。字が讀めぬので旅行案内や時間表を力にする譯に參りません。これでは全く心細かつた事でせう。

仕ますると、つひ横手に腰を掛けて居た男が「お前さんは品川まで行くのかい」と聲を掛けました「はい」と答へて其男の顔を見ますると、や、如何も人相の惡いと云つたら、眼が鋭くツて、色艶が惡くツて、扮裝も何んだか變的で如何考へても箱乘りの泥棒としか見えないのです。これは京都から乘つて來た人なのです。其不氣味な男は、一癖ある言葉の調子で、「品川へ行くのなら好いあんばいだ。お前初めて行くのなら、私が敎へて上げやう。私も品川で降りる者だ」

さア大變、きツとこれは掏摸？　でなければ誘拐者？　えらい者に睨まれたと思つて、ぶる〳〵顫へて來るのを、ぢツと我慢して、胴卷に入れた少しの金子を、上から兩手で密ツと押へて、然うして唯「はい……」とのみ答へて、それからは其男の方へ顔を向けない樣に仕ました。

夜はだん〳〵更けて來る。人は大概睡つて了うし、益々以て心細いです。驛々で、ドタン、バタン、汽車の戸を開閉する音が、更けるに連れて高く響き、驛名を呼びながら走る車掌の聲が何となく物凄く聴えて、キシの涙はこれが爲に、どの位絞れたか知れませんでした。まんじりともせず夜を明しました。名古屋で夜が明けましたので、人々は停車中顔を洗ひに行きましたが、キシは一人留つて居ました。朝の辨當を皆買ひましたが、キシの喉には迚も通りませんから買ひませぬ。正午は靜岡でしたが、此所でも何も食べませんでしたけれども、此所を發してから、つひトロ〳〵と居睡り

をして吃驚して目を覺して、若しや乘過ぎはせぬかと向ふの老人に問うて見ますと『未だ〳〵中々だ』何個所停車塲が有りませう『未だ二十餘り』と敎へられた『アッ未だ二十餘り』と思はず嘆聲を發したさうです。

扨て、最う品川まで五ッ四ッ三ッと段々減じて、最う一ッで品川といふ時の其間の長く感じられた事は、百里もあるかの樣にあつたとやら。



品川で降りた時に、氣味の惡いと思つた人は、巡査と馴々しく話をして、それから其巡査と共に俥を傭つて與れて、無事に私の家へ送り屆けて與れた處を考へると、刑事巡査であつたのでせう。

神戸と品川、其間の汽車の旅、敎育ある人には何んでもないのでありませうが、何も知らぬ者には、以上の如く頗る不安に感じるのでありまする。（そはり）

女學世界春季增刊

女學校生活

三月十五日發行

女學世界は敎育上の進步を計るの目的を以て、今回定期增刊「女學校生活」を發行せんとするその內容には各女學校觀察記、女學校長の意見、學校生活の模樣、寄宿舍の狀態、敎授法の特色、歐米女學校の狀態、外國留學談、知名夫人の學生時代等、其他學校敎育に關する諸般の記事を收め、加ふるに學校生徒の製作に係る圖案、繪畫、作文等を輯集し、以て一目の下に女學界の形勢を瞭然たらしめんと欲す、而して江湖女學生の手腕と實力とを紹介せん目的を以て、讀者の作品を募る、其の課題下の如し、時は是れ艶陽三月、梅花退いて櫻花之に代らんとし、學窓亦た舊學年より新學年に移らんとする好季節に會す、天下の才媛乞ふ奮つて多年研學の實蹟を本誌の上に披瀝されんことを

懸賞課題

寫生文（左の六種に付隨意撰擇の事）（二十行二十字にて紙數三枚）

運動會、修學日記、割烹會、同窓會、歸省日記、學校生活

和歌（春季雜題）新体詩、消息文

小說（短篇）

（投稿切〆二月二十日）

賞品 甲賞金五圓（一名） 乙賞金參圓（五名） 丙賞金壹圓（二十名）以上圖書切符

○注意 投稿者は夏書に其の所屬の學校名を附記せらるべし、封筒には必らず、「女學校生活」原稿と朱書すべし

次號記事豫告

（第三號三月五日發行）

▲女子の新教育	塚本濱子
▲露西亞の婦人界	
▲新家庭	巖谷小波
▲鎭守府將校夫人の美擧	
▲軍人の家庭	中村鈴子
▲男女の配偶	水原翠香
▲道徳と禮節	棚橋絢子
▲女子と美術	下田次郎
▲女子の日用文	近藤正一
▲小兒の教育	川瀬元九郎
▲新世帯の實驗	藤葉女史
▲急應活療法	桂園子
▲琉球風俗	坪谷水哉
▲婦人の自活問題	溪流女史
▲田邊和氣子の傳	小川直子
▲電氣の話	松翠女史
▲家庭二十四時	河西天放

每月五日發行

定價表

一冊（紙數二百八頁）	金二十錢
四冊（三ヶ月分）	前金七十五錢
八冊（半ヶ年分）	前金一圓四十五錢
十六冊（一ヶ年分）	前金二圓八十錢

內（定刊數……十二冊 增刊四回……三、六、九、十一月價格同一）

郵稅 一冊 二錢

廣告料

	特等	一等	二等	三等
二十四字詰一行	四十四錢	三十六錢	二十九錢	
中頁（卅二行）	十四圓〇八錢	十一圓五十二錢	九圓二十八錢	
一頁（六十四行）	割引三十三圓	割引二十七圓	割引二十二圓	割引十八圓

▲等級の位置〆切日等御照會次第御報可致候

注文規畧

●本館發行の圖書は都て前金の外送本せず
●御拂込の前金相切れ候節は送本を停止す
●郵券代用は一割增にて五厘一錢の切手に限る
●總目錄御入用の方は二錢券相添申込あれ

不許複製

明治卅七年二月五日發行　第四卷第貳號

編輯發行人　松原岩五郎
印刷人　水谷景長
印刷所　合資會社博進社工場　東京市小石川區久堅町百〇八番地
發行所　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

電話本局　三百三番　千十八番　二千六百二十番

●庭の摘草　正價三拾五錢　郵稅六錢

●おもひ草　正價五拾錢　郵稅六錢

●みだれ箱　正價廿五錢　郵稅六錢

●編引種本　正價拾八錢　郵稅四錢

●夜學讀本　正價廿五錢　郵稅六錢

坂本文學士編

世界史（全二冊）

上卷一圓六十錢小包四百匁　下卷二圓小包六百匁

世界史上の幾江流は宛轉曲折茲に數千載晚近に至りて悉く會匯し怒濤狂瀾今や天下を捲く是れ豈に古來未曾有の大史局にあらずや此時に方り天下の極東に崛起して新に振興の運に際會せる我國民は東西古今の往史に鑑みて世界潮勢の來路を究めざるを得ず此書上下二卷紙數三千頁撰んで精、述べて密、東西古今の盛衰興亡を通叙して餘蘊なし實に史學研鑽に心を潜めるの士は邦文世界史中にありては先づ本書を探らざるべからざるなり。

●俳諧提要　正價五拾錢　郵稅八錢

●（盆景盆石盆山盆庭）秘訣圖解　正價三十錢　郵稅六錢

●（美文韻文）霓裳微吟　正價卅五錢　郵稅六錢

●（訂正增補）漫遊案内　正價五拾錢　郵稅八錢

●園藝論　正價貳拾錢　郵稅四錢

十千萬堂文士合作

換菓編（全一冊）

正價金六拾錢　郵稅金八錢

紅葉先生の病むや天下擧げて嘆惜せざる莫く文を贈り藥を贈りて同情を寄する者多し、殊に門下生に至りては、殆んど寢食を廢して先生の枕頭に侍し其快癒の速かならんを祈れり然も至誠を致すもの悉さゞらんを恐れ、相謀りて各心を籠めたる一文を草し床下に獻して秋夜の伽と爲す、『換菓篇』此れなり小説あり、隨筆あり、句あり、歌あり、紅紫錯互金碧掩映して一幅の美觀を極む。

●女學生の栞　正價卅五錢　郵稅六錢

●處生訓　正價廿五錢　郵稅四錢

●商業の栞　正價拾五錢　郵稅四錢

●炭礦王　正價廿五錢　郵稅六錢

●江戸城明渡　正價廿五錢　郵稅四錢

木村鷹太郎君著

東洋倫理學史（上卷）

正價一圓八十錢　小包四百匁

本書は著者數年間の研究の末に成れる者にして叙述詳密、引用正確、説明親切、着眼卓絕、其挿む所の評論は鋭利にして議論は大膽而も能く整然たり。諸家の傳記は十分興味を含ましめて、雄健なる筆を以て之を叙す。世間の倫理學書の術語字義蟻然として平々凡々乾燥無味生硬難解にして而も一讀の後實際何の得る所なき者と全く趣を異にす。實にこれ研究的大著述なり。…………

（後付の一）

巖谷小波君著

洋行土産（全二册）

正價各一圓廿錢
郵税一册十三錢宛

著者が先に伯林大學の招聘を機として、椽大の筆を提げ、遠く獨逸國に遊びしことは、遍ねく世の知る所なり。此の新歸朝者齎す所、果して何物ぞ洋行土産一部二卷、著者が彼地に往來せる、前後二年の間、其の慧眼に映し其の兎耳に觸れしもの、網羅して此裡に盡せり。世人一たび之を繙かんか、居ながらにして海外の事情に通し世界の風土を察するを得ん。…………………

●花盛劇紅葉　正價廿五錢　郵税四錢

●文明の大破壞　正價四拾錢　郵税八錢

●實用裁縫全書　正價五拾錢　郵税八錢

●肥料編　正價拾五錢　郵税六錢

●氣候編　正價拾五錢　郵税六錢

村井弦齋君著

女道樂（全壹册）

正價　五十錢
郵税　十二錢

悖逆汚行一人物配するに婦徳正しき妻、孝操厚き娘を以てし、以て此人物が女色の爲めに種々の惡德を恣にせる妄狀を叙し一身一家の破倫より延て上流社會內政の腐敗を諷刺し遂に女道樂の行末如何を警結す其間の千變萬化讀者をして悲喜哀怒に耐へざらしむ著者得意の教訓的小說近來稀有の活文字といふべし。

櫻桃小舟君著

明治少年節用（全一册）

正價　七十五錢
郵税　八錢

口繪には我が東宮同妃兩殿下をはじめ來り兩皇孫殿下の御寫影をかゝげ各國盟國々旗及び日本勳章の等級陸海軍服制內容にいたりては卷頭にお伽噺二十四題、日本歷史、西洋歷史、日本立志談、西洋英雄傳、等を收めまた本文には教育勅語を始め、天文、地文、地理、物理、化學、動物、植物、礦物、農業、工業、商業、体操、遊戲、數學、音樂、軍事、國文、漢文、英語、作歌、作文、俳句、內外事物起原、格言集、字引、考へ物、座敷手品、骨牌法、少年吟誦用詩歌、笑話、養魚法、昆虫採集法、救急療法、學校案內、旅行案內、郵便案內、遊學案內、皇室一覽、皇族一覽、皇統略圖、日本形勢要覽、萬國形勢要覽、和漢洋對照年表、年齡早見表あり日本少年座右の寶典也

●仰臥三年　正價五拾錢　郵税八錢

●燕翁句集　正價壹圓　郵税拾錢

●世界金傑譚　正價拾五錢　郵税四錢

●うもれ木　正價廿五錢　郵税四錢

●酒道樂　上下　正價各五拾錢　郵税各六錢

●製絲新論　正價拾五錢　郵税六錢

●園藝通論　上製五拾五錢　郵税拾錢　並製卅錢　郵税八錢

●作物生理　正價拾五錢　郵税六錢

●商業讀本　一、二各拾五錢　郵税各四錢　二、三各廿錢　郵税各六錢

●勤儉貯蓄　正價拾五錢　郵税四錢

（後付の二）

江見水蔭君校訂

佛教各宗 續高僧實傳（全一冊） 正價六十錢 郵税十六錢

曩に本館より發行せる佛敎高僧實傳は、高僧中の高僧、祖師中の祖師のみにて。其他に及ばざりしは編纂の都合によるなるべしと雖、本館の大に遺憾とする所なり、故に今回例の江見水蔭君に請ふて彼編に洩れたる、諸高僧の實傳を古文書中に探り、校訂して之を公にせり、其行文は謹嚴にして言々句々、法るべく、奉すべく、仰ぐべく、尊むべきものあり、大方の讀者是非一讀あれ。

● 手なし姫 正價八錢 郵税二錢

● 石の行方 正價八錢 郵税二錢

● 刀三本 正價八錢 郵税二錢

● 遊戯の巻 正價五錢 郵税二錢

● 地理の巻 正價五錢 郵税二錢

博文館編輯局校訂

名家漫筆集（全一冊） 正價六拾錢 郵税拾八錢

目次

● 歴史の巻 正價五錢 郵税二錢

● お伽十番 正價拾貳錢 郵税四錢

● 黄金の船 正價八錢 郵税二錢

● 家庭の巻 正價五錢 郵税二錢

● お伽の巻 正價五錢 郵税二錢

幸田露伴君校訂

狂言全集

全三冊和綴

正價一冊五十錢 郵税八錢

人の輾然一笑するや、心直に三世を脱し四苦を忘る、其の怡々の容と嘻々の聲との由つて來るところの虚たり實たり眞たり假たるは問はざるなり、實より生ずるの笑、虚より生ずるの笑、眞より發するの笑、假より發するの笑、虚實一如、眞假不二、皆以て鬱を解き悶を開くべき也。笑や是の如し、狂言や是の如し、古人曰く人の病瘦死喪憂患を除けば其の中口を開て笑ふもの一月の中四五日に過ぎんと、此書を讀まば人の口を開いて笑ふもの一月の中必ずしも四五日に過ぎざるのみならざるべき也。

● 黒足小僧 正價八錢 郵税二錢

● 梨の殿様 正價八錢 郵税二錢

● 繪入 小僧讀本 正價拾貳錢 郵税四錢

● 繪入 下女讀本 正價拾五錢 郵税四錢

● 陸の日本 正價三十錢 郵税二錢

（廣告の三）

●滊船の巻 正價拾五錢 郵税四錢

●製紙の巻 正價拾五錢 郵税四錢

●銅山の巻 正價拾五錢 郵税四錢

●電燈の巻 正價拾五錢 郵税四錢

●陶器の巻 正價拾五錢 郵税四錢

文學士久保天隨君著

東洋通史（全十二冊）

正價一冊廿五錢郵税八錢
全部前金五圓郵税此外

此書は上漢族の移動、三代の興亡より、下は日清の葛藤北京城の攻圍に至り、黃禍の豫測を以て之を結ふ。上下五千年、縱橫八十五萬方里、先づ上下兩卷を分ち、四大時期を劃し、章を逐ぬる無慮數百。治亂興廢の跡、必ず原季を考へ、終始を綜べ、鉦固せさるなく、細、涵せさるなく、坤輿の半面にその文化を被及し、印度歐羅巴の人文と相並んで鼎足の勢を爲せる東亞ッラン人種の起伏消長は、實に本書に於て、之を審かにするを得べし、刻下の學界、希に見るところの一大撰述なり

岡三慶先生著

正續文章軌範文法講義

正價壹圓八十錢 郵税十六錢

文章軌範に標註解釋を加へたるもの古來汗牛充棟と稱す岡先生久しく儒門の大家を以て推されて其教論を蒙るの子弟海内に充溢す蓋し先生の提撕懇篤にして薫陶宜しきを得たるによる本書の如きは先生講習の餘暇を以て文章の解剖を施し初學の徒をして自在に文法の精髓を悉知せしむるの好意に出つ實に幾多の群籍中に在て斬然頭角を現はし講義の正鵠を得たるものは本書を措て他に覓むべからさる乎……

●大洪水 正價八錢 郵税貳錢

●啞の女王 正價八錢 郵税貳錢

●骸骨島 正價八錢 郵税貳錢

●三筋の金髪 正價八錢 郵税貳錢

●鬼大名 正價八錢 郵税貳錢

●漆器の巻 正價拾五錢 郵税四錢

●時計の巻 正價拾五錢 郵税四錢

●マッチの巻 正價拾五錢 郵税四錢

●織物の巻 正價拾五錢 郵税四錢

●幸福の花 正價八錢 郵税貳錢

青蓋居士著

日本書畫人名辭書

正價金八十錢 郵税金十四錢

我國由來美術國を以て鳴る蓋し其地勢に於て其風俗に於て萬國に凌駕して遜色なきは自然の現象といふべし本書は吾國古今の書家畫家の人名を網羅し各人の小傳を附し自在に其搜索をなし得べき便利の辭典なれば斯道社會に有らゆる人は机上に缺へべからざる必要有益なるものなり……

（後付の六）

發兌元　十千萬堂藏版　博文館

紅葉全集

全部六卷

菊判總クロース表紙背金刷美本

定價一冊金壹圓八拾錢

全部前金拾圓八拾錢

小包送料金拾五錢

卷の壹目次

朧、春日の如く、淸秋月の如き、紅葉山人の文章也、山人一生を文章に托し、奇思縱横字々警快を極めざるなし。骨て文壇革新の急先鋒となりて硯友社を創め、後進を養ふて藩社の名一生を歷す。山人が明治文學に寄與するの勞天下の齊しく知る所にして、仰いで以て泰斗と爲すは之が爲め也。今や山人逝て、文苑頓に寂々たり。山人の逝くや命也。而も山人の精神は萬古常に新也。蓋し山人の文章の如きは傳へて以て後代に貽し、長く河嶽に藏すべし。則ち親朋同人相謀りて十千萬堂を營み、凡そ山人が述作に係るものは其長と短とを問はず、悉く之を網羅して完璧と爲し、名けて紅葉全集といふ。思ふに七寶の散りて趾數ぜるは聯れて一環と爲すの美に若かず、全集分ちて六、順を追ふて之を收め、讀みて江湖文を愛し才を憐むの淑女紳士諸君に薦む。

十千萬堂出版部　敬白

●二人比丘尼色懺悔
●風雅娘
●新桃花扇
●巴波川
●南無阿彌陀佛
●拈華微笑
●戀の蜆
●此ぬし
●夏痩
●關東五郎
●新色懺悔
●文ながし
●猿枕
●わかれ蚊帳
●七十二文命の安賣
●二人むく助
●二人女房

續刊

卷の二―伽羅枕。おぼろ舟。むき玉子。紙きぬた。辻小僧。戀の病。(以上六編)

卷の三―三人妻。俠黑兒。男ごゝろ。心の闇。隣の女(以上五編)

卷の四―むらさき。不言不語。袖時雨。寒料理三ケ條。冷熱。浮木丸。青葡萄、八重襷。(以上八編)

卷の五―多情多恨。安知歇貌林子。箱の玉[illegible]。[illegible](以上四編)

卷の六―煙霞療養。金色夜叉。(以上二編)總じて四十二編

女學世界

(明治卅參年拾貳月廿五日第參種郵便物認可) 第四卷第貳號 (明治參拾七年二月五日發行)



監修
小山静子　KOYAMA Shizuko
京都大学大学院教授

女学世界 明治期復刻版㉕
明治37年1月(第4巻第1号)、2月(第4巻第2号)

2007年7月10日　第1刷発行　　定価(本体20,000円+税)

監　修　小山静子
発行者　富澤凡子
発行所　柏書房株式会社
東京都文京区本駒込1-13-14(〒113-0021)
電話　03-3947-8251[営業] 03-3947-8254[編集]
協　力　株式会社博文館新社
印　刷　有限会社オンデマンドジャパン
製　本　有限会社青木製本

ISBN978-4-7601-3141-9　C3321